横枕古墳群 Ⅱ

姫鳥線整備促進関連事業に係る
横枕10・11・22～26・36・59～64・67～91号墳の発掘調査

2003. 3

財団法人　鳥取市文化財団

横枕古墳群 Ⅱ

姫鳥線整備促進関連事業に係る
横枕10・11・22～26・36・59～64・67～91号墳の発掘調査

2003. 3

財団法人　鳥取市文化財団

序　　文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えております。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した横枕古墳群の調査は、中国横断自動車道姫路鳥取線整備促進事業に係る発掘調査として、平成12年度から調査を行ってきました。この古墳群は千代川左岸の丘陵部に展開しますが、この地域はこれまで開発に伴う本格的な発掘調査が行われておらず、のどかな田園風景が広がる地帯でした。今回の調査によって、古墳39基をはじめ、落とし穴を含む土坑59基、溝状遺構、ピットが見つかり、縄文時代から古墳時代にかけての土器、銅鏡や玉類、鉄剣をはじめとする鉄器など、豊富な各種副葬品が出土しました。これらの資料は、当地域のみならず古代因幡地方の歴史を探る上で、大きく役立っていくものと確信いたします。ささやかな冊子ではありますが、研究者のみならず広範な市民各位による郷土の歴史究明など、関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成15年3月

財団法人　鳥取市文化財団
理事長　竹内　功

例　　言

1．本書は、中国横断自動車道　姫路鳥取線整備促進事業の事前調査として実施した横枕（よこまくら）古墳群の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、財団法人　鳥取開発公社の委託を受けて、財団法人　鳥取市文化財団(平成12年度組織変更)鳥取市埋蔵文化財調査センターが、現地調査を平成12年度、13年度、報告書作成を平成14年度に実施した。

3．発掘調査は、調査地が三調査区に分かれ、各区を北から「横枕No11北区」、「横枕No11南区」、「横枕No12区」と呼称している。各区の所在地は以下のとおりである。

　横枕No11北　鳥取市横枕字イゴ、上味野字大坪下ノ割

　横枕No11南　鳥取市上味野字大坪上ノ割他

　横枕No12　　鳥取市竹生字稲田、上味野字大坪上ノ割ほか

4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。

5．現地実測・写真撮影、遺構図面の浄書は、調査員、補助員を中心に発掘調査参加者の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測・浄書は、杉谷美恵子、濱橋博子を中心として行った。出土遺物観察表は杉谷美恵子が作成し、下多みゆきが補佐した。遺物の写真撮影は山田真宏が行った。

6．本書の執筆、編集は谷口恭子が担当し、木原美和、杉本利子がこれを補佐した。

7．現地調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただいた。特に出土石製品の石材同定を鳥取市文化財審議会委員　山名　巌　先生にお願いし、お手を煩わせた。厚く感謝いたします。

凡　　例

1．本書における方位は、座標北の第１・２図を除いて磁北を示す。また、レベルは海抜標高である。

2．本書で使用した遺構の略号は、墳丘外の埋葬施設；SX、土坑(土壙)；SK、溝状遺構；SD、ピット；Pである。

3．今回の調査によって出土した遺物は、調査年度、調査区、古墳名、主体部番号、遺物台帳登録番号、取り上げ年月日を基本的に注記し、写真や図面などの記録類も同様である。

　(例；2001 姫鳥 No11北 横枕22号墳 第１主体部 No021 2001.07.21)

4．なお、横枕No11北　調査区において、一部、調査時の名称をその後の検討によって以下のように改称した古墳、遺構がある。本報告では新名称で記述している。

新名称	旧名称
横枕63号墳　第１主体部	横枕No11北　SX-08
横枕63号墳　第２主体部	横枕No11北　SX-07
横枕63号墳　周溝	横枕No11北　SD-01
横枕88号墳	横枕No11北　SX-02
横枕89号墳	横枕No11北　SX-03
横枕90号墳	横枕No11北　SX-04
横枕91号墳	横枕No11北　SX-09

本 文 目 次

序文
例言
凡例
第１章　発掘調査の経緯
　１．発掘調査にいたる経緯…… 1
　２．発掘調査の経過…… 1
　３．調査の組織・体制…… 2
第２章　遺跡の位置と歴史的環境…… 4
第３章　調査の結果
　第１節　横枕古墳群の立地と構成…… 11
　第２節　各調査区の立地と概要…… 11
　第３節　横枕No11北区の調査
　　１．横枕22～26、59～64、88～91号墳の調査…… 35
　　２．その他の埋葬施設の調査…… 89
　　３．その他の遺構、出土遺物の調査…… 94
　第４節　横枕No11南区の調査
　　１．横枕10・11、36、80～87号墳の調査…… 104
　　２．その他の遺構、出土遺物の調査…… 141
　第５節　横枕No12区の調査
　　１．横枕67～79号墳の調査…… 157
　　２．その他の遺構、出土遺物の調査…… 192
　(出土遺物観察表)
　第６節　まとめ…… 236
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　横枕古墳群周辺遺跡分布図……9
第２図　横枕古墳群調査地位置図……10
第３図　横枕古墳群No11北区調査前地形図……13・14
第４図　横枕古墳群No11南区調査前地形図……15・16
第５図　横枕古墳群No12区調査前地形図……17・18
第６図　横枕古墳群No11北区墳丘遺存図・全体図……19・20
第７図　横枕古墳群No11南区墳丘遺存図・全体図……21・22
第８図　横枕古墳群No12区墳丘遺存図・全体図……23・24
第９図　No11北　横枕22・23・24号墳墳丘断面図……25・26
第10図　No11北　横枕25・26・59号墳墳丘断面図……27・28
第11図　No11北　横枕60・61・62・90号墳墳丘断面図……29・30
第12図　No11北　横枕63・64・88・89号墳墳丘断面図……31・32
第13図　No11北　横枕91号墳・SX-10周辺墳丘断面図……33
第14図　No11北　横枕22号墳第１主体部出土遺物実測図……35
第15図　No11北　横枕22号墳第２主体部出土遺物実測図……36
第16図　No11北　横枕22号墳第１・２主体部実測図……37・38
第17図　No11北　横枕23号墳主体部出土遺物実測図……39
第18図　No11北　横枕23号墳表土出土遺物実測図……40
第19図　No11北　横枕23号墳主体部実測図…41・42
第20図　No11北　横枕24号墳主体部実測図…43・44
第21図　No11北　横枕24号墳主体部出土遺物実測図……45
第22図　No11北　横枕24号墳周溝出土遺物実測図……45
第23図　No11北　横枕25号墳第１主体部実測図……47・48
第24図　No11北　横枕25号墳第１主体部出土遺物実測図……49
第25図　No11北　横枕25号墳第２主体部実測図…50
第26図　No11北　横枕26号墳主体部実測図……52
第27図　No11北　横枕26号墳主体部出土遺物実測図……53
第28図　No11北　横枕26号墳周溝出土遺物実測図……54
第29図　No11北　横枕59号墳第１主体部出土遺物実測図……54
第30図　No11北　横枕59号墳第１主体部実測図…55
第31図　No11北　横枕59号墳第２主体部実測図……57・58
第32図　No11北　横枕59号墳第２主体部出土遺物実測図……59
第33図　No11北　横枕59号墳周溝内土器出土状況実測図……60
第34図　No11北　横枕59号墳周溝出土遺物実測図(1)……61
第35図　No11北　横枕59号墳周溝出土遺物実測図(2)……62
第36図　No11北　横枕59号墳表土出土遺物拓影…63
第37図　No11北　横枕60号墳主体部実測図……64
第38図　No11北　横枕60号墳主体部出土遺物実測図……64
第39図　No11北　横枕60号墳周溝出土遺物実測図……65
第40図　No11北　横枕60号墳出土遺物実測図……66
第41図　No11北　横枕61号墳第１主体部出土遺物実測図……68
第42図　No11北　横枕61号墳第１主体部実測図……69・70
第43図　No11北　横枕61号墳第２主体部実測図…71
第44図　No11北　横枕61号墳第２主体部出土遺物実測図……72
第45図　No11北　横枕62号墳主体部実測図……73
第46図　No11北　横枕62号墳主体部出土遺物実測図(1)……75
第47図　No11北　横枕62号墳主体部出土遺物実測図(2)……74

第48図 No11北 横枕62号墳主体部出土遺物実測図……75
第49図 No11北 横枕63号墳丘遺存図……75
第50図 No11北 横枕63号墳第1主体部実測図…76
第51図 No11北 横枕63号墳第2主体部実測図……77・78
第52図 No11北 横枕63号墳第1主体部出土遺物実測図……80
第53図 No11北 横枕63号墳第2主体部出土遺物実測図……80
第54図 No11北 横枕63号墳周溝出土遺物実測図……80
第55図 No11北 横枕89号墳主体部実測図……82
第56図 No11北 横枕89号墳主体部出土遺物実測図……83
第57図 No11北 横枕90号墳周溝土器出土状況図……84
第58図 No11北 横枕90号墳周溝出土遺物実測図(1)……85
第59図 No11北 横枕90号墳周溝出土遺物実測図(2)……86
第60図 No11北 横枕91号墳主体部実測図……88
第61図 No11北 SX-05実測図……90
第62図 No11北 SX-06実測図……91
第63図 No11北 SX-06出土遺物実測図……92
第64図 No11北 SX-10実測図……93
第65図 No11北 SK-01実測図……94
第66図 No11北 SK-02実測図……94
第67図 No11北 SK-03実測図……95
第68図 No11北 SK-04・05実測図……95
第69図 No11北 SK-04出土遺物実測図……96
第70図 No11北 SK-06実測図……97・98
第71図 No11北 SK-07実測図……99
第72図 No11北 SK-08実測図……99
第73図 No11北 SK-09実測図……100
第74図 No11北 SK-10実測図……100
第75図 No11北 SK-11実測図……100
第76図 No11北 SK-11出土遺物実測図……100
第77図 No11北 SK-12実測図……100
第78図 No11北 SK-13実測図……100
第79図 No11北 SK-14実測図……102
第80図 No11北 SK-14出土遺物実測図……102
第81図 No11北 SK-15実測図……102
第82図 No11北 SD-02実測図……103
第83図 No11北 SD-03実測図……103
第84図 No11北 SD-03出土遺物実測図……103
第85図 No11南 横枕10・11・36号墳墳丘断面図……105・106
第86図 No11南 横枕80～82号墳墳丘断面図……107・108
第87図 No11南 横枕83～85号墳墳丘断面図……109
第88図 No11南 横枕86・87号墳墳丘断面図……110
第89図 No11南 横枕10号墳主体部実測図……111
第90図 No11南 横枕11号墳主体部実測図……112
第91図 No11南 横枕11号墳主体部出土遺物実測図……113
第92図 No11南 横枕11号墳出土遺物実測図…113
第93図 No11南 横枕36号墳第1主体部実測図……115・116
第94図 No11南 横枕36号墳第1主体部出土遺物実測図……117
第95図 No11南 横枕36号墳第2主体部実測図……118
第96図 No11南 横枕36号墳第2主体部出土遺物実測図……119
第97図 No11南 横枕36号墳表土出土遺物実測図……120
第98図 No11南 横枕80号墳第1主体部実測図……121
第99図 No11南 横枕80号墳第2主体部実測図……122
第100図 No11南 横枕80号墳第2主体部出土遺物実測図……123
第101図 No11南 横枕80号墳盛土出土遺物実測図……124
第102図 No11南 横枕81号墳主体部実測図……125
第103図 No11南 横枕82号墳主体部出土遺物実測図……126
第104図 No11南 横枕82号墳主体部実測図……127
第105図 No11南 横枕82号墳出土遺物実測図…128
第106図 No11南 横枕83号墳主体部実測図……129
第107図 No11南 横枕83号墳主体部出土遺物実測図……129
第108図 No11南 横枕83号墳周溝出土遺物実測図……130

第109図　No11南　横枕84号墳横穴式石室実測図……131・132
第110図　No11南　横枕84号墳石室内出土遺物実測図……133
第111図　No11南　横枕84号墳表土出土遺物実測図……134
第112図　No11南　横枕85号墳主体部実測図……135
第113図　No11南　横枕85号墳主体部出土遺物実測図……135
第114図　No11南　横枕85号墳出土遺物実測図…136
第115図　No11南　横枕86号墳主体部実測図……137
第116図　No11南　横枕86号墳出土遺物実測図…138
第117図　No11南　横枕87号墳主体部出土遺物実測図……139
第118図　No11南　横枕87号墳主体部実測図……140
第119図　No11南　SK-02実測図……141
第120図　No11南　SK-03実測図……142
第121図　No11南　SK-04実測図……142
第122図　No11南　SK-05実測図……143
第123図　No11南　SK-06・07実測図……143
第124図　No11南　SK-08実測図……144
第125図　No11南　SK-09実測図……144
第126図　No11南　SK-10実測図……144
第127図　No11南　SK-11実測図……145
第128図　No11南　SK-12実測図……145
第129図　No11南　SK-13・14実測図……146
第130図　No11南　SK-16実測図……147
第131図　No11南　SK-17実測図……147
第132図　No11南　SK-18実測図……148
第133図　No11南　SK-19実測図……148
第134図　No11南　SK-19出土遺物実測図……148
第135図　No11南　SK-20実測図……149
第136図　No11南　P-01実測図……149
第137図　No11南　P-02実測図……149
第138図　No11南　縄文土器出土状況実測図……150
第139図　No11南　遺構外出土遺物実測図(1)……150
第140図　No11南　遺構外出土遺物実測図(2)……150
第141図　No12　横枕67～70号墳墳丘断面図……151・152
第142図　No12　横枕71～74号墳墳丘断面図……153・154
第143図　No12　横枕75～79号墳墳丘断面図……155・156
第144図　No12　横枕67号墳主体部出土遺物実測図……158
第145図　No12　横枕67号墳主体部実測図……159・160
第146図　No12　横枕67号墳表土出土遺物実測図……161
第147図　No12　横枕68号墳第1主体部実測図…162
第148図　No12　横枕68号墳第2主体部実測図…163
第149図　No12　横枕68号墳第1主体部出土遺物実測図……164
第150図　No12　横枕68号墳第2主体部出土遺物実測図……164
第151図　No12　横枕69号墳主体部実測図……165
第152図　No12　横枕69号墳主体部出土遺物実測図……166
第153図　No12　横枕69号墳周溝出土遺物実測図……167
第154図　No12　横枕70号墳主体部出土遺物実測図(1)……168
第155図　No12　横枕70号墳主体部実測図……169
第156図　No12　横枕70号墳主体部出土遺物実測図(2)……170
第157図　No12　横枕70号墳北西側周溝内土器出土状況実測図……172
第158図　No12　横枕70号墳東側周溝内土器出土状況実測図……172
第159図　No12　横枕70号墳周溝出土遺物実測図……172
第160図　No12　横枕71号墳主体部実測図……173
第161図　No12　横枕71号墳主体部出土遺物実測図……174
第162図　No12　横枕72号墳主体部実測図……176
第163図　No12　横枕72号墳主体部出土遺物実測図……177
第164図　No12　横枕73号墳第1主体部実測図……179・180
第165図　No12　横枕73号墳第1主体部出土遺物実測図(1)……181
第166図　No12　横枕73号墳第1主体部出土遺物実測図(2)……182
第167図　No12　横枕73号墳第1主体部出土遺物実測図(3)……183
第168図　No12　横枕73号墳第1主体部出土遺物実測図(4)……184

第169図　No12　横枕73号墳第1主体部出土遺物
実測図(5)……185
第170図　No12　横枕73号墳第1主体部出土遺物
実測図(6)……184
第171図　No12　横枕73号墳第2主体部実測図…186
第172図　No12　横枕73号墳第2主体部出土遺物
実測図(1)……187
第173図　No12　横枕73号墳第2主体部出土遺物
実測図(2)……188
第174図　No12　横枕73号墳出土遺物実測図……188
第175図　No12　横枕76号墳墳頂部土器出土状況
実測図……189
第176図　No12　横枕76号墳墳頂部出土遺物実測図
……189
第177図　No12　横枕77号墳表土出土遺物実測図
……190
第178図　No12　横枕78号墳周溝出土遺物実測図
……191
第179図　No12　横枕79号墳出土遺物実測図
……191
第180図　No12　SK-01実測図……192
第181図　No12　SK-02実測図……192
第182図　No12　SK-02出土遺物実測図……193
第183図　No12　SK-03実測図……195
第184図　No12　SK-04実測図……195
第185図　No12　SK-05実測図……195
第186図　No12　SK-06実測図……196
第187図　No12　SK-07実測図……196
第188図　No12　SK-08実測図……196
第189図　No12　SK-09実測図……196
第190図　No12　SK-10実測図……198
第191図　No12　SK-11実測図……198
第192図　No12　SK-12実測図……198
第193図　No12　SK-13実測図……198
第194図　No12　SK-14実測図……198
第195図　No12　SK-15・16実測図……199
第196図　No12　SK-17実測図……200
第197図　No12　SK-18実測図……200
第198図　No12　SK-19・20実測図……201
第199図　No12　SK-21実測図……203
第200図　No12　SK-22実測図……203
第201図　No12　SK-23実測図……203
第202図　No12　SK-24実測図……203
第203図　No12　SK-25実測図……203
第204図　No12　遺構外出土遺物実測図……204
第205図　土器・鉄製品細部名称図……205

図　版　目　次

図版1　横枕古墳群調査地全景
(上からNo12埋戻後、No11南、No11北)
(北東上空から)
図版2　横枕古墳群調査地遠景
(上からNo12埋戻後、No11南、No11北)
(北東上空から)
横枕古墳群調査地遠景
(上からNo11北、No11南、No12埋戻後)
(南西上空から)
図版3　横枕古墳群No11北区調査前全景
(北東上空から)
横枕古墳群No11北区全景
(北東上空から)
図版4　横枕古墳群No11南区調査前全景
(北東上空から)
横枕古墳群No11南区全景
(北東上空から)
図版5　横枕古墳群No12区調査前全景
(北東上空から)
横枕古墳群No12区全景(北西から)
図版6　No11北　横枕25号墳第1主体部検出状況
(北から)
No11北　横枕25号墳第1主体部北側遺物出土状況(東から)
図版7　No12　横枕73号墳第1主体部検出状況
(北東から)
No12　横枕73号墳第1主体部北側遺物出土状況(南東から)
図版8　No11北　横枕22号墳第1主体部出土遺物
No11北　横枕23号墳出土遺物
No11北　横枕25号墳第1主体部出土遺物
図版9　No11北　横枕59号墳第2主体部出土遺物
No11北　横枕59号墳周溝出土遺物
図版10　No11北　横枕61号墳第1主体部出土遺物
No11北　横枕89号墳主体部出土遺物

図版11　No11南　横枕36号墳第１主体部出土遺物
No11南　横枕80号墳第２主体部出土遺物
No11南　横枕84号墳横穴式石室内出土遺物
図版12　No12　横枕67号墳主体部出土遺物
No12　横枕70号墳主体部出土遺物
図版13　No12　横枕71号墳主体部出土遺物
No12　横枕72号墳主体部出土遺物
図版14　No12　横枕73号墳第１主体部出土遺物
図版15　No12　横枕73号墳第１主体部出土遺物
図版16　No11北　横枕22号墳土層ベルト設定状況（南から）
No11北　横枕22号墳全景（南西から）
No11北　横枕22号墳第１・２主体部断面（南西から）
図版17　No11北　横枕22号墳第１・２主体部検出状況（北西から）
No11北　横枕22号墳第１主体部遺物出土状況（北西から）
No11北　横枕22号墳第２主体部遺物出土状況（南西から）
図版18　No11北　横枕23号墳土層ベルト設定状況（南から）
No11北　横枕23号墳全景（南から）
No11北　横枕23号墳東裾遺物出土状況（南東から）
図版19　No11北　横枕23号墳第１主体部断面（南西から）
No11北　横枕23号墳第１主体部検出状況（南西から）
No11北　横枕23号墳第１主体部遺物出土状況（南西から）
図版20　No11北　横枕24号墳北裾断面（北西から）
No11北　横枕24号墳全景（南から）
No11北　横枕24号墳主体部断面（西から）
図版21　No11北　横枕24号墳主体部検出状況（南から）
No11北　横枕24号墳主体部遺物出土状況（北から）
No11北　横枕25号墳土層ベルト設定状況（北から）
図版22　No11北　横枕25号墳全景（北から）
No11北　横枕25号墳全景（東から）
No11北　横枕25号墳第１主体部断面（南から）
図版23　No11北　横枕25号墳第１主体部断面（東から）
No11北　横枕25号墳第１主体部検出状況（東から）
No11北　横枕25号墳第１主体部遺物出土状況（東から）
図版24　No11北　横枕25号墳第１主体部遺物出土状況（西から）
No11北　横枕25号墳第２主体部断面（北西から）
No11北　横枕25号墳第２主体部検出状況（北西から）
図版25　No11北　横枕26号墳土層ベルト設定状況（西から）
No11北　横枕26号墳西側周溝断面（南から）
No11北　横枕26号墳全景（西から）
図版26　No11北　横枕26号墳主体部上層円礫検出状況（南から）
No11北　横枕26号墳主体部断面（南から）
No11北　横枕26号墳主体部検出状況（北から）
図版27　No11北　横枕26号墳主体部遺物出土状況（北から）
No11北　横枕59号墳土層ベルト設定状況（北西から）
No11北　横枕59号墳北側周溝内遺物出土状況（北東から）
図版28　No11北　横枕59号墳西側周溝断面（北東から）
No11北　横枕59号墳全景（北西から）
No11北　横枕59号墳全景（北東から）
図版29　No11北　横枕59号墳第１主体部断面（北東から）
No11北　横枕59号墳第１主体部検出状況（南西から）
No11北　横枕59号墳第１主体部遺物出土状況（北東から）
図版30　No11北　横枕59号墳第１主体部遺物出土状況（北東から）
No11北　横枕59号墳第２主体部断面（北東から）

No11北　横枕59号墳第2主体部検出状況
(南西から)
図版31　No11北　横枕59号墳第2主体部遺物出土状況
(北西から)
No11北　横枕60号墳土層ベルト設定状況
(北から)
No11北　横枕60号墳北側周溝断面(西から)
図版32　No11北　横枕60号墳全景(北から)
No11北　横枕60号墳主体部検出状況
(西から)
No11北　横枕60号墳主体部遺物出土状況
(西から)
図版33　No11北　横枕61号墳土層ベルト設定状況
(西から)
No11北　横枕61号墳東側断面(南東から)
No11北　横枕61号墳全景(西から)
図版34　No11北　横枕61号墳第1主体部断面
(南から)
No11北　横枕61号墳第1主体部断面
(東から)
No11北　横枕61号墳第1主体部検出状況
(東から)
図版35　No11北　横枕61号墳第1主体部遺物出土状況
(西から)
No11北　横枕61号墳第1主体部遺物出土状況
(西から)
No11北　横枕61号墳第2主体部断面
(東から)
図版36　No11北　横枕61号墳第2主体部検出状況
(南から)
No11北　横枕61号墳第2主体部遺物出土状況
(東から)
No11北　横枕62号墳北側周溝断面(西から)
図版37　No11北　横枕62号墳全景(北から)
No11北　横枕62号墳主体部断面(北東から)
No11北　横枕62号墳主体部検出状況
(南西から)
図版38　No11北　横枕62号墳主体部遺物出土状況
(北西から)
No11北　横枕63号墳北側周溝断面
(南西から)
No11北　横枕63号墳全景(北西から)
図版39　No11北　横枕63号墳第1主体部検出状況
(北東から)
No11北　横枕63号墳第1主体部遺物出土状況
(北東から)
No11北　横枕63号墳第2主体部断面
(南西から)
図版40　No11北　横枕63号墳第2主体部検出状況
(南西から)
No11北　横枕63号墳第2主体部遺物出土状況
(南西から)
No11北　横枕64号墳全景(南から)
図版41　No11北　横枕64号墳・横枕91号墳全景
(南西上空から)
No11北　横枕88号墳断面(南西から)
No11北　横枕88号墳全景(北西から)
図版42　No11北　横枕89号墳北側断面(北東から)
No11北　横枕89号墳全景(北東から)
No11北　横枕89号墳主体部断面(南東から)
図版43　No11北　横枕89号墳主体部検出状況
(北東から)
No11北　横枕89号墳主体部遺物出土状況
(北東から)
No11北　横枕90号墳北側周溝断面(西から)
図版44　No11北　横枕90号墳全景(北西から)
No11北　横枕90号墳全景(北から)
No11北　横枕90号墳周溝内遺物出土状況
(北から)
図版45　No11北　横枕91号墳断面(北東から)
No11北　横枕91号墳北東側断面(南から)
No11北　横枕91号墳主体部断面(南西から)
図版46　No11北　横枕91号墳主体部検出状況
(南西から)
No11北　横枕91号墳全景(南東から)
No11北　SX-05遠景(北西から)
図版47　No11北　SX-05断面(南東から)
No11北　SX-05検出状況(南東から)
No11北　SX-05石棺南側小口部分
(南西から)
図版48　No11北　SX-06断面(北から)
No11北　SX-06検出状況(南から)
No11北　SX-06遺物出土状況(西から)
図版49　No11北　SX-10全景(西から)
No11北　SX-10断面(北から)
No11北　SX-10検出状況(東から)

図版50　No11北　SK-01検出状況(北西から)
No11北　SK-02検出状況(南から)
No11北　SK-03検出状況(南西から)
図版51　No11北　SK-04・05検出状況(北西から)
No11北　SK-06断面(南から)
No11北　SK-06検出状況(北から)
図版52　No11北　SK-06上層角礫出土状況(西から)
No11北　SK-07検出状況(西から)
No11北　SK-08検出状況(北東から)
図版53　No11北　SK-09検出状況(北西から)
No11北　SK-10検出状況(北西から)
No11北　SK-11検出状況(北西から)
図版54　No11北　SK-12検出状況(北東から)
No11北　SK-13検出状況(北東から)
No11北　SK-14検出状況(北東から)
図版55　No11北　SK-15検出状況(北東から)
No11北　SD-02検出状況(北から)
No11北　SD-03検出状況(北東から)
図版56　No11南区東側調査前(西から)
No11南区西側調査前(東から)
No11南　横枕10号墳西側周溝断面(南から)
図版57　No11南　横枕10号墳全景(西から)
No11南　横枕10号墳主体部断面(南東から)
No11南　横枕10号墳主体部検出状況(北東から)
図版58　No11南　横枕11号墳南側周溝断面(南東から)
No11南　横枕11号墳全景(東から)
No11南　横枕11号墳主体部断面(北西から)
図版59　No11南　横枕11号墳主体部検出状況(北西から)
No11南　横枕11号墳主体部遺物出土状況(北西から)
No11南　横枕36号墳北側周溝断面(北西から)
図版60　No11南　横枕36号墳全景(東から)
No11南　横枕36号墳第1主体部断面(南東から)
No11南　横枕36号墳第1主体部断面(南西から)
図版61　No11南　横枕36号墳第1主体部検出状況(南東から)
No11南　横枕36号墳第1主体部南側遺物出土状況(北東から)
No11南　横枕36号墳第1主体部北側遺物出土状況(北東から)
図版62　No11南　横枕36号墳第1主体部北側遺物出土状況(北西から)
No11南　横枕36号墳第2主体部検出状況(北西から)
No11南　横枕36号墳第2主体部遺物出土状況(北東から)
図版63　No11南　横枕80号墳北溝断面(北西から)
No11南　横枕80号墳全景(南西から)
No11南　横枕80号墳第1主体部断面(南西から)
図版64　No11南　横枕80号墳第1主体部検出状況(北東から)
No11南　横枕80号墳第2主体部断面(南西から)
No11南　横枕80号墳第2主体部検出状況(北東から)
図版65　No11南　横枕80号墳第2主体部遺物出土状況(北東から)
No11南　横枕80号墳第2主体部遺物出土状況(北東から)
No11南　横枕81号墳西溝断面(北西から)
図版66　No11南　横枕81号墳全景(南から)
No11南　横枕81号墳主体部断面(北東から)
No11南　横枕81号墳主体部検出状況(南東から)
図版67　No11南　横枕82号墳東側周溝断面(北東から)
No11南　横枕82号墳全景(北から)
No11南　横枕82号墳主体部検出状況(北から)
図版68　No11南　横枕82号墳主体部遺物出土状況(西から)
No11南　横枕83号墳全景(南西から)
No11南　横枕83号墳主体部断面(東から)
図版69　No11南　横枕83号墳主体部検出状況(北から)
No11南　横枕83号墳主体部遺物出土状況(東から)
No11南　横枕84号墳調査前(北から)

図版70　No11南　横杭84号墳横穴式石室断面
（南東から）
No11南　横杭84号墳横穴式石室検出状況
（北西から）
No11南　横杭84号墳全景（南東から）
図版71　No11南　横杭84号墳石室内遺物出土状況
（南東から）
No11南　横杭84号墳石室内遺物出土状況
（南から）
No11南　横杭85号墳北側周溝断面
（北西から）
図版72　No11南　横杭85号墳全景（東から）
No11南　横杭85号墳主体部断面（西から）
No11南　横杭85号墳主体部検出状況
（北から）
図版73　No11南　横杭86号墳東側周溝断面（南から）
No11南　横杭86号墳全景（西から）
No11南　横杭86号墳主体部断面（南東から）
図版74　No11南　横杭86号墳主体部検出状況
（南東から）
No11南　横杭87号墳北側周溝断面（東から）
No11南　横杭87号墳全景（北から）
図版75　No11南　横杭87号墳主体部検出状況
（南西から）
No11南　横杭87号墳主体部検出状況
（東から）
No11南　横杭87号墳主体部遺物出土状況
（北東から）
図版76　No11南　SK-02検出状況（北から）
No11南　SK-03検出状況（西から）
No11南　SK-04検出状況（北東から）
図版77　No11南　SK-05検出状況（北から）
No11南　SK-06・07検出状況（北西から）
No11南　SK-08検出状況（南から）
図版78　No11南　SK-09検出状況（東から）
No11南　SK-10検出状況（東から）
No11南　SK-11検出状況（北から）
図版79　No11南　SK-12検出状況（南東から）
No11南　SK-13・14検出状況（西から）
No11南　SK-16検出状況（南から）
図版80　No11南　SK-18検出状況（北から）
No11南　SK-19検出状況（南から）
No11南　縄文土器出土状況（東から）
図版81　No12区北側調査前（南から）
No12区南側調査前（北から）
No12区北側調査後（南から）
図版82　No12　横杭67号墳土層ベルト設定状況
（北西から）
No12　横杭67号墳北据断面（北西から）
No12　横杭67号墳全景（北西から）
図版83　No12　横杭67号墳主体部断面（南東から）
No12　横杭67号墳主体部検出状況
（南西から）
No12　横杭67号墳主体部遺物出土状況
（北東から）
図版84　No12　横杭68号墳全景（北西から）
No12　横杭68号墳第1主体部断面
（南東から）
No12　横杭68号墳第1主体部検出状況
（南東から）
図版85　No12　横杭68号墳第1主体部遺物出土状況
（南東から）
No12　横杭68号墳第2主体部検出状況
（南東から）
No12　横杭69号墳北西側周溝断面
（北東から）
図版86　No12　横杭69号墳全景（北東から）
No12　横杭69号墳主体部検出状況（北から）
No12　横杭69号墳主体部遺物出土状況
（東から）
図版87　No12　横杭70号墳土層ベルト設定状況
（南西から）
No12　横杭70号墳西側周溝断面（北から）
No12　横杭70号墳北西側周溝内遺物出土状況
（北東から）
図版88　No12　横杭70号墳全景（南西から）
No12　横杭70号墳主体部検出状況
（北東から）
No12　横杭70号墳主体部西側遺物出土状況
（北東から）
図版89　No12　横杭70号墳主体部西側遺物出土状況
（北東から）
No12　横杭70号墳主体部北東側遺物出土状況
（南東から）
No12　横杭71号墳全景（西から）
図版90　No12　横杭71号墳主体部断面（南から）

No12　横杭71号墳主体部検出状況(東から)
No12　横杭71号墳主体部遺物出土状況
(南から)
図版91　No12　横杭72号墳土層ベルト設定状況
(西から)
No12　横杭72号墳全景(北西から)
No12　横杭72号墳主体部断面(北西から)
図版92　No12　横杭72号墳主体部検出状況
(北西から)
No12　横杭72号墳主体部遺物出土状況
(北東から)
No12　横杭73号墳土層ベルト設定状況
(北東から)
図版93　No12　横杭73号墳墳丘検出状況(北西から)
No12　横杭73号墳全景(北東から)
No12　横杭73号墳第1主体部断面
(南東から)
図版94　No12　横杭73号墳第1主体部検出状況
(北東から)
No12　横杭73号墳第1主体部遺物出土状況
(南東から)
No12　横杭73号墳第1主体部遺物出土状況
(北西から)
図版95　No12　横杭73号墳第1主体部北側遺物出土状況(南東から)
No12　横杭73号墳第1主体部鋼鏡出土状況
(西から)
No12　横杭73号墳第2主体部検出状況
(南東から)
図版96　No12　横杭73号墳第2主体部遺物出土状況
(南東から)
No12　横杭73号墳南北墳丘断面(南から)
No12　横杭74号墳東側周溝断面(北東から)
図版97　No12　横杭74号墳全景(北から)
No12　横杭75号墳西側周溝断面(西から)
No12　横杭75号墳全景(北西から)
図版98　No12　横杭76号墳全景(西から)
No12　横杭76号墳墳頂部遺物出土状況
(西から)
No12　横杭77号墳西側周溝断面(北西から)
図版99　No12　横杭77号墳全景(北から)
No12　横杭78・79号墳周溝断面(西から)
No12　横杭78・79号墳全景(北西から)
図版100　No12区中央SK群検出状況
(北西から)
No12区中央SK群完掘状況
(南東から)
No12　SK-01検出状況(南東から)
図版101　No12　SK-02検出状況(北西から)
No12　SK-03検出状況(北東から)
No12　SK-04検出状況(北西から)
図版102　No12　SK-05検出状況(北西から)
No12　SK-06検出状況(東から)
No12　SK-07検出状況(南東から)
図版103　No12　SK-08検出状況(北西から)
No12　SK-09検出状況(南西から)
No12　SK-10検出状況(南西から)
図版104　No12　SK-11検出状況(西から)
No12　SK-12検出状況(北東から)
No12　SK-13検出状況(北西から)
図版105　No12　SK-14検出状況(北東から)
No12　SK-15・16検出状況(北から)
No12　SK-17検出状況(北西から)
図版106　No12　SK-18検出状況(南東から)
No12　SK-19・20検出状況(南西から)
No12　SK-21検出状況(南東から)
図版107　No12　SK-22検出状況(北東から)
No12　SK-23検出状況(南西から)
No12　SK-24検出状況(北から)
図版108　No12　SK-25検出状況(北東から)
No12区北東トレンチ掘下げ状況
(西から)
No12区北東トレンチ掘下げ状況
(北東から)
図版109　No11北　横杭22号墳第1主体部出土遺物
No11北　横杭22号墳第2主体部出土遺物
No11北　横杭23号墳主体部出土遺物
No11北　横杭24号墳周溝出土遺物
No11北　横杭25号墳第1主体部出土遺物
図版110　No11北　横杭26号墳主体部出土遺物
No11北　横杭26号墳周溝出土遺物
図版111　No11北　横杭59号墳第1主体部出土遺物
No11北　横杭59号墳周溝出土遺物
図版112　No11北　横杭59号墳周溝出土遺物
No11北　横杭59号墳表土出土遺物
図版113　No11北　横杭60号墳主体部出土遺物

No11北　横杭60号墳周溝出土遺物
No11北　横杭60号墳出土遺物
図版114　No11北　横杭61号墳第1主体部上層出土遺物
No11北　横杭61号墳第2主体部出土遺物
No11北　横杭62号墳主体部出土遺物
No11北　横杭63号墳第1主体部出土遺物
図版115　No11北　横杭63号墳第2主体部出土遺物
No11北　横杭63号墳周溝出土遺物
No11北　横杭89号墳主体部出土遺物
No11北　横杭90号墳周溝出土遺物
図版116　No11北　横杭90号墳周溝出土遺物
No11北　SX-06出土遺物
図版117　No11北　SK-04出土遺物
No11北　SK-11出土遺物
No11北　SK-14出土遺物
No11北　SD-03出土遺物
図版118　No11南　横杭11号墳主体部出土遺物
No11南　横杭11号墳出土遺物
図版119　No11南　横杭36号墳第1主体部出土遺物
No11南　横杭36号墳第2主体部出土遺物
図版120　No11南　横杭36号墳第2主体部出土遺物
No11南　横杭36号墳表土出土遺物
No11南　横杭80号墳盛土出土遺物
No11南　横杭82号墳主体部出土遺物
図版121　No11南　横杭82号墳出土遺物
No11南　横杭83号墳主体部出土遺物
No11南　横杭83号墳周溝出土遺物
No11南　横杭84号墳横穴式石室内出土遺物
図版122　No11南　横杭84号墳横穴式石室内出土遺物
No11南　横杭84号墳表土出土遺物
No11南　横杭85号墳主体部出土遺物
No11南　横杭85号墳出土遺物
図版123　No11南　横杭86号墳出土遺物
No11南　横杭87号墳出土遺物
No11南　SK-19出土遺物
No11南　遺構外出土遺物
図版124　No12　横杭67号墳表土出土遺物
No12　横杭68号墳第1主体部出土遺物
No12　横杭68号墳第2主体部出土遺物
No12　横杭69号墳主体部出土遺物
図版125　No12　横杭69号墳周溝出土遺物
No12　横杭70号墳主体部出土遺物
No12　横杭70号墳周溝出土遺物
No12　横杭72号墳主体部出土遺物
図版126　No12　横杭73号墳第1主体部出土遺物
No12　横杭73号墳第2主体部出土遺物
図版127　No12　横杭73号墳表土出土遺物
No12　横杭76号墳頂部出土遺物
No12　横杭77号墳表土出土遺物
No12　横杭78号墳周溝出土遺物
No12　横杭79号墳周溝出土遺物
No12　SK-02出土遺物
図版128　No12　SK-02出土遺物
図版129　No12　遺構外出土遺物

第１章　発掘調査の経緯

１．発掘調査にいたる経緯

横枕古墳群は、鳥取市横枕、竹生、上味野に広がる標高30～150m程度の丘陵上およびその裾部に展開する古墳群である。古くから山裾部に露出した横穴式石室がいくつか知られていたが、その後の県教育委員会の分布調査などによって、大小様々な古墳が50基余り、周辺平野部にも遺物散布地が確認された。しかしながら、平成11年に始まった浄水施設整備事業に伴う当古墳群の調査以前に本格的な発掘調査が行われたことはなく、鳥取市内でも原始・古代の概要がいまひとつ不明瞭な地域のひとつでもあった。この平成11～13年度に実施された横枕41～44、52～58号墳の調査では、標高138mの尾根上で横穴式石室(44号墳)をはじめ、全長23mの小前方後円墳(55号墳)など、古墳時代後期の古墳が次々と明らかになり、多くの成果を得た。古墳時代以降については、式内社である倭文神社、中世の山城である鷲尾城などが今を昔に偲ばせている。

今回の発掘調査の契機となった姫鳥線整備促進事業は、横枕集落の前面に広がる低丘陵から集落北東の丘陵裾にかけて姫鳥線建設予定路線が計画されているものである。工事範囲内には複数の古墳が分布し、丘陵裾の微高地上にも数ケ所の遺物散布地が認められることから、鳥取市教育委員会が平成12年度に試掘調査を実施した。調査の結果、土坑や古墳盛土状の土層、須恵器などの遺物が確認された。鳥取市教育委員会はこれらの試掘結果をもとに関係機関との協議を行ったが、路線内の遺跡は現状での保護・保存が難しく、記録保存で対応することとなった。

２．発掘調査の経過

横枕古墳群の調査は、財団法人鳥取開発公社の委託を受け、平成12～14年度に財団法人鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センターが調査を行った。

今回、古墳群中における三ケ所の調査区の呼称については、姫鳥線路線図内の埋蔵文化財の管理番号である「№11」、「№12」を適用し、北から順に「横枕№11北」、「横枕№11南」、「横枕№12」として調査区名称を与えた。調査した順としては、横枕№11北区、横枕№12区、横枕№11南区である。

横枕№11北区の調査は、平成12年12月から開始した。資材の整備や資材搬入などの調査準備の後、立ち木の伐開整理の後、尾根上の古墳頂部を結ぶラインに基準ライン(Ｃ１～Ｃ12杭)を設け、そのラインに直交あるいは角度を振って、各古墳について測量杭を設定した。その後、現況の地形を業者委託により航空測量し、細かな地形補足・修正については手取りで対応した。表土除去作業は尾根北側の22号墳から南側および東斜面へと順次進め、合わせて墳丘の検出を行った。土層観察ベルトの断面記録・除去後、墳丘遺存状況の写真撮影、測量を行った。続いて埋葬施設の検出、掘り下げに取りかかった。

その結果、尾根上に前期の方墳が並び、このうち核となる25号墳は南周縁に付随するかのような方墳が３基配置され、以南東斜面には中・後期の円墳が一部重複しながら展開するといった状況が明らかとなった。また、鉄器や土器転用杭の保有が目立ち、25号墳ではＵ字形に曲がった鉄剣が、22・23号墳ではいずれも破鏡とみられる銅鏡が出土している。これら古墳15基以外に、墳丘外の埋葬施設、落とし穴を含む土坑、溝状遺構を検出した。

こうして、主体部の状況が明らかとなった状態で、航空写真撮影を業者委託し、主体部および遺構・遺物の記録・取り上げを適宜行った。最終的に墳丘を断ち割って断面調査を行い、現地調査を平成13年７月に終了した。

横枕№12区の調査は、平成13年７月から開始した。伐開整理の後、現況の地形航空測量を業者委託し、測量杭の補足とともに地形図の修正・補足を行った。表土除去作業は調査区南側の72号墳から周辺裾部、北側へと進め、合わせて墳丘の検出を行った。№12区の現況は段状の平坦面が広がり、加えて耕

作溝・肥料穴などによる著しい改変を受けていた。適宜補助トレンチを設け、古墳の確認をしながら調査を行った。墳丘検出後、土層観察ベルトの断面記録・除去後、遺存状況の写真撮影、測量を行い、続いて埋葬施設の検出、掘り下げに取りかかった。

その結果、調査区の南北ではやや様相が異なり、北側では、前期の方墳である67号墳が尾根屈曲先端部に位置し、その南側斜面に前期の方墳、中期の円墳が、南側では72号墳を中心として周辺に中期および後期の複数の円墳が展開することが明らかとなった。中期の古墳については、鉄器と玉類の出土が目立ち、特に73号墳第1主体部では、土器転用枕が墓壙両端に安置され、鉄剣や鉄刀、銅鏡、各種多量の玉など豊富な副葬品が出土している。また、古墳13基以外に、調査区中央の鞍部を中心として、落とし穴と推定される土坑多数が検出された。

こうして、主体部および遺構・遺物の記録・取り上げを適宜行った。最終的に墳丘を断ち割って断面調査を行い、現地調査を平成13年11月に終了した。

横枕№11南区の調査は、平成13年12月から開始した。資材の整備や資材搬入などの調査準備の後、立ち木の伐開整理の後、調査区中央の尾根筋に基準ライン(5―51杭)を設け、そのラインに直交あるいは角度を振って、各古墳について測量杭を設定した。その後、現況の地形を業者委託により航空測量し、細かな地形補足・修正については手取りで対応した。表土除去作業は西側の87号墳から西側および南北斜面へと順次進め、合わせて墳丘の検出を行った。土層観察ベルトの断面記録・除去後、墳丘遺存状況の写真撮影、測量を行った。続いて埋葬施設の検出、掘り下げに取りかかった。

その結果、鞍部中央にひとまわり規模の大きい36号墳が占地し、南側に小規模な古墳が、調査地東および西側の斜面は調査区外の尾根上からの流れとみられる中・後期の円墳が一部重なるように展開することが明らかとなった。古墳は裾部へ向けて築造されており下位には横穴式石室を内部主体とする84号墳が築造されている。また、これら中・後期の円墳11基以外に、鞍部南斜面を中心に落とし穴を含む土坑19基、ピットが検出された。遺物は、棺外や転用枕として須恵器蓋杯が出土する例が目立ち、縄文土器や中世の遺物も若干ながら出土している。

こうして、主体部および遺構・遺物の記録・取り上げを適宜行った。最終的に墳丘を断ち割って断面調査を行い、現地調査を平成14年3月に終了した。

出土した遺物、写真や図面などの記録類の整理は、現地調査と並行して進め、土器については、水洗い、バインダー処理の後、注記・復元作業を行った。また、銅鏡、鉄器については可能な限り業者委託による応急保存処理を行った。報告書作成作業は、平成14年度に本格的にとりかかり平成15年3月に終了した。

3．調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成12年度　調査主体　財団法人　鳥取市文化財団
理事長　西尾　迢　富(鳥取市長)
副理事長　本多　達　郎
米澤　秀　介(鳥取市教育長)
常務理事　田中　哲　夫
事務局長　小杉　宗　雄
調査指導　鳥取市教育委員会　文化課
事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
所長　藤井　博
副所長　加藤　卓美
前田　均
調査事務　秋田　澄世

水戸口　直　美
白　岩　千　足
森　　克　之
調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
調　査　員　山　田　真　宏
調査補助員　杉　谷　美恵子
杉　本　利　子
矢　芝　泰　伸

平成13年度　調査主体　財団法人　鳥取市文化財団
理　事　長　西　尾　沼　富（鳥取市長）
副理事長　伊　藤　憲　男
米　澤　秀　介（鳥取市教育長）
常務理事　田　中　哲　夫
事務局長　小　谷　荘太郎
調査指導　鳥取市教育委員会　文化課
事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
所　　長　藤　井　　博
副　所　長　加　藤　卓　美
前　田　　均
調査事務　秋　田　澄　世
白　岩　千　足
水戸口　直　美
調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
調　査　員　山　田　真　宏
藤　本　隆　之
谷　口　恭　子
調査補助員　杉　谷　美恵子
神　谷　伊　鈴
木　原　美　和
小　杉　雄　貴
杉　本　利　子
下　多　みゆき
矢　芝　泰　伸
岡　本　大　輔

平成14年度　調査主体　財団法人　鳥取市文化財団
理　事　長　竹　内　　功（鳥取市長）
副理事長　福　田　泰　昌
中　川　俊　隆（鳥取市教育長）
常務理事　小　谷　荘太郎（事務局長兼務）
調査指導　鳥取市教育委員会　文化課
事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
所　　長　前　田　　均
調査事務　秋　田　澄　世
白　岩　千　足
水戸口　直　美
調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
調　査　員　谷　口　恭　子
調査補助員　杉　谷　美恵子
神　谷　伊　鈴
木　原　美　和
杉　本　利　子
下　多　みゆき
濱　橋　博　子

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

１．横枕古墳群の位置

鳥取市は県東部に位置し、面積237.25㎢、人口15万人余りを擁する県庁所在地である。市域の三方は山に囲まれ、北は日本海を臨む鳥取砂丘が広がる。市の中央には中国山地を源とする千代川が流れ、この下流域に広がる鳥取平野は、縄文時代前期の縄文海進時には入り組んだ内湾状を呈していたとみられ、海退に伴う湖沼化と海岸部の砂洲の発達、千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積によって形成された沖積平野である。

横枕古墳群は、千代川中流西岸の平野南西部、横枕集落背後の、標高294mの八町山から派生する丘陵および集落前面に広がる低丘陵に展開する古墳群である。この千代川西沿岸一帯は、現在は幅１km余りの平野部を形成しているが、もともとは千代川の氾濫源であったと見られ、今も随所にその名残りが認められる。平野西側の丘陵沿いには江戸時代に治水された大井手川が北上している。

このうち今回の調査地は、横枕集落の前面に水田を挟んで複雑に入り組んだ標高50m程の独立丘陵上に位置し、鳥取市横枕、竹生、上味野地内に所在する。JR鳥取駅から直線にして南西約５kmの位置である。

横枕から３kmばかり北の菖蒲・古海地域では、1985年(昭和60)の鳥取国体を一つの契機として、国道29号線(旧国道53号線鳥取南バイパス)が菖蒲と服部集落の間を通って南吉成へと開通し、その沿線に店舗や各種事業所が、釣山の西側には東郷工業団地が進出するなど、開発が著しい地帯となっている。それに対し有富川を南へ遡った美穂、大和地区を中心とする一帯は、特に県道鳥取河原線以西においては農村集落の原像をとどめたかのようなのどかな田園風景が広がる地域であったが、今後の開発によってその景観が激変するのは必至である。

２．古墳群の歴史的環境

縄文時代　鳥取平野において最初に人の足跡がたどれるのは、千代川東岸の浜坂地内の砂丘で採集された黒曜石製の有舌尖頭器である。詳細は不明ながら旧石器時代まで遡る可能性をもつ遺物である。続く縄文時代早期の遺跡として、平成14年、中国山地山間部に位置する智頭町智頭枕田遺跡で、縄文時代早期および中期末から後期初頭の竪穴住居跡多数が見つかり、内６棟に石囲埋甕炉が遺存するなど、10万点を越す土器・石器などを含め、西日本最大級の縄文集落として注目されている。鳥取平野周辺では、同年、鳥取市域の西端、白兎海岸から１km余り内陸の丘陵裾部で前期中頃の磯ノ森式土器が後期の土器とともに採集されているほか、前期末の大歳山式土器が千代川東岸の丘陵上に立地する美和古墳群下層遺跡、湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡から微量ながら出土している。中期の遺跡としては砂丘地に立地する栃木山遺跡、追後遺跡、天神山遺跡があげられるが、縄文時代前半期については断片的な土器の出土にとどまる。縄文時代の遺跡として、砂丘後背地の低湿地に立地する前期の福部村渠谷遺跡、中期から始まる同村直浪遺跡、湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡、布勢第１遺跡が後期を中心とする著名遺跡として知られている。桂見遺跡ではこれまで数度にわたる調査が行われているが、平成６、７年度に全長7.2、6.4mの丸木舟が相次いで出土し話題となった。桂見遺跡の東側に位置する布勢第１遺跡では木組みをもった水路や漆塗で木製の広口壺や腕輪が出土し、高度な漆技術が示された。また、湖山池に浮かぶ青島遺跡では、磨消縄文の浅鉢など多くの遺物が出土している。

湖山池周辺以外の地域では、横枕古墳群から２km余り北の山裾に位置する本高円ノ前遺跡では二次堆積とみられるものの晩期の突帯文土器が、そのさらに北側、釣山の北東に広がる山ケ鼻遺跡で、縄文時代後期後葉から晩期前葉に比定される土器群が出土している。さらに千代川の自然堤防上に立地する古海遺跡では突帯文土器の良好な資料が出土しており、後期から晩期へかけて遺跡の立地場所が推移して

いく状況が窺える。布勢第１遺跡でも同様で、後期も後半を過ぎると遺跡は自然堤防上へ進出するようになり、晩期後半になると平野中心部の微高地へ進出するようになる。また、この他に千代川左岸では、岩本第２遺跡、帆城遺跡、湖山第２遺跡、岩吉遺跡、大桝遺跡、里仁遺跡(仮称)等で少量の土器片が出土している。千代川東岸では、平野部に位置する大路川遺跡でトチ・アラカシなどの堅果類の詰まった貯蔵穴５基、土製耳飾、後期～晩期前半の土器等が検出され、この他晩期の土器が断片的ながら、西大路上居遺跡、古市遺跡などで出土している。

弥生時代 弥生時代に入り、縄文時代晩期からの遺跡が引き続き営まれるが、前期の遺物を断片的に出土するだけで中期へ継続しない傾向がみられ、前期の実態は不透明な部分が多い。前期の遺物を出土する遺跡として、青島遺跡、湖山第１・２遺跡、布勢第１遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、天神山遺跡、身干山遺跡などが挙げられる。そんな中、鳥取平野の拠点集落と考えられている岩吉遺跡では、千代水平野の自然堤防上の砂州を中心とした微高地に立地し、遺跡の範囲は南北1,300m、東西800mに及ぶ。これまで数度の調査が行われているが、県東部平野部では、今のところ最も古い要素をもつ弥生土器が出土しており、鳥取平野で最初に稲作を導入した遺跡と考えられる。ただ前期の資料は数少なく、中期の遺物も今のところ断片的な出土にとどまり、昭和63～平成２年度の調査では、弥生中期中葉末から後期にかけて掘立柱建物、土坑、溝状遺構等の遺構が検出されている。この他、千代川東岸では西大路上居遺跡、富安遺跡が前期の遺物を出土する遺跡として知られる。中期中頃には自然堤防上に出現する古海、菖蒲、山ケ鼻、服部、秋里遺跡などがあり、一部岩吉遺跡の分村的な遺跡と考えられている。中期後葉になると段丘状の微高地に立地する遺跡が目立ち始め、帆城、湖山第２、布勢第２、大桝、北村恵儀谷遺跡などがその例である。こうして後期に入ると松原谷田、桂見遺跡をはじめ数は飛躍的に増加するとともに遺跡内の住居も増加傾向がみられ、それぞれ古墳時代へと営まれていく。この地域の弥生集落の一つの特徴として、玉作り関連の遺物が帆城、岩吉、秋里遺跡で出土している他、布勢第２遺跡で玉作り工房とみられる竪穴住居が検出されている。この他に、祭祀遺跡として湖山池に浮かぶ青島遺跡、湧泉に展開した寒ノ谷遺跡、弥生中期を初現とした秋里遺跡があり、高住字宮ノ谷では、扁平鈕式の流水文銅鐸が出土している。

横枕古墳群周辺の弥生時代の遺跡としては、平成13年に、今回の調査地から北側の、横枕集落背後の丘陵標高100m余りの地点で、古墳調査に伴って、弥生中期後半の壺、高杯、器台などが出土している。下味野古墳群からは、標高75m余りで、中期および後期の土器が出土している。また、標高41mの地点で、焼失竪穴住居から、弥生中期の土器がまとまって出土している。

千代川水系の氾濫原にあたる平野部にあたり、服部集落西側の標高７～８m程度の微高地に服部遺跡が内包している。昭和44年、圃場整備に伴う工事によって弥生時代後期の土器とともに田下駄、大足などの木製品が出土している他、服部遺跡出土とされる弥生時代中期の土器が鳥取県立博物館で所蔵されている。また、西側400mの丘陵裾部の微高地には北村恵儀谷遺跡が位置しており、後期を主体とする竪穴住居や土坑、掘立柱建物などが検出されている。また、北側の独立丘陵の釣山では、弥生時代後期の住居跡が検出されている。調査地から１～1.5km北の自然堤防上の微高地には、山ケ鼻遺跡、菖蒲遺跡が位置しており、中期中葉～後期の土坑や重複する溝状遺構が検出されている他、山ケ鼻丘陵では、中期の竪穴住居、貯蔵穴が調査されている。

弥生時代の墳墓については、西大路上居遺跡で調査された前期末～中期初頭の土坑が一部土壙墓との指摘がなされており、中期の土壙墓の可能性がある埋葬施設が下味野古墳群の調査で明らかとなっている。中期中葉に郡家町万代寺遺跡で方形周溝墓が採用されているが、鳥取平野での中期の様相は依然不透明な部分が多い。後期初頭の土壙墓が六部山古墳群の調査で、甕棺が釣山古墳群の調査から出土している。それよりやや早く長辺26m規模の岩美町新井三嶋谷墳丘墓が突如出現し、鳥取平野周辺においては、後期前葉に滝山貘懸平２号墓、中葉に紙子谷門上谷１・２号墓、郡家町下坂１号墓が造営されてい

る。このうち紙子谷門上谷１号墓は長辺24mの規模で26基の埋葬施設をもち、ガラス製管玉や鉄刀などが出土している。これに対し、千代川左岸地域では湖山池南東岸地域において目覚ましい台頭がみられる。布勢鶴指奥１号墓、第１土壙墓を中心とした桂見土壙墓群である。これらは、湖山池を望む丘陵上に突如造営され、この中で古い布勢鶴指奥１号墳丘墓は後期中葉の造営で、次の時期となる西桂見墳丘墓は四隅突出型墳丘墓であるか否かは分かれるところではあるが、突出部を含め一辺64×高さ５mと傑出した規模である。続く桂見土壙墓群では調査前重機の削平・攪乱を受けていた後の調査であったが、丘陵頂部に位置し、石列と地山の浅い掘削によって12mの方形状に墓域を区画し、中心主体とみられる第１土壙墓でのガラス製勾玉、水銀朱の出土などから墳丘墓であった可能性があるとされる。このように、千代川左岸と右岸地域ではやや様相が異なるようで、これまで調査事例の比較的少なかった弥生墳墓の調査例は今後増加していくものとみられる。

古墳時代　古墳時代になると、平野周辺部の丘陵上に大小さまざまな古墳が造られるようになる。引き続き千代川西岸では湖山池南東岸の桂見古墳群、倉見古墳群などを中心として展開されるが、これらは弥生時代からの系譜を引く方墳である。桂見１号墳は長辺22m×高さ2.5m、続いて作られた２号墳は長辺28m×高さ4.5mの規模で長大な木棺から舶載鏡を出土している。これらに続く主体部や副葬品等卓越した内容の古墳は今のところ明らかになっていない。10m前後の小規模古墳として倉見２～７号墳、桂見10・16号墳が調査されており、前期後半～中期初頭とやや遅れて丘陵上に造営されている。土器転用枕や弥生時代からの系譜とみられる彎曲する小口を有する木棺、舟形木棺の採用が特徴的であり但馬～丹後地方との同期の交流を窺う上で興味深い。木棺形式として箱式木棺、舟底状木棺、H形木棺、U字形木棺という序列が認められる。服部墳墓群周辺では、これまでに判明しているものでは、釣山24号墳（長辺22m、方墳）、銅鏡を出土した古海40号墳を含め古溝古墳群、徳尾古墳群が前期古墳として知られている。中期になって前方後円墳としてそれぞれ未調査のため内容は不明瞭ながら、里仁29号墳（全長85m）が、やや遅れて楕円１号墳（全長92m）、前方後方墳では古海36号墳（全長67m）などが点在する。調査例としては方墳で構成される里仁古墳群があり、畿内地方の影響を強く受けた鰭付円筒埴輪が出土している。また、下味野古墳群では箱式石棺より鉄鉾が出土している。後期に入って小規模古墳は墳丘規模が全体的に小型化する傾向があり、支稜線上にも造られるようになる。前方後円墳として布勢１号墳（全長59m）、大熊段１号墳（全長46.5m）があり、三浦１号墳（全長36m）、桂見６号墳（全長24.5m）、釣山２号墳（全長26.4m）等のように小規模な前方後円墳の築造もみられるようになる。このように小規模な前方後円墳を比較的多く有する古墳群として良田古墳群、松原古墳群などが挙げられる。桂見古墳群では湾曲した小口穴をもつ木棺が再び採用されるなど木棺墓が主流であり、千代川右岸に比べて箱式石棺の事例が少ないようである。千代川左岸では古墳の内部構造については右岸に比較して調査例が少なく特に湖山池周辺の横穴式石室については６世紀中葉の葦岡長者古墳（吉岡１号墳）、後葉の倉見９号墳、時期不明の石場山５号墳、高住12号墳が確認されているだけである。石材の豊富な東岸と比べて全体的に横穴式石室の造営が数少なく東岸でよく見られる所謂「中高式天井石室」とは異なる石室形態をとるようである。ただ、野坂川右岸の丘陵東側斜面に立地する山ケ鼻古墳（古海13号墳）は巨石を刳り抜いた石棺式石室で７世紀中頃の築造でありその特徴的石室構造とともに数少ない後期～終末期古墳として、７世紀後半に創建されたと考えられている菖蒲廃寺につながる貴重な存在である。

古墳時代の集落の調査例は比較的少ないものの、現在のところ古墳の立地する丘陵の後背地微高地上、現集落と重なって営まれたものと推察されている。弥生時代から続く遺跡として、布勢第２遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、湖山第１、湖山第２遺跡、天神山遺跡等がある。いずれも大集落とはいかず微高地上に住居跡が点在するといった状況で、西桂見遺跡の調査から、弥生時代丘陵上にみられた住居も古墳築造期になると丘陵斜面へ下りていくとされる。この他に千代川左岸では、岩吉、菖蒲、山ケ鼻、大枘遺跡等がある。菖蒲遺跡では釣山裾の微高地に焼失住居が検出されている。しかし菖蒲・服部の平野

部周辺では中期になると溝状遺構を除いて明確に古墳時代中後期に比定される遺構は7世紀に入るまでみられなくなるようである。また、この時期の特徴的な遺跡として、秋里、窯ノ谷遺跡を挙げることができる。前者は古墳時代を中心として弥生後期、奈良・平安時代と祭祀色が濃く、特に多量の土師器とともに各種模造土・石製品が出土する土器群、土器溜状遺構が特徴的である。後者は湧泉を中心に弥生～古墳時代と継続して展開され、分銅形土製品や、舟、刀等各種木製模造品が注目される。

歴史時代 7世紀に入ってからこの地域は、白鳳後期創建とされる菖蒲廃寺に象徴されるように菖蒲村周辺は古代山陰道の通過地点とともに駅衙、郡家の推定地でもあり、律令期に入って鳥取平野西岸の中心的地域であったとされる。現在でも菖蒲集落の西に菖蒲廃寺の塔の心礎とみられる礎石があり、この付近で土師百井式軒丸瓦が出土している。またその250m西の山ケ鼻遺跡では、菖蒲廃寺の時期と重なる7世紀の掘立柱建物群、溝状遺構、土坑等が検出されている。千代川対岸の古市遺跡では7世紀後半から平安時代にかけての掘立柱建物と奈良三彩小壺、墨書土器などが出土している。横枕周辺では倭文神社が式内社であり、古代新羅系の織布技術をもった集団である委文部がこの地域に居住していたと推定されている。また、律令体制下のこの地域は、天平勝宝7年(755)、『東大寺東南院文書』「東大寺領因幡国高草郡高庭庄坪付注進状案」から南北10条にわたり条里制が施行されていたことが明らかとなっている。この時期、菖蒲遺跡では釣山沿いの微高地に8世紀後半の総柱建物が検出されている。しかし高庭庄の経営はうまくいかず、その後延暦20年(801)、延暦22年(803)東大寺から庄域の多くが藤原縄主、藤原藤嗣へ売却され、残りの散在する5町8反余りを中心として開発を行ったが、その後10世紀後半には完全に没落し、長保6年(1004)を最後に史料に見られなくなる。10世紀初頭から国衙領体制が成立していく中で国衙領として再編されたものと考えられ、中世には一部を高草郡の郡領寺である薬師寺(後の座光寺)が有していたと『因幡民談記』に記されている。その間の遺構として、山ケ鼻遺跡のそれぞれ墨書土器などが出土した9世紀後半の井戸や13世紀に至る多量の遺物が出土した大形土坑があり、菖蒲遺跡では9世紀後半の墨書土器が出土している。また、岩吉遺跡では8～10世紀にかけて溜り状遺構や自然流路から567点にもおよぶ多量の墨書土器、人形、「天長二年(825)税帳」と記された題箋軸を含む木簡等が出土し、桂見遺跡是谷地区では8世紀後半、9世紀後半の掘立柱建物が検出され、いずれも公の機関の存在を示唆する報告がなされている。山ケ鼻遺跡では輸入陶磁器類が土坑や井戸から出土しており、菖蒲遺跡では、中世京都、近江産の緑釉陶器片とともに、白磁片、青磁片が多数出土していることなどから、高庭庄没落後も中世にかけて何らかの統治機関的なものがあったと考えられている。

貞治3年(1364)、因幡守護に山名氏が任じられる。山名氏は15世紀に入って守護所を布施に移して布施天神山城を築き、鳥取城へ移るまでの100年程の間、因幡支配の拠点とした。17世紀後半の古絵図に天神城周辺の様子が描かれており、一部調査されて内堀や土塁、井戸、焼け落ちた建物跡等が検出されている。また、「葬地」と記された丘陵である布勢鵜指奥墳墓群、桂見墳墓群で中世墓が検出され、この他に西桂見遺跡、大熊段遺跡、三浦遺跡、里仁古墳群、徳尾古墳群や、中世の埋葬施設とみられる集石遺構が釣山古墳群で検出されている。また、中世の倉庫跡が布勢第2遺跡で、長さ45m以上の土塁状遺構が西桂見遺跡で検出されている。山名氏の時代、横枕周辺では倭文城跡のほか、玉津集落の西側背後に鶴尾城跡があり、山名氏の家臣武田高信の持城であったが、謀反により山名豊国に滅ぼされ廃墟となったと伝えられる。

慶長5年(1600)関ヶ原の合戦後鹿野城主となった亀井茲矩は、慶長年間(1596～1614年)によって行われた亀井堤と呼ばれる大規模な堤防や河原を取水口とする大井手用水を開削した。この用水は横枕古墳群の調査地の丘陵緩辺部を北上しており、下流域の古海、里仁など千代川西岸下流域一帯は安定した用水を確保できるようになった。横枕地区他で現在も伝えられている因幡の傘踊りは、もともと雨乞いの踊りで、天明6(1786)年の旱害以来豊穣を祈る奉納行事として始まったとされる。県民俗文化財に指定され、長柄の大傘を持ち忠臣蔵の討ち入り装束に白鉢巻と白たすき姿の勇壮な踊りである。鳥取市はこ

の傘踊りから新作傘踊りを創案し、8月16日に行われる「しゃんしゃんまつり」として定着させ、現在にいたっている。

引用・主要参考文献

鳥取市『新修鳥取市史　第1巻　古代・中世篇』1983年
平凡社『日本歴史地名大系第32巻　鳥取県の地名』1992年
鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団『岩吉遺跡Ⅲ』1991年
鳥取市遺跡調査団『釣山古墳群発掘調査概報Ⅱ』1992年
㈶鳥取市教育福祉振興会『古海古墳群・宮瀬遺跡』1993年
㈶鳥取市教育福祉振興会『山ケ鼻遺跡Ⅱ』1996年
㈶鳥取市教育福祉振興会『桂見遺跡群』1998年
久保穣二朗『弥生時代の集落立地について』『鳥取県立博物館研究報告第27号』1990年
松井　潔『山陰東部における後期弥生墓制の展開と画期』『考古学と遺跡の保護』甘粕　健先生退官記念論集刊行会　1996年
谷口恭子『因幡地域』『山陰地方における弥生時代前期の地域相』第3回西伯耆弥生集落検討会　2001年
谷口恭子『因幡の弥生墳墓』『シンポジウム台状墓の世界』第20回両丹・但馬考古学研究交流会　2002年

―第1図　遺跡名称―

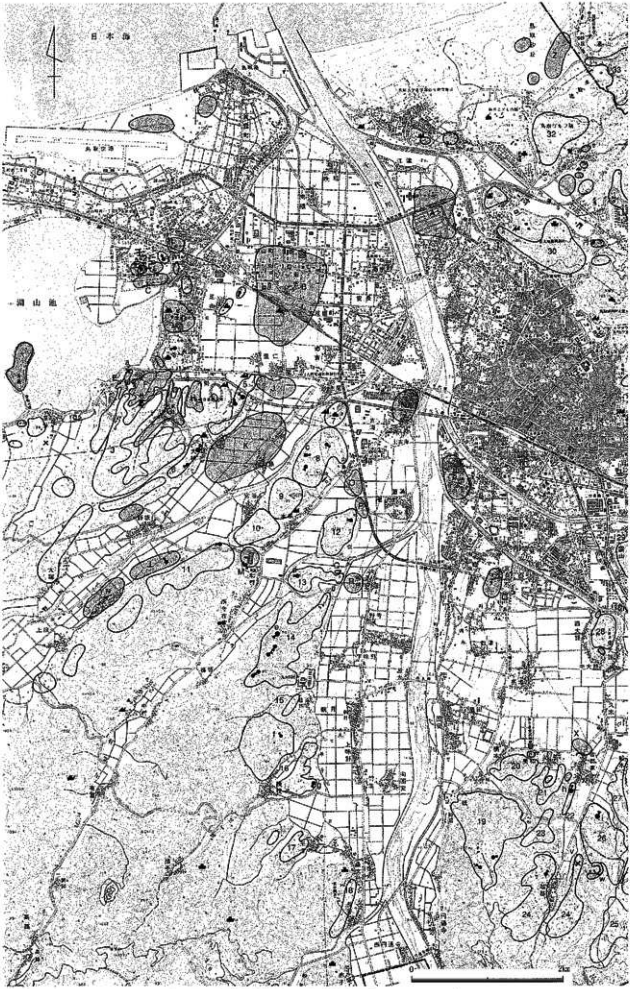
1．大熊段古墳群
2．三浦古墳群
3．桂見墳墓群
4．布勢鷲指奥墳墓群
5．里仁古墳群
6．物岡古墳群
7．馳尾古墳群
8．古海古墳群
9．本高古墳群
10．宮谷古墳群
11．小森山古墳群
12．釣山古墳群
13．服部墳墓群
14．下味野古墳群
15．薩田古墳群
16．**横枕古墳群**
17．玉津古墳群
18．長谷古墳群
19．八坂古墳群
20．橋本古墳群
21．奥和古墳群
22．古都家古墳群
23．興原古墳群
24．越路古墳群
25．宗山古墳群
26．六部山古墳群
27．船木古墳群
28．大路山古墳群
29．西影山古墳群
30．原金山古墳群
31．円護寺古墳群
32．岡地谷古墳群
33．湯山古墳群

A．秋里遺跡
B．岩吉遺跡
C．溝山第2遺跡
D．天神山遺跡
E．西桂見遺跡
F．桂見遺跡
G．東桂見遺跡
H．布勢第1遺跡
I．布勢第2遺跡
J．里仁遺跡
K．大物遺跡
L．小森山遺跡
M．北村恵信谷遺跡
N．古海遺跡
O．山ケ鼻遺跡
P．高御遺跡
Q．本高円ノ前遺跡
R．服部遺跡
S．古市遺跡
T．宮長竹ケ鼻遺跡
U．横本遺跡
V．越路鍋鶴出土地
W．七谷須恵器窯跡群
X．久末・吉都家・大路川遺跡
Y．西大路土居遺跡
Z．遠後遺跡

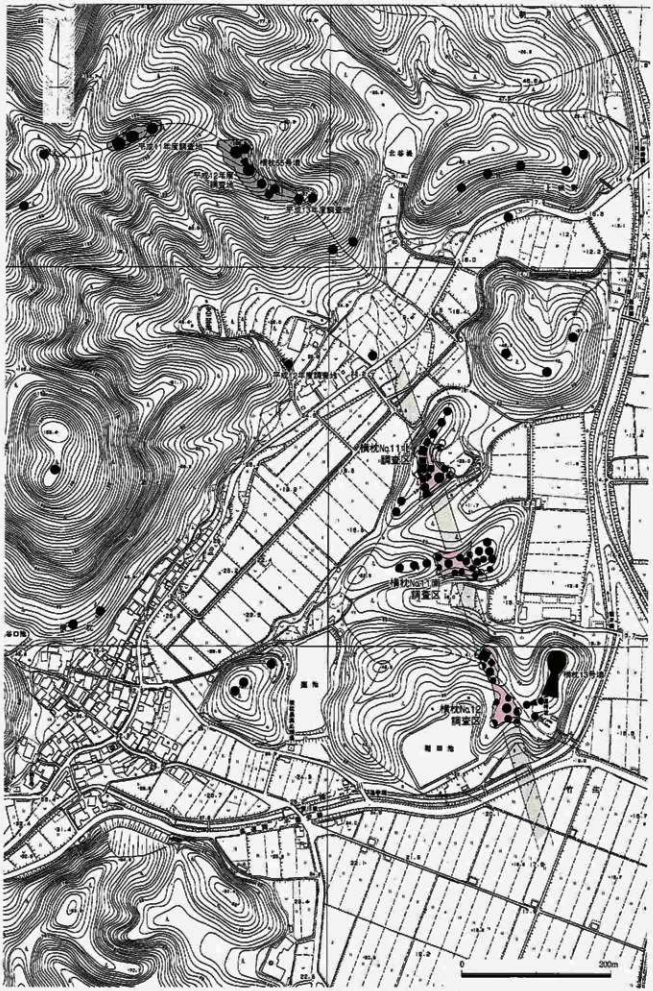
a．西桂見墳丘墓
b．物岡1号墳
c．古海35号墳
d．服部23号墳
e．下味野23号墳
f．横枕55号墳
g．横枕13号墳
h．古都家1号墳
i．六部山3号墳

―凡例―

集落遺跡・遺物散布地
墳墓群・古墳群
主要古墳
横穴
城跡



第１図　横枕古墳群周辺遺跡分布図（Ｓ＝１：50,000）



第２図　横枕古墳群調査地位置図（Ｓ＝１：5,000）

第３章　調査の結果

第１節　横枕古墳群の立地と構成（第２図）

横枕古墳群は、鳥取市横枕、竹生、上味野に所在する。中国山地から派生する丘陵のうち、八町山（標高294m）から東側へ下る横枕集落背後の丘陵および、集落前面の独立丘陵に展開する古墳群である。現在までに計91基の古墳が確認されているが、十分な分布調査が行われておらず、周辺の玉津、篠田、下味野古墳群同様に今後詳細な踏査が必要である。またこれらの地域では、平成11～13年度に水道施設建設に伴い、横枕集落北東の丘陵および裾部で古墳の調査が実施されるまで、本格的な発掘調査が行われなかった地域である。ただ、大正期の県道建設で多数の土器・鉄器が出土し、昭和初期に近隣の住民によって古墳の発掘が行われたという。また、山麓の果樹栽培等に伴い土器などが出土したとも聞く。現在でも丘陵裾部に開口している横穴式石室があり、裾部微高地の畑地で土器片が採集されるなど、古くから遺跡の存在が地元に知られた地域であった。ただ、今回の調査地が所在する独立丘陵東、玉屋神社の社叢北側に全長70mもの前方後円墳（横枕13号墳）の存在が明らかとなったのは比較的最近になってからである。

これまでの調査から、古墳は、標高155m弱（水田面からの比高差約130m）のあたりまで確認されている。平成12年度に行われた調査では、標高128～138mの北東に延びる尾根上で連なる円墳３基を調査した。尾根先端頂部に立地する43号墳は、径14.8m、内部主体は木棺直葬で、古墳時代後期中葉の築造である。その丘陵上位に位置する44号墳は、径14.8m、南西に開口する横穴式石室を内部主体とし、後期後半の築造である。さらに上位の52号墳については墳丘規模、内部主体ともに流失著しく明確にできなかった。これらから下った標高87～104mの南東に延びる尾根上の調査では、径11あるいは15m規模の円墳６基と、古墳群中３例目の前方後円墳である55号墳（全長23m）の調査が行われた。上部が大きく流失して内部主体が不明瞭なものが多いながら、木棺直葬あるいは直葬が推測され、墳裾の箱式石棺を含わせ、これらの古墳は後期前半の築造と考えられる。この他、別丘陵の裾部、標高32mで遺存状態が劣悪であったが、横穴式石室の調査を行った。

このように、横枕集落背後の丘陵上には、古墳時代後期の古墳が築造され、３基程度の小単位を形成していたようである。特に標高138mもの高い丘陵上での横穴式石室構築は注目され、時期的にこの周辺に石室が導入された初期の頃と考えられる。また、丘陵裾部には、横穴式石室を内部主体とする古墳が点在しており、今後詳細な踏査で新たに発見されるであろう。このように丘陵上と丘陵裾部とに立地が大別される集落背後に対し、集落前面の低丘陵では、古墳時代前期から後期までの古墳が連綿と築造される状況が看取され、古墳が近接および一部重複する状況であり、小単位として捉えることは難しい。古墳群全体で、どれほどの古墳が存在するのか不明瞭な現在の状態では群内の古墳について一律に考えるのは困難な状況といえる。

なお、古墳に先行する弥生時代の墳墓は現在のところこの周辺では見つかっていないが、集落については、平成12年度の横枕42～55号墳の墳丘下を中心とした標高100～103mで弥生時代中期の土器が出土しており、丘陵裾部の標高20数mの微高地で遺物の散布地が認められるなど、古墳築造の素地となる集落遺跡の存在も喚起されるところである。

第２節　各調査区の立地と概要（第２図）

今回調査した横枕古墳群№11北、№11南、№12区は、このうち、横枕集落前面の複雑に入り組んだ独立丘陵に立地する。標高が30m弱もしくは50mに満たない程度の小丘陵５ケほどが複雑に連結したような形状であり、基本的には南西－北東方向に延びる主稜線から南東および東方向に尾根が派生している。これら３ケの調査区は、いずれも尾根先端部を除く中位所に位置し、谷を挟み100mほどの距離を

隔てた小丘陵に立地する。北から順に、No11北、No11南、No12区と名称を与えた。

No11北区は、今回調査区の中で北側にあたり、南西－北東へ延びる丘陵頂部から南東へ下る小尾根および斜面、標高36～26mに立地する。No11南区は南西－北東へ延びる丘陵からさらに東へ派生する尾根の中位、鞍部を中心とした標高21～29mに立地する。No12区の所在する丘陵は、これら低丘陵の中でも東側に大きくそびえ、南にも平野を望み、横枕集落および猪子谷の谷口にあたる。標高50mの頂部から東へ下る尾根の先端頂部と、そこから南へ下る斜面および鞍部、さらに南へ張り出す小尾根に立地し、標高40～32mを測る。位置的には稲田池東側にあたり、東側尾根には横枕古墳群中最大の前方後円墳である13号墳(全長70m)が存在する。

このように、同じ丘陵とはいえ、それぞれに離れた立地で、それぞれの尾根で群を構成しているといってよい。また、いずれの調査区も丘陵東側の平野部を指向しており、No12区については一部南側平野部をも視野に入れていると考えられる。

横枕No11北区

No11北区は、横枕22～26、59～64、88～91号墳の計15基の古墳、墳丘外の埋葬施設(SX)3基、土坑(SK)15基、溝状遺構(SD)2条を検出した。調査区は南西－北東へ延びる主稜線上と南東へ下る小尾根および南東斜面に立地し、主稜線上には北東の丘陵先端側から続くと考えられる前期古墳が並び、南東斜面には中期および後期の古墳が築造されている。No11北区の所在する丘陵は、もともと幅25m程度の尾根幅しかなく、西側は比較的急斜面で水田面へと続き、東側はややなだらかな傾斜で下るが、丘陵中央の標高36mの尾根頂部から南東に張り出す小尾根があり、調査地はこの一部稜線上と丘陵頂部、張り出す小尾根および南東斜面が調査の対象となる。北側の丘陵先端部を除けば、この小丘陵内では中心的な位置である。調査地の北西側は耕作地として利用されており、一部掘削を受けている状況が見受けられた。

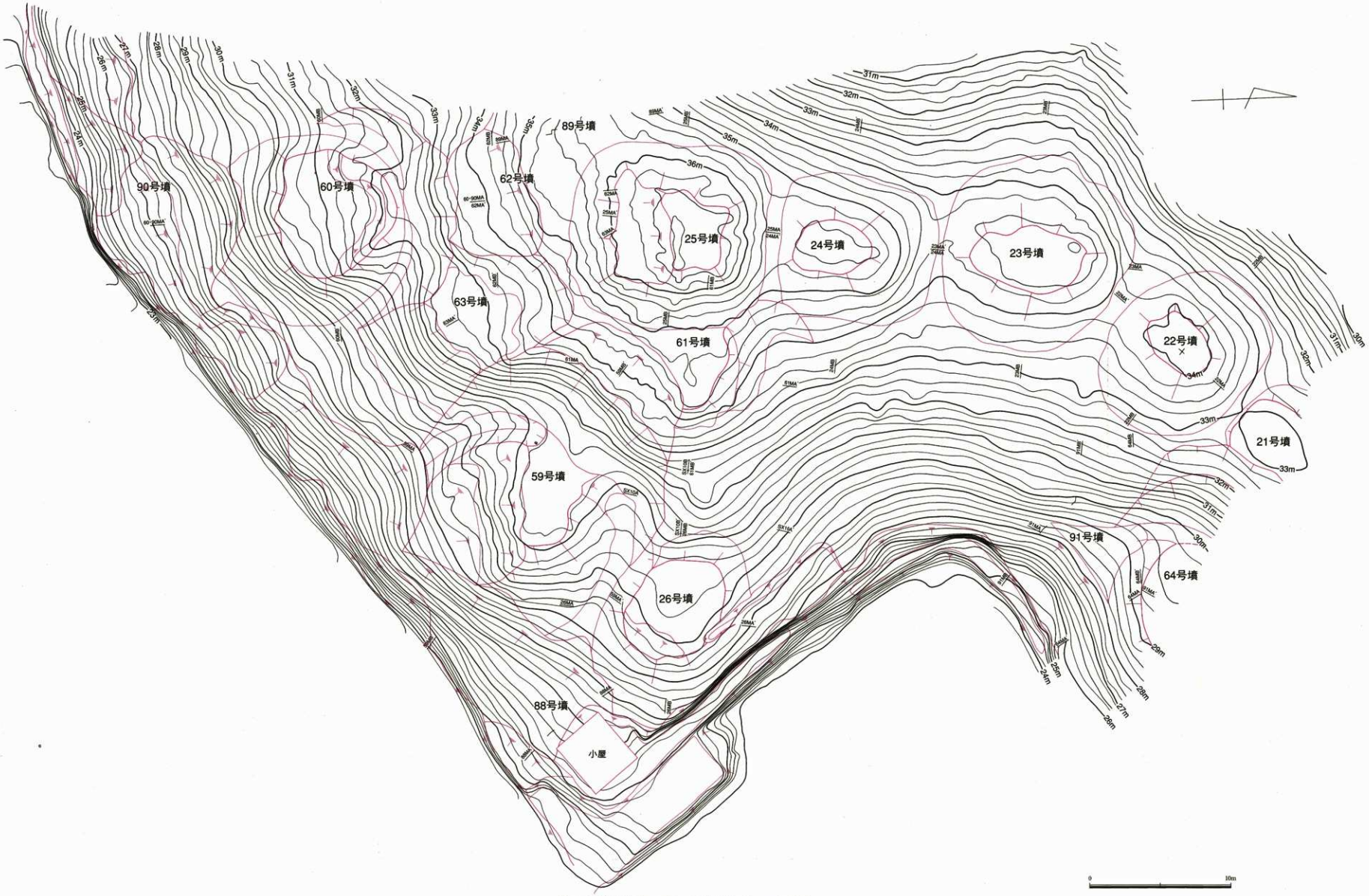
古墳は前期のものが基本的に方形で墳丘規模に大小が見受けられる。丘陵頂部に25号墳が占地し、その東側および南東側に小規模な方墳が取り巻く。中期の古墳は連なるように南側に下り、このうち59号墳は、やや規模の大きな円墳である。東斜面については、64、91号墳の存在から、おそらく北側の斜面についても同様に規模の小さな古墳が存在するものと予想される。

主体部は木棺直葬が主で、箱式石棺とみられる主体部、直葬がそれぞれ1例確認された。主体部内の多くは土器転用枕がみられ、鼓形器台、壺、土師器高杯、須恵器蓋杯、須恵器高杯と様々なものがみられている。副葬品は、前期では枕に使用された鼓形器台以外にはみられないが、核となる25号墳で折れ曲がった剣などが出土している。また、銅鏡が主体部外から出土している。

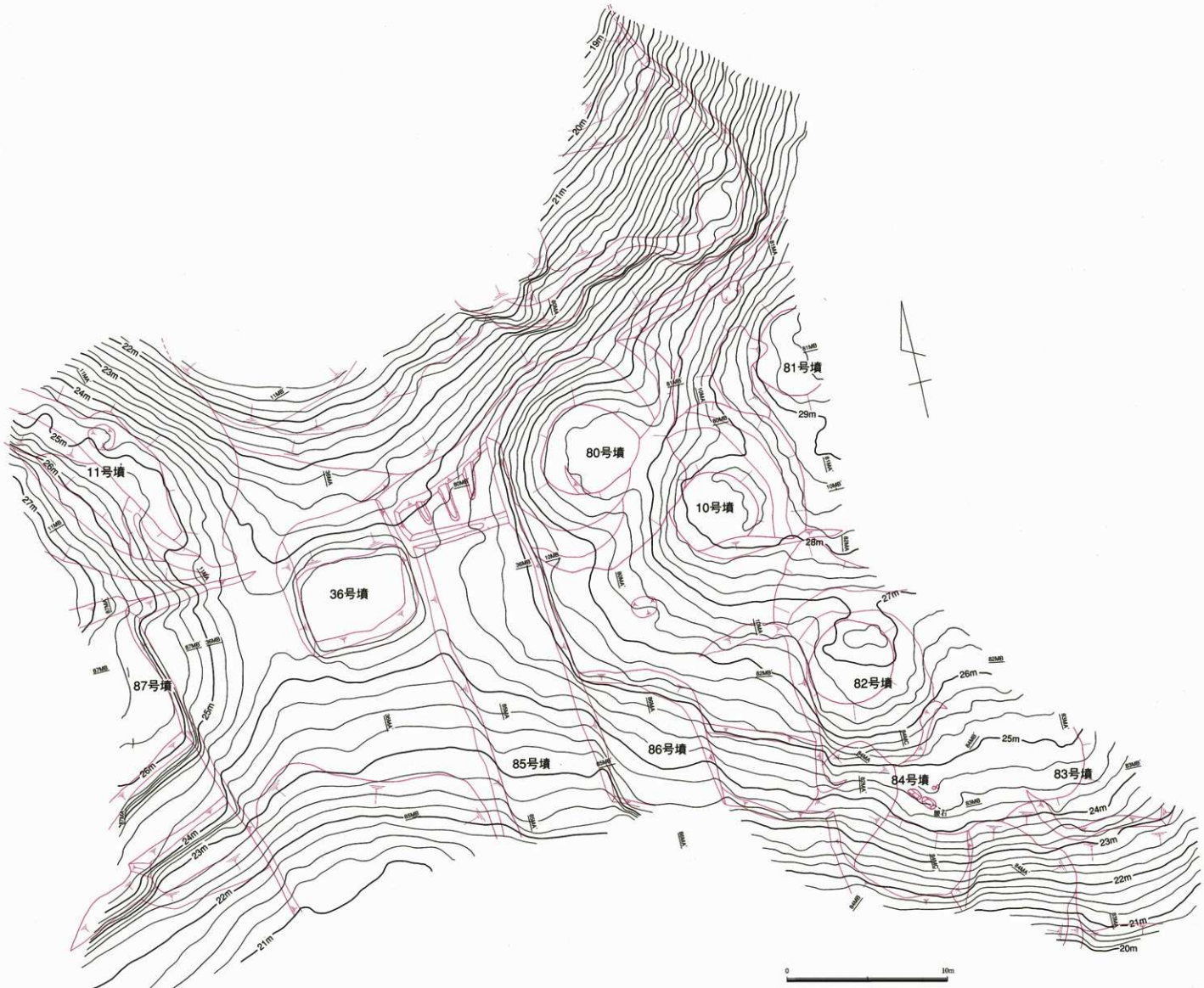
古墳のほかにも、南斜面を中心として、底部中央に小穴をもつ土坑などを検出している。このほかに、溝状遺構や、石鏃、中世土器が出土している。

横枕No11南区

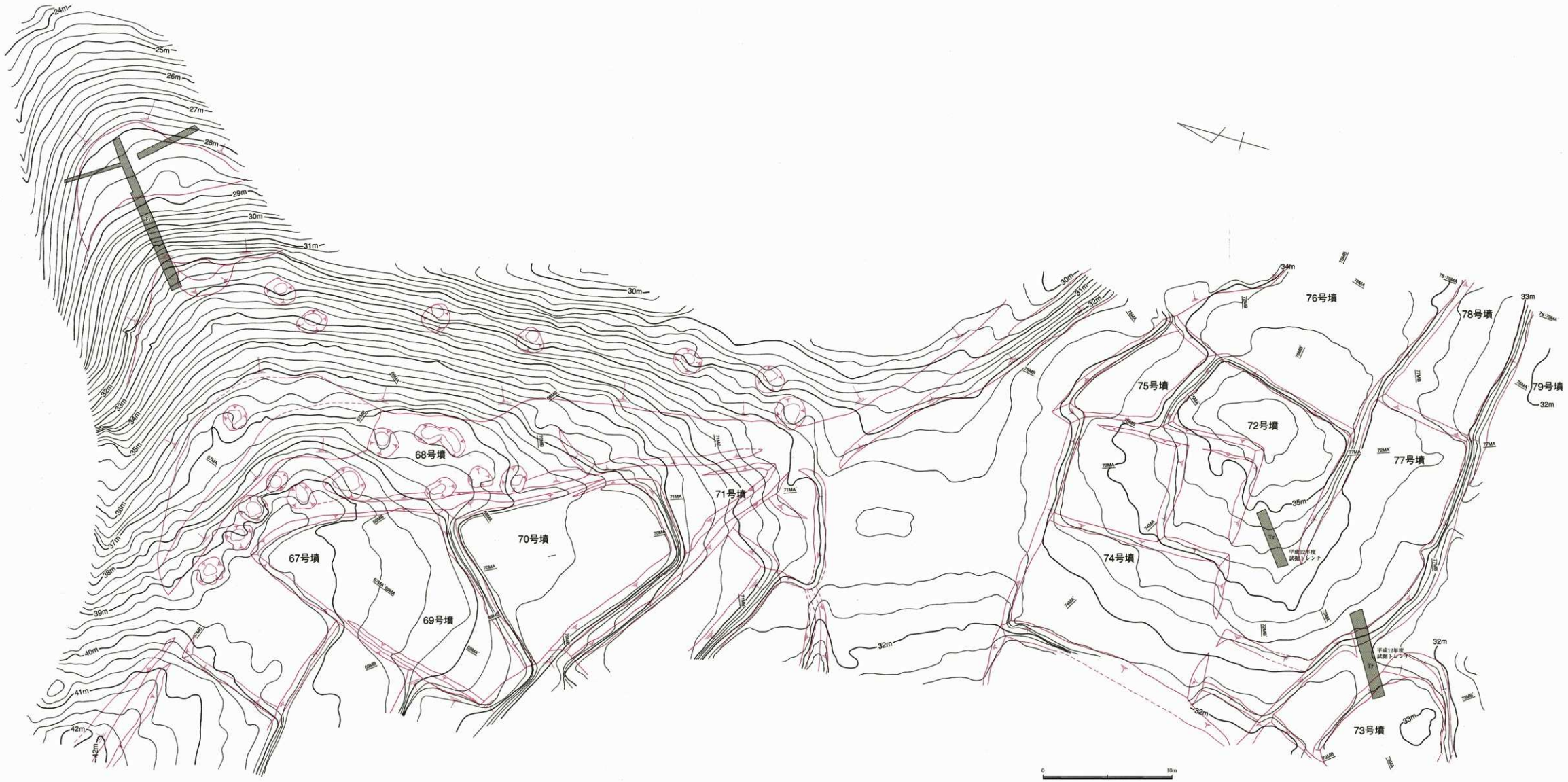
No11南区は、横枕10、11、36、80～87号墳の計11基、土坑(SK)18基、ピット2基を検出した。調査区は、南西－北東へ延びる主稜線から東へ派生する丘陵の中位あたり、丘陵先端部の標高30mの頂部から、下る西斜面と鞍部、再び標高33mの頂部へ続く東斜面に所在する。丘陵先端部には明らかに核とわかるような古墳の認識は現状ではできないが、標高約30mの頂部平坦面を中心として古墳が密集し、一部南斜面にも分布が認められる。その流れがNo11南区の東半にあたる西斜面でもみられ、径11mほどの円墳が一部重複しながら検出された。調査区中央の標高24m弱の鞍部には、一回り大きな径12.7mの36号墳が中央に占地し、南斜面に小規模な径8m程度の円墳が、調査区西側の東斜面には標高33mの頂部稜線上にも古墳が複数基分布するがその流れとみられる径11m規模の円墳が所在する。時期的には古墳時代中期から後期、終末期にかけての古墳である。埋葬形態としては木棺直葬が主であり、石棺と横穴式石室がそれぞれ1例である。主体部内には土師器高杯や椀、須恵器蓋杯を伏せた転用枕を検出する主



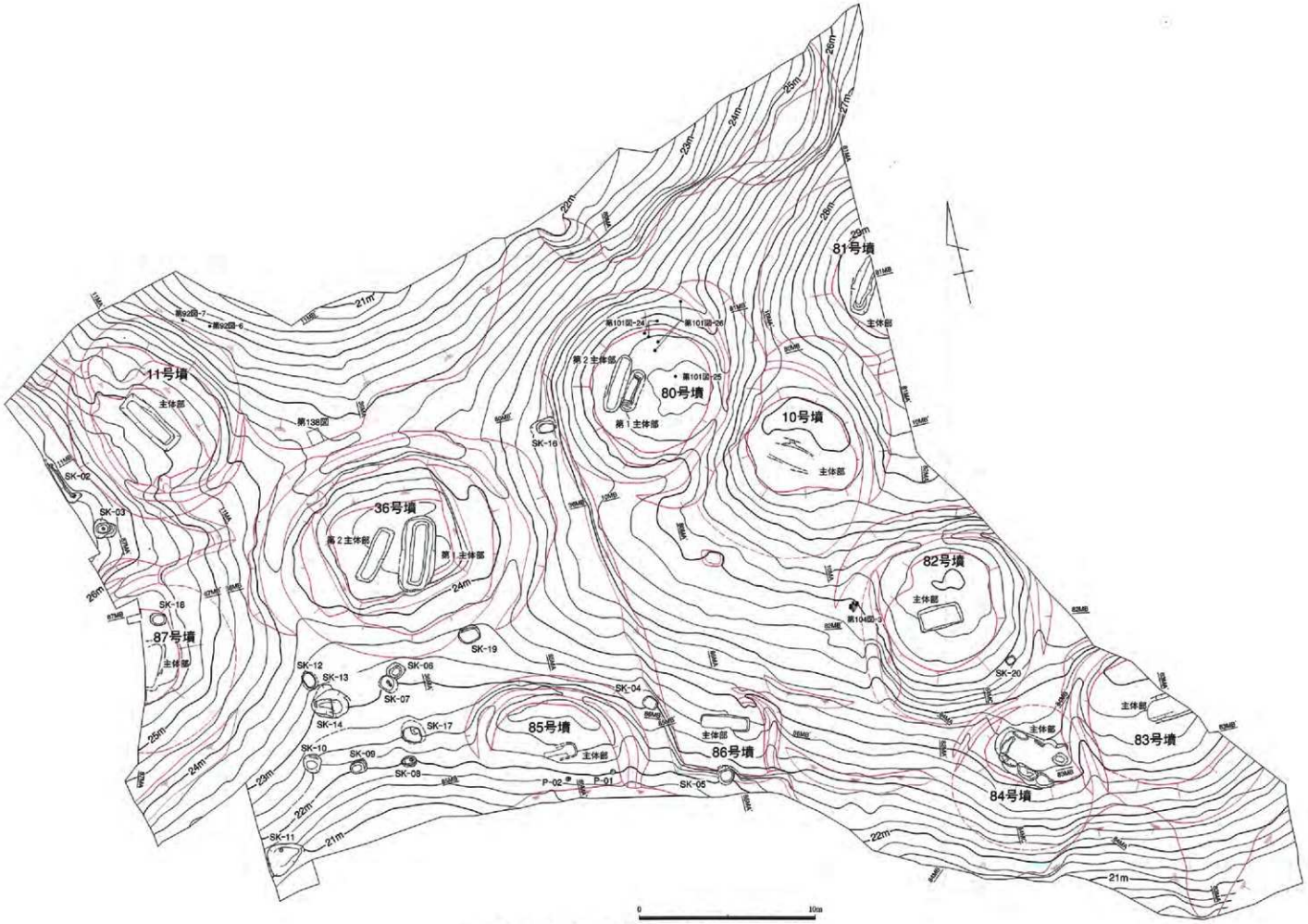
第３図　横枕古墳群 No.11北区 調査前地形図（Ｓ＝１：200）



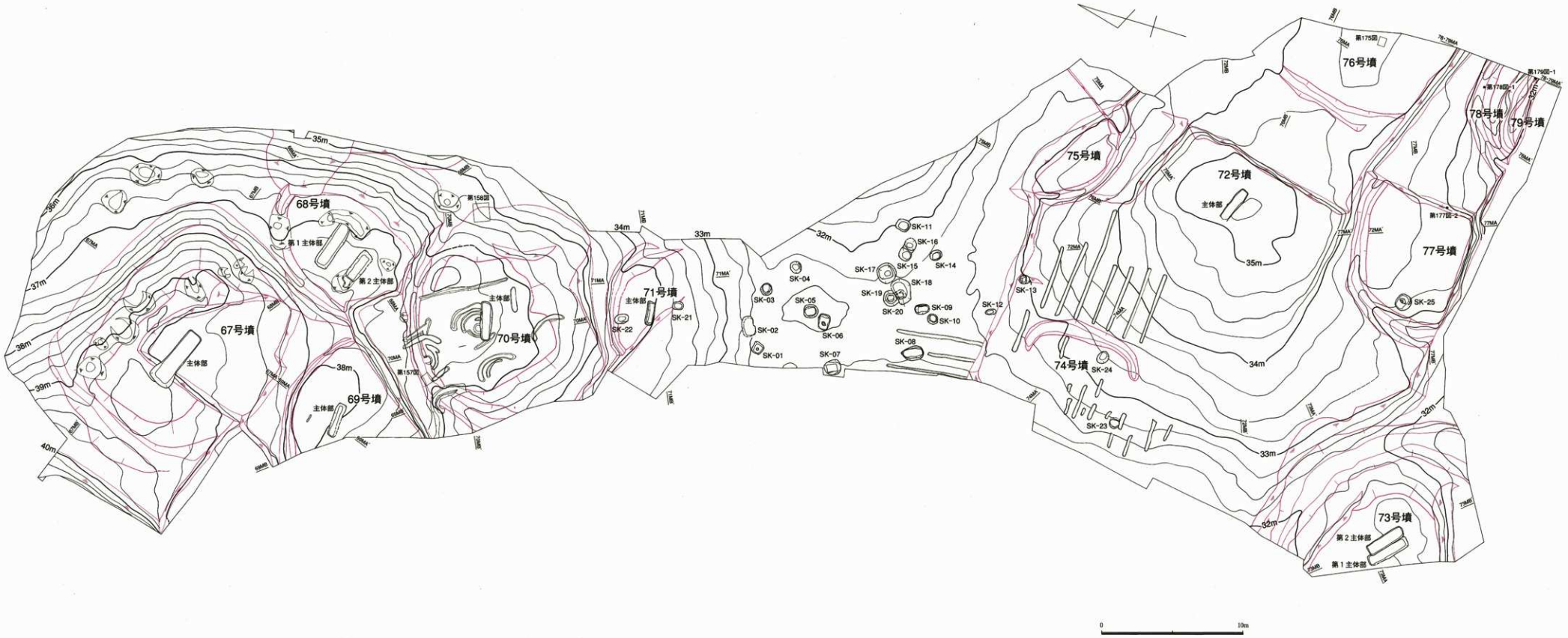
第４図　横枕古墳群 No11南区 調査前地形図（Ｓ＝１：200）



第5図　横枕古墳群 No.12区 調査前地形図（S＝1：200）

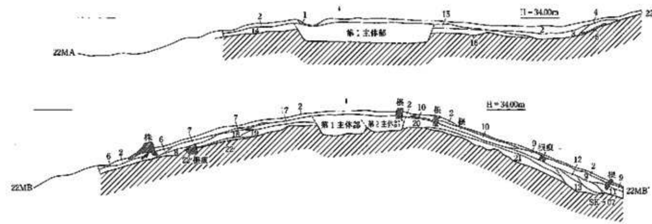


第7図　横枕古墳群 No.11南区 墳丘遺存図・全体図(S＝1：200)



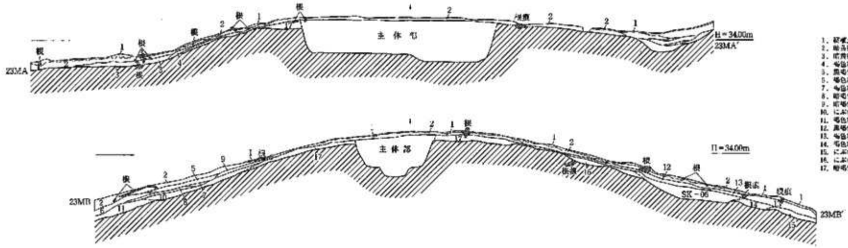
第8図　横枕古墳群 No.12区 墳丘遺存図・全体図（S＝1：200）

横枕22号墳



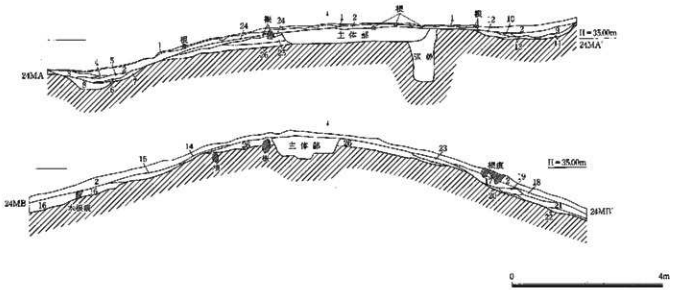
1. 耕作土
2. 耕作土・暗黄褐色粘質土（やや赤褐色かかる。表土）
3. 褐色粘質土（やや赤褐色かかる）
4. 褐色粘質土（3より明。やや赤褐色かかる）
5. 暗赤褐色粘質土
6. 褐色粘質土（やや黄褐色かかる）
7. 褐色粘質土（6よりやや暗）
8. にぶい黄褐色粘質土
9. 暗黄褐色粘質土（10よりやや暗）
10. 暗黄褐色粘質土（2よりやや暗。やや橙色かかる）
11. 暗黄褐色粘質土（9より暗）
12. 暗黄褐色粘質土
13. 褐色砂礫粘質土（赤褐色粘質シルトを含む）
14. にぶい赤褐色粘質土
15. 橙褐色粘質土
16. にぶい赤褐色粘質土（砂粒を僅かに含む）
17. 橙褐色粘質土
18. にぶい赤褐色粘質土（濁る）
19. 赤褐色粘質シルト
20. 橙褐色粘質土
21. にぶい赤褐色粘質土
22. 褐色砂礫粘質土（黒色かかる。旧表土）

横枕23号墳



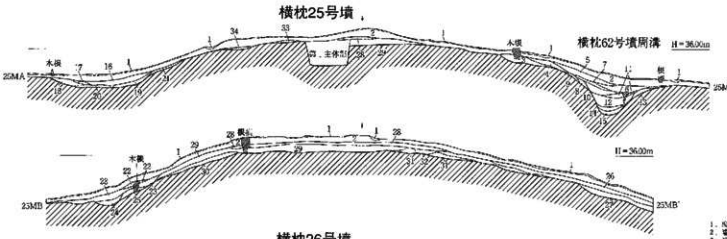
1. 耕作土
2. 暗赤褐色粘質土（やや赤褐色かかる。表土）
3. 暗黄褐色粘質土（2よりやや明）
4. 褐色粘質土（表土）
5. 黒褐色粘質土
6. 褐色粘質土（7より明）
7. 褐色粘質土
8. 暗褐色粘質土
9. 暗褐色粘質土
10. にぶい赤褐色粘質土（濁る）
11. 褐色粘質土（砂粒を僅かに含む。濁る）
12. 黒褐色粘質土
13. 褐色粘質土（4より明）
14. 褐色粘質土（砂粒を僅かに含む）
15. にぶい赤褐色粘質土（砂粒を僅かに含む。濁る）
16. にぶい赤褐色粘質土
17. 暗褐色粘質土（黒色かかる。旧表土）

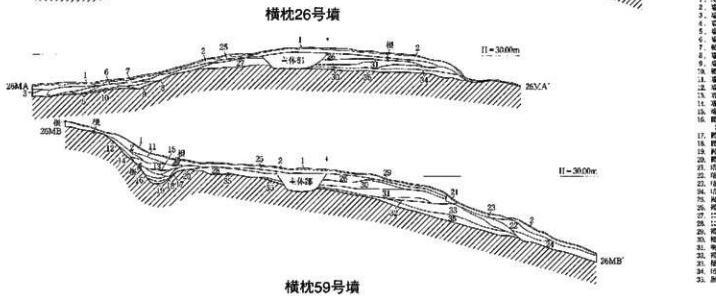
横枕24号墳

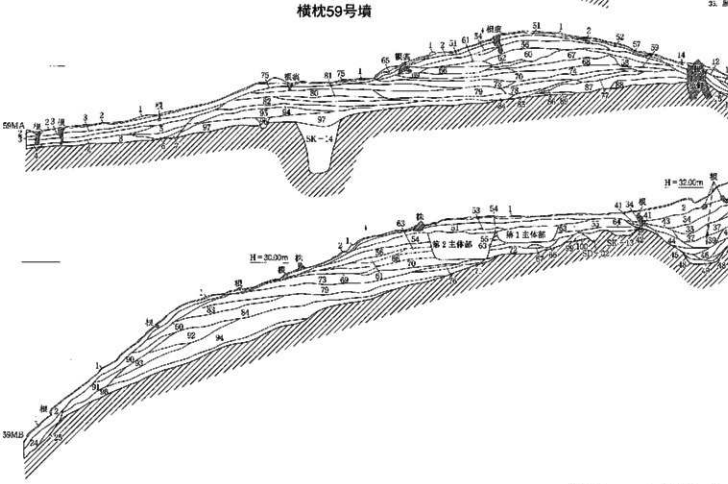


1. 耕作土・暗黄褐色粘質土（やや赤褐色かかる。表土）
2. 耕作土・暗黄褐色粘質土（1より黄褐色斑紋。表土）
3. 褐色粘質土（表土）
4. 褐色粘質土（3より暗）
5. 黒褐色粘質土
6. 褐色粘質土（3より明）
7. 暗褐色粘質土
8. 赤褐色砂質粘質シルト
9. 黒褐色粘質土
10. 褐色粘質土
11. 暗褐色粘質土
12. 暗黄褐色粘質土（2よりやや明）
13. 褐色粘質土（10より明）
14. 褐色粘質土（やや黄褐色かかる）
15. 暗褐色粘質土
16. 暗褐色粘質土（15より明）
17. 褐色粘質土
18. 褐色粘質土（17よりやや暗）
19. 暗褐色粘質土
20. にぶい褐色粘質土（21より明）
21. にぶい褐色粘質土（やや黄褐色かかる）
22. にぶい黄褐色粘質シルト（灰色かかる）
23. 暗褐色砂礫粘質土
24. 暗黄褐色粘質土（12よりやや明）
25. 赤褐色粘質シルト（灰色かかる。にぶい黄褐色シルトブロックを含む）
26. にぶい黄褐色シルト（灰色かかる。旧表土）

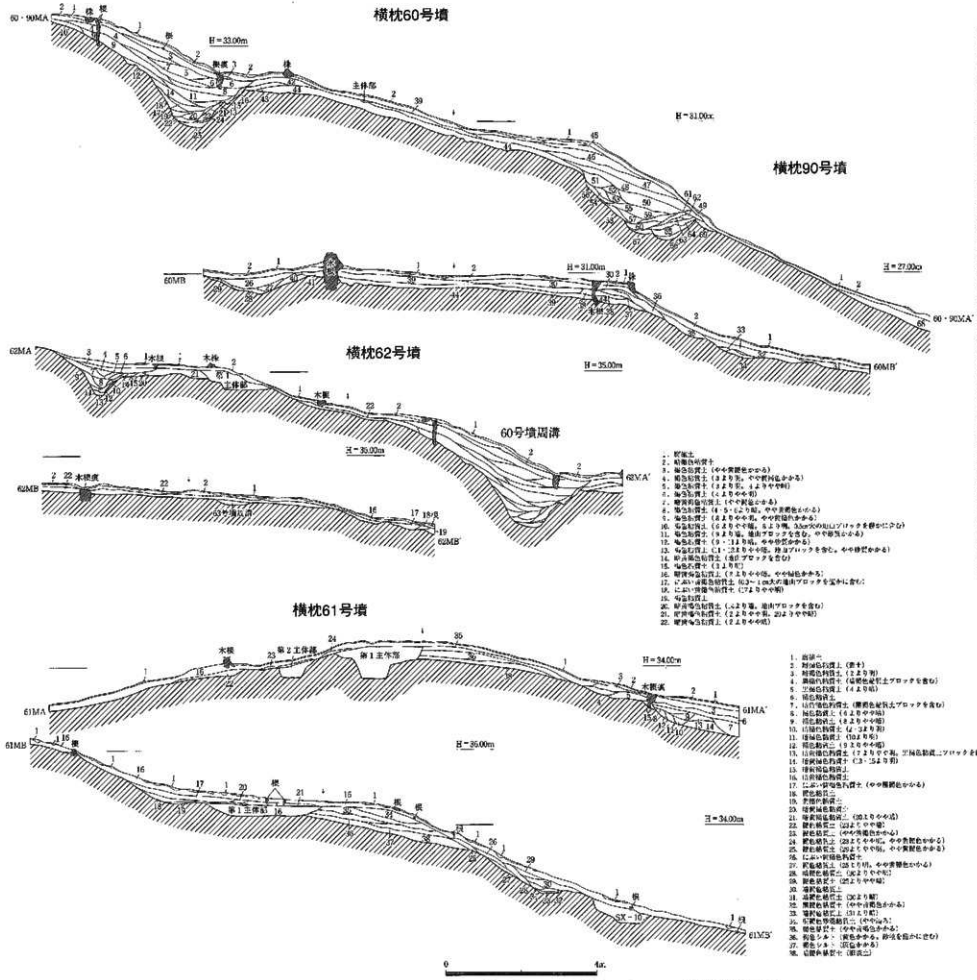
第９図　№11北　横枕22・23・24号墳墳丘断面図（Ｓ＝１：100）



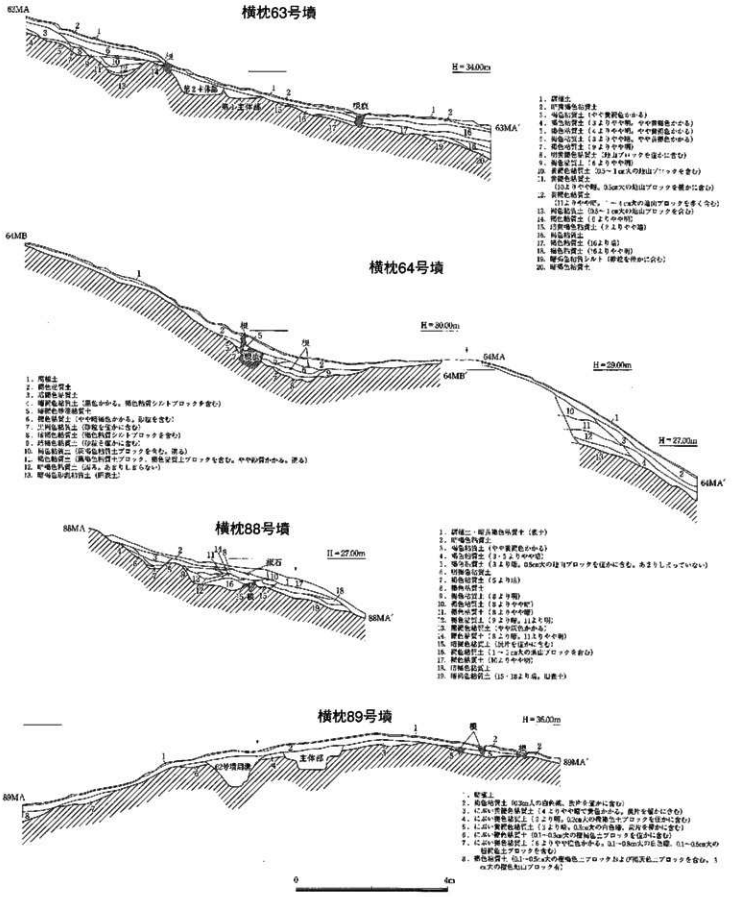




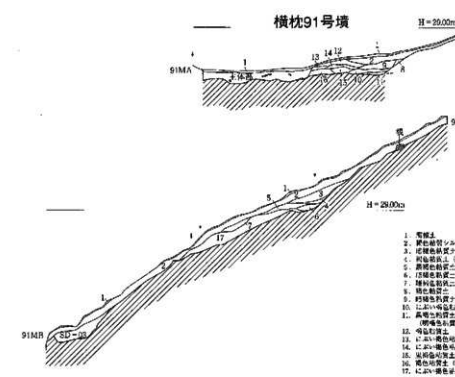
第10図　No11北 横枕25・26・59号墳墳丘断面図（S＝1：100）

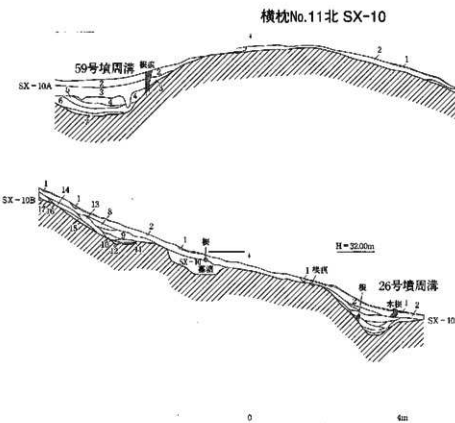


第11図　No11北 横杭60・61・62・90号墳墳丘断面図（S＝1：200）



第12図　№11北 横枕63・64・88・89号墳墳丘断面図（S＝1：200）





第13図　No.11北 横枕91号墳・SX-10周辺墳丘断面図（S＝1：100）

体部が7基、鉄鏃、玉類を副葬する例が6例みられた。

古墳のほかにも、中央鞍部南斜面を中心として、底部中央に小穴をもつ土坑などが検出している。このほかに、弥生土器片や縄文土器片、中世土器片がわずかながら出土している。

横枕No.12区

No.12区は、67～79号墳の計13基、土坑(SK)25基を検出した。調査区は、横枕集落前面の低独立丘陵のうち、一番南に広がる丘陵の東側に位置し、最東端の尾根には、主軸を南北よりやや東に振る前方後円墳・横枕13号墳(全長70m)があり、調査区全体は13号墳と谷を挟んで西側に並列するような位置である。調査区は中央の鞍部をはさんで南北ではやや様相が異なり、北側の標高50mの丘陵頂部から東へドる尾根筋の先端頂部やや北西側に前期の方墳67号墳と68号墳が2基築かれ、この2基については、あくまで丘陵東側の平野部を意識している。そしてその南斜面に中期の古墳が築造されている。鞍部の南側では前方後円墳からの流れともみられる中・後期の円墳が72号墳を中心として展開し、南西へ張り出す尾根先端頂部に各種豊富な副葬品が出土した73号墳が立地する。他の調査区に比べ、墳丘規模に格差が認められる。調査区は、畿中・後の畑の耕作によって階段状の平坦面に著しく改変されていただめ、上部がかなり削平され、埋葬施設についても不明なものが多々あるが、基本的に木棺直葬とみられる。主体部内には上器枕をもつものが目立ち、中・後期の古墳を中心に、鉄器や玉類の副葬が行われている。

古墳のほかにも、調査区中央鞍部を中心として、多くの土坑を検出した。底部中央に小穴をもつもの、平面方形の底部をもつものなど類型がありそうである。このほかに、71号墳の南側に中期の高杯・壺などがまとまって出土した上器溜り状の土坑がある。

第３節　横枕No.11北区の調査

1. 横枕22～26、59～64、88～91号墳の調査

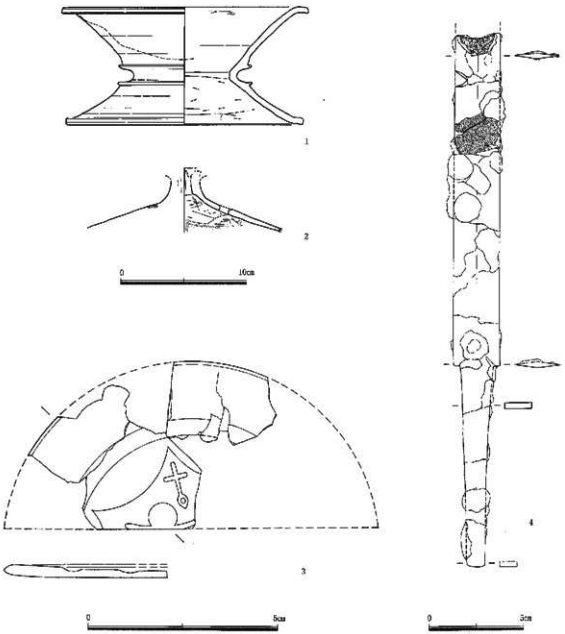
横枕22号墳（第３・６・９・14～16図、図版３・８・16・17・109）

〔位置と現状〕

横枕22号墳は、調査区北端、標高32.3～33.9mの丘陵上に立地する。南西に23号墳、北東は調査区外であるが21号墳がそれぞれ近接する。丘陵東側に広がる水出面からの比高差は約21mである。調査前の観察では、北東の丘陵先端から稜線上に古墳状の高まりが連続し、22号墳もその中のひとつで主稜線に直交する窪みが周溝の存在を予想させたが、日で確認する限りそれほどの高さは認められなかった。

〔墳丘〕

表土下10～20cmで墳丘面を検出した。古墳の北東端は調査区外となるが、おおよその墳丘規模は確認できた。墳頂部は標高33.9mをはかり、主体部の遺存状況から若干上部が流失しているものとみられる。主稜線方向にやや長い方墳で、墳丘規模は北東裾から南西裾まで推定10.8m、北西裾から南東裾で10.5m、墳丘の高さは南西裾から北西裾で2.04mを測る。



第14図　No11北 横枕22号墳第１主体部出土遺物実測図

墳丘は、地山成形と尾根に直交方向の溝を掘削して盛り土することにより築造されている。盛土は、墳頂部周辺に20cm弱が遺存しており、主体部南側で最大25cmを確認した。東側の墳丘裾部周辺で旧地表を確認しており、西側斜面に盛土して墳丘規模をそれなりに維持しようとする意図は窺えるものの古墳自体の重心は築造当初から東側にあったと考えられる。

【埋葬施設】

埋葬施設は、遺存する墳頂部中央、尾根に並行する軸で切り合う2基を検出した。当初の予想より検出が困難なため、上部をグリッドで掘り窪めさらに補助トレンチによる層序確認によって主体部を検出した。ほぼ古墳の主軸に並行する第1主体部に対し、やや軸を西へ振り西側壁を切る状態で第2主体部が重なる。なお、西裾にSK-07が位置するが、22号墳との関連等は不明である。

第1主体部（第14・16図、図版8・16・17・109）

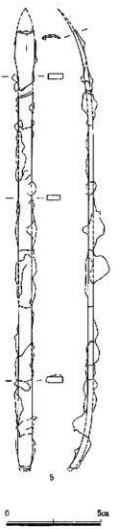
墳頂部中央で第2主体部とは約12°の軸を振って西側で重複し、南西端が不明である。盛上上から地山まで掘り込んでいる。墓壙の主軸は尾根の稜線に並行するN-44°-Eを振り、平面形は隅丸長方形である。規模は、現況で長さ3.66m、幅1.53m、深さ43cmが確認されるが、検出グリッドの深さを勘案すると約55cmの深さとなる。上層の断面観察などから木棺の痕跡は積極的には認められず、直葬の可能性も考えられる。なお、墓壙南東壁際で、鼓形器台と鉄剣が出土しており、鼓形器台は時期や配置から転用枕と考えるのが妥当と思われる。また、墓壙中央やや東寄りの埋土上層から銅鏡片が出土しており、破断面から破砕鏡である。その他に小形高杯の脚台部が埋土から出土している。

鼓形器台（1）は、やや厚手で、受部、脚台部ともにしっかりとした稜をもつが脚台部は短くなる傾向が窺える。受部に打ち欠きが認められる。椀形高杯の脚台部（2）は、大きく開く裾部上位に円孔3が復元される。銅鏡（3）は、「子」の銘と蝙蝠座が確認される復元径9.9cmの内行花文鏡である。鋺を取り切断後、内区破断面に調整痕が認められる。鉄剣（4）は、茎部が長く剣先を欠くが現存長28.2cmからみると、本来40cm程度の長さはあったと推定される。鎬がはっきりとした断面菱形で、布目が観察される。

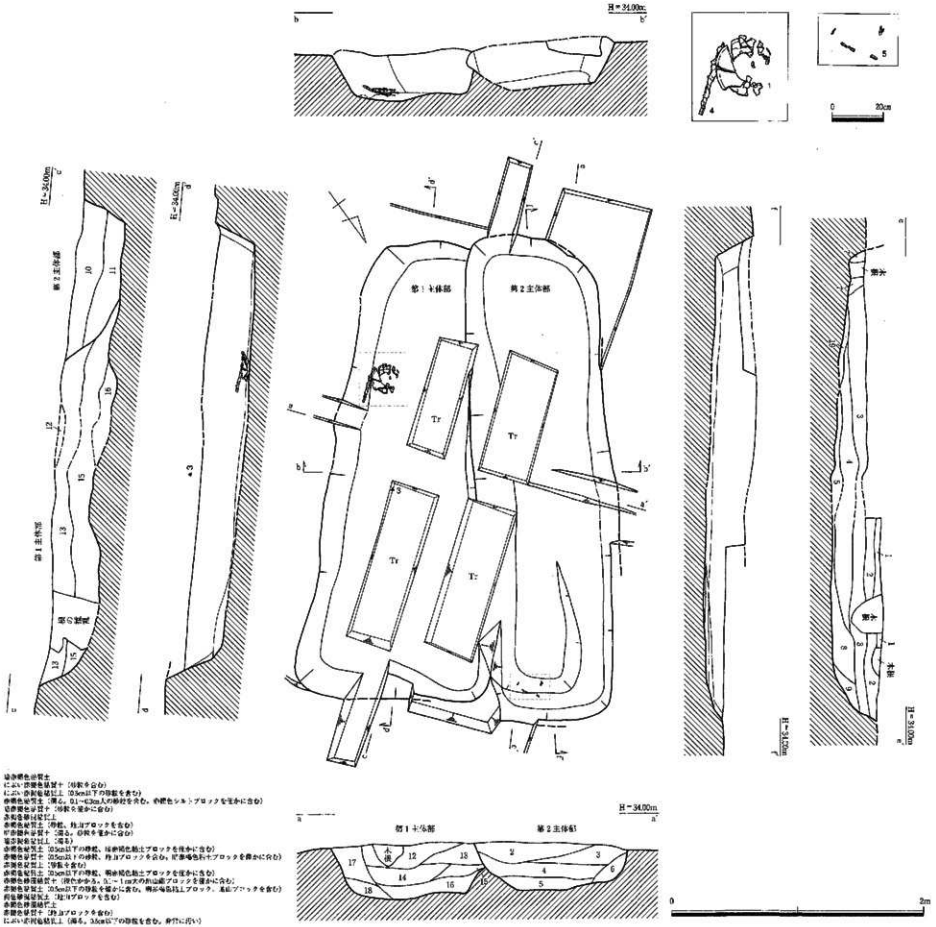
第2主体部（第15・16図、図版8・16・17・109）

古墳の主軸からやや西へ振り、第1主体部の南西側を切って造られている。盛土上から地山まで掘り込まれており、第1主体部より掘り込みは若干浅い。墓壙の主軸は尾根の稜線にほぼ並行するN-31°-Eを振り、平面形は隅丸長方形である。規模は、現況で長さ3.86m、幅1.12m、深さ38cmが確認されるが、検出グリッドの深さを勘案すると約42cmの深さとなる。土層の断面観察などから木棺の痕跡は積極的には認められず、直葬の可能性も考えられる。北西端で鉄1個体が散乱した状態で出土している。

鉄（5）は、切先、茎尻を欠くが、全体に細身で茎部が長い。全長24.6cmが推定される。



第15図　No11北 横枕22号墳 第2主体部出土遺物 実測図



1. 暗赤褐色出雲土
2. にぶい赤褐色粘質土（砂粒を含む）
3. にぶい赤褐色粘質土（35cm以下の砂粒を含む）
4. 赤褐色砂質土（薄く、0.1～0.2cm大の砂粒を含む。赤褐色シルトブロックを微かに含む）
5. 暗赤褐色砂質土（砂粒を微かに含む）
6. 赤褐色粘質土
7. 赤褐色砂質土（砂粒、粘土ブロックを含む）
8. 灰赤褐色砂質土（薄く、砂粒を微かに含む）
9. 暗赤褐色砂質土（薄く）
10. 赤褐色砂質土（35cm以下の砂粒、暗赤褐色粘土ブロックを微かに含む）
11. 赤褐色砂質土（25cm以下の砂粒、粘土ブロックを含む。灰赤褐色粘土ブロックを微かに含む）
12. 赤褐色砂質土（砂粒を含む）
13. 赤褐色粘質土（35cm以下の砂粒、明赤褐色粘土ブロックを微かに含む）
14. 赤褐色砂質粘質土（砂粒が多い。0.1～1cm大の白色ブロックを微かに含む）
15. 赤褐色砂質土（25cm以下の砂粒を微かに含む。明赤褐色粘土ブロック、黒色ブロックを含む）
16. 赤褐色砂質粘土（粘土ブロックを含む）
17. 赤褐色砂質粘質土
18. 赤褐色砂質土（粘土ブロックを含む）
19. にぶい赤褐色粘質土（薄く、35cm以下の砂粒を含む。身部に近い）

第16図　No11北 横枕22号墳第1・2主体部実測図（S＝1：30）

横枕23号墳（第3・6・9・17～19図、図版3・8・18・19・109）

〔位置と現状〕

横枕23号墳は、調査区北側の丘陵上に位置し、北東からやや北向きに軸を変える主稜線の変換部、標高32.8～34.5mに立地する。北東に22号墳、南に24号墳が近接する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は21m弱である。調査前の観察では、北東の丘陵先端から稜線上に古墳状の高まりが連続し、23号墳もその中のひとつであるが、他と比べやや大きな規模であり、主稜線に直交する窪みが周溝の存在を予想させたが、高さはさほど感じられなかった。

〔墳丘〕

表土下5～15cmで墳丘面を検出した。墳頂部は標高34.5mを測る。丘陵高位南側では表土下は地山面であったが、北側および東西は旧地表面が遺存し、盛土は、墳頂部北側の一部で部分的に確認されるにとどまる。上部がかなり流失しているとはいえ、遺存する主体部墓壙の深さを考慮すれば、本来盛土がさほど施されなかったと考えられる。主稜線方向にわずかに長い方墳で、墳丘規模は南北周溝底間で13.8m、東西裾間で13.5m、墳丘の高さは東裾から1.7mを測る。

墳丘は、主に地山成形で造られており、東西裾部のわずかな削り出しと尾根に直交方向の溝を掘削して尾根低位の北側に盛り土することにより尾根幅を最大限利用した築造がなされている。なお、南側の24号墳との前後関係は、周溝の土層断面から、23号墳が先行するものと考えられる。22号墳との関係は明確にできなかった。

〔埋葬施設〕

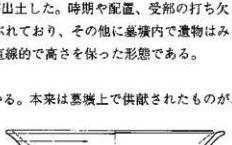
埋葬施設は、遺存する墳頂部中央で、尾根に並行する軸で1基を検出した。なお、西裾に墳丘裾を切ってSK-06が位置し、軸が23号墳の主軸とほぼ並行するものの、関連性や埋葬施設かどうかも含めてさらに検討が必要である。

墓壙の主軸は尾根の稜線に並行するN-17°-Eをとり、墓上上から地山を深く掘り込んでいる。平面形は隅丸長方形である。墓壙は二段に掘り込まれており、上面の長さ5.05m、幅2.26m、二段目掘り方は長さ4.72m、幅80～92cm、深さ26cmを測る。底面の規模は、長さ4.35m、幅53～75cmである。墓壙上面からの深さは1.09mを測る。墓壙埋土の断面観察から木棺の痕跡が認められ、第18図の第27～39層が木棺の裏込め土とみられる。木棺の大きさは断面から推定して長さ3.1m、幅50cm前後と考えら、二段目掘り方いっぱいに棺を納めていたとみられる。

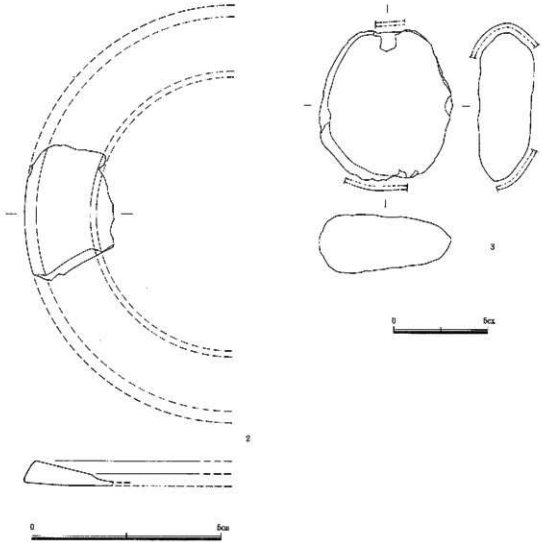
遺物は、墓壙北壁から1.3m離れた床面で鍛形器台（1）が出土した。時期や配置、受部の打ち欠きから転用枕と考えられる。土圧でわずか5cm程度に器形がつぶれており、その他に墓壙内で遺物はみられなかった。（1）は、受部、脚台部ともに開き具合が比較的直線的で高さを保った形態である。

〔その他の出土遺物〕

古墳東裾の表土中、標高33.1mで鋼鏃片（2）が出土している。本来は墓壙上で供献されたものが、流土とともに流れ落ちたと考えられる。その他に、西側墳裾部から石錘（3）が出土している。（2）は推定径11cmを測り、外縁8分の1ほどの破片である。平縁で径が大きくわずかに残る内区の厚さなどから内行花文鏡の可能性がある。破断面にいずれも調整痕は認められない。（3）は長軸両端に打ち欠きがあり、使用痕が観察される。



第17図　No.11北　横枕23号墳主体部出土遺物実測図



第18図　№11北 横枕23号墳表土出土遺物実測図

横枕24号墳（第3・6・9・20～22図、図版3・20・21・109）

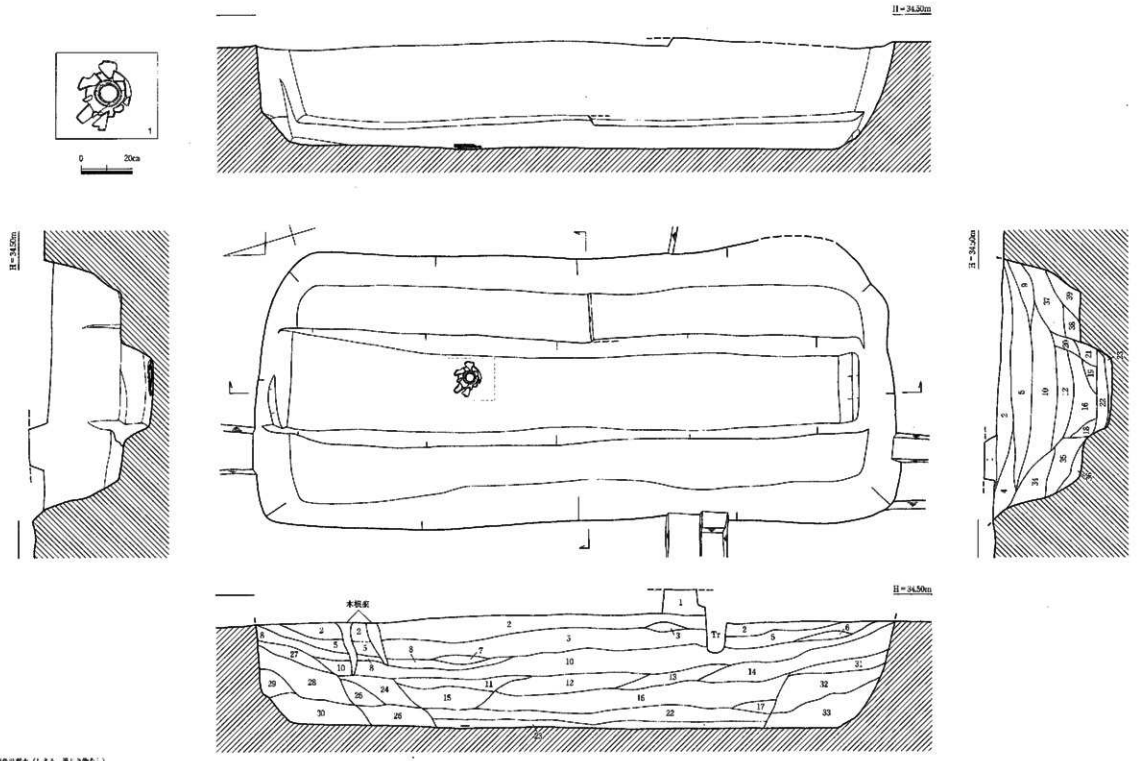
〔位置と現状〕

横枕24号墳は、調査区北側の丘陵上に位置し、標高33.9～35.3mに立地する。北東に23号墳、南に25号墳が近接する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は22m弱である。調査前の観察では、北東の丘陵先端から稜線上に古墳状の高まりが連続し、24号墳もその中のひとつであるが、近接する南北の古墳と比較すると、やや小さな規模であり、主稜線に直交する窪みが周溝の存在を予想させたが、他の古墳同様に高さはあまり認められなかった。

〔墳丘〕

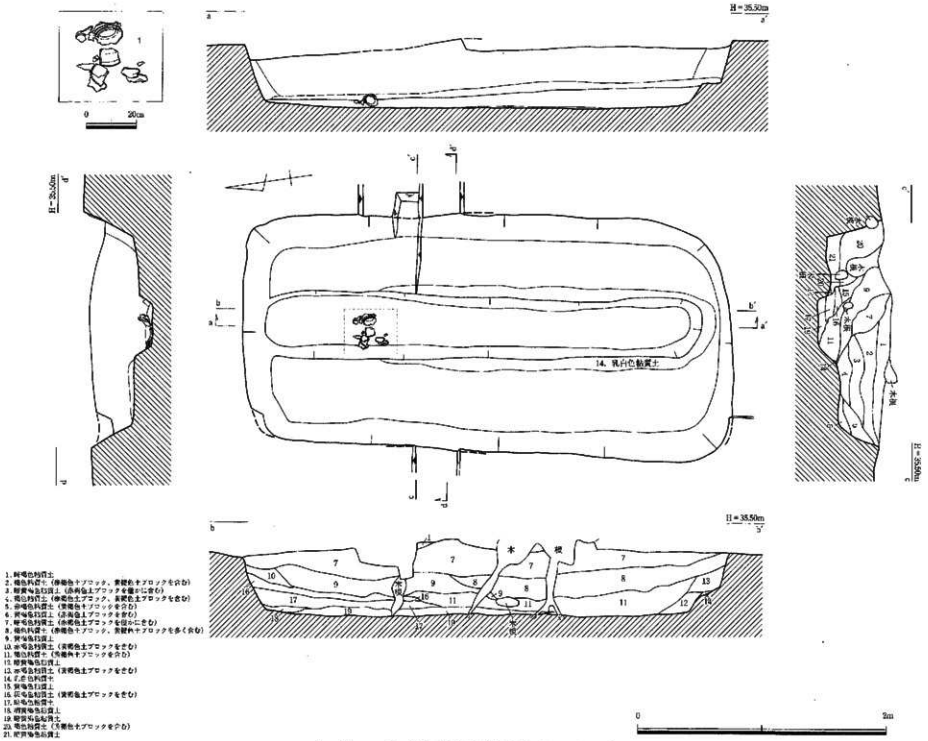
表土下10～20cm前後で墳丘面を検出した。墳頂部は標高35.3mを測る。丘陵高位南側では表土下は地山面であったが、北側墳頂部には盛土が5～20cm程度遺存し、東西方向では旧地表面が検出された。主体部墓壙の深さを考慮すると、上部はかなり流失しているとみられる。ほぼ辺の長さが等しい方墳で、墳丘規模は南北周溝底間で10.6m、東西裾間で10.3m、墳丘の高さは西裾から2.1mを測る。

墳丘は、主に地山成形で造られており、東西裾部の削り出しと尾根に直交方向の溝を掘削して尾根低位の北側に盛り土することにより造られている。なお、南側の25号墳との前後関係は、周溝の土層断面



1．暗褐色土層中（しまる。粗しき物もし）
2．にぶい赤褐色砂質土（やや赤色かかる。3%ほどの極小色地山ブロックを疎かに含む。しまる）
3．にぶい赤褐色砂質土（3より明。9%ほどの砂岩色地山ブロックを含む。しまる）
4．にぶい赤褐色砂質土（0.5～1cm大の赤黒色粒ブロックを有る。しまる）
5．暗赤褐色砂質土（0.5～0.8cm大の極小色地山ブロックを疎に含む。しまる）
6．にぶい赤褐色砂質土（5より明で、10.2より暗。0.2～1cm大の砂岩色地山ブロックを含む）
7．暗赤褐色砂質土（0.2～1cm大の赤黒色地山ブロックを有る。6cm大の砂岩色地山ブロック有）
8．暗赤褐色土（5よりやや明で、10.2より暗。0.5～1cm大の極小色地山ブロックを含む）
9．赤褐色砂質土（1cm大の砂岩色、赤褐色地山ブロックを含む。5.2よりしまり強い）
10．赤褐色砂質土（5より明。0.5～2cm大の砂岩色地山ブロックを有る。粗色土を所々に含む）
11．赤褐色土（0.5～0.8cm大の極小色地山ブロックを含む。2.5cm大の硬色粒ブロックが、15.2よりよくしまる）
12．赤褐色粘質土（0.5～1cm大の砂岩色土ブロック、赤褐色粒ブロックを含む。粘質土を疎かに含む。高分子に極小色地山ブロックを含む。しまりなし）
13．赤褐色砂質土（0.5～2.5cm大の極小色地山ブロックを含む。しまり強い）
14．暗赤褐色砂質土（0.5～2cm大の赤黒色土ブロック、褐色土ブロック、極色地山ブロックを含む。炭片少量中に含む）
15．暗赤褐色砂質土（0.5～2cm大の砂岩色土ブロック、褐色地山ブロック、赤色土ブロックを含む。11.5より10ブロック大。しまり強い）
16．明赤褐色粘質土（1～3cm大の砂岩色ブロック、黄色粒ブロック、赤色ヤブロックを含む。7cm大の木枕痕色地山ブロック有。部分的に硬化した砂岩色地山ブロックを含む。しまり強い）
17．暗赤褐色砂質土（15.2より明。1～2cm大砂岩色粒ブロックを含む。粗色土を14.2より多く含む）
18．赤褐色小型土（15.2より明で黒色かかる。1cm大の砂岩色地山ブロックを含む）
19．明赤褐色土（15.2より明で黒色かかる。0.5～1.5cm大の砂岩色地山ブロックを疎かに含む）
20．にぶい赤褐色砂質土（15.2より暗。0.5～2cm大の砂岩色地山ブロック、白粒色土ブロックを含む）
21．にぶい赤褐色粘質土（20.2ほどやや暗。1cm大の砂岩色土ブロック、褐色地山ブロックを含む。しまり強い）
22．にぶい赤褐色粘質土（10.2ほどやや暗。0.5～1cm大の焼けかかった砂岩色土ブロック、褐色地山ブロックを含む。ややしまる）
23．にぶい赤褐色粘質土（1～1cm大の赤黒粒ブロックを含む。22.2を除く）
24．赤褐色砂質土（0.5～3cm大の砂岩色土ブロック、褐色地山ブロック、赤色ヤブロックを有る。しまり強い）
25．赤褐色砂質土（24.2よりやや明。0.5～1cm大の砂岩色土ブロック、褐色地山ブロックを含む。粒土ブロックの含有が少ない）
26．赤褐色砂質土（26.2より明。1～2cm大の焼土色土ブロック、赤色粒ブロック、褐色土を有る。24.2よりややしまる）
27．赤褐色砂質土（0.5～2cm大の砂岩色土ブロック、炭片を含む。26.2よりしまる）
28．明赤褐色粘質土（0.5～3cm大の砂岩色土ブロック、褐色地山ブロック、赤色土ブロックを含む。6cm大の赤色土ブロック有。27よりしまりやや強いが硬くはしまる）
29．にぶい赤褐色粘質土（0.5～1.5cm大の極小色地山ブロックを含む）
30．にぶい赤褐色粘質土（20.2に同。0.5～1cm大の赤黒色土ブロック、黄色地山ブロックを25.2ほどなかに含む。5cm大の赤褐色地山ブロック有。しまりやや強い）
31．赤褐色砂質土（0.5～2cm大の砂岩色土ブロック、褐色地山ブロック、赤色ヤブロックを含む。14.2よりしまる）
32．赤褐色砂質土（0.5～3cm大の極小色土ブロック、褐色地山ブロックを多く含む。粒粒土ブロックを含む。16.2としまる）
33．赤褐色砂質土（0.5～3cm大の極小色土ブロック、褐色地山ブロックを多く含む。32よりやや明で多く含む。32よりしまり硬い）
34．赤褐色砂質土（10.2より明。0.5～1cm大の砂岩色土ブロック、褐色地山ブロックを含む。よくはくれしまりやや強い）
35．赤褐色砂質土（29.2よりやや明。0.5～1.5cm大の砂岩色土ブロック、褐色地山ブロック、白色土ブロックを含む。34.2より砂岩色粒ブロックの含有多い）
36．赤褐色砂質土（0.5cm大の焼けた砂岩色粒ブロックを含む。しまる）
37．赤褐色砂質土（10.2より明。0.5～1.5cm大の極小色土ブロック、褐色地山ブロックを含む。しまる）
38．赤褐色粘質土（37.2ほどやや明。白土と焼土色ブロック、白色粒色ブロックを有る。しまる）
39．赤褐色砂質土（0.5～1cm大の焼けた砂岩色土ブロック、褐色地山ブロックを有る。35cm大の赤褐色地山ブロック有。しまりやや硬い）

第19図　No.11北　横枕23号墳主体部実測図（S＝1：30）



1. 暗褐色粘質土
2. 褐色粘質土（赤褐色土ブロック、黄褐色土ブロックを少し）
3. 暗黄褐色粘質土（赤褐色土ブロックを僅かに含む）
4. 褐色粘質土（赤褐色土ブロック、黄褐色土ブロックを含む）
5. 赤褐色粘質土（黄褐色土ブロックを少し）
6. 黄褐色粘質土（赤褐色土ブロックを少し）
7. 暗褐色粘質土（赤褐色土ブロックを僅かにさむ）
8. 褐色粘質土（赤褐色土ブロック、黄褐色土ブロックを多く含む）
9. 黄褐色粘質土
10. 赤褐色粘質土（黄褐色土ブロックをさむ）
11. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを少し）
12. 暗黄褐色粘質土
13. 赤褐色粘質土（黄褐色土ブロックをさむ）
14. 灰赤色粘質土
15. 黄褐色粘質土
16. 灰褐色粘質土（黄褐色土ブロックをさむ）
17. 暗褐色粘質土
18. 褐黄褐色粘質土
19. 暗黄褐色粘質土
20. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを少し）
21. 明黄褐色粘質土

第20図　No11北 横枕24号墳主体部実測図（S＝1：30）

から、24号墳が先行するものと考えられ、23号墳との関係は同様に、周溝の上層断面から、23号墳が先行するものと考えられる。

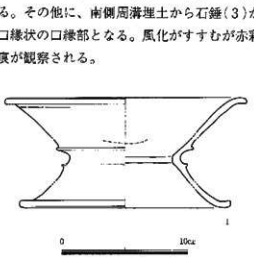
〔埋葬施設〕

埋葬施設は、遺存する墳頂部やや南よりで、尾根に並行する軸で1基を検出した。なお、主体部の南西隅の下層にSK-09が重なる。墓壙の主軸は尾根の稜線に並行するN-9°-Eをとり、盛上上から地山を掘り込んでいる。平面形は隅丸長方形である。墓壙は二段に掘り込まれており、二段目の北側を除く周囲に目張り状の乳白色粘質土が認められた。上面の長さ3.95m、幅1.90m、二段目掘り方は長3.55m、幅50cm、深さ18cmを測る。底面の規模は、長さ3.4m、幅39cmである。墓壙上面からの深さは39cmを測る。墓壙中央部に径が50cm以上もある木根があり、墓壙坦上の断面観察が困難を極め、層自体も根による撹乱を受けていたが、断面観察から木棺の痕跡が認められた。第22図の第5・6・12・13・20・21層は木棺の裏込め土とみられる。木棺の大きさは断面から推定して長さ3.1m、幅35cm弱と考えら、二段目掘り方いっぱいに棺を納めていたとみられる。

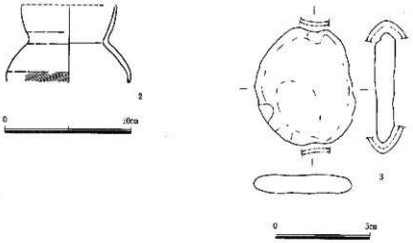
遺物は、墓壙北隅から70cm離れた床面で鼓形器台(1)が出土した。根によるものか、横転して西側に受部が散らばっていた。時期や配置、受部の打ち欠きから転用枕と考えられる。(1)は、器壁厚く脚台部に対し受部が大きいものの、比較的バランスのとれた器台である。

〔その他の出土遺物〕

古墳南東裾で小型壺(2)が出土している。これと接合する破片が61号墳の北西裾で出土しているが、24号墳からの転落と考えられる。その他に、南側周溝埋土から石錘(3)が出土している。(2)は頸部を強くヨコナデすることで複合口縁状の口縁部となる。風化がすすむが赤彩の可能性を残す。(3)は長軸両端に打ち欠きがあり、使用痕が観察される。



第21図　No.11北 横枕24号墳主体部出土遺物実測図



第22図　No.11北 横枕24号墳周溝出土遺物実測図

横枕25号墳（第3・6・10・23～25図、図版3・6・8・21～24・109）

〔位置と現状〕

横枕25号墳は、調査区中央部の丘陵上、標高34.9～36.3mに立地する。No11北調査区が所在する丘陵の頂部にあたり、23号墳で屈曲した稜線が25号墳以南もさらに南西へ軸を振ることから、25号墳の立地する丘陵頂部がやや東に張り出している。古墳の立地や配置からも中心的な古墳であったことが窺え、北に24号墳、南に62号墳、東側に61号墳、南西側に89号墳、南東側に63号墳と、周囲に古墳が一部重複しながら配置する。

丘陵東側に広がる水田面からの比高差は23m弱である。調査前の観察では、北東の丘陵先端から稜線上に連続する古墳状の高まりが、一旦25号墳で終結し、そこから斜面へ向かっていくつかの高まりが認められる。主稜線に直交する窪みが周溝の存在を予想させたが、他の古墳同様に高さはあまり認められなかった。

〔墳丘〕

表土下10～20cm前後で墳丘面を検出した。墳頂部は標高36.3mを測る。丘陵高位の北側では表土下はほぼ地山面であったが、南側墳頂部および東西方向では盛土が10～30cm程度遺存し、旧地表面は墳丘断割りの精査でも確認されなかった。墳丘北側の盛土の遺存状況を考慮すると、上部はやや盛土が流失しているとみられる。ほぼ辺の長さが等しい方墳で、墳丘規模は南北間で12.5m、東西裾間で12.8m、墳丘の高さは西裾から1.43mを測る。

墳丘は、主に地山成形と盛土で造られている。東西裾部の削り出しと尾根に直交方向の溝を掘削して尾根低位の南側に盛り上することにより造られている。なお、北側の24号墳との前後関係は、周溝の土層断面から、24号墳が先行するものと考えられ、62号墳との前後関係は同様に、周溝の上層断面から、25号墳が先行するものと考えられる。この他63、89号墳は裾部を切ることから25号墳より後の築造と考えられる。

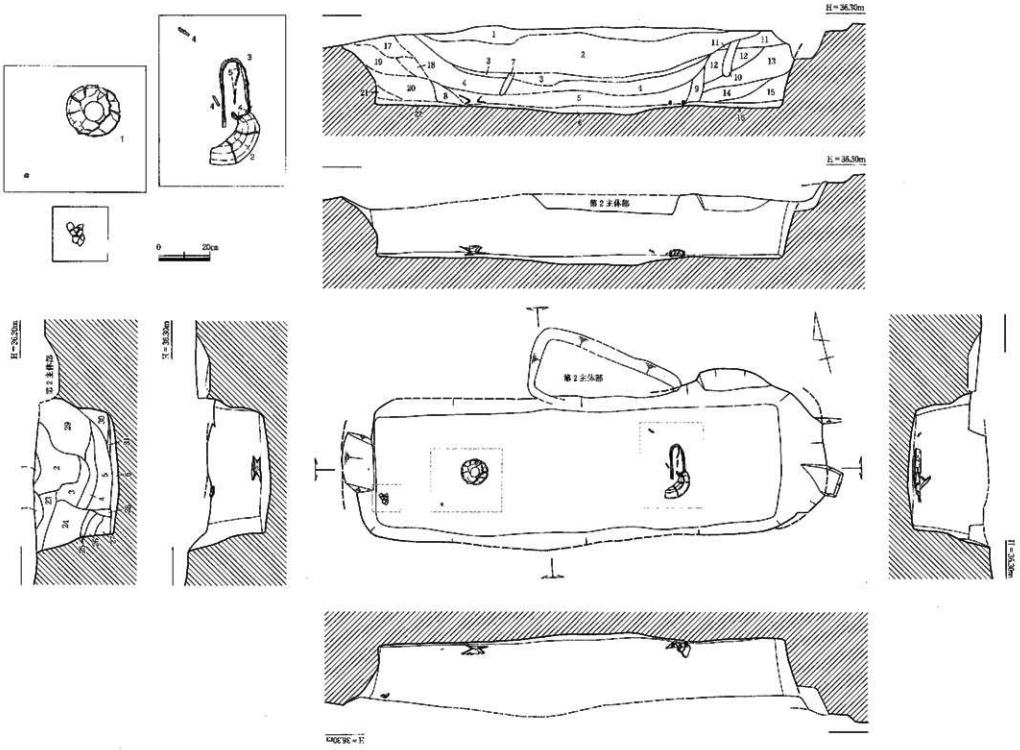
〔埋葬施設〕

埋葬施設は、遺存する墳頂部中央やや東寄り、尾根に直交する軸で切り合う2基を検出した。丘陵の主稜線に対しほぼ直交する第1主体部に対し、軸を北西へ振り北壁を斜めに切る状態で第2主体部が重なる。なお、南西墳丘斜面にSX-06が位置する。さらに南西には89号墳が近接するが、埋葬施設の主軸を考慮した場合、25号墳の主軸に並行するSX-06の帰属は25号墳と考えるのが妥当と思われる。

第1主体部（第23・24図、図版6・22～24・109）

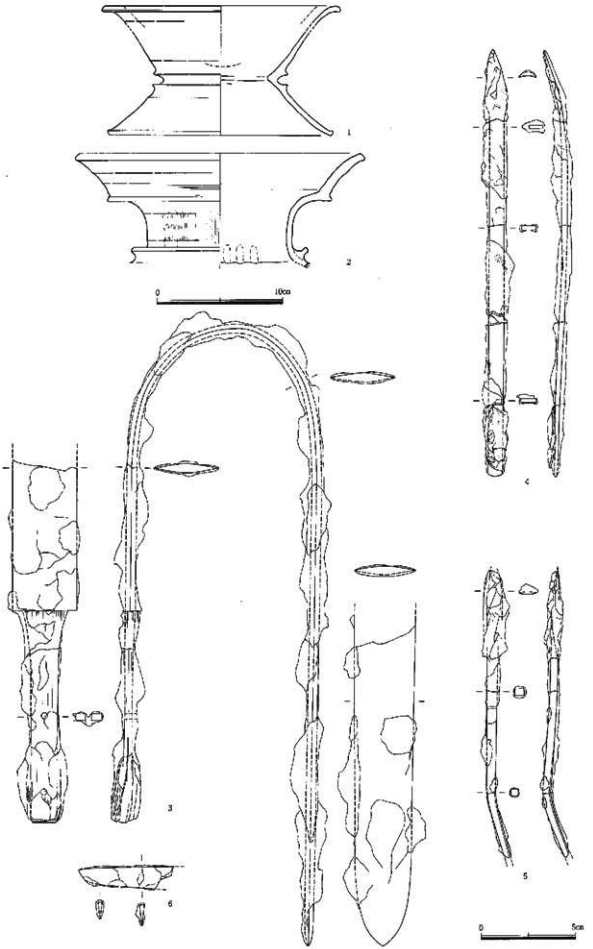
墳頂部中央やや東寄りで検出した。盛土上から地山を深く掘り込んでいる。墓壙上には、封土とみられる厚さ5cm程度の層が確認された。墓壙の主軸は尾根の稜線に直交するN-77°-Wを振り、平面形は隅丸長方形である。規模は、現況で長さ3.63m、幅1.21m、深さ69cmを測る。墓壙埋土の断面観察から木棺の痕跡が認められ、第24図の第11～15・17～20・24～28・30・31層などが木棺の裏込め土とみられる。木棺の大きさは断面から推定して長さ2m弱、幅50cm前後と考えられる。墓壙両端の壁面からそれぞれ70cm程度離れて、西側で鼓形器台（1）と25cmほど南西に土器細片、東側で壺口縁部（2）、鉄剣（3）、鉋（4）、鉄鏃（5）が出土している。壺口縁部（2）は口縁部10分の1程度が内面を上に向け、やや南側に寄り、その北側に接してU字形に折れ曲がった鉄剣（3）が剣先側を外側に刃を立てた状態で、その折れ曲がった内側に鉄鏃（5）、鉋（4）は壺の下および鉄剣の茎部近くと鉄剣から30cm弱北西とそれぞれ離れた状態で出土している。刀子（6）は鉄剣の刀身部の茎部近く下部で出土している。鼓形器台は時期や配置、受部の打ち欠きから転用枕と考えられる。壺口縁部についても、口縁部内面を扇形に配置した様子から転用枕と考えられる。また、墓壙西端埋土上層から土器体部片が出土している。

鼓形器台（1）は、受部が深く、比較的、器高、径ともに大きい。壺口縁部（2）は体部と頸部の境界に凸帯を持ち、口縁部は大きく外反し上端部はやや丸みのある面をもつ。鉄剣（3）は、全長64.8cm、鋒が



1．褐灰色粘質土
2．黒褐色粘質土
3．褐色粘土
4．にぶい黄褐色粘質土（5Y～1cm大の地山ブロックを僅かに含む）
5．にぶい褐色粘質土（4よりも暗）
6．にぶい黄褐色粘質土（4とやや明）
7．褐色粘質土（小粒褐土ブロックを含む）
8．褐色粘質土（2よりやや明。0.5～2cm大の地山ブロックを多に含む）
9．褐灰色粘質土
10．褐色粘質土（低彩強かす）
11．褐色粘質土（10よりも明。やや黄褐色がかる）
12．褐色粘質土（11よりやや明。やや黄褐色がかる）
13．褐色粘質土（10よりやや明る（11とより暗）
14．明褐色土と明褐褐色粘質土の混合
15．にぶい黄褐色粘質土（5と同色。0.5～1cm大の地山ブロックを多く含む）
16．にぶい黄褐色粘質土（4とより暗く15よりやや明。1～3cm大の地山ブロックを多く含む）
17．褐色粘質土
18．褐色粘質土（17よりやや明。若褐色地山ブロックを僅かに含む）
19．褐色粘質土（7と同色）
20．褐色粘質土（8より暗く15・19よりやや明。0.5～1cm大の地山ブロックを僅に含む）
21．褐色粘質土（20よりやや明。1cm大の赤褐色粘土ブロックを含む）
22．にぶい黄褐色砂質土（5とより暗。0.5～1cm大の地山ブロックを含む。16と酷似）
23．褐色粘質土（22より明）
24．褐色粘質土（23より明。0.5～2cm大の地山ブロックを含む）
25．明赤褐色砂質土（褐色砂質土ブロックを含む）
26．褐色粘質土（赤褐色粘土ブロックを含む）
27．褐色粘質土（26よりやや明。若褐色粘土ブロックを含む）
28．にぶい褐色砂質土
29．にぶい黄褐色粘質土（4とやや明）
30．褐色粘質土（褐灰色粘土ブロックを含む）
31．にぶい黄褐色砂質土（6よりやや暗）

第23図　No.11北 横枕25号墳第１主体部実測図（Ｓ＝１：30）

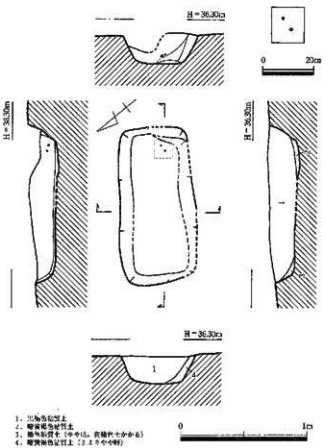


第24図　No.11北 横穴式石室第1主体部出土遺物実測図

不明瞭で、茎部に木質痕と目釘穴2が観察される。鉈(4)は全長22.4cm、切先がやや左に向く。鉄鏃(5)は長頸鏃で茎下部が曲がる。刀子(6)は刀身のみの遺存で切先は丸い。

第2主体部（第25図、図版24）

第1主体部よりやや北へ軸を振り、第1主体部の墓壙北壁を切って造られている。墓土上から掘り込まれており、第1主体部と比べ掘り込みがかなり浅く規模も小さい。墓壙の主軸は尾根の稜線に対し直交方向であるが、厳密には古墳の軸とも合わず N-55°-W をとる。平面形は隅丸長方形である。規模は、現況で長さ1.25m、幅60cm、深さ26cmを測る。土層の断面観察などから木棺の痕跡は認められず、土壙墓とみられる。墓壙東隅の床面から5cm程度浮いた状態で刀子片が出土している。



第25図　№11北 横穴25号墳第2主体部実測図（S＝1：30）

横枕26号墳（第3・6・10・26～28図、図版3・25～27・110）

〔位置と現状〕

横枕26号墳は、調査区東側、25号墳の位置する丘陵頂部から東へ張り出す尾根筋下位の標高28.2～30.2mに立地する。西にSX-10、南に59号墳、南東に88号墳が配置する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は16.5mである。調査前の観察では、25号墳から続く小尾根の傾斜が平坦となり、25号墳周辺とはかなり比高差が認められるものの、南西側に周溝とみられる弧状の窪みも認められることから、古墳の存在が予想された。

〔墳丘〕

表土下10cm前後で墳丘面を検出した。墳頂部は標高30.2mを測る。墳丘全体に厚く盛土がなされ、墳頂部で35cm程度、西側で20cm程度、北東側で55cmと斜面低位ほど厚い盛土が観察された。墳丘中央より西側周溝近くで標高が高く、本来はもう少し盛土がなされ上部はやや流失しているとみられる。東側で少し崩れが認められ、西側の周溝径を考慮に入れても径10mの円墳である。現況の墳丘規模は東西で9.5m、南北で9.6m、墳丘の高さは東裾から2.05mを測る。

墳丘は、主に西側斜面高位側に弧状の周溝を大きく掘削することで尾根を切断し、掘り上げた土を北東側ほど厚く盛ることで墳丘を整えている。南西側で旧地表面が遺存していなかったことからも、北東側に土を掻き出した様子が窺える。なお、南側の59号墳との前後関係は、ともに似通った時期であり、周溝の土層断面からも明確にはできなかった。

〔埋葬施設〕

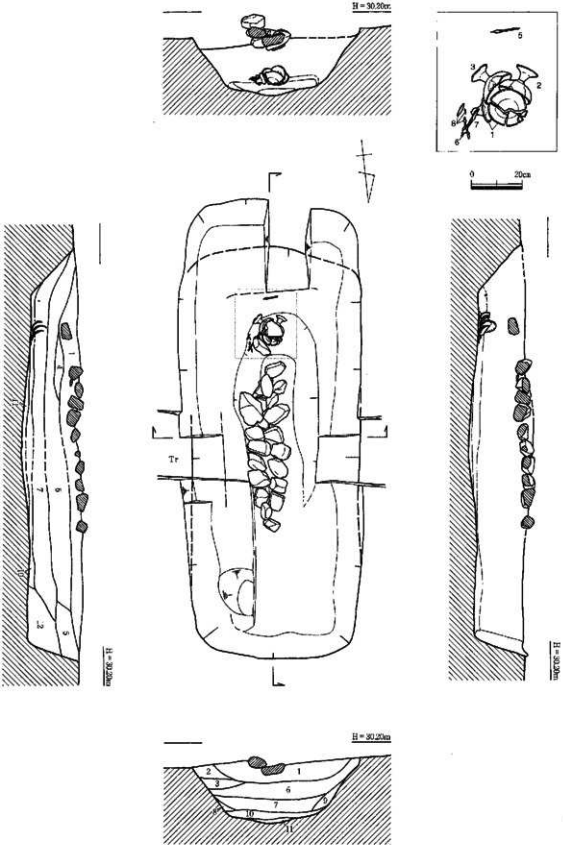
墳頂部中央やや西寄りで検出した。盛土上から地山を掘り込んでいる。墓壙の主軸は尾根の稜線に直交するN-11°-Eを振り、平面形は隅丸長方形である。南側を中心に墓壙の掘り誤りがみられたが、土層断面部分を考慮に入れて、規模は、長さ3.28m、幅1.32m、深さ50cmを測る。上層の断面観察から木棺の痕跡は積極的には認められず、床面にみられる窪みの状況などからも直葬の可能性が考えられる。

なお、墓壙上層の中央部で長さ1.6m弱の石列が検出された。墓壙の主軸とほぼ同一で、位置的にはほぼ被葬者の上層にあたる。石列は10～20cm大の自然石を横2列に配し、頭部側へ向けて並びをやや低くする傾向がある。特に南端の石は、土器枕上、被葬者の頭部上25cm程の位置である。また、石列検出時に須恵器蓋杯(4)が出土しており、後世の遺構の重複を考えるよりも、26号墳の埋葬施設に付随するものと考えたほうが妥当とみられる。

南壁のすぐそばに刀子、さらに15cmばかり離れて椀形高杯3点が組み合わさった土器枕、そのすぐ東側に鉄鏃3点が出土した。刀子(5)は、墓壙軸と直交して西側に切先を向け、墓壙底に刃部を向けたような状態である。土器枕は、3点の高杯のうち一番大きな(1)の脚部をはずし、その杯部南側を(2)(3)と(1)の脚部とで覆うように配置している。高杯(1)～(3)は法量の大小はあるもののほぼ同様な形態・調整技法で、(1)(2)の脚部内面を除いて赤彩される。杯部は口縁部内外面ヨコナデされ、下半外面に多面状の成形痕が観察される。脚部は差込み式で脚柱部外面に縦位の工具ナデ、内面に成形時の絞り目および裾部にほぼ等間隔の指頭圧痕が遺存する。須恵器杯蓋(4)は長く直立気味の口縁部で端部内面に段を有する。(5)は切先を欠損するものの全長13cm弱とみられ、両関で茎部に木質が遺存する。(6)～(8)は鏃身部が刀子形の長頸鏃で、ほぼ同様な大きさである。木質と巻締痕が茎部に遺存する。

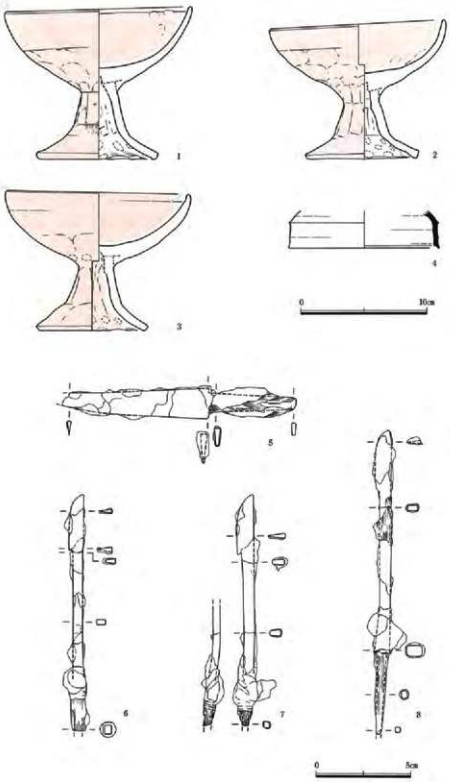
〔その他の出土遺物〕

古墳の北西周溝埋土下層から数片に分かれた杯蓋(9)、完形の甕(10)が出土している。本来は墳丘上で供献されたのが、転落したものとみられる。(9)は丸味のある天井部に中央が大きく凹むつまみを貼り付け、長くわずかに内傾する口縁部は端面で内傾する段を有する。(10)は体部径より若干開く口縁部をもち、端部はやや肥厚して凹面を上に向ける。頸部から口縁部への屈曲は明瞭で、外面に波状文が周回するが一部乱れが認められる。

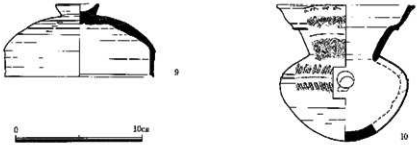


1．灰褐色粘質土（炭片を僅かに含む。よくしまる）
2．褐色粘質土（1より明るくやはりやや粘。しまる）
3．褐色粘質土（6ようやや明。0.3mの大の橙褐色土ブロック、炭片を含む）
4．にぶい黒色粘質土（6より明。0.5mの大の灰色土ブロックを含む）
5．褐色粘質土（炭片を含む）
6．褐色砂質土（炭片を含む）
7．暗褐色粘質土（6とやや似。0.2mの大の黒褐色土ブロックを僅かに含む。炭片を含む。4とやしまらない）
8．にぶい黒色粘質土（6より暗。黄褐色土、炭片を含む）
9．褐色粘質土（7より黄褐色がかる。しまり弱い）
10．にぶい黒色粘質土（やや灰色がかる。7よりブロック様の炭しりが少ない）
11．にぶい黄褐色粘質土（0.2mの大の黄褐色土ブロックを僅かに含む。しまり弱い）
12．褐色粘質土（0.3mの大の橙褐色土ブロックを僅かに含む。黄褐色土を含む）

第26図　Km11北 横枕26号墳主体部実測図（S＝1：30）



第27図　No11北 横枕26号墳主体部出土遺物実測図



第28図　No.11北 横枕26号墳周溝出土遺物実測図

横枕59号墳（第3・6・10・29～36図、図版3・9・27～31・111・112）

〔位置と現状〕

横枕59号墳は、調査区東側、25号墳の位置する丘陵頂部から南東へ下る斜面、標高31.18～25.18mに立地する。北西側の高位に63号墳、25号墳、61号墳、SX-10が取り囲み、北東に26号墳、88号墳が配置する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は13.5mである。調査前の観察では、25号墳から南東に下る斜面に弧状の大きな窪みがあり、その内側に円形の平坦面がみられることから、古墳であることが容易に判断でき、東側からもかなりの高さが想定された。墳頂部とみられるところから南東斜面にかけての傾斜が厳しく、かなり盛土が流失しているものとみられた。

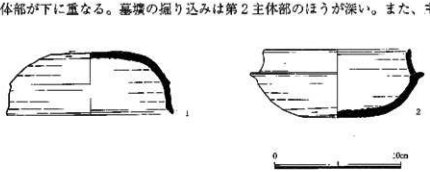
〔墳丘〕

表土下5～10cm前後で墳丘面を検出した。墳丘部の最高所は標高31.18mを測る。墳丘全体に厚く盛土がなされ、墳頂部で1.63m程度、北西側で30cm程度、南東側で1.32mと北東頂部で厚い盛土が観察された。墳丘中央より北西側周溝近くで標高が高く、本来はもう少し盛土がなされ上部はやや流失しているとみられる。南東側で少し崩れが認められ、西側の周溝径を考慮に入れると径15mの円墳が復元される。現況の墳丘規模は北西周溝底－南東裾間で17.1m、南西－北東周溝底間で14.8mとやや斜面低位で墳丘が膨らむ。墳丘の高さは南東裾から6.0mを測る。

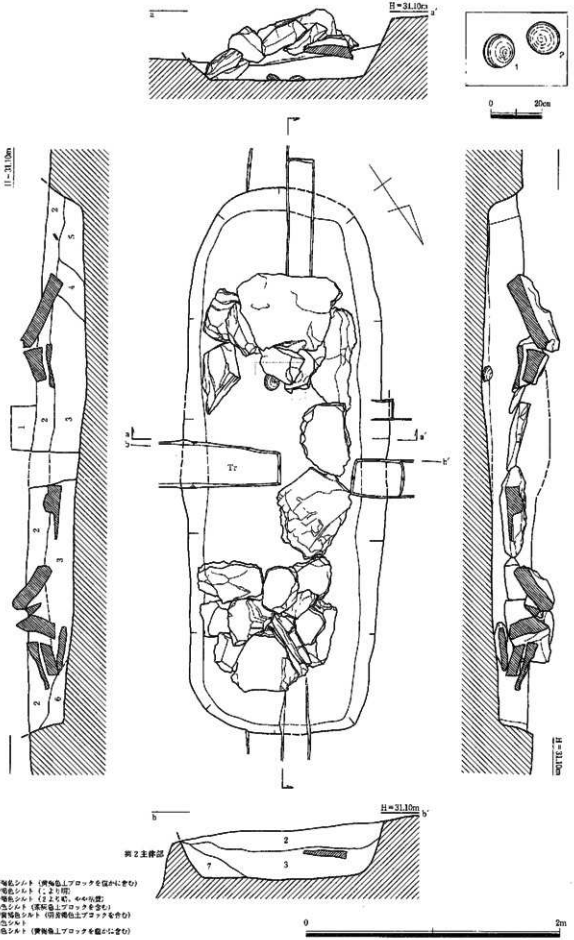
墳丘は、主に西側斜面高位側に弧状の周溝を大きく掘削することで墓域を確保している。斜面高位の周溝上端から周溝幅は7mに及び、深さも3.75mを測る。その掘り上げた土は南東裾側から盛り始め、70cmほど積み上げて一旦水平面を作ってから10～20cm前後の互層に盛り上げ墳丘を整えている。なお、北西墳丘下でSK-12、SK-13、SD-02が、南墳丘下でSK-14と古墳築造以前の遺構を検出した。よって、旧地表面は南東側のみの遺存であった。なお、北東側の26号墳との前後関係は、ともに似通った時期であり、周溝の土層断面からも明確にはできなかった。

〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳頂部中央よりかなり斜面高位寄りで、尾根に直交する軸でわずかに切り合う2基を検出した。丘陵斜面に対しほぼ直交する第2主体部に対し、軸をわずかに北へ振り南東壁を斜めに切られる状態で第1主体部が下に重なる。墓壙の掘り込みは第2主体部のほうが深い。また、主体部2基上層



第29図　No.11北 横枕59号墳第1主体部出土遺物実測図



第30図　No.11北 横枕59号墳第1主体部実測図（S＝1：30）

に厚さ10～25cm前後の封土が施されていた。

第1主体部（第29・30図、図版28～30・111）

墳頂部中央北西寄りで検出した。盛土上から墓壙を掘り込んでおり、地山面まで到達しない。墓壙上には、封土とみられる厚さ10～25cm程度の層が確認された。墓壙の主軸は尾根の斜面に直交するN-34°-Eを振り、平面形は隅丸長方形である。規模は、現況で長さ4.34m、幅1.63m、深さ41cmを測る。墓壙東側を除く墓壙側壁にコ字形の石の並びが検出された。出土層は墓壙上層から床面にいたっており、小口部の一部を除いて平積みである。南側の須恵器蓋杯の土器枕が出土していることから、南が頭部であり、頭部と足部に重点が置かれている。足部側で三段に平積みし、小口部で石を立てている。内面の石面の揃いもみられず、頭部側小口では両側板側の石上に一番大きな石を被せているような用い方である。墓壙埋土の断面観察から明確な木棺の痕跡は認められないものの、木棺の頭部側小口上および周辺、足部側を石で覆い、足側小口は石であった可能性も考えられる。

遺物は墓壙南西壁から1.2m離れた中央部に須恵器蓋杯(1)(2)を伏せ、互いに内側に傾斜をつけて頭を固定できるように並べている。(1)と(2)は焼き色や形態、質感などからセットとして作られたもので、全体的に器壁が厚く、天井部、底部ともにやや丸味をもち、口縁部内面に内傾する段を有する。内面中央部にはともに円弧文工具痕が明瞭に残り後のナデ消しは施されない。

第2主体部（第31・32図、図版9・28・30・31）

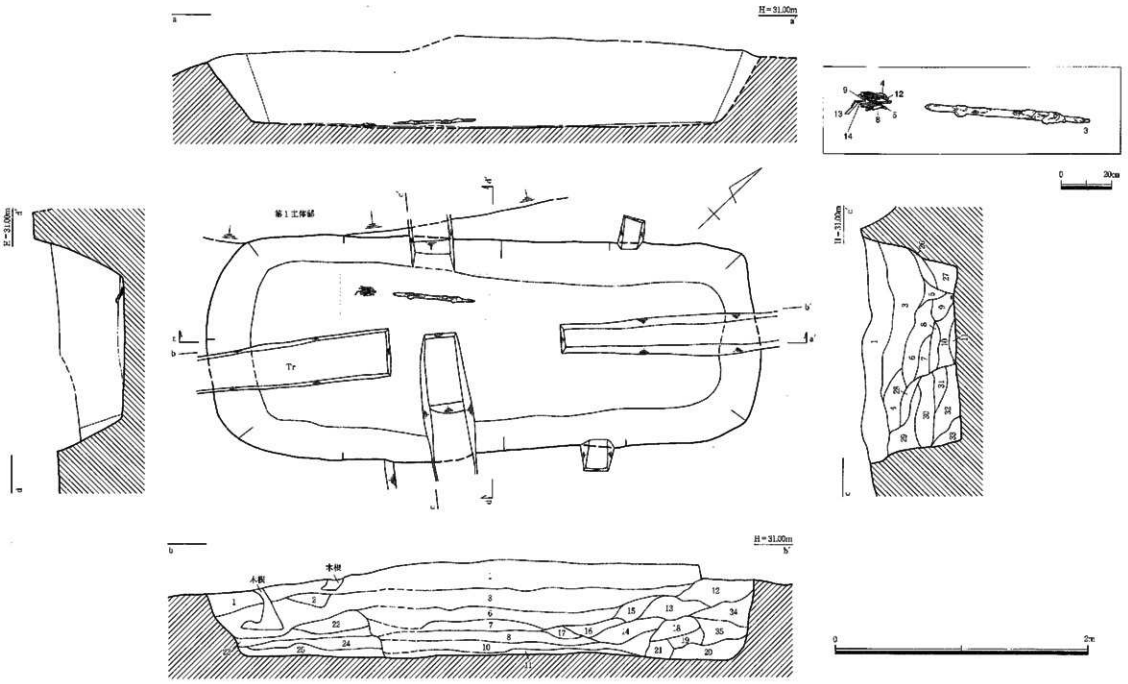
第1主体部より北東側の墳頂部よりに位置し、わずかに東へ軸を振る。第1主体部の墓壙南東壁をかすかにかすめる。盛土上から掘り込まれているが、地山面まで到達しない。平面形は隅丸長方形である。第1主体部と比べ平面的にはよく似た規模、形態であるが、掘り込みは第1主体部よりかなり深い。墓壙の主軸は斜面に対し直交方向であり、N-44°-Eをとる。平面形は隅丸長方形である。規模は、現況で長さ4.40m、幅1.80m、深さ78cmを測る。土層の断面観察などから墓壙北西壁寄りに木棺の痕跡が認められる。第31図の第18～35層が木棺の裏込め土とみられる。木棺の大きさは断面から推定して長さ2m弱、幅50cm弱、深さ37cm程度と考えられる。

墓壙西壁寄りで鉄剣(3)と鉄鏃(4)～(14)が出土している。土層断面から、鉄剣は木棺の南西端、鉄鏃は棺外の可能性が高い。鉄剣は剣先を南西へ向け、向きを揃えた鉄鏃は剣先と合わせたかのようにほぼ軸を合わせ、刃先を向かい合わせにする。鉄剣(3)は全長65.5cmを測る。刀身部の鎬は不明瞭、茎部に目釘孔有り。全体に木質が遺存し、特に刀身部に二種の布目痕を観察する。鉄鏃(4)～(14)はおおまかに4種があり、(4)～(11)は短頸で鏃身部が三角形で(10)を除き腸抉の逆刺をもつ。(12)(13)は長頸で鏃身部が(12)は三角形、(13)は刀子形である。(14)は接合はしないものの(8)の茎部の可能性があり、木質と巻締め痕が明瞭に残る。

〔その他の出土遺物〕

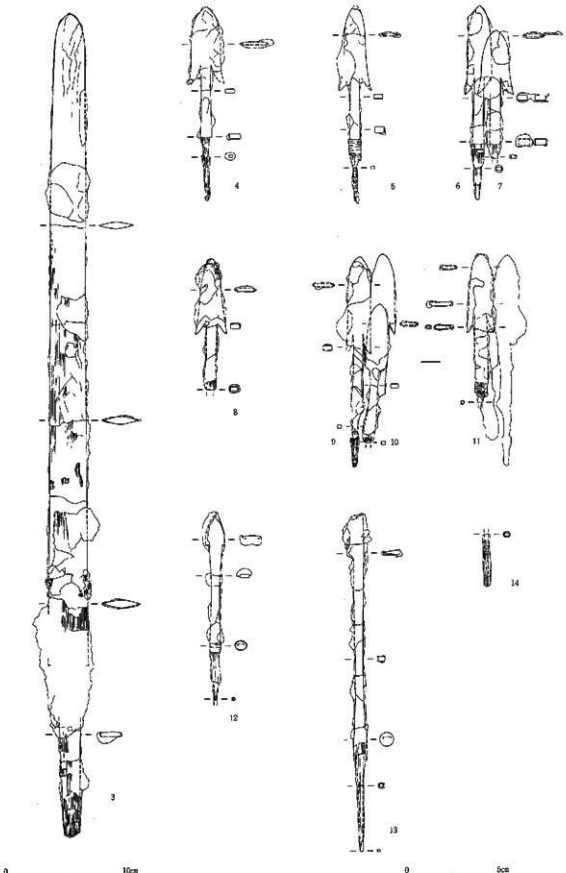
古墳の南西側周溝および北西周溝埋土下層から土器が出土している。土師器は(15)の1点だけで、他は須恵器である。比較的完形あるいは接合すれば完形に近いものが目立った。中には周溝底面で出土したものもみられたが、多くは10～20cm程度底面より浮いた状態で出土している。(29)は肩部以上がまとまり口縁部が上を向いてつぶれた状態の出土であるが、体部片が周囲に点々と散らばっており、周溝に据えられたとは言い難い。また、有蓋高杯が4組出土しているが、このうちセット関係の蓋(16)、高杯(21)は、(16)は南西側、(21)は北西側で出土している。有蓋高杯(18)(23)も同様である。古墳の南東側では土器はほとんど出土しておらず、土器は墳丘上のかなり西寄りで供献されたとみられる。土師器は甕(15)、須恵器は有蓋高杯(16)～(19)、(21)～(24)、壺(26)(27)、甕(29)、器台(28)がある。

(15)は中型の甕で、頸部および口縁部上半の強いヨコナデで複合口縁とするが上端部は面をなさない。体部は球形であるが肩部はなだらかで最大胴径を体部中位におく。有蓋高杯(16)～(19)、(21)～(24)は蓋の摘みの大小や脚の透し窓の有無の差があるが、ほぼ似通った形状、法量である。体部は丸味

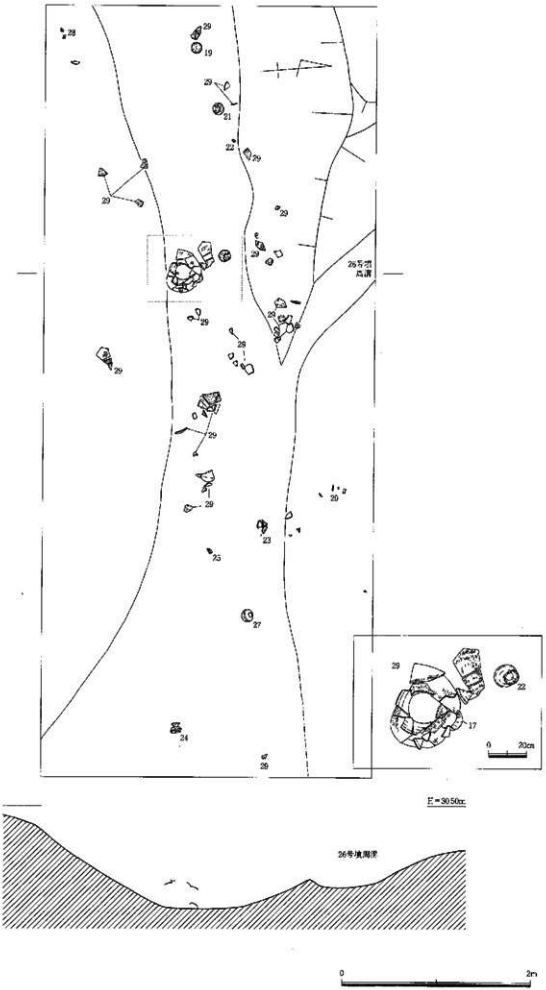


1. 暗色シルト
3. 明灰色シルト
4. 灰褐色シルト（埋葬色土ブロック含用）
5. 黒褐色シルト
6. 暗色シルト
7. 灰黒褐色粘質土（赤褐色土ブロックを含む）
8. 灰褐色粘土（赤褐色土ブロックを含む）
9. 暗灰褐色粘質土（赤褐色土ブロックを含む）
10. 灰褐色粘質土（赤褐色土ブロックを多く含む）
11. 赤褐色粘質土（明黄褐色土ブロックを含む）
12. 灰褐色シルト（ややより明、灰色土ブロック少）
13. 黄褐色シルト（灰褐色土ブロック、灰色土ブロックを含む）
14. 暗色シルト（1～2cmの灰色ブロック、黄褐色土ブロックを少し）
15. 暗色シルト（黒褐色土ブロックを含む）
16. 暗褐色粘質土（赤褐色土ブロックを含む）
17. 赤褐色粘質土
18. 暗灰色粘質土（黄褐色土ブロック、黄灰色土ブロックを少し）
19. 暗黄褐色粘質土（黄灰色土ブロックを含む）
20. 暗黄褐色粘質土（灰黄色土ブロックを含む）
21. 暗色粘質土（赤褐色土ブロック、黄灰色土ブロックを含む）
22. 暗色粘質土
23. 暗灰色粘質土（灰褐色土ブロック、黄褐色土ブロックを含む）
24. 暗色粘質土（黄灰色土ブロック含む）
25. 暗色粘質土（灰色土ブロック、赤褐色土ブロックを少し）
26. 暗褐色粘質土（灰黄色土ブロック、赤褐色土ブロックを含む）
27. 暗褐色粘質土（赤褐色土ブロック）
28. 暗褐色粘質土（赤褐色土ブロック、明黄褐色土ブロックを多く含む）
29. 暗褐色粘質土（赤褐色土ブロック、灰色土ブロックを含む）
30. 暗褐色粘質土（赤褐色土ブロック、灰色土ブロックを含む）
31. 暗色シルト（1～2cm大の灰色土ブロックを少し）
32. 暗色シルト（赤褐色土ブロック、明黄褐色土ブロックを含む）
33. 暗色シルト（赤褐色土ブロック、灰色土ブロックを含む）
34. 暗色シルト（赤褐色土ブロック、1～2cm大の灰色土ブロックを少し）
35. 灰褐色粘質土

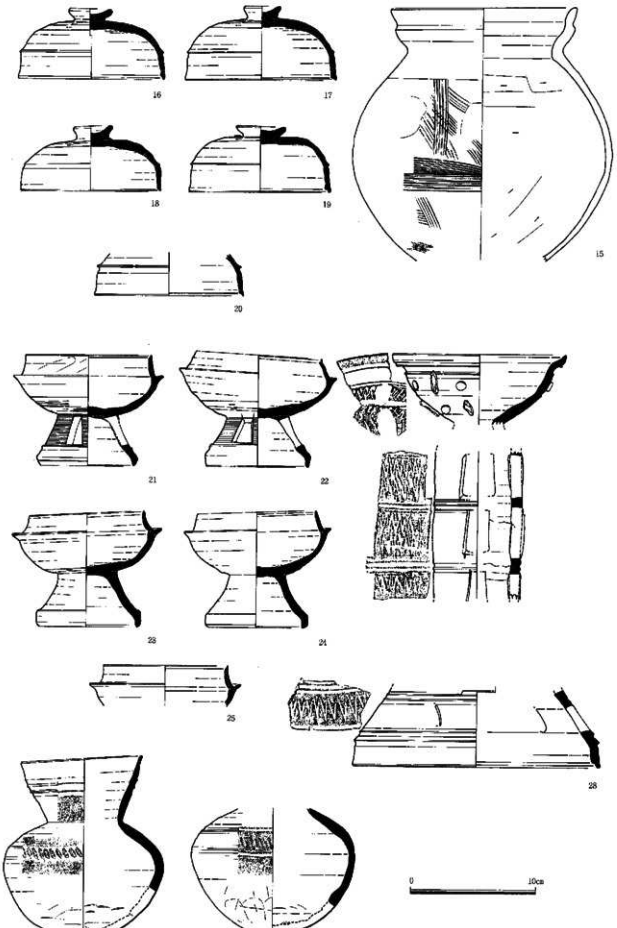
第31図　No11北 横穴59号墳第2主体部実測図（S＝1：30）



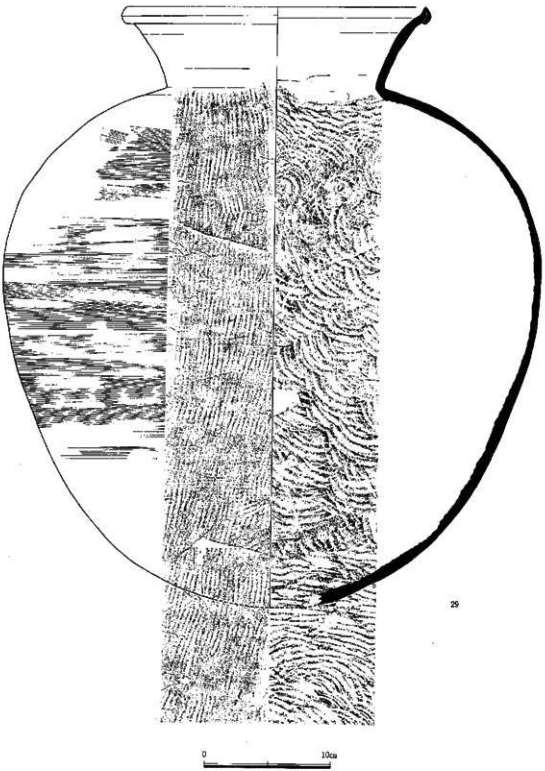
第32図　No.11北 横枕59号墳第２主体部出土遺物実測図



第33図　No11北 横枕59号墳周溝内土器出土状況実測図(S＝1：40)



第34図　No11北 横枕59号墳周溝出土遺物実測図(1)



第35図　No11北 横枕59号墳周溝出土遺物実測図（２）

をもち、口縁部はやや長めで端部は内傾する段を有する。内面中央部に円弧文工具痕が観察されるが後にヨコナデされ、かすかに観察されるものがみられる。(20)(25)は5点目の有蓋高杯になるのか杯蓋か不明であるが、有蓋高杯の口縁部同様の形態である。(26)(27)は屑部が張り、外面に連続刺突文を施すが、(27)は押し引く。(26)の口縁部は頸部から直線的に開き、2条の稜線下位に体部と同一工具の波状文を施す。底部内面に円弧文工具痕が観察される。(28)は全体を復元するには到らなかったが高さ33cm以上になると推定される。受部は椀形で透しはなく、口縁部で屈曲して外方に開く。外面に円形、勾玉状の浮文を貼り付ける。筒部は外面に波状文後に長方形透し窓を各段直列に穿つ。台部は裾部で屈曲して立ち、端部は内傾する段を有する。台部裾外面に波状文、沈線で区画された各段に透し窓の痕跡を確認する。(29)は中型の甕で、体部は丸味の強い倒卵形で口縁部は外反して端部で肥厚、屈曲して上方に丸く納める。体部外面は平行叩き日後、3分の2上半軽いカキ目を施す。内面は円弧文・同心円工具痕を観察する。

この他に表土中の遺物として、南西側で銅銭「永樂通寶」1点が出土している。

第36図　No11北 横枕59号墳表土出土遺物拓影

横枕60号墳（第3・6・11・37～40図、図版3・31・32・113）

〔位置と現状〕

横枕60号墳は、調査区南西側、25号墳の位置する丘陵頂部から南東へ下る斜面、標高29.26～32.17mに立地する。北側の斜面高位に62号墳、斜面低位の南側に90号墳が配置し一部重複する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は17.5mである。調査前の観察では、25号墳から南東に下る斜面に弧状の大きな盛土がみられることから古墳と想定されたが、南斜面にかけての傾斜が厳しく、墳丘がかなり流失しているものとみられた。なお、周溝西端が調査区域外となる。周溝内にSK-01、SK-02、SK-08が配置する。

〔墳丘〕

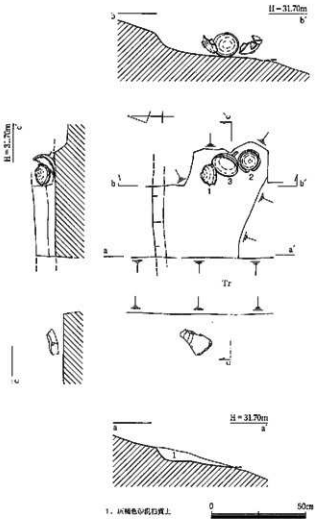
表土下10～15cm程度で墳丘面を検出した。墳丘部の最高所は墳丘中央より北側周溝近くが高く、標高32.17mを測る。本来墳丘全体に厚く盛土が施されていたとみられるが、墳丘全体では10～20cm程度の盛土が遺存しているのみで、南側では旧地表が露出していた。上部はかなり流失しているとみられる。

南東側で崩れが認められるものの、現況の墳丘規模は東西で12.7m、やや斜面低位側で墳丘が膨らみ、南北で10mが遺存する。北側の周溝径を考慮に入れると径12mの円墳が復元される。墳丘の高さは東裾から現況2.91mを測る。

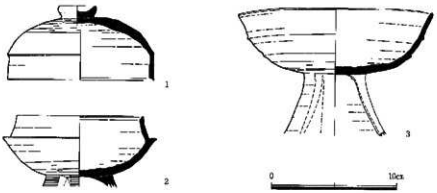
墳丘は、主に北側斜面高位側に弧状の周溝を大きく掘削することで墓域を確保している。斜面高位の周溝上端から周溝幅は5.58mに及び、深さも2.90mを測る。墳丘の築造は墳丘全体では10～20cm程度の盛土が遺存している程度で盛土の大半を流失していることから不明であるが、旧表土はほぼ墳丘全域に遺存していた。なお、北側の62号墳、南側の90号墳との前後関係は、第11図の土層断面、墳丘断面図から、斜面低位側の古墳ほど新しく、60号墳が62号墳を切り、60号墳が90号墳に切られたことが判明した。ただ、90号墳北側の周溝埋土断面では、上層の埋土の大半は60号墳からの流土とみられる。

〔埋葬施設〕

墳頂部中央やや北寄りで須恵器3点を検出した。組み合わさるように出土していることや出土した位置とから土器枕とみられ、周囲を精査した結果、わずかながら墓壙の落ち込みを検出した。盛土上からわずかに地山を掘り込んでいる。墓壙は北壁の一部が遺存するのみで規模や形態は明らかにできなかった。ただ、土器枕が西へ開口していることから斜面に対し直交する東西方向に主軸をとるとみられる。北壁から想定してN-87°-E程度を振ると想定される。規模は、幅1.3m前後が復元される。わずか9cm



第37図　No.11北 横枕60号墳主体部実測図(S＝1：20)



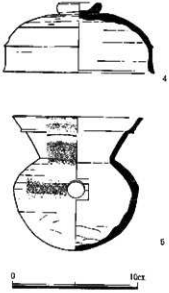
第38図　No.11北 横枕60号墳主体部出土遺物実測図

ばかりの上層の断面観察からは木棺の痕跡は認められなかった。なお、土器枕から1.1m西に離れた地点で角礫1点が認められたが、埋葬施設に伴うものか否か不明である。

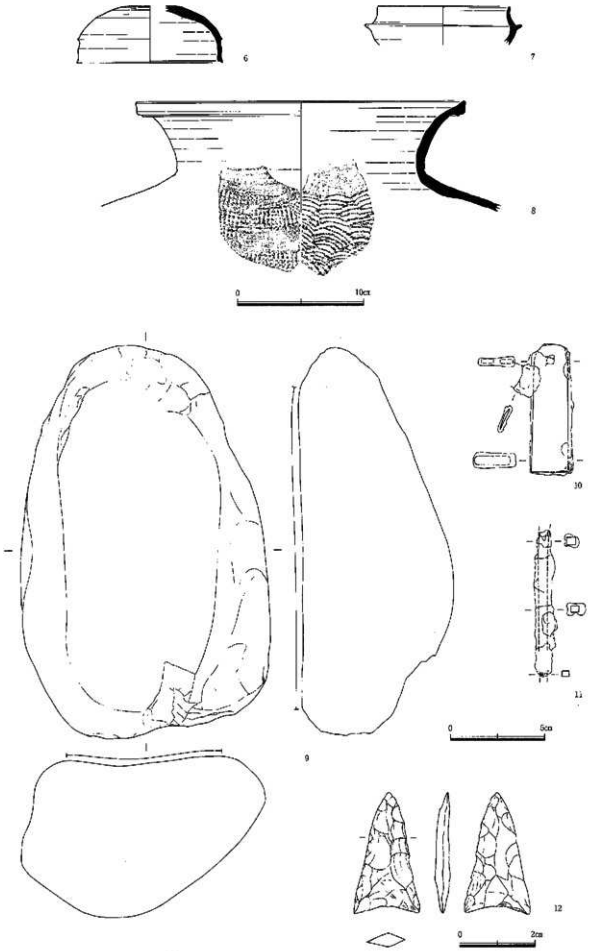
須恵器は、脚裾部を欠いた無蓋高杯(3)を、口縁部西側にした横位に置きその北側を有蓋高杯の蓋(1)、南側を脚部のない杯部(2)のそれぞれ内面を向き合わせて配置している。(1)(2)はセットでよく似た質感である。ともに丸味のある体部、やや長めの口縁部で、端部に内傾する段を有する。(1)は小さな摘みが付き、(2)は脚部にカキ目後透し窓を三方に穿つ。(3)は底部から内彎しながら口縁部まで立ち上がる。体部と口縁部、底部の境界に鈍い稜2条を配し、波状文などの装飾はみられない。脚部は三方の透し窓をもつ。(2)(3)ともに支えのためか脚付け根部分3分の1を遺存する。

〔その他の出土遺物〕

60号墳の西裾を除く全域から、須恵器を中心とする遺物が出土している。特に南東側で盛土の流失が著しく、遺物もその多くが流土中からの出土である。このうち比較的実測可能な(4)～(12)を図化した。北側周溝で有蓋高杯の蓋(4)、瓶(5)、北東裾部から蓋(6)、石皿(9)のほか、南西部墳丘で杯身(7)、鉄鏃の頸部(11)、石鏃(12)、墳頂部で(10)、出土地が不明瞭ながら(8)が出土している。(4)は焼きが甘く主体部出土の(1)とよく似た法量、形態である。ただ天井部の摘みがやや大きく口縁部もやや長い。(5)は焼成が極めて良好で口縁部内面および肩部に自然釉がかかる。肩部と口縁部外面に波状文を施す。口縁端面は凹み状とならず平坦面を上に向ける。(6)(7)はともに体部が丸味をもつとみられ、口縁部は端部内傾する段を有する。(8)は頸部から外反して開き端部で肥厚して上方に摘み上げる。遺存する肩部は外面叩き目後軽いカキ目を施す。(9)は一面に使用頻度の高い擦痕がみられる。(10)は平面、断面形ともに長方形でやや丸味をとる一端側に方形孔がある鉄製品である。(11)は断面方形で鉄鏃の頸部とみられる。(12)は無頸鏃で細長く、全長3.2cmを測る。断面ははっきりとした菱形で重量1.7g、サヌカイト製である。



第39図　No11北 横枕60号墳周溝出土遺物実測図



第40図　No11北 横穴60号墳出土遺物実測図

横枕61号墳（第3・6・11・41～44図、図版3・10・33～36・114）

〔位置と現状〕

横枕61号墳は、調査区中央部、25号墳の位置する丘陵頂部から東へ張り出す尾根筋の標高32.21～34.60mに立地する。東にSX-10、南東に59号墳、南西に63号墳、北西に24号墳が配置する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は20.6mである。調査前の観察では、25号墳東裾部で台形状の平坦面がみられ、位置的に25号墳に付随するような埋葬施設の存在が想定された。北東側は谷となって急傾斜で下っているが、東側の尾根筋は段をとって次の平坦面へ続いており、南東側は若干の崩れがあり、さらに南東側は59号墳周溝によって掘削されている。

〔墳丘〕

表土下10～20cm前後で墳丘面を検出した。墳頂部は西側で標高34.60mを測る。墳丘は斜面低位の北東側ほど厚く盛土がなされ、墳頂部で30cm程度、北東側で46cmを測る。墳丘西側は盛土が確認されておらず、現況の主体部墓壙の深さを考慮すると、本来はもう少し盛土がなされ、上部はやや流失しているとみられる。東西裾間で10.0m、南北は南東側で少し崩れが認められるものの、西側の墳頂部平坦面部分で約10mが確認され、北側の墳裾までは12m前後が復元される。南北方向にやや長い方墳である。墳丘の高さは東裾から2.39mを測る。

墳丘は、主に西側斜面高位側を掘削して低位の北東側ほど厚く盛ることで平坦面を作り出している。本来西端には直線的な溝が掘り込まれていたとみられ、現況でもわずかにその名残りを土層断面で確認することができる。西側で旧地表面が遺存していなかったことからも、北東側に土を掻き出した様子が窺える。また、北側は地山を掘削して墳丘をととのえており、南側は旧地表面も流失しているが、わずかに地山成形の痕跡が観察される。

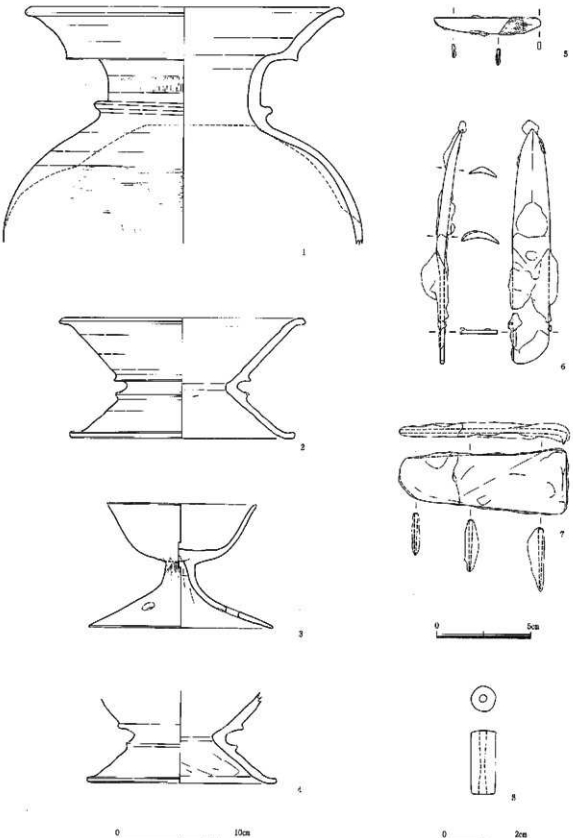
〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳頂部中央で第1主体部、その南隣に第2主体部の2基を検出した。ともに尾根稜線に平行で、切りあい関係はみられない。25号墳の第1主体部に対し61号墳第1主体部はほぼ同様な軸をとる。第1主体部に対し、第2主体部は軸をわずかに北へ振り全体が東側へずれる位置であり、あくまで中心主体は第1主体部であるように強調するかのようである。墓壙の掘り込みは第1主体部のほうがわずかに深い。

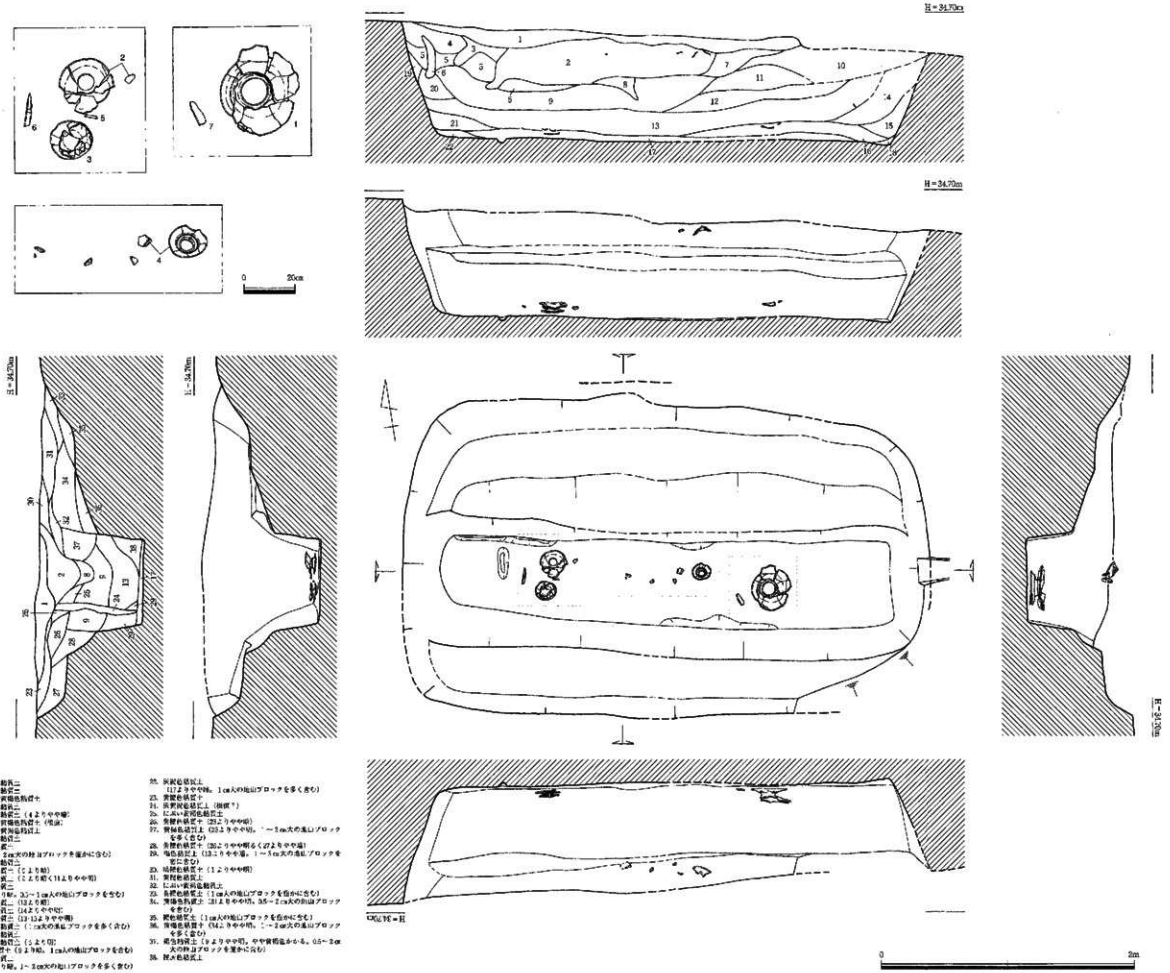
第1主体部（第41・42図、図版10・34・35・114）

墳頂部中央で検出した。墓壙は盛土上から地山を深く掘り込んでいる。墓壙の主軸は尾根の斜面に平行するN-79°-Wを振り、平面形は隅丸長方形である。墓壙は二段に掘り込まれており、上面の長さ4.25m、幅2.70m、二段目掘り方は長さ3.90m、幅1.10cm、深さ38cmを測る。底面の規模は、長さ3.65m、幅は西側で65cm、東側で71cmと東側ほど広くなる。墓壙上面からの深さは90cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、上層で黒く落ち込んだ層（第41図第1・2層）がみられ、墓壙中央部第2層中から鼓形器台（4）が検出されている。縦断面では明確ではなかったものの、横断面ではまっすぐに68cmほど立ち上がる木棺の痕跡が認められた。また、墓壙底部には、底面と壁面との屈曲部に沿って溝状の凹みが3ケ所あり、木棺の側板および小口溝の可能性が考えられる。木棺の大きさは断面から推定して幅65cm前後、深さ68cm弱と考えられ、二段目掘り方いっぱいに棺を納めていたとみられる。

遺物は、墓壙上層の鼓形器台（4）のほか、東壁から80cm離れた床面で広口壺（1）と鉄鏃（7）、西壁から67cm離れた床面で鉢（6）、壁から80cm離れて高杯（3）、鼓形器台（2）、刀子（5）が出土した。（4）は脚台部ほぼ完存で西側に受部片が散らばっていた。床から67cmほど上層の黒褐色粘質土層中から出土している。（1）は肩部から上半の遺存で、口縁部を下にしておかれていた。西側の墓壙内側の肩部は打ち欠きされており、土器転用枕とみられる。（7）は（1）の10cm南西に出土している。（2）と（3）はほぼ横に並ぶように配置しており、やや（3）が西に数cmずれる。（2）と（3）の西側10cmほどに切先を北へ向け

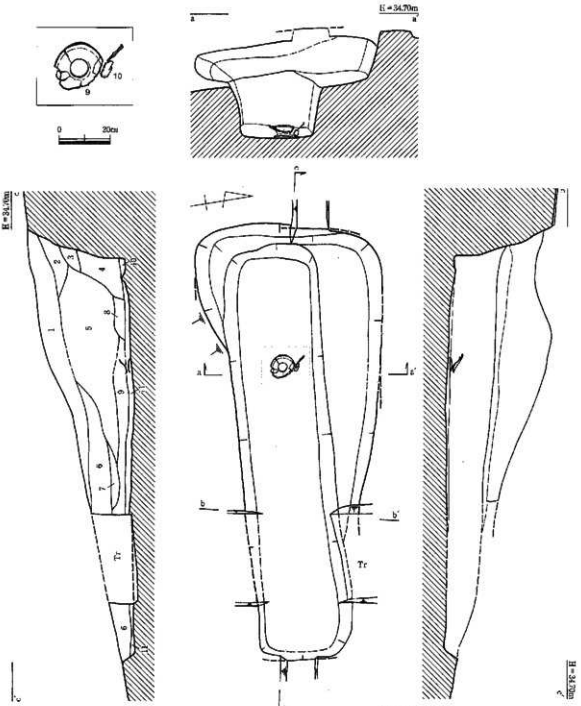


第41図　No11北 横枕61号墳第１主体部出土遺物実測図



1. 暗褐色粘質土
2. 黒褐色粘質土
3. にぶい黄褐色粘質土
4. 黄褐色粘質土
5. 灰褐色粘質土（4よりやや暗）
6. にぶい黄褐色粘質土（明度）
7. にぶい黄褐色粘質土
8. 暗褐色粘質土
9. 褐色粘質土
（0.5～2cm大の粒子ブロックを僅かに含む）
10. 黒褐色粘質土
11. 褐色粘質土（1よりやや明）
12. 褐色粘質土（1よりやや暗）11よりやや明）
13. 褐色粘質土
（12と同色。3.5～1cm大の地山ブロックを含む）
14. 褐色粘質土（12よりやや暗）
15. 褐色粘質土（14とほぼ同色）
16. 褐色粘質土（13・12よりやや明）
17. 赤褐色粘質土（1cm大の焼土ブロックを多く含む）
18. 黒褐色粘質土
19. 赤褐色粘質土（5とほぼ同）
20. 褐色粘質土（9よりやや明。1cm大の地山ブロックを含む）
21. 褐色粘質土
（12と同色。1～2cm大の地山ブロックを多く含む）
22. 灰褐色粘質土
（11よりやや明。1cm大の地山ブロックを多く含む）
23. 黒褐色粘質土
24. 灰黄褐色粘質土（明度7）
25. にぶい黄褐色粘質土
26. 黒褐色粘質土（23よりやや暗）
27. 黄褐色粘質土（23よりやや明。1～3cm大の焼土ブロックを多く含む）
28. 黒褐色粘質土（26と1ランクやや暗くなる（27よりやや暗））
29. 褐色粘質土（13・5よりやや暗。1～3cm大の焼土ブロックを多く含む）
30. 褐色粘質土（12よりやや明）
31. 黒褐色粘質土
32. にぶい黄褐色粘質土
33. 黒褐色粘質土（1cm大の地山ブロックを僅かに含む）
34. 黒褐色粘質土（31よりやや明。3.5～2cm大の赤焼ブロックを含む）
35. 褐色粘質土（1cm大の地山ブロックを僅かに含む）
36. 黒褐色粘質土（34と1ランクやや明。1～2cm大の焼土ブロックを多く含む）
37. 褐色粘質土（9よりやや明。やや黄褐色かかる。0.5～3cm大の粒子ブロックを僅かに含む）
38. 暗赤褐色粘質土

第42図　No11北 横枕61号墳第1主体部実測図（S＝1：30）



1．黄褐色砂質土（0.5cm大の礫を上ブロック、明黄褐色上ブロック、0.2～1cmの浅白色粒状を含む。しまる）
2．にぶい黄橙色粘質土（0.5cm大の焼土ブロック、明黄褐色ブロックを含む）
3．明褐色砂質土（2～5まで褐色がかる。褐色土ブロック、明褐色ブロックを含む。1cm大の炭化物をブロック状。しまる）
4．にぶい褐色土（3cm大の明黄褐色上ブロック、0.5cm大の褐色土ブロックを含む。よくはくされ混じった土）
5．にぶい黄橙色砂質土（1cm大の明黄色ブロック、暗灰色ブロック、明黄褐色上ブロックを含む。1（はくれはじった土）
6．黄褐色砂質土（1～2ラインで明（褐色がかる。0.5cm大の褐色土ブロック、黄褐色ブロックを含む。3cm大の明黄色ブロック有。しまる）
7．にぶい黄褐色粘質土（0.5cm大の明黄褐色土ブロックを含む）
8．にぶい黄橙色粘質土（3cm大の暗灰黄色ブロック、0.5cm大の明黄褐色上ブロック、褐色上ブロックを含む）
9．黄褐色砂質土（1～2ライン薄、0.3cm大の褐色土ブロック、明黄褐色土ブロック、暗灰色ブロックを含む。しまり悪い）
10．にぶい黄褐色粘質土（3cm大の暗灰色土ブロック有）
11．黄褐色砂質土（3～5ラインで明るかがる。0.5cm大の褐色土ブロック、明黄褐色ブロックを含む）
12．明褐色粘質土（0.5cm大の暗色上ブロック、明黄褐色上ブロック、褐灰色土ブロックを含む。しまりもしまる）
13．暗色粘質土（1～2ライン薄、明色がかる。0.5cm大の暗色土ブロック、明黄褐色上ブロック、褐灰色上ブロックあり）
14．にぶい黄褐色砂質土（0.1cm大の褐色土ブロック、明黄褐色土ブロック、炭化を含む）
15．にぶい黄褐色砂質土（1～2ラインで明るかがる。0.5cm大の暗色土ブロック、0.5cm大の明黄褐色土ブロックを含む）
16．明黄褐色粘質土（0.1～0.5cm大の黒色土ブロックを1～2ラインあく含む）
17．黄褐色砂質土（3～5ライン薄、明色がかる。褐色二ヶ所がに含む）

第43図　№11北 横枕61号墳第２主体部実測図（S＝1：30）

第44図　No11北 横枕61号墳第２主体部出土遺物実測図

た(６)が配置する。なお(５)は(２)と(３)間の(２)寄りで検出された。(２)と(３)ともに打ち欠きは認められなかった。ただ、(６)の配置などから土器枕の可能性は十分にあるものと考えられる。

(１)は口縁は大きく広がり先端でわずかに外方に膨らんで丸味のある端面で終える。体部と頸部の境界に貼付け凸帯をもつ。肩部外面に赤彩痕が認められる。(２)は受部、脚台部ともに大きく広がる割にはやや器高の低い形態で、口縁部、脚台部ともに端部は屈曲して面をもつ。(３)は椀形の杯部に口縁より大きく広がる脚台が付き３方向の円形透し孔を有する。器壁は薄く杯部も深い。(４)は全体的に器壁が厚く径も小さい。(５)は全長5.6cmと小型で、関部周辺に布目痕が観察される。(６)は幅広の古い形態で、施身部と基部の幅がほぼ同じく基部で厚さを減じる。(７)は直刃で幅2.7cmの割に長さ8.8cmと短く、着柄部は短く折る。(８)は墓壙埋土から出土したもので、長さ3.7cm、径6.6cmを測り、瑪瑙製の管玉である。

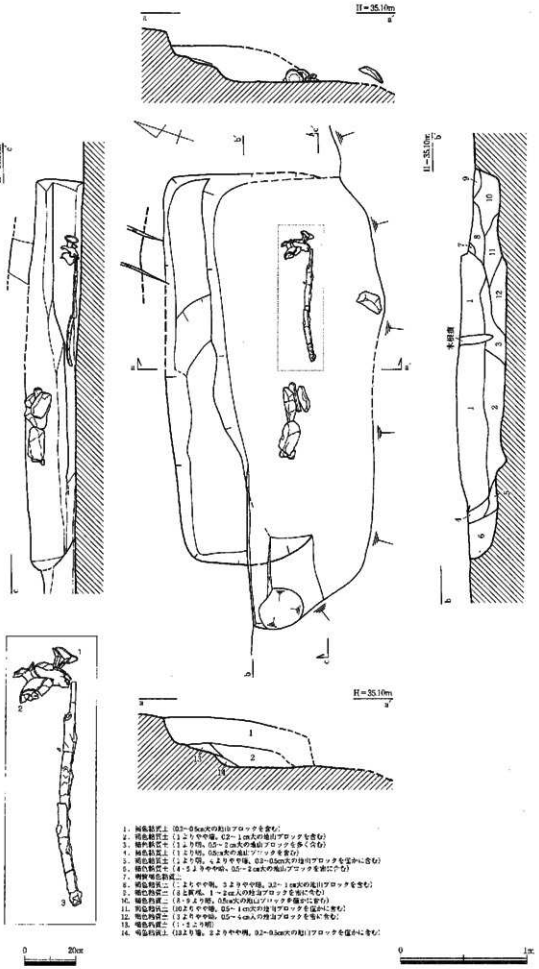
第２主体部（第43・44図、図版35・36・114）

墳頂部中央に位置する第１主体部の南側にほぼ平行に配置し、全体がやや東へずれ軸もわずかに東へ振る。墓壙は地山面を掘り込むが第１主体部より浅い。墓壙南東側が流失しかなり浅くなっているものの、遺存部分から墓壙の主軸は尾根の斜面に平行するN-85°-Wを振り、平面形は隅丸長方形と想定される。墓壙は二段に掘り込まれており、現況で上面の長さ3.48m、幅1.45m、二段目掘り方は長さ3.31m、幅76cm、深さ41cmを測る。底面の規模は、長さ3.15m、幅58cm、墓壙上面からの深さは82cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、木棺の痕跡が認められ、第43図の第３・４層が木棺の裏込め土とみられる。木棺の大きさは断面から推定して幅55cm程度、深さ40cm弱と考えられ、二段目掘り方いっぱいに棺を納めていたとみられる。墓壙西壁から80cm離れた床面で鼓形器台(９)、その北隣に鉄鎌(10)が検出された。(９)は出土位置や受部の打ち欠きから土器枕とみられる。受部脚台部ともに大きく開くが高さがやや縮小化の傾向が見受けられる。口縁部は屈曲して外方に伸び若干肥厚して面をもつ。(10)は直刃で長さ15.7cmと長く、刃部中央が使用のためか凹む。着柄部は短く折る。

横枕62号墳（第３・６・11・45～48図、図版３・36～38・114）

〔位置と現状〕

横枕62号墳は、調査区中央部南西側、25号墳の位置する丘陵頂部から南東へ下る斜面の、標高32.55～35.12mに立地する。斜面高位の北側で25号墳の裾を切り、斜面低位の南側で60号墳に一部墳丘まで切られる。また、62号墳の下層東側に63号墳が、北西側に89号墳が位置し、それぞれ古墳半分ほどを62号墳が切る。東側に広がる水田面からの比高差は20.85mである。調査前の観察では、25号墳から南東



第45図　No11北　横枕62号墳主体部実測図（S＝1：30）

に下る斜面に弧状の大きな窪みがみられることから古墳と想定されたが、南斜面にかけての傾斜が緩しく、墳丘がかなり流失しているものとみられた。なお、墳丘西端が調査区域外となる。墳丘下層にSK-03、SK-10、SK-11が配置する。

〔墳丘〕

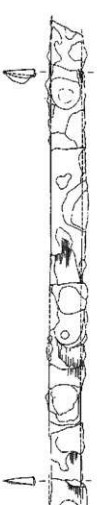
表土下10cm前後で墳丘面を検出した。墳丘部の最高所は墳丘中央より北側周溝近くが高く、標高35.12mを測る。本来墳丘全体に盛土が施されていたとみられるが、墳丘北側で21cm程度の盛土が遺存するに過ぎない。旧地表も斜面低位の南側においても検出されなかった。遺存する墓壙の深さを考慮に入れても、上部はかなり流失しているとみられる。現況の墳丘規模は東西で8.8m、南北で8.2mが遺存する。北側の周溝径を考慮に入れると径10mの円墳が復元される。墳丘の高さは東裾から現況1.91mを測るが、南側の60号墳周溝北壁でわずかに検出された地山掘削の段を地山成形の痕と仮定すると、南裾から高さ2.57mとなる。

墳丘は、主に北側斜面高位側に弧状の周溝を掘削することで墓域を確保している。斜面高位の周溝上端から周溝幅は2.80m、深さ1.20mを測る。墳丘の築造は墳丘北側で10～20cm程度の盛土が遺存している程度で盛土の大半を流失し旧表土も遺存していないことから不明であるが、北側の周溝を掘削し、その土を南東側へ盛って築造したとみられる。なお、北側の25号墳、南側の60号墳との前後関係は、第11図の土層断面、墳丘断面図から、斜面低位側の古墳ほど新しく、60号墳が62号墳を切り、62号墳が25号墳を切ったことが判明した。ただ、62号墳北側の周溝埋土断面では、周溝埋土の半分程は62号墳からの流土とみられる。

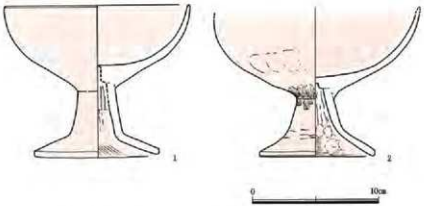
〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳頂部中央よりやや北の斜面高位寄りで検出した。墓壙は盛土上から地山面を掘り込んでいる。墓壙南側が流失しているものの、遺存部分から墓壙の主軸は尾根の斜面に平行するN-69°-Eを振り、平面形は隅丸長方形と想定される。墓壙は二段に掘り込まれており、現況で上面の長さ3.55m、幅1.85mが遺存し、二段目掘り方は長さ3.08m、深さ10cmを測る。底面の規模は、長さ2.84m、墓壙上面からの深さは53cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、木棺の痕跡と思われる土層が認められるものの規模等は不明である。

墓壙東壁から40cm弱離れた床面で、槍形高杯(1)(2)、鉄刀(3)を検出し、主体部埋土から鉄鏃(4)が出土している。高杯2点は口縁部を東側へ向けて互いに被さるように出土しており、土器枕と考えられる。鉄刀は切先を足位、刃部を被葬者側へ向け、土器枕の横に等部がくる配置である。(1)(2)はともに赤彩され、同様な形態、法量のようであるが、(2)の杯部が口縁部を含め若干大きく、脚部は逆に(2)が短く底径も小さい。(3)は切先を欠損するもののの、遺存長92.5cmを測り、全体に木質痕が観察される。茎部に目釘孔2を有する。(4)は鏃身部のみの残存で、平面三角形、逆刺は腸抉である。



第47図　No11北 横枕62号墳 主体部出土遺物 実測図(2)



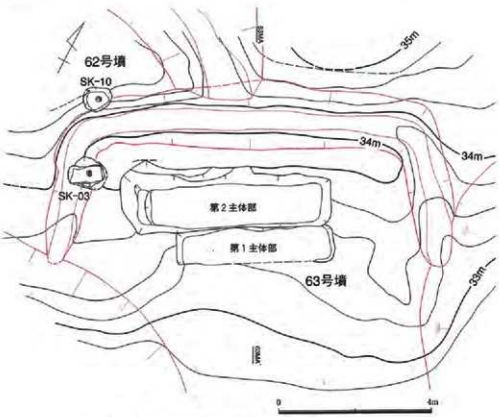
第46図　No.11北 横枕62号墳主体部出土遺物実測図（1）

第48図　No.11北 横枕62号墳 主体部出土遺物 実測図（3）

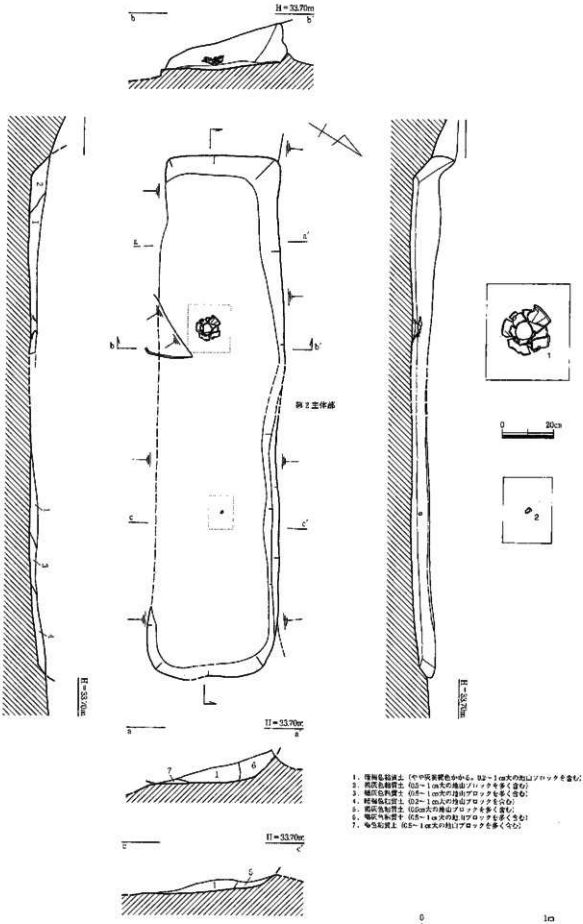
横枕63号墳（第3・3・12・49～54図、図版3・38～40・114・115）

［位置と現状］

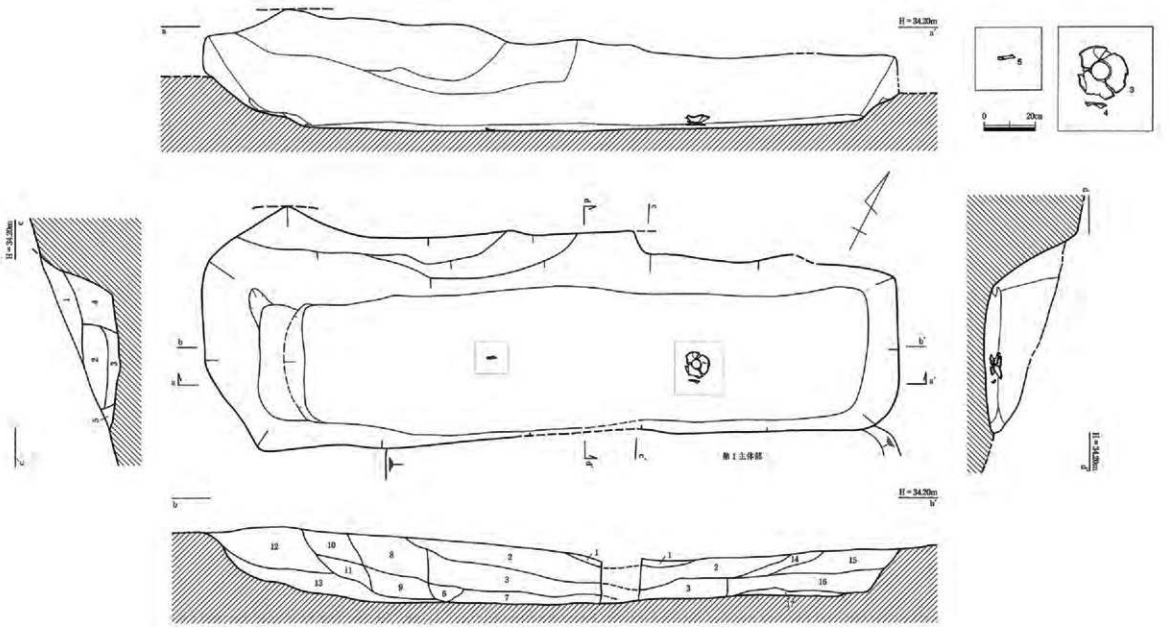
横枕63号墳は、調査区中央部やや南に位置し、25号墳の位置する丘陵頂部から南東へ下る斜面、標高32m程～34.26mに立地する。北東に25号墳、北に61号墳が配置し、西側で62号墳、東で59号墳に切られる。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は20m程度である。調査前の観察では、25号墳南東側に残丘状の張り出しが認められ、確認のため掘り下げたトレンチによって新たに見つかった古墳である。西側半分が62号墳と重なり、南東周溝を59号墳に、南西周溝を60号墳に一部掘削される。全体的に南東側の流失が著しい。



第49図　No.11北 横枕63号墳墳丘遺存図（S＝1：100）

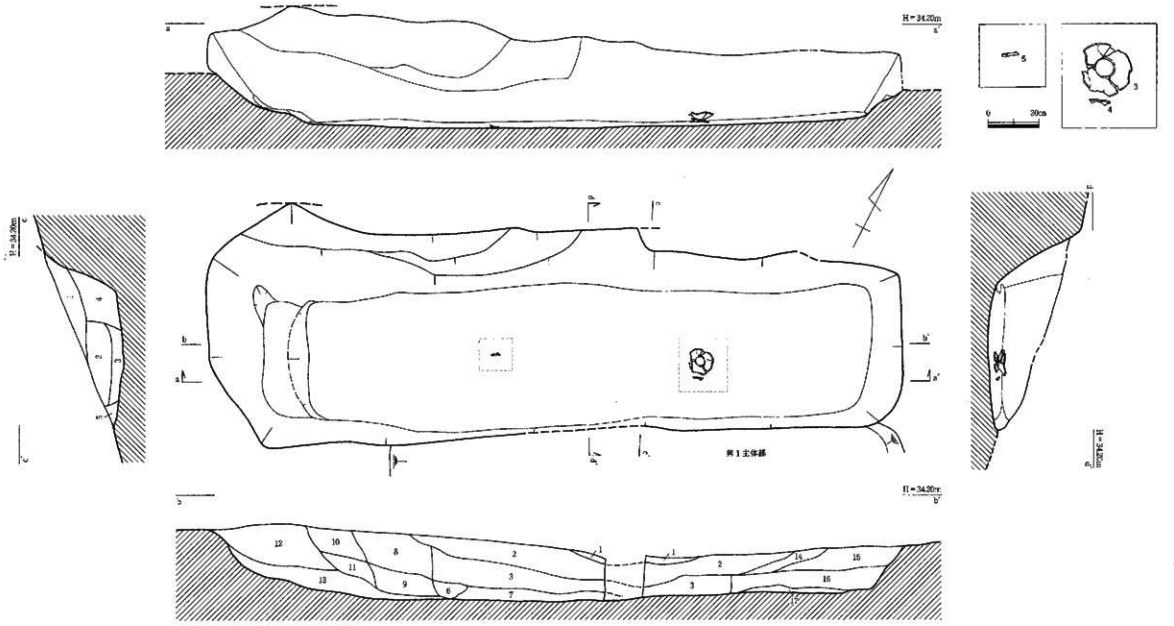


第50図　No11北 横穴63号墳第1主体部実測図（S＝1：30）



1．にぶい黄褐色粘質土（0.5～1cm大の褐山ブロックを含む）
2．褐色粘質土（0.5～1cm大の褐山ブロックを含む）
3．褐色粘質土（2.5Y明、0.5～1cm大の褐山ブロックを微かに含む。あまりしまっていない）
4．暗黄褐色粘質土（0.5～1cm大の褐山ブロックを密に含む）
5．暗黄褐色粘質土（0.5～1cm大の褐山ブロックを多く含む）
6．褐色粘質土（7.5Y明、やや褐灰色がかる。0.5～0.5cm大の褐山ブロックを含む）
7．褐色粘質土（7.5Yやや明、やや褐灰色がかる。0.5～1cm大の褐山ブロックを微かに含む）
8．褐色粘質土（7.5Y明、0.5～1cm大の褐山ブロックを微かに含む）
9．褐色粘質土（7.5Yやや明、0.5～1cm大の褐山ブロックを微かに含む）
10．褐色粘質土（7.5Yやや明、0.5～1cm大の褐山ブロックを含む）
11．褐色粘質土（10YR明、1～2cm大の褐山ブロックを含む）
12．褐色粘質土（10YR明、0.5～5cm大の褐山ブロックを密に含む）
13．褐灰色粘質土（0.5～3cm大の褐山ブロックを密に含む）
14．褐色粘質土（7.5YR明、0.5～1cm大の褐山ブロックを微かに含む）
15．褐色粘質土（10YRやや明、0.5～1.5cm大の褐山ブロックを含む）
16．褐色粘質土（7.5YR明、2.5Yやや明、0.5～3cm大の褐山ブロックを多く含む）
17．褐色粘質土（10YR明、やや褐灰色がかる。0.5～1cm大の褐山ブロックを含む）

第51図　No.11北 横枕63号墳第2主体部実測図（S＝1：30）



1. にぶい黄橙色砂質土（0.5～1cm大の焼土ブロックを含む）
2. 褐色砂質土（0.5～1cm大の炭ブロックを含む）
3. 褐色砂質土（2よりも暗。0.5～1cm大の焼土ブロックを極小に含む。あまりしまっていない）
4. 灰黄褐色砂質土（0.5～1cm大の炭ブロックを少に含む）
5. 暗黄褐色砂質土（0.5～2cm大の炭ブロックを多く含む）
6. 褐色砂質土（3よりも軟。やや軟天粒かかる。0.1～0.5cm大の炭ブロックを含む）
7. 褐色砂質土（3よりもやや白。やや軟天粒かかる。0.1～1cm大の焼土ブロックを極小に含む）
8. 褐色砂質土（3・7・2の間。0.5～1cm大の炭ブロックを極小に含む）
9. 褐色砂質土（8よりもやや暗。0.5～1cm大の炭ブロックを少に含む）
10. 褐色砂質土（8よりもやや黒。0.5～3cm大の焼土ブロックを含む）
11. 褐色砂質土（9・10之間。～1cm大の炭ブロックを少に）
12. 褐色粘質土（11よりも軟。0.5～5cm大の焼土ブロックを更に含む）
13. 褐灰色砂質土（0.5～3cm大の炭ブロックを多に含む）
14. 褐色砂質土（2・3之間。0.5～1cm大の焼土ブロックを極小に含む）
15. 褐色粘質土（14よりもやや黒。0.5～2cm大の焼土ブロックを少に）
16. 褐色粘質土（2よりも暗。3よりもやや軟。0.5～3cm大の焼土ブロックを多く含む）
17. 褐色粘質土（6よりも暗。やや軟天粒かかる。0.5～1cm大の焼土ブロックを含む）

第51図　No11北 横枕63号墳第２主体部実測図（Ｓ＝１：30）

〔墳丘〕

表土下10～20cm前後で墳丘面を検出した。墳頂部は西側で標高34.60mを測る。墳丘は盛土が確認されていないが、現況の主体部の墓壙の深さを考慮すると、本来は南東側を中心に盛土がなされていたと考えられる。南東側の大半を流失しており、南東側に流土の溜りが認められる。北側の斜面高位に遺存する周溝から、方墳で、南西から北東周溝底間で9.8mを測る。墳丘の高さは現状で南東裾から1.6m程度を測るが、辺10mを復元すると、2.5～3mほどにはなるものと想定される。

墳丘は、主に北側斜面高位側に周溝を掘削して墓域を区画し、掘り上げた土を低位の南東側ほど盛ることで墳丘をつくり出していると考えられる。ただ、南東側の流失が著しく、旧地表面や盛土および南東側の地山成形の痕跡は確認できなかった。

〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳頂部北東側で第1主体部、そのさらに北東隣に第2主体部の計2基を検出した。ともに尾根斜面に直交、第2主体部が第1主体部の北東壁をほぼ平行に切る関係である。墓壙自体は斜面低位にある第1主体部底面のほうが標高低く地山を深く掘り込むが、大きさは第2主体部の方が格段の差で大きい。

第1主体部（第50・52図、図版39・114）

墳頂部北東側で検出した。墓壙は地山を深く掘り込んでいる。墓壙の主軸は尾根の斜面に直交するN-59°-Eを振り、平面形は隅丸長方形である。墓壙は上部がかなり流失しており、特に南東側の壁面は一部を除いて不明瞭となる。規模は、現況で長さ4.15m、幅1.02m、深さ38cmを測る。上層の断面観察などから木棺の痕跡がわずかに認められる。第50図の第2～6層が木棺の裏込め土とみられる。木棺の大きさは断面から推定して長さ2.5m弱と考えられる。

遺物は、墓壙南東壁から1.1m離れた床面で鼓形器台（1）、さらに1.4m北東で刀子（2）を検出した。（1）は出土した位置や打ち欠きから土器枕と考えられる。受部、脚台部はともに大きく開き、口縁端部、底端部ともにかすかな屈曲で面をもって終える。（2）は刀子の関部片で、関の角度は斜めで刃部へ続く。

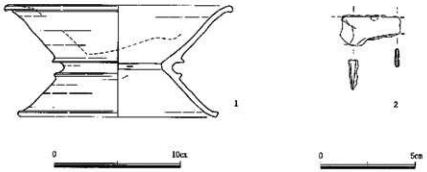
第2主体部（第51・53図、図版39・40・115）

墳頂部北側に位置する第1主体部の北東側にほぼ平行に配置し、第1主体部の北東壁を切る。墓壙は地山面を掘り込むが第1主体部よりやや浅い標高となる。墓壙の主軸は尾根の斜面に直交するN-62°-Eを振り、平面形は隅丸長方形である。墓壙南東側が流失しかなり浅くなっているものの、遺存部分から規模は、長さ5.53m、幅1.92m、深さ96cmを測る。上層の断面観察などから木棺の痕跡が認められる。第53図の第4・5・8～13・15～17層が木棺の裏込め土とみられる。木棺の大きさは断面から推定して長さ2.3m弱、幅50cm弱、高さ43cm程度と考えられる。

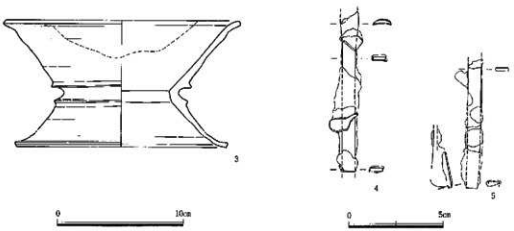
遺物は、北東壁から1.3m程離れた床面で鼓形器台（3）と鉢（4）、さらに1.5m離れて施の茎部（5）を検出した。（3）は出土した位置や打ち欠きから土器枕と考えられる。受部、脚台部はともに大きく開くが、特に受部が深く口径が大きい。口縁端部、底端部ともにやや屈曲して外方へ開き端面をもって終える。第1主体部出土の鼓形器台（1）より径、器高ともに大きく、受部の打ち欠きが浅い。施（4）（5）は、接合はしないものの同一個体の可能性が高い。（4）は切先を欠損するが施身部は反りをもつ。

〔その他の出土遺物〕

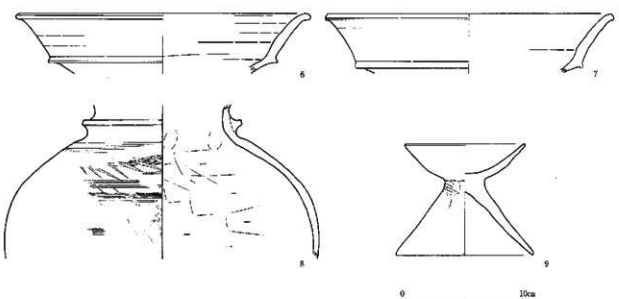
63号墳の北側周溝から小型器台（9）、60号墳の周溝埋土上層および東裾部周辺から、壺（6）（7）（8）が出土している。60号墳築造の際に63号墳の南西側を掘削したか、後の流失によって60号墳へ流れたものとみられる。（6）（7）（8）は同一個体の可能性があり、（6）（7）は口縁部は大きく開いて端部で外方へ摘み面をもつ。肩部（8）は頸部との境界に凸帯を貼付け、肩部上面にハケ目工具の連続刺突文を施す。（9）は受部は下半で膨らみ皿状を呈する。脚台部はまっすぐに開き、端部へ器壁を細める。



第52図　No11北　横枕63号墳第１主体部出土遺物実測図



第53図　No11北　横枕63号墳第２主体部出土遺物実測図



第54図　No11北　横枕63号墳周溝出土遺物実測図

横枕64号墳（第３・６・12・13図、図版３・40・41）

〔位置と現状〕

横枕64号墳は、調査区北東端に位置し、古墳の大部分は調査区域外となる。21号墳が位置する丘陵頂部から南東へ下る斜面、標高25.95～29.15mに立地する。北西の斜面高位に21号墳、南に91号墳が配置する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は14.2mである。調査前の観察では、21号墳南東側にしっかりとした古墳状の高まりと、その西側に周溝とみられる凹みが認められた。確認のため調査区の境界に掘り下げたトレンチによって古墳として確認された。また、南裾部が91号墳と重なり、第13図墳丘断面図から、64号墳築造の後、91号墳が上に盛土して新たに墳丘を築造したことが判明した。

〔墳丘〕

表土下10cm前後で墳丘面を検出した。墳頂部南側で標高29.15mを測る。墳丘は南東側で旧地表面と80cm程度の盛土が確認された。西側の斜面高位に遺存する周溝から、円墳で、径10mが復元される。墳丘の高さは南東裾から3.2mを測る。調査は、南側の４分の１周縁部が対象となったことから、古墳の墳頂部まで明らかにできず、盛土や高さはこれより若干大きくなると思われる。

墳丘は西側斜面高位側に周溝を大きく掘削して墓域を区画し、掘り上げた土を低位の東側ほど盛ることで墳丘をつくり出していると考えられる。ただ、調査で確認された周溝は幅が広い割にはそれほどの深さが見られない。東裾では地山成形が確認される。

〔埋葬施設など〕

埋葬施設は限られた調査範囲のため、調査区域内では検出できなかった。周溝埋土から、須恵器体部片や透し窓のある脚部片などが出土しているが、図化に及ばなかった。

横枕88号墳（第３・６・12図、図版３・41）

〔位置と現状〕

横枕88号墳は、調査区東端に位置し、古墳の北東半分には墳丘上に農具小屋が建っており調査区域外となる。斜面高位の北西に26号墳が、南西には59号墳が、その59号墳間との中間部にSX-05が配置する。25号墳が位置する丘陵頂部から南東へ下る斜面下位、標高25.45～26.90mに立地する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は13.75mである。調査前の観察では、農具小屋の建っている高まりが、古墳状となっており、その西側に帯状の凹みがみられた。確認のため、調査区の境界に掘り下げたトレンチによって古墳として確認された。

〔墳丘〕

表土下10～25cm前後で墳丘面を検出した。周溝そばの墳丘北西側で標高26.90mを測る。墳丘は南東側で旧地表面と10～20cm程度の盛土が確認された。北西側の斜面高位に遺存する周溝から、径６m程度の円墳が復元される。墳丘の高さは南東裾から1.45mを測る。調査は南側のほぼ２分の１が対象となったことから、規模や高さはこれより若干大きくなると思われる。

墳丘は西側斜面高位側に周溝を大きく掘削して墓域を区画し、掘り上げた土を低位の東側ほど盛ることで墳丘をつくり出していると考えられる。ただ、調査で確認された周溝は幅が広い割にはそれほどの深さが見られない。東裾では地山成形が確認される。

〔埋葬施設など〕

埋葬施設は調査区域内では検出できなかった。周溝埋土から土器細片などが出土している。

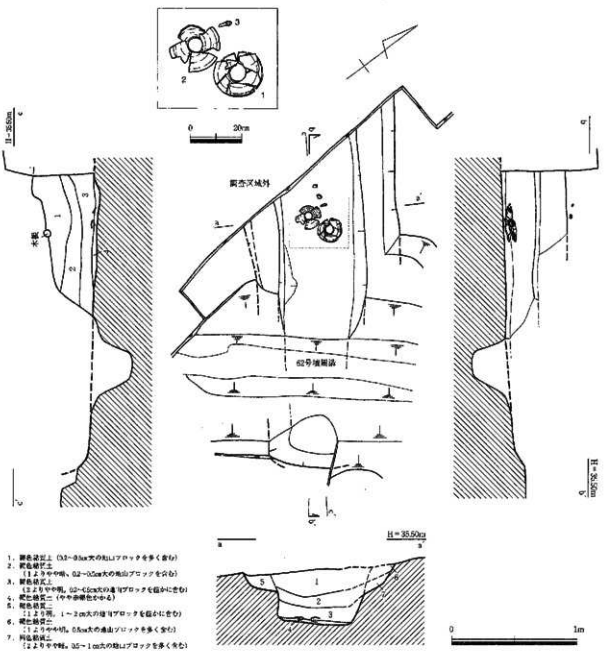
横枕89号墳（第3・6・12・55・56図、図版3・10・42・43・115）

〔位置と現状〕

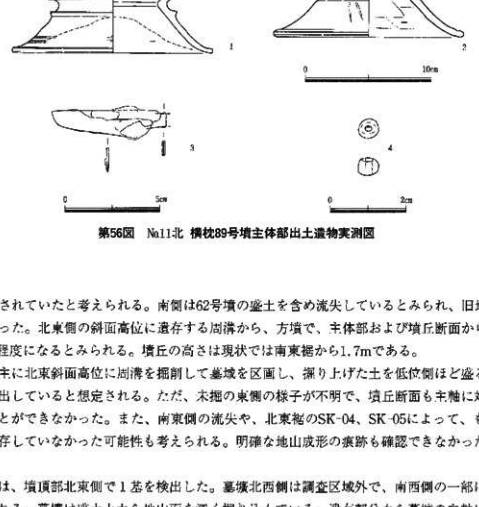
横枕89号墳は、調査区中央部西端の丘陵上に位置する。西側半分は調査区域外となる。北東から伸びる主稜線頂部、丘陵変換点に位置する25号墳の南西隣、標高33.90m～35.60mに立地する。東側3分の1を62号墳に切られ、東側斜面低位に63号墳が配置する。丘陵東側に広がる水出面からの比高差は23.9mである。調査前の観察では、25号墳南西側に高まりが認められ、調査区境界に掘り下げたトレンチによって新たに確認された古墳である。なお、北東裾部にSK-04、SK-05が配置する。

〔墳丘〕

表土下10～20cm前後で墳丘面を検出した。最高所は、墳丘北側で標高34.60mを測る。主体部周辺を中心に盛土10cm弱が確認され、現況の主体部の墓壙の深さを考慮すると、本来は北側でもさらに10cm強



第55図　No.11北 横枕89号墳主体部実測図（S＝1：30）



第56図　№11北 横枕89号墳主体部出土遺物実測図

は盛土がなされていたと考えられる。南側は62号墳の盛土を含め流失しているとみられ、旧地表面も検出できなかった。北東側の斜面高位に遺存する周溝から、方墳で、主体部および墳丘断面から想定して辺9～10m程度になるとみられる。墳丘の高さは現状では南東裾から1.7mである。

墳丘は、主に北東斜面高位に周溝を掘削して墓域を区画し、掘り上げた土を低位側ほど盛ることで墳丘をつくり出していると想定される。ただ、木掘の東側の様子が不明で、墳丘断面も主軸に対し平行に設定することができなかった。また、南東側の流失や、北東裾のSK-04、SK-05によって、もともと旧地表面が遺存していなかった可能性も考えられる。明確な地山成形の痕跡も確認できなかった。

〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳頂部北東側で1基を検出した。墓壙北西側は調査区域外で、南西側の一部は62号墳周溝に掘削される。墓壙は盛土上から地山面を深く掘り込んでいる。遺存部分から墓壙の主軸は尾根の斜面に直交するN-54°-Wを振る。平面形は隅丸長方形である。墓壙は二段に掘り込まれており、上面の遺存長2.94m、幅1.24m、二段目掘り方は遺存長2.68m、幅70cm、深さ26cmを測る。底面の規模は、遺存長2.52m、幅55cmである。墓壙上面からの深さは墳丘断面から64cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、縦断面では掘削などで明らかでなかったが、横断面ではまっすぐに44cmほど立ち上がる木棺の痕跡が認められた。また、墓壙底部には、底面と壁面との屈曲部に沿って溝状の凹みがあり、木棺の側板溝の可能性が考えられる。木棺の大きさは断面から推定して幅50cm程度、深さ44cm弱、二段目掘り方いっぱいに棺を納めていたとみられる。

遺物は、墓壙南西壁から1.7m程離れた床面で、横に前後10cmずれて並ぶ鼓形器台(1)(2)、それらの北西側に刀子(3)、墓壙埋土からガラス小玉(4)を検出した。(1)(2)は出土した位置や打ち欠きから土器枕と考えられる。なお、(1)は脚台部を上に向けて出土しており、打ち欠きも脚台部側に認められた。(1)は脚台部に比べて受部がかなり深く、口縁部は屈曲して外方へ伸び面をもつ。(2)は受部脚台部とも接合部に稜をもたず屈曲も甘いが、内面は接合部でしっかりした屈曲がみられる。脚台部外面に縦位2条のヘラ記号が刻まれる。(3)は刀身幅に対し刀身長が短く切先は丸い。(4)は径5.3mmの淡青色、ガラス製である。

横枕90号墳（第3・6・11・57～59図、図版3・43・44・115・116）

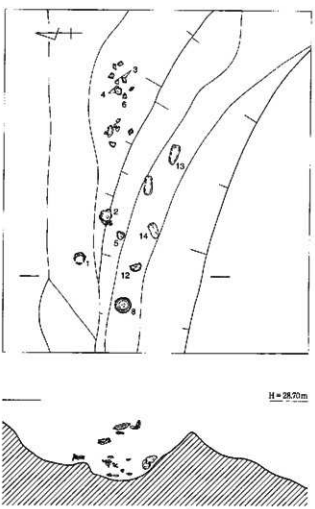
〔位置と現状〕

横枕90号墳は、調査区南西端、25号墳の位置する丘陵頂部から南東へ下る斜面下位、標高26～28.6mに立地する。北側の斜面高位に60号墳が配置し、90号墳北側周溝が一部掘削する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は14m程である。調査前の観察では、90号墳の西側にわずかに帯状の凹みが認められたが、60号墳からの流土の堆積が著しく、古墳として認識したのは60号墳の墳裾確認のため掘り下げたトレンチによる。埋没した周溝、遺物が検出され、土層断面から60号墳南端を切る古墳と判明した。ただ南斜面にかけての傾斜が厳しく、墳丘の多くは流失しているものとみられた。

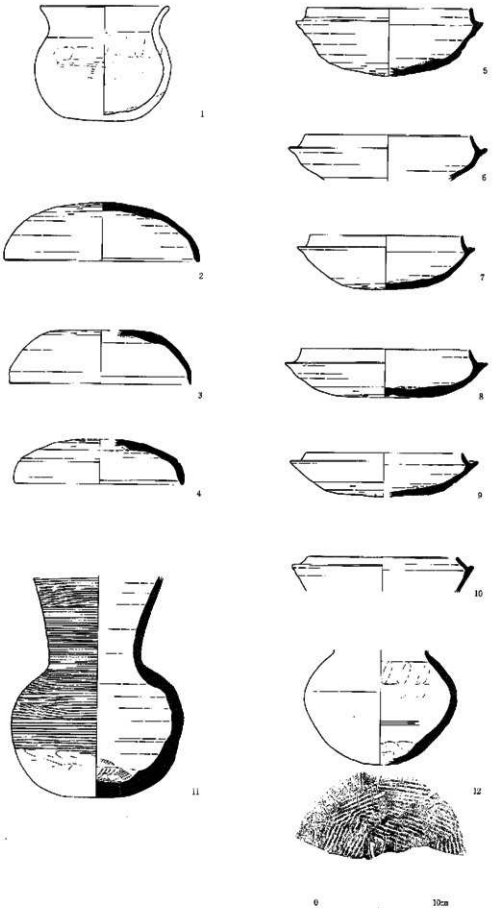
〔墳丘〕

表土下10cm程度で墳丘面を検出した。南側の大半を流失し、周溝も北側5分の2程度の遺存である。墳丘部の最高所は北西周溝近くの墳丘部で、標高28.6mを測る。周溝の規模から本来は墳丘全体に厚く盛土が施されていたとみられるが、わずか北側に10cm弱が遺存するのみである。北側では表土下は地山が露出し、流失したのか旧地表面は検出されなかった。北側の周溝径を考慮に入れると径8m程の円墳が復元される。墳丘の高さは東裾から現況2.6mを測る。

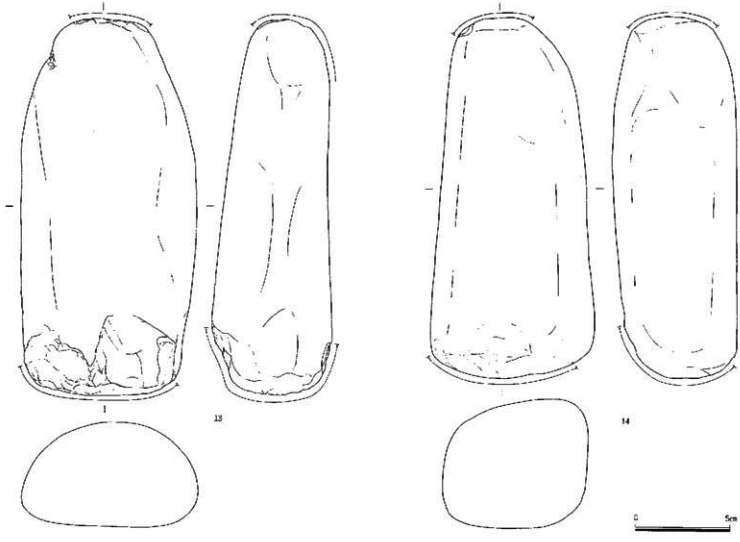
墳丘は、主に北側斜面高位側に弧状の周溝を大きく掘削し、その土を南側へ盛ることで造られていると考えられる。周溝は、上層堆上の大半は60号墳からの流土とみられるが、現況で斜面高位の周溝上端から周溝幅3.02m、深さ1.86mを測る。90号墳北東側の周溝部で、外周に新たな弧状の溝が検出され、



第57図　No.11北 横枕90号墳周溝土器出土状況図（S＝1：30）



第58図　No11北 横枕90号墳周溝出土遺物実測図（1）



第59図　No11北 横枕90号墳周溝出土遺物実測図（２）

第11図の周溝土層断面から、90号墳以降の溝である。60号墳の南裾部を切る周溝の掘削も墳丘規模を考慮した場合、やや大きすぎる感もあり、検出した遺存状況では不明瞭な部分も多いが、周溝の掘り直しあるいは占墳自体の重複の可能性が考えられる。

〔埋葬施設〕

墳丘の大半を流失しており、埋葬施設は検出されなかった。

〔その他の出土遺物〕

90号墳北側周溝内から、須恵器を中心として、土師器、蔵石などの遺物が出土しているが、特に北東部での出土が目立つ。このうち比較的実測可能な(1)～(14)を図化した。出土した多くの土器は、出土位置と層から90号墳外周側の溝堆土の出土遺物で、(12)は第59層中から、(1)(2)(5)(8)も第55・57～60層中の出土である。また、これらの遺物は南から落ち込んだような傾斜をもつ。(3)(4)(6)も外周側の溝の遺物である。蔵石(13)(14)は90号墳内側の周溝の出土である。

土師器甕(1)は小型で、平底から彎曲しながら立ち上がり頸部ですぼまって胴部よりわずかに小さい口縁へ続く。須恵器杯蓋(2)(3)(4)はともに浅く丸味のある天井部をもち小型化の兆しが見受けられる。(4)は口縁部と天井部とは境界に施した1条の沈線で介するが、(2)(3)はみられない。杯身(5)～(10)は杯蓋同様、全体的に浅く小型化の兆しが見受けられ、受部はやや上向きで外方へ伸び、立上がりは短く内傾し先端を細める。底部内面は円弧文がナデ消され、底部外面はヘラ削りするが中央を削り残すものが見られる。壺(11)(12)は体部器壁分厚く楕円形で平底の(11)と、器壁薄く肩部が張って尖り底状の(12)とがある。(11)の頸部はなだらかに上外方へ伸び、体部中程までカキ目を施す。(11)の底部は不定方向のヘラ削り、(12)は平行叩き目を観察する。蔵石(13)(14)はともに似通った大きさ、石材で、長軸端部に使用痕が観察される。

横枕91号墳（第3・6・13・60図、図版3・45・46）

〔位置と現状〕

横枕91号墳は、調査区北東端に位置する。21号墳が位置する丘陵頂部から南東へ下る斜面、標高27～29.05mに立地する。北西の斜面高位に21、22号墳、北麓に64号墳が配置する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は15.3mである。調査前の観察では、64号墳のすぐ南側にあたり、急斜面ということもあって全く予想しえなかった。表土除去に伴う板状の石材や主体部の一部露出により、確認のためトレンチを掘り下げ、新規の古墳として明らかになった。なお、南東の斜面低位に周溝状の規模をもつSD-03が配置する。

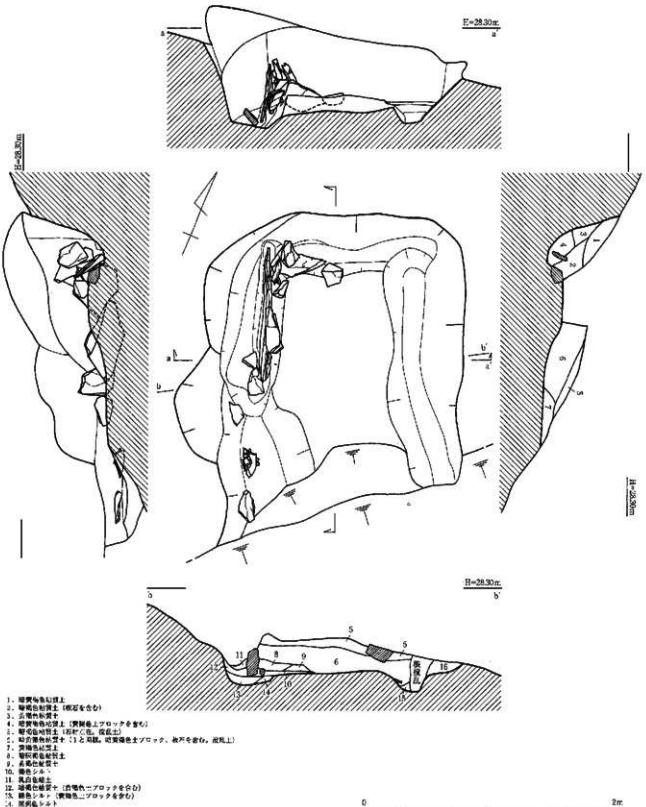
〔墳丘〕

表土下5～15cm前後で墳丘面を検出した。64号墳の検出時に90号墳の存在が明らかとなり、残土置場として南側の谷部を利用していたこと等諸般の理由のため南側の調査を断念した。斜面低位の南東側半分程は完全に流失し、調査で明らかとなったのは北西側4分の1程度である。墳頂部西側で標高29.05mを測る。墳丘は南東側で30cm程度の盛土が確認された。西側の斜面高位に遺存する周溝から、円墳で、径7～8m程度が復元される。墳丘の高さは南東裾から現況2m程度を測る。

墳丘は西側斜面高位側に周溝を大きく掘削して墓域を区画し、掘り上げた土を低位側に盛ることで墳丘をつくり出していると考えられる。また、北裾部が64号墳と重なり、第13図墳丘断面図から、64号墳築造の後91号墳が上に新たに盛土して墳丘を築造したことが窺える。

〔埋葬施設〕

墳頂部西寄りで検出した。墓壙は床面をはじめ南東側ほど大きく流失を受けており、地山を深く掘り込んでいる北西側の長さ2.6m程が遺存する。墓壙の主軸は尾根の傾斜に対し強いて言えば平行方向であるが、さほど関連性は認められず、N-22°-Wを振る。墓壙には小口坑や側板溝が検出され、箱式石



1. 暗黄褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土（根石を含む）
3. 茶褐色粘質土
4. 暗黄褐色砂質土（黄褐色土ブロックを含む）
5. 暗褐色砂質土（石が〇色、褐色土）
6. 灰白黄褐色砂質土（うと同色、暗黄褐色土ブロック、赤石を含む、砂礫上）
7. 黄褐色砂質土
8. 暗褐色砂質土
9. 赤褐色砂質土
10. 褐色シルト
11. 黒色粘質土
12. 暗褐色砂質土（赤褐色ブロックを少し）
13. 褐色シルト（黄褐色ブロックを少し）
14. 黒褐色シルト
15. 暗赤褐色粘質土
16. 暗黄褐色砂質土（イとBは同）

第60図　No.11北 横枕91号墳主体部実測図（S＝1：30）

棺が構築されていたと考えられる。石棺を構成する石材は、北西側の側板溝、小口坑に残るわずかな棺材を除いて既に失われている。墓壙平面はやや不整形な隅丸長方形を呈すると想定される。規模は、現況で遺存長2.60m、幅2.06m、深さ99cmを測る。墓壙の壁際には小口板、側板を固定する幅30～45cm、深さ15cm程度の溝状の掘り込みがあり、西側は2枚の石の痕跡が認められる。石棺の内法は遺存する床面から幅90cmが推定され、遺存長1.54cm、床面から墓壙上面まで深さ67cmを測る。

遺物は占墳全域を含め何も出土しなかった。

2．その他の埋葬施設の調査

No.11北　SX-05（第6・61図、図版3・46・47）

SX-05は、調査区東端に位置する。25号墳を丘陵頂部として南東へ下る斜面低位、標高25.85～26.65mに立地する。北東70cmに88号墳、南西2.5mに59号墳が所在する。位置的には88号墳に伴う埋葬施設の可能性が大きい。

墓壙の主軸は斜面の傾斜に対しさほど関連性は認められず、強いて言えば平行方向であるがやや北へ振るN-20°Wをとる。墓壙上面は南東側ほど大きく流失を受けている。墓壙内には箱式石棺が構築されていたとみられ、墓壙南側には小口部を中心として棺の一部が遺存していた。底部には小口坑や側板溝が検出され、わずかに棺材、棺の置台とみられる石が散在する。

墓壙平面は、流失により南側がすぼむもののやや不整な隅丸長方形を呈する。規模は、現況で遺存長2.50m、幅1.23m、深さ67cmを測る。墓壙の壁際北側と南東には小口板、側板を固定する幅30～50cm、深さ10cm程度の溝状の掘り込みがある。南側小口部では小口板を側板で挟み込むように石棺を組み合わせており、側板は数枚の石を用い、つなぎ部分にやや小規模な石を補足しながら構築していったとみられる。石棺の内法は遺存する床面や土層断面から、長さ1.58m、幅65cm程度が推定され、床面から墓壙上面まで深さ60cmを測る。墓壙や遺存する石棺の状況から、北側斜面高位が頭位の可能性が高いと思われる。

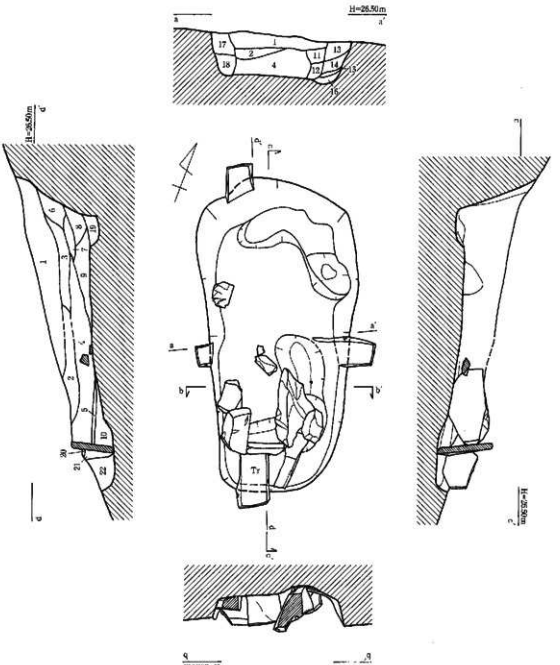
遺物は墓壙埋土から須恵器細片が出土しているが、図化に及ばなかった。

No.11北　SX-06（第6・62・63図、図版3・48・116）

SX-06は、調査区中央西端に位置する。丘陵頂部に位置する25号墳の南西墳丘斜面、標高35.44～35.90mに立地する。位置的には25号墳に伴う埋葬施設と考えられる。南西部で下層にSK-04、SK-05が重複する。

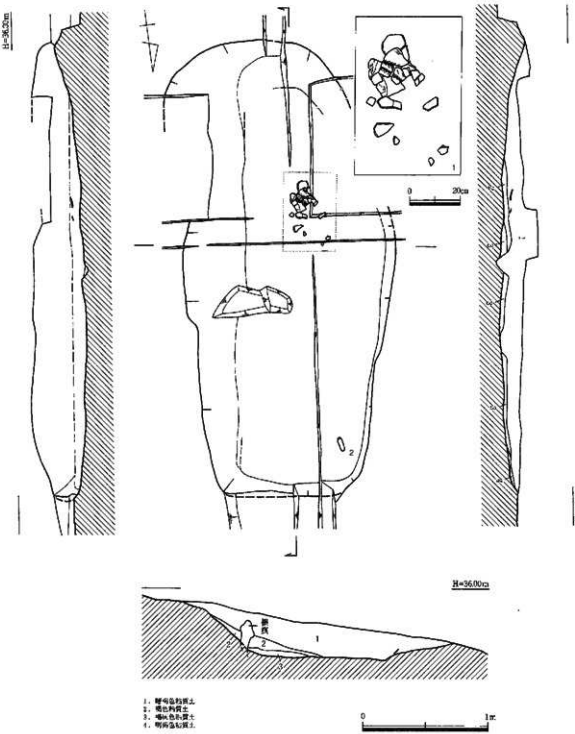
墓壙の主軸は25号墳の主軸および丘陵主稜線に対しほぼ平行で、N-5°-Eを振る。墓壙上面は斜面低位の西側ほど流失しており、確認の補助トレンチやSK-05の検出により南側を中心に掘削され一部底面も掘り過ぎが認められる。墓壙平面は南側が若干膨らむ隅丸長方形状で、規模は、現況で長さ3.63m、幅は北側で1.34m、膨らむ中央部で1.68m、深さ46cmを測る。墓壙底面からの壁の立ち上がりは本来より流失でかなり緩やかになっているとみられ、第1層自体も東側からの流土とみられる。墓壙の土層断面から木棺の痕跡は認められず、直葬か木棺直葬かは明らかにできなかった。

遺物は、墓壙中央やや南西寄りの床面近くで土師器壺（1）、北西隅で磨石（2）を検出した。（1）は肩部2分の1と口縁部6分の1程度が潰れた状態で出土しており、後の部位は検出されなかった。（1）（2）ともに第1層中の出土であり、上からの転落の可能性を含め、直接この遺構に伴うものなのかはっきりしない。（1）は口縁部がほぼ直立して上端面は内外から摘まれて凹面をもち、頸部と体部の境界に突出度のある貼付け凸帯を有する。肩部は口縁部に比較して大きく張り、上位に平行沈線数段と綾杉文を施す。（2）は長さ11cmの自然石で長軸の一面に使用痕が観察される。

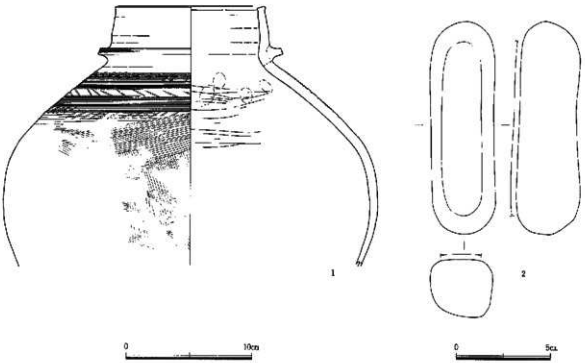


1. 暗色粘質土
2. 暗色粘質土（1より軟）
3. 暗褐色土（1～2cm大の亀裂ブロックを含む）
4. 黒褐色砂質土（植物片と思われる石片を含む）
5. 暗褐色粘質土
6. 褐色砂質土
7. 黒褐色砂質土（3ごろ軟）
8. 暗褐色粘質土
9. 暗色粘質土（3ごろ硬、ぬるりしまっていない）
10. 暗褐色砂質土（1ごろやや硬、8より軟）
11. 暗色粘質土（1ごろやや硬、8より軟）
12. 暗褐色砂質土（あまりしまっていない）
13. 褐色砂質土（10ごろやや硬）
14. 暗褐色粘質土（11ごろやや硬）
15. 暗色砂質土（黄褐色粘質土ブロックを多く含む）
16. 褐色砂質土（19より軟）
17. 褐色粘質土
18. 暗褐色粘質土（あまりしまっていない）
19. 褐色砂質土
20. 黒色粘質土
21. 明褐色粘質土
22. 褐色粘質土

第61図　No.11北 SX-05実測図（S＝1：30）



第62図　No11北 SX-06実測図（S＝1：30）



第63図　No.11北 SX-06出土遺物実測図

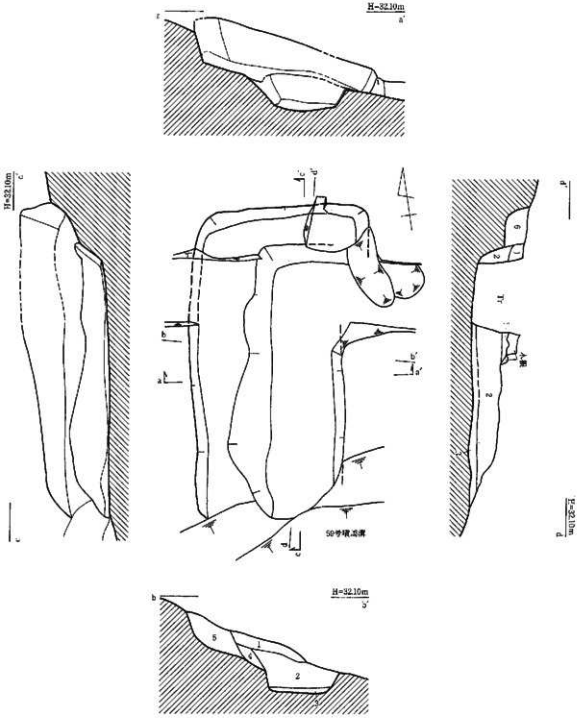
No.11北　SX-10（第６・13・64図、図版３・49）

SX-10は、調査区中央部、25号墳の位置する丘陵頂部から東へ張り出す尾根筋の標高31.31～32.04mに立地する。西側斜面高位に61号墳、東側斜面低位に26号墳、南側に59号が配置する。

調査前の観察では、61号墳東裾部で台形状の平坦面がみられ、残丘とも思われるが61号墳と同様に古墳である可能性が十分に考えられた。確認のため尾根稜線上と平坦面中央に南北にトレンチを掘り下げた結果、平坦面西寄りで埋葬施設１基(SX-10)を検出した。表土下10cm弱で地山面が露出し、盛土や旧地表は検出されなかった。SX-10の西側の61号墳との境界屈曲部についても、第13図からSX-10に伴って何らかの地山整形がなされたと考えられる。いずれにせよ、SX-10の墓壙の遺存状態から上部は東側を中心としてかなり流失しているとみられ、北側は谷となって急傾斜で下り、東側は26号墳、南側は59号墳周溝により埋葬施設が一部掘削を受けている。61号墳と類似する古墳の可能性も完全には捨て切れないが、現状では明確にできなかった。

墓壙の主軸は25号墳の主軸および丘陵主稜線に対し直交で、N－9°－Eを振る。墓壙上面は斜面低位の東側ほど流失しており、南側を59号墳の周溝で掘削され、全容は不明ながら、墓壙平面は隅丸長方形と想定される。墓壙は二段に掘り込まれており、上面の遺存長2.50m、幅1.40m、二段目掘り方は遺存長2.19m、幅73cm、深さ25cmを測る。底面の幅は52cmである。墓壙上面からの深さは72cmを測る。墓壙埋土の断面観察から木棺の痕跡が確認され、木棺の大きさは断面から推定して幅40cm弱、深さ35cm弱と考えられ、二段目掘り方いっぱいに棺を納めていたとみられる。

遺物は、何も出土しなかった。



1. 褐色粘質土
2. 暗色粘質土（1よりやや茶褐色がかる。1～3cm大の地山ブロックを含む）
3. 灰黄褐色粘質土
4. 褐色粘質土（1・2よりやや黒褐色がかる。0.5～1cm大の地山ブロックを含む）
5. 暗色粘質土（1・2よりやや明。1～3cm大の地山ブロックを含む）
6. 褐色砂質土（1・2よりやや明。1～3cm大の地山ブロックを含む）

第64図　No11北 SX-10実測図（S＝1：30）

3．その他の遺構、出土遺物の調査

No.11北　SK-01（第6・65図、図版50）

調査区南西部、60号墳の北東側周溝の掘り下げ時に検出した。標高29.86～30.00mに位置する。土坑平面は楕円形を呈し、主軸は斜面の傾斜に対し直交でN-58°-Eを振る。規模は長軸56cm、短軸40cm前後、深さ14cmを測る。断面は不整形な皿状で、埋土は1層である。埋土上面で円礫がまとまって出土している他、遺物はみられなかった。60号墳以降の時期とみられ、SK-02と同様な時期と推定される。

No.11北　SK-02（第6・66図、図版50）

調査区南西端、60号墳の西側周溝の掘り下げ時に検出した。標高31.51～31.75mに位置する。土坑平面は不整な長楕円形を呈し、主軸は斜面の傾斜に対し平行方向のN-6°-Eを振る。規模は長軸1.21m、短軸は南側で50cm、北側で67cm、深さ20cm程度を測る。断面は逆台形になるとみられ、埋土は1層である。埋土上部を中心として円礫がまとまって出土している。5～15cm程度の円礫、自然石で占められ、土坑の主軸あたりに比較的大きめの石が並ぶ。埋土から須恵器、陶磁器片、炭片がわずかに出土しており、近世の遺構とみられる。

No.11北　SK-03（第6・67図、図版50）

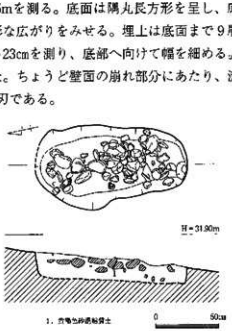
調査区中央部西側、62号墳、63号墳の下層、標高32.96～34.06mに位置する。上面は63号墳により削平される。土坑平面は不整な楕円形状を呈し、主軸は斜面の傾斜に対し直交するN-69°-Eを振る。規模は長軸1.01m、短軸は膨らむ中央部で83cm、深さ1.10mを測る。底面は隅丸長方形を呈し、底面から70cm程度まではやや幅を狭めながら台形状に立ち上がるが、上部で不整形な広がりをみせる。埋土は複雑に分かれ、東側の第1～4層については別遺構である可能性が考えられる。底面中央やや東よりで小ピットが検出された。長径16cm、短径11cm、深さ22cmを測り、底部へ向けて幅を細める。遺物は何も出土しなかった。

No.11北　SK-04（第6・68・69図、図版51・117）

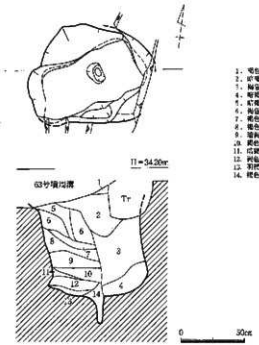
調査区中央西端、丘陵頂部に占地する25号墳の南西裾部、標高34.18～35.22mに位置する。東側をSK-05に切られる。土坑平面は不整な楕円形状を呈し、主軸は斜面の傾斜に対し直交するN-36°-Eを振る。規模は長軸1.25mが遺存し、短軸1.34m、深さ1.05mを測る。底面は隅丸長方形を呈し、底面から40cm程度までは逆台形状に立ち上がるが、上部で不整形な広がりをみせる。埋土は底面まで9層に分かれる。底面中央でピットが検出された。径12cm、深さ23cmを測り、底部へ向けて幅を細める。

遺物は上坑西壁際の埋土上層で磨製石斧（1）を検出した。ちょうど壁面の崩れ部分にあたり、流入の可能性もある。基部側は欠損しており、幅3.8cmを測る両刃である。

第65図　No.11北 SK-01実測図（S＝1：30）

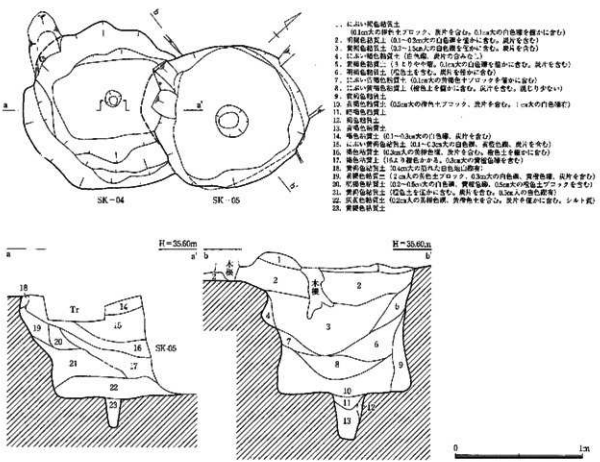


第66図　No.11北 SK-02実測図（S＝1：30）



1. 明色粘質土（やや茶褐色かかる）
2. 灰褐色粘質土（0.2～1cm大の焼土ブロック、炭片を含む）
7. 褐色砂質土（0.2～1cm大の焼土ブロックを多く含む）
4. 暗褐色砂質土（2cm大の焼土ブロックを多く含む）
5. 紅褐色砂質土（2.5Y6/4明、5.2～0.5cm大の焼土ブロックを含む）
6. 褐色砂質土（5.2Y5/4明、やや黄褐色かかる、0.5cm大の焼土ブロックを密に含む）
7. 明色砂質土（5.2Y5/6明、3～5cm大の焼土ブロックを多く含む）
8. 褐色砂質土（5.2Y5/6明、5～7.5cm大の焼土ブロックを密に含む）
9. 暗褐色砂質土（0.5～1cm大の焼土ブロックを含む）
10. 褐色砂質土（5.2Y5/6明、やや黄褐色かかる、0.5cm大の焼土ブロックを多く含む）
11. 灰褐色砂質土（0.5cm大の焼土ブロックを含む）
12. 明褐色砂質土（10.2Y5/8明、0.5～1cm大の焼土ブロックを含む）
13. 灰褐色砂質土
14. 褐色砂質土（10.5Y5/2暗、やや灰褐色かかる、1～3cm大の焼土ブロックを僅かに含む）

第67図　No11北 SK-03実測図（S＝1：30）

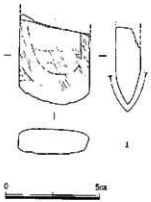


1. 暗褐色粘質土（0.1cm大の焼土ブロック、炭片を含む。0.1cm大の白色礫を僅かに含む）
2. 明褐色粘質土（0.1～0.5cm大の白礫を多かに含む。炭片を含む）
3. 黄褐色粘質土（0.2～1.5cm大の白色礫を少かに含む。炭片を含む）
4. にぶい褐色粘質土（白色礫、炭片を含まない）
5. 黄褐色粘質土（5Y5/6やや暗、0.1cm大の白礫を僅かに含む。炭片を含む）
6. 明褐色粘質土（白色土を含む。炭片を若かに含む）
7. にぶい黄褐色粘質土（0.1cm大の黄褐色ヤブロックを僅かに含む）
8. にぶい黄褐色粘質土（褐色土を僅かに含む。炭片を含む。混じり少ない）
9. 黄褐色粘質土
10. 赤褐色砂質土（0.5cm大の淡色ヤブロック、炭片を含む。1cm大の白色礫有）
11. 褐色砂質土
12. 明褐色土
13. 赤褐色砂質土
14. 褐色砂質土（0.1～0.3cm大の白色礫、炭片を含む）
15. にぶい黄褐色砂質土（0.1～0.2cm大の白色礫、赤色土粒、炭片を少な）
16. 褐色砂質土（0.3cm大の赤褐色礫、炭片を含む。褐色土を僅かに含む）
17. 褐色砂質土（10.5Y4/4暗色かかる。0.3cm大の黄褐色礫を含む）
18. 黄褐色砂質土（0.4cm大の白色土粒を多く含む）
19. 赤褐色粘質土（2cm大の赤色土ブロック、0.3cm大の白色礫、黄褐色礫、炭片を含む）
20. 灰褐色砂質土（0.2～0.5cm大の白色礫、黄褐色礫、0.5cm大の焼土ブロックを含む）
21. 黄褐色砂質土（0.5cm大の焼土を含む。炭片を含む。0.5cm大の白色礫有）
22. 灰褐色粘質土（0.2cm大の黒褐色礫、黄褐色を含む。炭片を僅かに含む。シルト質）
23. 黄褐色砂質土

第68図　No11北 SK-04・05実測図（S＝1：30）

No11北　SK-05（第６・68図、図版51）

調査区中央西端、丘陵頂部に占地する25号墳の南西裾部、標高34.09～35.45mに位置する。SK-04の東側を切る。土坑平面は不整な円形状である。規模は長径1.18m、短径1.14m、深さ1.36mを測る。断面は底面から40cm弱までは台形状となるがそこから上部は広がりをみせる。埋土は底面まで10層に分かれる。底面中央で小ピットが検出された。長径26cm、短径24cm、深さ36cmを測り、底部へ向けて幅を細める。遺物は何も出土しなかった。



第69図　No11北 SK-04出土遺物実測図

No11北　SK-06（第６・９・70図、図版3・51）

調査区北西側、丘陵上に位置する23号墳の西裾、標高32.28～33.44mに立地する。23号墳の主軸にほぼ平行し、位置的には23号墳に関連する可能性がある。平面は南側がややすぼまる不整な隅丸長方形を呈する。主軸は斜面の傾斜に対し直交でN－7°－Eをとる。上面は西側ほど流失を受け浅くなる。規模は、長軸3.36m、幅2.66m、深さ1.16cmを測る。断面は不整な椀状で、底面は凹凸がみられ、中央に径40cm程度の浅い凹みが認められる。西整際上面で長さ1.23mの石の並びを検出した。上層南側に細かな石片や、全体的に少し乱れがあるものの石の並びはほぼ土坑の主軸に平行し、厚さ15cm弱の20～50cm大の角礫を横位４列に並べている様子が窺える。また、石の西側が浅いテラス状に広がるが、遺構自体は本来第23層までであった可能性もあり、土層断面からも、石の並び等の性格を含め、遺構の性格は明らかにできなかった。遺物は何も出土しなかった。

No11北　SK-07（第６・９・71図、図版52）

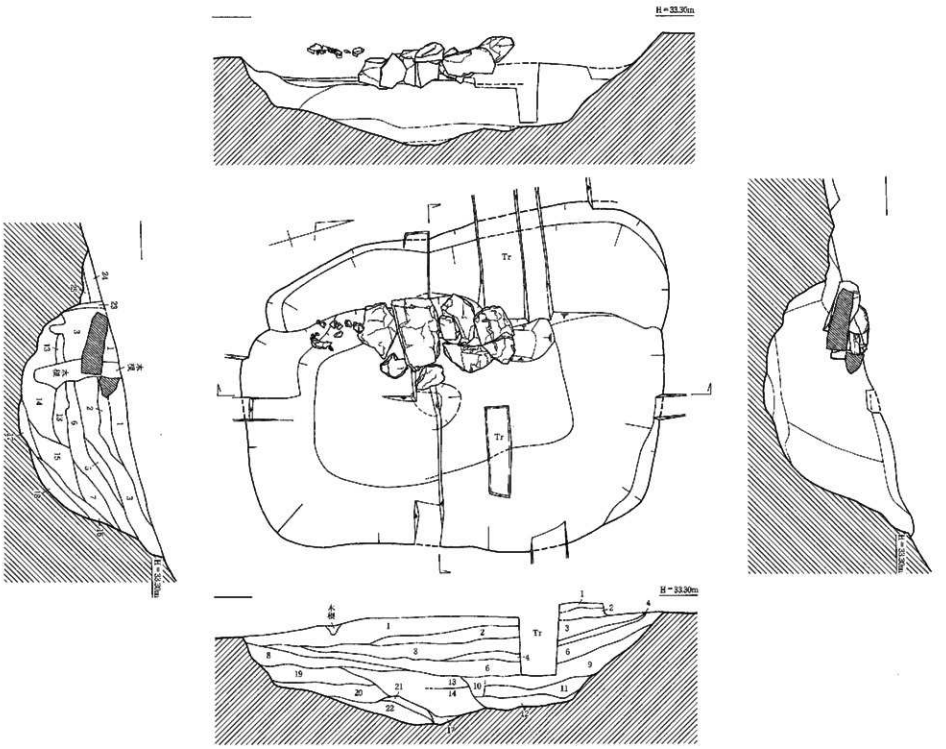
調査区北東側、丘陵上に位置する22号墳の北西裾、標高31.66～32.17mに立地する。22号墳の墳丘確認のトレンチによって検出された土坑である。平面は東側が広がる不整な楕円形を呈する。主軸は斜面の傾斜に対し直交でN-78°-Wをとる。トレンチが遺構の中心部を掘削したため土層断面でその規模や形を復元した。規模は、長軸1.13m、幅93cm、深さ51cmを測る。断面は不整な椀状で、底面の中央西寄りに深さ８cm程度の凹みが認められる。埋土は２層に分かれ、第９図から22号墳築造後、西側裾部がかなり堆積した後の遺構である。遺物は何も出土しなかった。

No11北　SK-08（第６・72図、図版52）

調査区南西寄りの、60号墳北東周溝部、標高30.40～31.98mに立地する。60号墳の周溝掘り下げ時に周溝斜面で検出した。平面は不整な楕円形を呈し、主軸は斜面の傾斜に対し直交方向のN-55°-Eをとる。上面および南西側を60号墳周溝で掘削されるが、規模は、長軸1.00m、幅90cm、深さ1.65mを測る。断面は丸味のある逆台形状で、底面の平面は隅丸方形状となり、中央東寄りに小ピットが検出された。長径21cm、短径19cm、深さ31cmを測る。埋土は10層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No11北　SK 09（第６・９・73図、図版53）

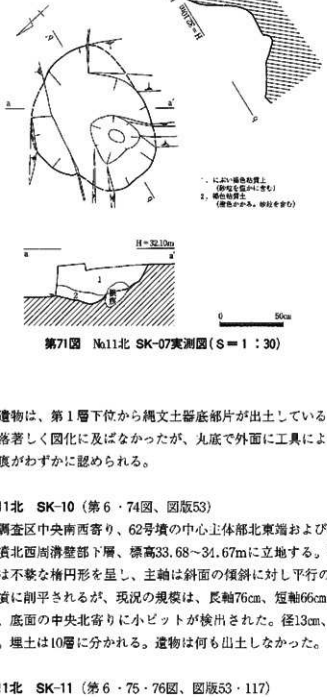
調査区北側、丘陵上に位置する24号墳の主体部南西端下層、標高33.59～35.24mに立地する。平面は不整な楕円形を呈し、主軸は斜面の傾斜に対し直交方向のN-48°-Wをとる。北側上面を24号墳の主体部で削平されるが、規模は、長軸1.08m、幅79cm、深さ1.58mを測る。断面は不整な逆台形状で、底面の平面は隅丸長方状となり、ほぼ中央に小ピットが検出された。長径20cm、短径18cm、深さ21cmを測る。埋土は５層に分かれる。



1. 暗褐色粘質土（炭化物を微かに含む）
2. 暗色粘質土
3. 明色粘質土（明色がかる）
4. にぶい赤色粘質土（赤る）
5. 暗色粘質土（白粒を微かに含む）
6. 灰褐色粘質土（白粒を微かに含む、炭化物多含む）
7. にぶい赤褐色粘質土（白粒を微かに含む）
8. 暗色粘質土（黄褐色がかる、0.1cm以下の砂粒を含む）
9. にぶい赤褐色粘質土（0.1cm大の砂多量に含む）
10. にぶい赤褐色粘質土（黒褐色がかる、暗褐ブロックを微かに含む、焼る）
11. 暗色粘質シルト（白色が小る）
12. 暗色粘質粘土（白色ブロックを含む）
13. 明色粘質土（微色がかる、砂粒を微かに含む）
14. にぶい赤褐色粘質粘土（1cm大の白色ブロックを微かに含む）
15. 暗色粘質土（赤色がかる、砂粒を微かに含む）
16. にぶい赤褐色粘質土（黄色がかる、砂粒を微かに含む）
17. 暗色粘質土（白砂を微かに含む）
18. にぶい褐色粘質土（白色がかる）
19. 明色粘質シルト（2cm大の褐色ブロックを含む）
20. にぶい赤褐色粘質シルト（褐色ブロックを含む）
21. にぶい赤褐色粘質土（褐色ブロックを微かに含む、焼る、円い）
22. 明色粘質粘質土（白色ブロックを含む）
23. 白褐色粘質土（白砂を多かに含む）
24. 暗色粘質土（白砂を微かに含む）
25. にぶい褐色粘質土

0 2m

第70図　№11北 SK-06実測図（S＝1：30）



第71図　No.11北 SK-07実測図（S＝1：30）

1．褐色粘質土
2．褐色粘質土（1よりやや明）
3．暗褐色粘質土（あまりしまっていない）
4．暗褐色粘質土（3より明）
5．暗褐色粘質土
（4より明。0.5cm大の地山ブロックを僅かに含む）
6．黒褐色粘質土
（5より明。0.5cm大の地山ブロックを僅かに含む）
7．暗黄色粘質土（5よりやや暗。0.5cm大の地山ブロックを僅かに含む）
8．暗褐色粘質土（6よりやや暗。0.5cm大の地山ブロックを僅かに含む。やや砂質土がある）
9．明褐色粘質土
10．明褐色粘質土

第72図　No.11北 SK-08実測図（S＝1：30）

遺物は、第1層下位から縄文土器底部片が出土している。剥落著しく図化に及ばなかったが、丸底で外面に工具による擦痕がわずかに認められる。

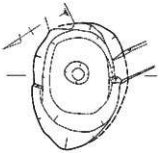
No.11北　SK-10（第6・74図、図版53）

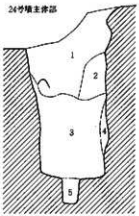
調査区中央南西寄り、62号墳の中心主体部北東端および63号墳北西周溝整部下層、標高33.68～34.67mに立地する。平面は不整な楕円形を呈し、主軸は斜面の傾斜に対し平行のN-40°-Wをとる。上面は、62号墳および63号墳に削平されるが、現況の規模は、長軸76cm、短軸66cm、深さ99cmを測る。断面は丸味のある逆台形で、底面の中央北寄りに小ピットが検出された。径13cm、深さ29cmを測り、底部へ向けて尖り状となる。埋土は10層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.11北　SK-11（第6・75・76図、図版53・117）

調査区南西寄り、62号墳の中心主体部下層、標高34.24～34.48mに立地する。平面は長楕円形を呈し、主軸は斜面の傾斜に対し直交するN-62°-Eをとる。上面は62号墳中心主体部に削平されているとみられ、規模は、長軸84cm、短軸35cm、深さ24cmを測る。断面は丸味のある不整な逆台形状で、埋土は3層に分かれる。

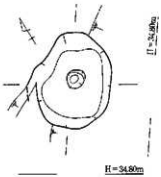
遺物は、上坑北西側で低脚杯（1）が第1層から出土している。脚部は短くハ字状に開く。杯部内外面ヘラ磨きする。

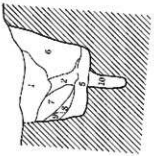


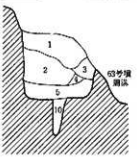


1. 黄褐色粘質土（A黄色がかる。にぶい褐色土ブロックを含む。炭片を僅かに含む）
2. 淡褐色粘質土（1より明色かかる。0.5cm大の赤褐色ブロック、炭片を含む）
3. 暗灰黄色砂質土（黄褐色土ブロックを含む。炭片を僅かに含む。よくほぐれた土）
4. 灰白色粘質土層（3cm大の黄褐色土ブロックを含む）
5. 暗灰褐色砂質土（黄褐色粘質土ブロック、炭褐色粘質土ブロックを含む）

第73図　No.11北 SK-09実測図（S＝1：30）

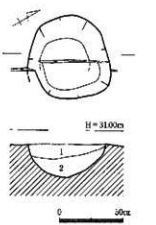






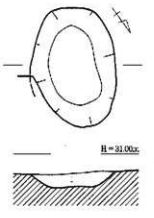
1. オリーブ褐色粘質土（0.5～1.5cm大の地山ブロックを多く含む。炭片を含む）
2. オリーブ褐色粘質土（1よりやや明。やや黄色がかる。0.5cm大の地山ブロック、炭片を含む）
3. オレーブ黒色粘質土（1よりやや暗。3.5～1cm大の炭片ブロック、炭片を含む）
4. オリーブ褐色粘質土（2よりやや明。2.5cm大の地山ブロックを僅に含む。
5. 暗灰黄褐色粘質土（炭片を含む。底に炭層堆積）
6. オリーブ褐色粘質土（1・2よりやや暗。0.5～1cm大の地山ブロック、炭片を含む）
7. オリーブ褐色砂質土（1よりやや明。0.5cm大の地山ブロック、炭片を含む）
8. 褐色砂質土（ややオリーブ褐色かかる。0.3cm大の炭片ブロックを僅に含む）
9. 褐色砂質土（ややオリーブ褐色がかる。8と同様。ブロックを含まない）
10. 暗灰黄褐色粘質土（炭片を含む。底に炭層堆積）

第74図　No.11北 SK 10実測図（S＝1：30）



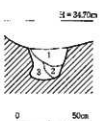
1. 褐色粘質土
2. 褐色粘質土
（1～3cm大の炭片ブロックを多く含む）

第77図　No.11北 SK 12実測図（S＝1：30）



1. 黄色粘質土
0.5～1.5cm大の地山ブロックを含む。

第78図　No.11北 SK-13実測図（S＝1：30）



1. 暗褐色粘質土
（0.5cm大の地山ブロックを含む）
2. 暗黄褐色砂質土（1より暗）
3. 暗褐色粘質土（1より明。2よりやや明。0.5～1cm大の地山ブロックを含む）

第75図　No.11北 SK-11実測図（S＝1：30）

第76図　No.11北 SK-11出土遺物実測図

No.11北　SK-12（第６・77図、図版54）

調査区中央やや南西寄り、59号墳の墳丘下層、標高30.63～30.89mに位置する。北東隣にSK-13、SD-02が配置する。平面は不整円形を呈し、規模は、長軸66cm、短軸63cm、深さ26cmを測る。断面は椀状で、埋土は２層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.11北　SK-13（第６・10・78図、図版54）

調査区中央やや南西寄り、59号墳の墳丘下層、標高30.73～30.87mに位置する。南隣にSK-12、東隣にSD-02が配置する。平面は楕円形を呈し、主軸は斜面の傾斜に対し直交するN-21°-Eをとる。規模は、長軸97cm、短軸69cm、深さ14cmを測る。断面は皿状で、埋土は１層である。第10図から、59号墳築造前の遺構である。遺物は何も出土しなかった。

No.11北　SK-14（第６・10・79・80図、図版54・117）

調査区南西側、59号墳の南東墳丘下層、標高26.87～28.67mに位置する。59号墳墳丘断割り時に検出した。平面は不整円形を呈し、規模は南東側が不明瞭なものの、現況で長軸1.15m、短軸88cm、深さ1.8mを測る。断面は逆台形で、底面中央小ピットが検出された。径12cm、深さ27cmを測り、底部へ向けて幅を細める。埋土は10層に分かれる。第10図から、59号墳築造前の遺構である。

遺物は、床面から25cm程上位の第５層中で、縄文土器底部（１）を出土した。平底で、内外面丁寧にナデ仕上げする。厚部に輪積みの接合痕が観察される。

No.11北　SK-15（第６・81図、図版55）

調査区北東、91号墳の南東下位、SD-03の下層、標高25.41～25.92mに位置する。平面は北西側が広がるやや不整な長楕円形で、主軸は斜面の傾斜に対し直交するN-50°-Eをとる。規模は、長軸1.18m、短軸58cm、深さ51cmを測る。断面は不整な椀状で、北西側がテラス状の段をとる。埋土は２層に分かれる。第10図から、59号墳築造前の遺構である。遺物は何も出土しなかった。

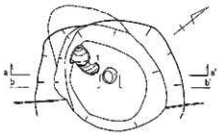
No.11北　SD-02（第６・10・82図、図版55）

調査区中央やや南西寄り、59号墳の墳丘下層、標高30.65～30.86mに位置する。西隣にSK-12、SK-13が配置する。主軸は斜面の傾斜に対し直交方向のN-15°-Eをとる。北側に削平および抛り込まれが認められるが、規模は現況で、長さ97cm、幅69cm、深さ21cmを測る。横断面は椀状で、埋土は３層に分かれる。第10図から、59号墳築造前の遺構である。遺物は何も出土しなかった。

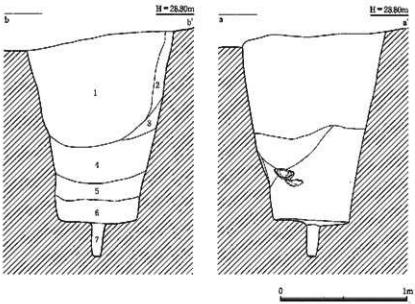
No.11北　SD-03（第６・83・84図、図版３・55・117）

調査区北東、91号墳の南東下位、標高25.52～26.35mの斜面に位置する。西側底部下層にSK-15が配置する。南西側は崖斜面のため不明となり、北西側が平面弧状に遺存する。規模は、長さ4.5m、幅1.26m、深さ83cmを測る。横断面は不整な椀状で、埋土は５層に分かれる。底面は東から西へかけて幅広となり、底面の高さもわずかに低く傾斜する。形状から古墳の周溝の可能性を有するが、南西側に盛土状の層位は認められなかった。

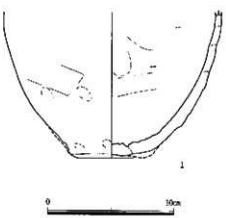
遺物は、埋土上位で、土師器杯（１）、鍋（２）、底部（３）を出土している。（１）は復元口径13.8cm、器高6.7cm、平底から直線的に開く器形である。（２）は焼成甘く本来は瓦質とみられ、（３）も（２）と同様に鍋の底部とみられる。（２）は外面まっ黒に煤が付着し、口縁部の屈曲は甘く外方へ立ち上がる。口縁端面はカットされ凹面状に若干歪む。



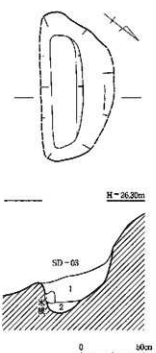
1．にぶい赤褐色粘質土
（0.5～1.5cm大の遺山ブロック、炭片を僅かに含む）
2．黒褐粘質土（やや黒味強かる）
3．にぶい黄褐色粘質土
（ところどころ明るい、0.5～1cm大の遺山ブロックを含む）
4．暗褐色粘質土（0.5～2cm大の遺山ブロックを含む）
5．にぶい黄褐色粘質土
（ところどころ明るい、0.5～2cm大の遺山ブロックを含む）
6．黒褐色粘質土（0.5～4cm大の遺山ブロックを含む）
7．灰褐色粘質土（砂質気味かる）



第79図　No.11北 SK-14実測図（S＝1：30）

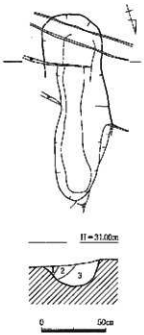


第80図　No.11北 SK-14出土遺物実測図

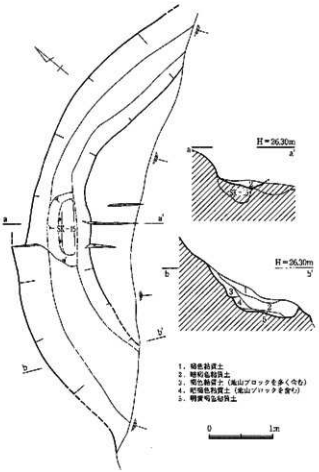


1．褐色粘質土（遺山ブロックを僅かに含む）
2．暗褐色粘質土
（遺山ブロックを含む、あまりしまっていない）

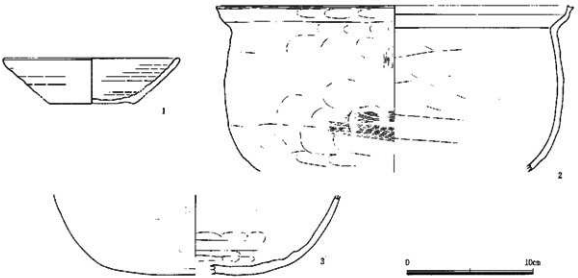
第81図　No.11北 SK-15実測図（S＝1：30）



第82図　№11北 SD-02実測図
（S＝1：30）



第83図　№11北 SD-03実測図（S＝1：60）



第84図　№11北 SD-03出土遺物実測図

第４節　横杭No.11南区の調査

１．横杭10・11、36、80～87号墳の調査

横杭10号墳（第４・７・85・89図、図版４・56・57）

〔位置と現状〕

横杭10号墳は、調査区東部の尾根稜線上、標高26.45～28.10mに立地する。北西に80号墳、北東に81号墳、南東に82号墳が隣接する。このうち80号墳と81号墳については一部重複が認められる。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は14.4mである。調査前の観察では、調査区東の尾根先端部から分布する古墳状の高まりが数部への尾根斜面にも続き、そのうちの一つの高まりとして容易に認識できた。斜面高位側に弧状の凹みをもち、遺存状況も良好に思われ、隣接する高まりと切り合い関係が予想された。

〔墳丘〕

表土下10cm弱で墳丘面を検出した。古墳の北西側周溝は80号墳周溝に大きく掘削を受け、10号墳は81号墳の南西裾部を切る関係にある。墳頂部北側で標高28.10mを測り、主体部の遺存状況から上部はかなり流失していることが判明した。墳形は円墳で、墳丘規模は、北東周溝底から南西裾部間で10.4mを測り、北東側周溝の径から径11mが復元される。墳丘の高さは南裾から2.1mを測る。

墳丘は、地山成形と、北東側斜面高位に周溝を大きく掘削し、土を南西低位側へ盛ることで造られている。盛土は、墳頂部周辺で最大34cmが遺存しており、旧地表面は斜面低位南西側で検出された。現状の墳丘平坦面は古墳中央よりかなり北東寄りとなる。

〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳丘平坦面のやや南西寄りで検出した。盛土上からわずかに地山を掘り込んでいる。当初の予想より検出が困難で、上部をグリッド状に掘り窪め、補助トレンチによる層序確認によって主体部を検出した。主体部の主軸は斜面の傾斜に直交するN-54°-Wをとる。残念ながら明確な墓壙の両端は検出できず、推定で墓壙平面は隅丸長方形とみられる。現況の規模は、遺存長1.83m、幅1.45m、深さ19cmを測る。土層の断面観察から木棺痕跡を確認するにいたらず、埋葬形態は不明である。

主体部内をはじめ、墳丘や周溝内で遺物は出土しなかった。

横杭11号墳（第４・７・85・90～92図、図版４・58・59・118）

〔位置と現状〕

横杭11号墳は、調査区北西端の北東へ下る斜面、標高22.26～25.63mに立地する。南に87号墳、南東に36号墳が配置する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は10.3mである。調査前の観察では、調査区北東の急斜面ながら、弧状に凹む溝とわずかに古墳状の高まりが認められた。遺存状況も北東側の斜面低位は崩れが予想されるものの比較的良好に思われた。斜面に沿って設定したトレンチによって古墳と確認した。

〔墳丘〕

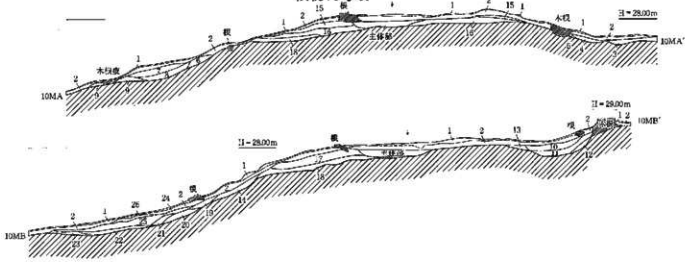
表土下15cm弱で墳丘面を検出した。西側周溝近くで標高25.63mを測り、墳丘平坦面は当初から斜面高位の西寄りに設定されていたとみられる。墳形はやや南北に広い円墳で、墳丘規模は、南周溝底から北裾間で10.3m、西周溝底から東裾間で8.8mを測る。南西側周溝から径10mが復元される。墳丘の高さは北裾から3.37mを測る。

墳丘は、地山成形と、南西側斜面高位に周溝を掘削し、土を北東低位側へ盛ることで造られている。盛土は、主体部よりやや東側周辺で最大45cmが遺存しており、旧地表面は主体部以北東で検出された。

〔埋葬施設〕

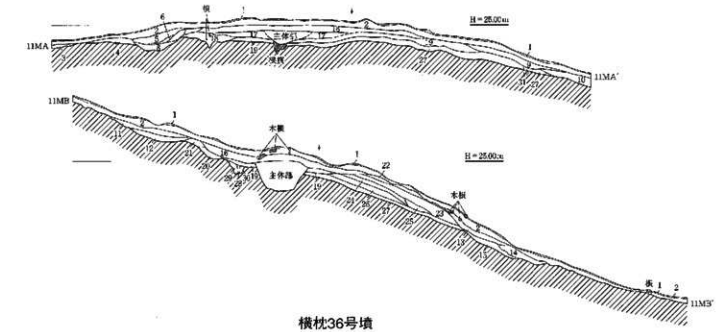
埋葬施設は、古墳中央部南西寄り、墳丘平坦面の北東側で検出した。盛土上から地山を深く掘り込んでいる。主体部の上層には厚さ18cm程度の封土が広い範囲で認められた。墓壙の主軸は斜面の傾斜に直

横枕10号墳



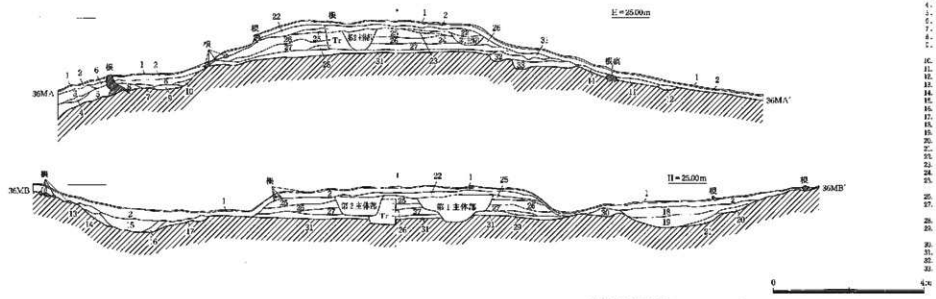
1. 表土
2. にぶい黄橙色粘質土（赤土）
3. 暗色粘質土（やや赤色がかる。黒色）
4. にぶい黄色粘質土（暗色がかる。黒色）
5. 赤褐色粘質土（黒色）
6. 明赤褐色シルト
7. 明赤褐色粘質土（やや黒色がかる。黒色）
8. 明褐色粘質土（明赤褐色粘質ブロックを微かに含む）
9. 暗色粘質土（明色がかる。褐色）
10. 褐色粘質土（やや黒色がかる。黒色）
11. 明褐色粘質土（やや黒色がかる。黒色）
12. 暗色粘質土
13. 褐色粘質土（黒色）
14. 褐色粘質土（黒色）
15. 明赤褐色粘質土（明色がかる。黒色）
16. 褐色粘質土（やや黒色がかる。黒色）
17. 褐色粘質土（やや黒色がかる。黒色）
18. 暗褐色粘質土（黒色がかる。黒色。粘質土）
19. にぶい黄褐色砂質土
20. 暗色粘質土（やや黒褐色がかる）
21. にぶい褐色粘質土（20に加えるもやや明）
22. 黄褐色粘質土（やや黒褐色がかる）
23. 黒褐色粘質土（やや黒褐色がかる。0.3～0.5m大の黒褐ブロックを含む）
24. にぶい褐色粘質土（23とうやや明）
25. にぶい褐色粘質土
26. 褐色粘質土

横枕11号墳



1. 表土
2. にぶい黄褐色粘質土（赤土）
3. にぶい黄褐色粘質土（3とうやや明）
4. にぶい黄褐色粘質土（3とうやや明。やや黄味がかる）
5. にぶい黄褐色粘質土（4とうほ）
6. にぶい黄褐色粘質土（5とうやや明）
7. にぶい黄褐色粘質土（5とうやや明）
8. にぶい黄褐色粘質土（5～5.7とやや明。0.5～3cm大の暗褐ブロックを含む）
9. にぶい黄褐色粘質土（5.2とほ。15とうやや明）
10. にぶい黄褐色粘質土（5.2とほ）
11. にぶい黄褐色粘質土（5.2とうやや明。0.5～2cm大の暗褐ブロックを含む）
12. にぶい黄褐色粘質土（5.4とほ。0.5～1cm大の暗褐ブロックを微かに含む）
13. にぶい黄褐色粘質土（5.8とほ。1cm大の黒褐ブロックを含む）
14. にぶい黄褐色粘質土（5.8とうやや明）
15. 暗色粘質土（1～2cm大の黒褐ブロックを微かに含む）
16. にぶい黄褐色粘質土（7.8とほ。7とうやや明。1～5cm大の黒褐ブロックを含む）
17. にぶい黄褐色粘質土（1cm大の黒褐色粘質ブロックを含む）
18. にぶい黄褐色粘質土（7とほ。5とうやや明）
19. にぶい黄褐色粘質土（7.8とうやや明で粘色がかる。4cm大の黒褐色粘質土）
20. にぶい黄褐色粘質土（5.6～5.8とうやや明。1～4cm大の黒褐ブロックを含む）
21. にぶい黄褐色粘質土（5とうやや明。5とほとうやや明。1～7cm大の黒褐ブロックを含む）
22. にぶい黄褐色粘質土
23. にぶい黄褐色粘質土（5.8とうやや明で黒褐色がかる。0.5cm大の黒色粘質ブロックを微かに含む）
24. にぶい黄褐色粘質土（5.8cm大の明黄褐色土ブロックを微かに含む。3cm大の黒色粘質ブロック用）
25. にぶい黄褐色粘質土（1～5cm大の黒色粘質ブロックを含む）
26. 灰黄褐色粘質土（黒色粘質ブロックを微かに含む）
27. 暗黒色粘質土（やや赤褐色がかる。粘質土）
28. にぶい黄褐色粘質土（0.5～1cm大の黒褐ブロックを含む）
29. 褐色粘質土（やや黄味色がかる）
30. にぶい黄褐色粘質土（5.8とうやや明。0.5～2cm大の暗褐ブロックを微かに含む）
31. にぶい黄褐色粘質土（5.8とうほ）

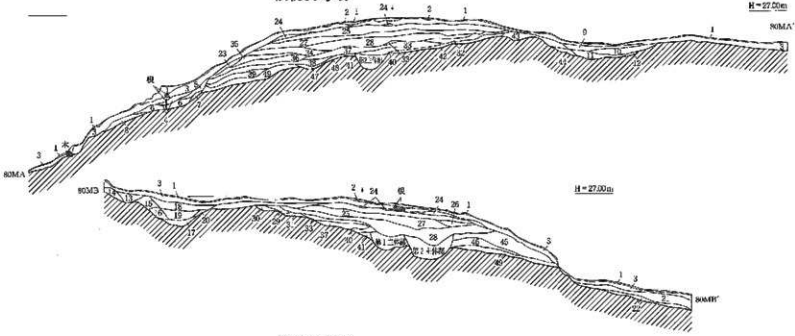
横枕36号墳



1. 表土
2. にぶい黄褐色粘質土（赤土）
3. にぶい黄褐色粘質土
4. にぶい黄褐色粘質土（3とうやや明。暗褐色ブロックを微かに含む）
5. にぶい黄褐色粘質土（暗褐色土ブロック。黒褐色ブロックを含む）
6. 暗褐色粘質土（にぶい黄褐色粘質土ブロックを微かに含む）
7. にぶい黄褐色粘質土（3とうやや明。暗褐色ブロックを多かに含む）
8. にぶい黄褐色粘質土（7とうやや明）
9. にぶい黄褐色粘質土
（7～10とうやや明。黒褐色土ブロックを微かに含む）
10. にぶい黄褐色粘質土（暗褐色土ブロックを微かに含む）
11. にぶい黄褐色粘質土（3とうほ。暗褐色土ブロックを含む）
12. にぶい黄褐色粘質土（3とうほ。白褐色土ブロックを含む）
13. 褐色粘質土
14. 褐色粘質土（3とうほ）
15. にぶい黄褐色粘質土（3～5とうほ）
16. にぶい黄褐色粘質土（3～5とうほ。5とうやや明）
17. にぶい黄褐色粘質土（3とうやや明）
18. 暗褐色粘質土
19. にぶい黄褐色粘質土（3とうほ）
20. にぶい黄褐色粘質土（3～5とうほ）
21. にぶい黄褐色粘質土（5とうほ。5とうやや明）
22. にぶい黄褐色粘質土（5とうほ。暗色土ブロックを含む）
23. 黄褐色粘質土（黒灰ブロックを多く含む）
24. にぶい黄褐色粘質土（7～8とうやや明。暗色土ブロックを含む）
25. にぶい黄褐色粘質土
（7とうやや明。5とうやや明。暗色土ブロックを含む）
26. にぶい黄褐色粘質土（5とうほ。黒灰色土ブロックの含み少）
27. にぶい黄褐色粘質土
（明褐灰色土ブロック。灰黄褐色土ブロック。炭片を含む）
28. にぶい黄褐色粘質土（5とうほ。暗褐色がかる）
29. にぶい黄褐色粘質土
（黒褐色がかる。暗褐色土を微かに含む。炭片を含む）
30. 褐色粘質土（5とうやや暗）
31. 明褐色粘質土（にぶい黄褐色ブロックを含む。粘質土）
32. 褐色土
33. 褐色粘質土（5とうやや暗）

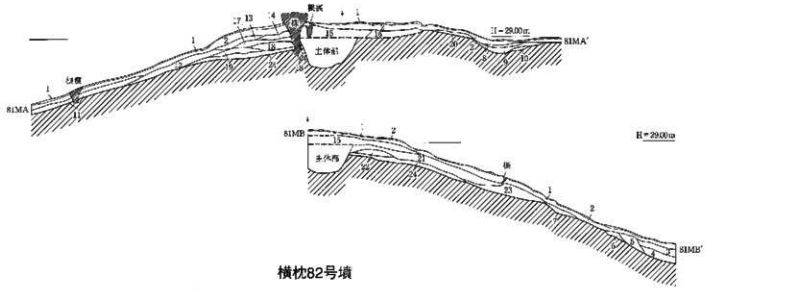
第85図　No11南 横枕10・11・36号墳墳丘断面図（S＝1：100）

横枕80号墳



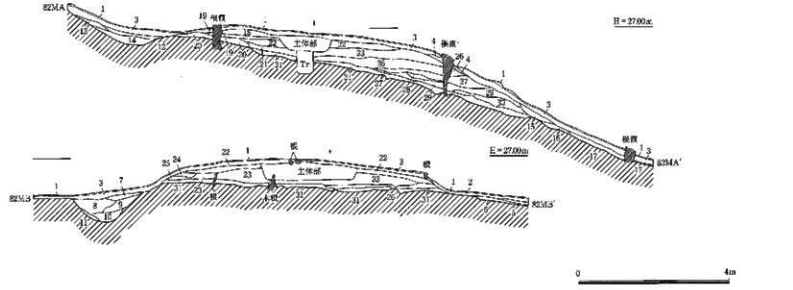
1. 耕作土
2. 均質褐色粘土
3. 褐色砂質土（黒土）
4. 褐色砂質土（明るい褐）
5. 褐色砂質土（やや明るい褐）
6. にぶい黄褐色粘質土（明るい褐）
7. にぶい黄褐色粘質土（明るい褐）
8. にぶい黄褐色粘質土（やや明るい褐）
9. 明褐色粘土
10. にぶい褐色粘質土
11. 黄褐色砂質土（やや褐色かかる）
12. にぶい褐色粘質土
13. 褐色砂質土（黒色）
14. 褐色砂質土（明るかかる、黒色）
15. 褐色砂質土（やや明るかかる、黒色）
16. 褐色砂質土（明るかかる、黒色）
17. 褐色砂質土（やや黒色かかる、黒色）
18. 褐色砂質土（明るかかる、黒色）
19. 褐色砂質土（やや黒色かかる、黒色）
20. 赤褐色砂質土（やや黒色かかる、黒色）
21. 褐色砂質土
22. 赤褐色砂質土
23. 褐色砂質土
24. 褐色砂質土
25. 褐色砂質土（黒色かかる、やや黒色）
26. 褐色砂質土（明るいやや褐、明赤褐色ブロック、黄褐色土ブロックを含む）
27. 褐色砂質土（黒っぽくやや明、赤褐色土ブロック、灰褐色土ブロック、黄褐色土ブロックを含む）
28. 褐色砂質土（黒っぽ・ぼるり明、明褐色ブロック、暗褐色ブロック、赤褐色土ブロックを含む）
29. 褐色砂質土（明るいやや明、暗褐色ブロックを含む）
30. 褐色砂質土
31. 褐色砂質土
32. 褐色砂質土（明るい褐、赤褐色土ブロック、黄色土ブロックを少に含む）
33. 褐色砂質土（明るい明、暗褐色土ブロックを含む）
34. にぶい褐色粘質土（ぼるりやや明、明褐色ブロック、赤褐色土ブロックを多く含む）
35. にぶい褐色粘質土（明るいやや明、明褐色ブロックを部分に含む）
36. にぶい褐色粘質土（明褐色土ブロック、暗褐色土ブロックを多く含む）
37. にぶい褐色粘質土
38. にぶい黄褐色粘質土
39. にぶい褐色粘質土（明・明・明るい明）
40. 黒褐色粘質土（にぶい黒褐色ブロックを含む）
41. にぶい褐色粘質土（褐色ブロックを部分に含む）
42. にぶい褐色粘質土
43. 褐色砂質土（明るいやや褐色かかる）
44. にぶい黄褐色粘質土（褐色ブロックを部分に含む）
45. 褐色砂質土
46. 褐色砂質土（明るいやや明、明褐色ブロック、明褐色土ブロックを多く含む）
47. にぶい黄褐色粘質土（明・明るいやや明、暗黄褐色ブロック、明褐色ブロックを含む）
48. にぶい褐色粘質土（明るいやや明、明黄褐色土ブロックを部分に含む）
49. 褐色砂質土（黒褐色）

横枕81号墳



1. 表土
2. 褐色砂質土（明赤褐色砂質土ブロックを含む。黒土、表土）
3. 褐色砂質土（明色かかる、褐色）
4. 褐色砂質土（やや明色かかる、褐色）
5. 褐色砂質土（やや黒色かかる、褐色）
6. 褐色砂質土（褐色）
7. 褐色砂質土（やや黒色かかる、褐色）
8. 褐色砂質土（まばら明、0.5cm大の粘土ブロックを含む）
9. 褐色砂質土（まばら明、明褐色かかる、0.5cm大の粘土ブロックを部分に含む）
10. にぶい褐色粘質土（褐褐色土ブロック部分に含む）
11. 褐色砂質土（やや明るかかる）
12. 褐色砂質土（明褐色土を含む）
13. にぶい褐色粘質土（やや褐色かかる、1cm大の炭化物含む）
14. 褐色砂質土（明赤褐色土、にぶい褐色粘質土を含む、6cm大の炭化物含）
15. 褐色砂質土
16. 褐色砂質土（明よりやや明褐色かかる、0.5cm大の明赤褐色土ブロック、褐色ブロック含む）
17. にぶい褐色粘質土（ぼるりやや明、にぶい黄褐色土を含む）
18. 褐色砂質土（褐褐色土を含む、灰褐色土を部分に含む）
19. 褐色砂質土（ぼるりやや明、灰色土を含む）
20. にぶい褐色粘質土（0.5cm大の炭化物含む、褐色）
21. 褐色砂質土（明色かかる、褐色）
22. 褐色砂質土（明色かかる、褐色）
23. にぶい褐色粘質土（明色かかる、褐色）
24. 褐色砂質土（オリーブ色かかる、褐色）
25. 褐色砂質土（黒色かかる）
26. 褐色砂質土（褐色）
27. 褐色砂質土（やや黒色かかる）
28. 褐色砂質土
29. 褐色砂質土（褐色かかる、褐色）
30. 褐色砂質土（明色かかる、褐色）
31. 褐色砂質土（0.5cm大の焼土粒を部分に含む）
32. 褐色砂質土（明赤褐色粘質土ブロックを部分に含む）
33. 褐色砂質土（赤褐色粘質土ブロックを含む）
34. 褐色砂質土（褐色）
35. 褐色砂質土（褐色）
36. 褐色砂質土（やや赤褐色の強い明赤褐色粘質土ブロックを含む）
37. 褐色砂質土
38. 褐色砂質土（やや黒色かかる、褐色）
39. 褐色砂質土（褐色）
40. 褐色砂質土（褐色）
41. 褐色砂質土（褐色かかる、暗黒…）

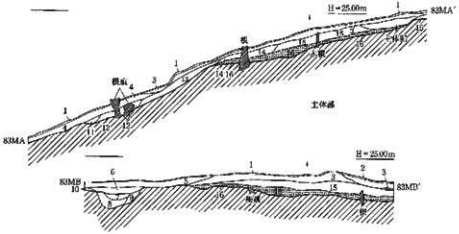
横枕82号墳



1. 表土
2. 赤褐色粘質土（赤色かかる、褐色）
3. 赤褐色粘質土（褐色）
4. 明赤褐色粘質土（褐色）
5. にぶい赤褐色粘質土（やや黒色かかる、褐色）
6. にぶい赤褐色粘質土（褐色）
7. 赤褐色粘質土（褐色）
8. 褐色砂質土（黒色・明色かかる、褐色）
9. 明褐色粘質土（褐色）
10. 明赤褐色粘質土（褐色かかる、褐色）
11. 褐赤褐色粘質土（褐色）
12. 赤褐色粘質土（褐色）
13. にぶい赤褐色粘質土（褐色）
14. にぶい赤褐色粘質土（黒色かかる、褐色）
15. 褐色砂質土（オリーブ色かかる、褐色）
16. 褐色砂質土（黒色かかる）
17. 褐色砂質土（褐色）
18. 明赤褐色粘質土（やや黒色かかる）
19. 褐色砂質土
20. 明赤褐色粘質土（褐色かかる、褐色）
21. 赤褐色粘質土（0.5cm大の焼土粒を部分に含む）
22. 赤褐色粘質土（明赤褐色粘質土ブロックを部分に含む）
23. 褐色砂質土（赤褐色粘質土ブロックを含む）
24. 明赤褐色粘質土（褐色）
25. 褐色砂質土（褐色）
26. 明赤褐色粘質土（やや赤褐色の強い明赤褐色粘質土ブロックを含む）
27. 赤褐色粘質土
28. 褐色砂質土（やや黒色かかる、褐色）
29. 褐色砂質土（褐色）
30. 褐色砂質土（褐色）
31. 褐褐色粘質土（褐色かかる、暗黒…）

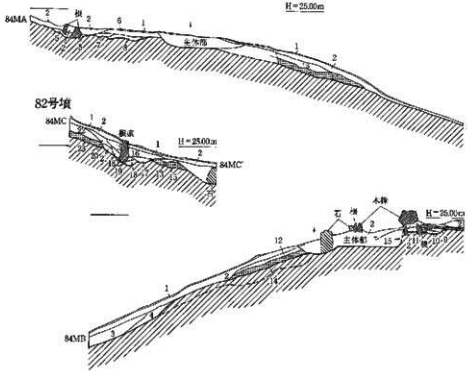
第86図　№11南 横枕80～82号墳墳丘断面図（S＝1：100）

横枕83号墳



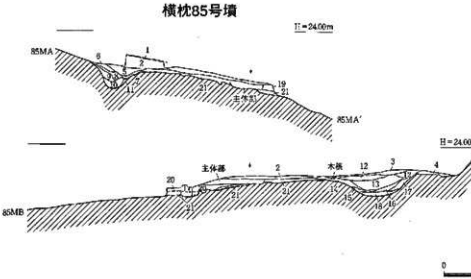
1. 耕土
2. にぶい赤色粘質土（1～3cm大の礫山砂を含む。炭上）
3. 赤褐色粘質土（1～3cm大の礫山砂を含む。焼る）
4. にぶい赤褐色粘質土（中や黒色少中る。0.5cm大の礫山砂を含む）
5. にぶい赤褐色粘質土（1cm以下の礫山砂を含む。炭上）
6. にぶい赤褐色粘質土（0.5～1cm大の礫山砂を含む）
7. にぶい赤褐色粘質土（中や黒色少中る。0.5cm大の礫山砂を含む）
8. 暗褐色粘質土（黒色少中る。1cm以下の礫山砂を含む）
9. にぶい赤褐色粘質土（赤色少中る。1cm以下の礫山砂を微量に含む）
10. にぶい赤褐色粘質土
11. にぶい赤褐色粘質土（褐色少中る）
12. 褐赤褐色粘質土（中や黒色少中る。5cm大の礫山砂を含む。焼る）
13. にぶい赤褐色粘質土（褐色少中る。0.5～5cm大の礫山砂を含む）
14. にぶい赤褐色粘質土（1～5cm大の礫山砂を含む。焼る）
15. 褐色粘質土（1～5cm大の礫山砂、赤褐色粘質土ブロックを含む）
16. 暗褐色粘質土（黒色少中る。炭上）

横枕84号墳



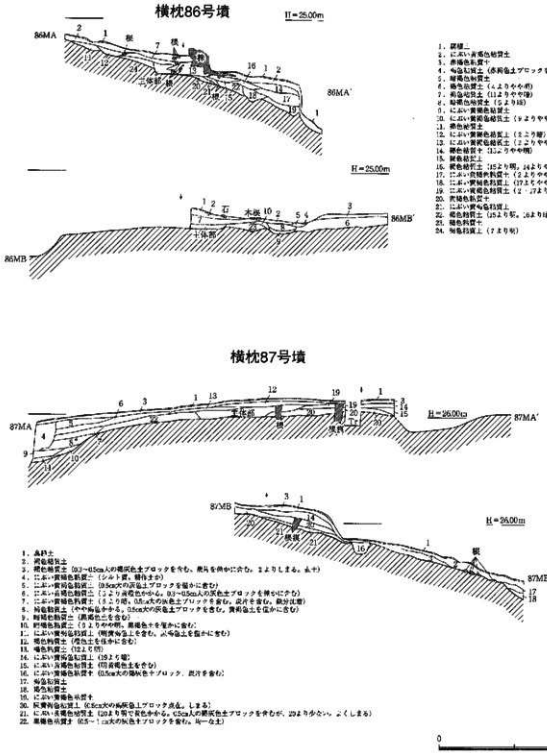
1. 耕土
2. 褐色粘質土（焼る）
3. 褐色粘質土（焼る）
4. 褐赤色粘質土
5. 褐色粘質土（中や黒色少中る。焼る）
6. 褐色粘質土（中や黒色少中る。焼る）
7. にぶい褐色粘質土（0.5%少中る。焼る）
8. 赤褐色粘質土（焼る中る。1cm以下の礫山砂を含む。焼る）
9. 赤褐色粘質土（1cm以下の礫山砂を少中やに含む）
10. 赤褐色粘質土（1cm以下の礫山砂を少中やに含む）
11. にぶい赤褐色粘質土（赤褐色粘質土を含む）
12. 褐色粘質土（1～5cm大の礫山砂を含む）
13. 褐色粘質土（中や黒色少中る。焼る）
14. 褐赤褐色粘質土（中や黒色少中る。炭上、？）
15. にぶい赤褐色粘質土（0.5～1cm大の礫山砂を含む）
16. 褐色粘質土（0.5～2cm大の礫山砂を微量に含む。焼る）
17. 褐赤褐色粘質土（0.5～2cm大の礫山砂を微量に含む。焼る）
18. にぶい赤褐色粘質土（焼る）
19. 明赤褐色粘質土（焼る）
20. 明赤褐色粘質土（焼る）
21. 赤褐色粘質土（中や黒色少中る。焼る）
22. 明赤褐色粘質土（焼る）
23. 暗赤褐色粘質土（黒色少中る。焼る。炭上）

横枕85号墳

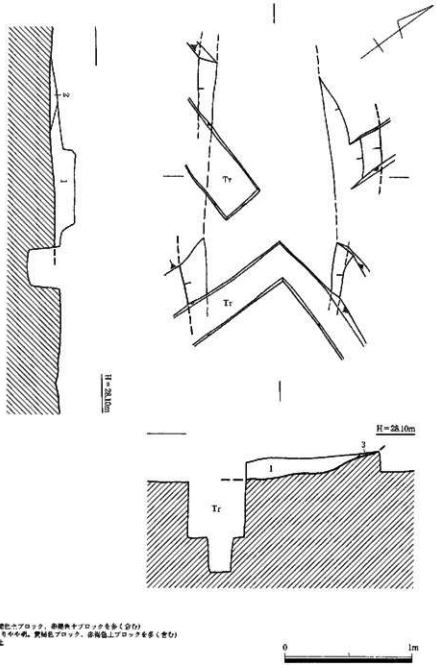


1. 表土
2. にぶい黄褐色粘質土（1よりやや明）
3. にぶい黄褐色粘質土（炭上）
4. 褐色粘質土
5. にぶい黄褐色粘質土（2よりやや明）
6. 黄褐色粘質土
7. にぶい黄褐色粘質土（2よりやや明。ごくやや明）
8. 褐色粘質土
9. 褐色粘質土（8よりやや明）
10. 黄褐色粘質土（9よりやや明）
11. にぶい黄褐色粘質土（5・7よりやや暗）
12. 褐色粘質土（4よりやや明）
13. にぶい黄褐色粘質土
14. にぶい黄褐色粘質土（13よりやや明）
15. にぶい黄褐色粘質土（14よりやや明）
16. にぶい黄褐色粘質土（15よりやや明）
17. にぶい黄褐色粘質土（16より暗）
18. 黄褐色粘質土
19. にぶい黄褐色粘質土（2よりやや明）
20. にぶい黄褐色粘質土（19よりやや明）
21. にぶい黄褐色粘質土（2より暗）

第87図　No11南 横枕83～85号墳墳丘断面図（S＝1：100）



第88図　Na11南 横枕86・87号墳墳丘断面図（S＝1：100）

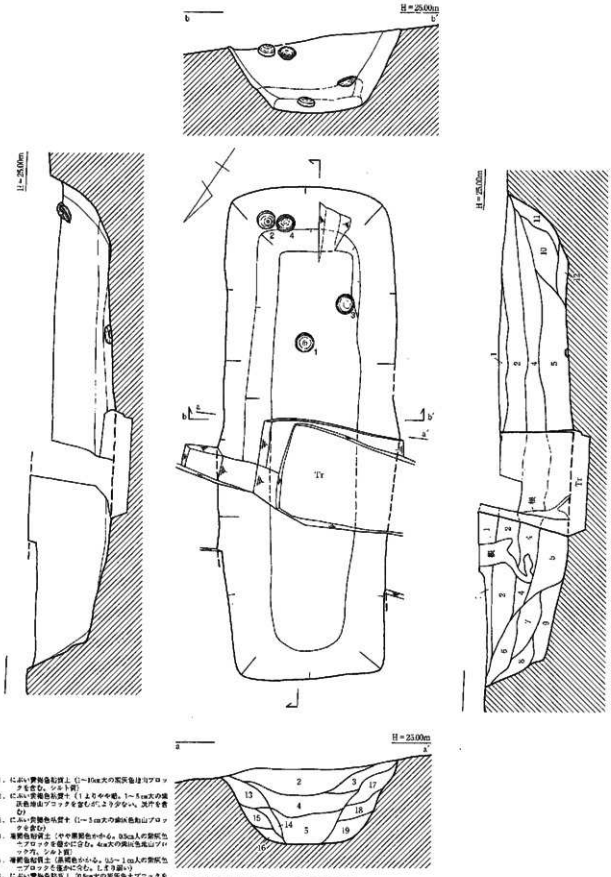


1. 暗色帯粘土（灰褐色ブロック、赤褐色ブロックを多く含む）
2. 暗色帯粘土（やややや明、黄褐色ブロック、赤褐色上ブロックを多く含む）
3. にぶい黄色砂質土

第89図　No.11南 横枕10号墳主体部実測図（S＝1：30）

交するN-33°-Wをとる。墓壙平面は、隅丸長方形である。規模は長軸3.92m、短軸1.35m、深さ71cmを測る。墓壙底面は南東側でやや角張り10cmほど上位までは壁の立ち上がりがゆるやかである。墓壙の土層断面から、木棺の痕跡が認められ、第90図の第6～19層は裏込め土と考えられる。木棺の規模は、長さ2.1m、幅30～40cm、深さ40cm程度が想定される。

遺物は、南東壁から65cm離れた床面で杯蓋（1）、図示できなかったが中央のトレンチより20～30cm北西床面で刀子（5）、墓壙南東隅上層で杯蓋（2）、杯身（4）、（1）より30cm南の棺外で杯身（3）が出土している。墓壙や遺物の状況から南西が頭位とみられ、（1）は1点であるが傾きや位置関係から土器枕の可能性が高い。（1）（3）と（2）（4）はそれぞれ形態や質感が異なり当初からセットとして製作されたものではないが、一応のセット関係を成す。外面のヘラ削りが中心部までしっかり成されず内面には円弧文がナデ消される。（1）は天井部扁平で口縁部との境界に稜をもち、口縁部は内傾する段状を呈する

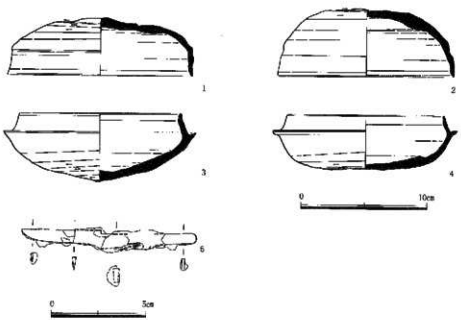


第90図　No.11南 横枕11号墳主体部実測図（S＝1：30）

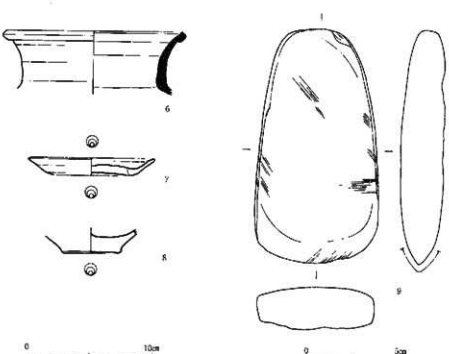
が、天井部の中心部までヘラ削りが及ばない。(2)は天井部丸く口縁部との境界は強いヨコナデによって意識される。(3)は口縁部の立ち上がりは長く端部も上方へ摘み上げるが、底部は中心部までヘラ削りしないことで丸く尖り状となる。(4)は器壁薄く受部もほぼ横方向に伸びるが、底部中心部はヘラ切り痕が残る軽いヘラ削りで、器壁の厚さにムラがみられる。(5)は刀身に対し茎部が長く関部で折れ曲がっている。

〔その他の出土遺物〕

北側の墳丘斜面や掘部を中心として、須恵器甕口縁部(6)、須恵器体部片や土師器体部片、回転糸切り痕のある皿(7)と杯底部(8)、磨製石斧(9)が出土している。(6)は口縁上位から外方へ開き端部は外面で肥厚して段をとる。(7)(8)(9)は古墳とは直接関与しないが、図化した以外に糸切り痕のある底部が数点出土している。(9)は長さ12.4cmを測り、扁平で刃部は弧状、基部までほぼ完存する。



第91図　No.11南 横枕11号墳主体部出土遺物実測図



第92図　No.11南 横枕11号墳出土遺物実測図

横枕36号墳（第4・7・85・93～97図、図版4・11・59～62・119・120）

〔位置と現状〕

横枕36号墳は、調査区中央部西寄りの尾根鞍部、標高23.16～24.82mに立地する。北西に11号墳、南西に87号墳、南東に85号墳、北東に80号墳が配置するものの、重複関係はみられない。鞍部のど真ん中に占地する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は11.2mである。調査前の観察では、鞍部の中央部に小規模な方墳と見間違えるような方形の高まりがあるが、よく観察すると円座状の段と弧状の凹みが認められ、削平を受けかなり改変された結果と予想された。

〔墳丘〕

表土下15cm弱で墳丘面を検出した。墳頂部中央やや東寄りで標高24.82mを測る。墳丘は方形状に掘削されており、南西側を除く周囲にやや楕円形の周溝が検出された。掘削は東西の掘部分が著しく、盛土とともに旧地表面をも削平していた。盛土は最大66cmが遺存し、削平部を除く墳丘下に旧地表面が良好な状態で検出された。墳丘の規模は、東西周溝底間で13.6m、北側周溝底から南裾間で11.9mを測る東西にやや大きい円墳である。墳丘の高さは、南裾から1.66mを測る。

墳丘は、鞍部稜線上中央のわずかに南斜面側に寄った位置につくられている。周囲に周溝を掘削するが、特に東西の稜線上を、幅3m弱、深さ50cm以上の溝を大きく掘り下げることで墓域を確保している。盛土は掘削した周溝の内側にほぼ水平に盛られている様子が墳丘断面図から窺える。

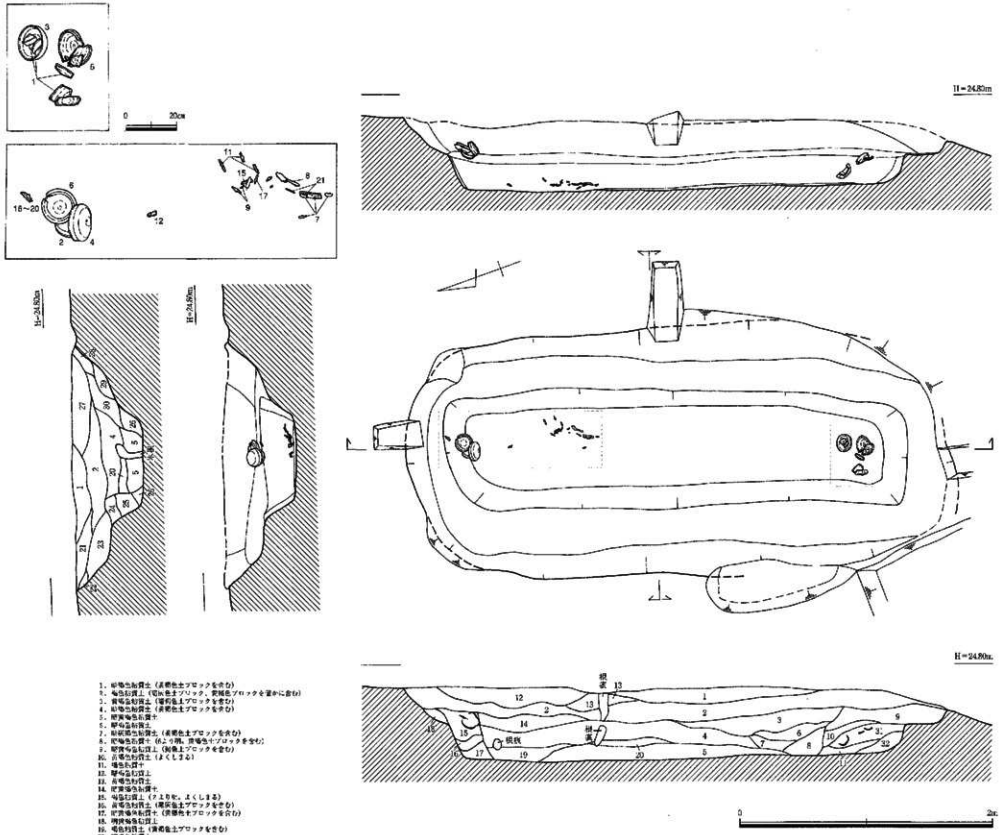
〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳丘中央部やや南寄りで並列する2基を検出した。主体部の主軸は稜線に対し直交方向であるが、厳密には2基ともやや東へ振り、第1主体部と第2主体部との主軸も若干ずれが認められる。2基の墓壙上には封土とみられる厚さ10cm弱の層が確認された。

第1主体部（第93・94図、図版11・60～62・119）

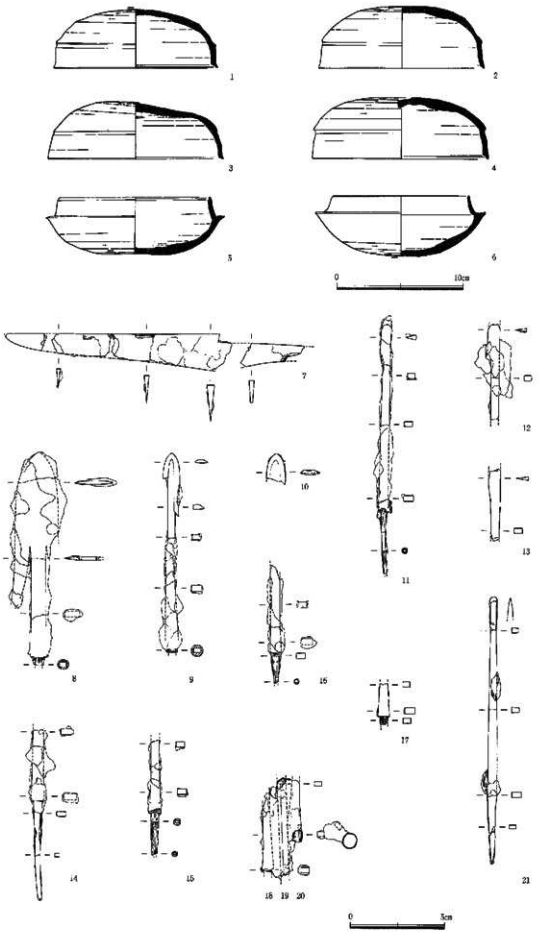
墳頂部やや南寄りで検出した。盛土上から地山面をわずかに掘り込んでいる。墓壙の主軸は尾根稜線と直交方向のN-19°-Eをとる。墓壙平面は、角が丸味の強い隅丸長方形である。墓壙は二段に掘り込まれており、上面の長さ4.40m、幅2.00m、二段目掘り方は、長さ3.75m、幅98cm、深さ27cmを測る。底面の規模は、長さ3.36m、幅64cmである。墓壙上面からの深さは、墳丘断面図から70cmを測る。墓壙埋土の断面観察から木棺の痕跡が認められ、第94図の第9～11、15～18、24～26、28、30～32図が木棺の裏込め土とみられる。木棺の大きさは断面から長さ2.5m弱、幅40～50cm、深さ38cm程度が想定される。二段目の中央北側寄りに棺を納めていた様子が窺える。

遺物は棺内北側で床面より数cm浮いた状態で刀子（7）、鉄鏃（8）～（17）、（21）が出土している。鉄器の西側周辺に木根の攪乱があり、鉄器の出土状態も若干の影響を受けているとみられるが、切先を北東小口側へ向けている様子は窺えるものの整然と横位に並んだ状況は想定し難い。また、鉄鏃の多くは鏃身部を欠損する。棺外では、北側小口の裏込め土から、須恵器の杯蓋（2）（4）、杯身（6）、鉄鏃の頸部（18）～（20）が、南側小口の裏込め土から、須恵器の杯蓋（1）（3）、杯身（5）が出土している。須恵器はいずれも小口側に傾いた状態で、さらに杯身（5）（6）は内面を小口側に向け、杯蓋（4）は杯身（6）にややかぶさるような状態で出土している。須恵器6点はそれぞれ質感や焼きが異なり当初からセットとして製作されたものはない。出土状況から、（3）（5）、（4）（6）が一応のセット関係のように見受けられるが、それぞれにやや離がありむしろ（2）（6）のほうが妥当である。須恵器はいずれも天井部、底部ともに丸味をもち、ヘラ削りは中心部へ及ぶがやや粗雑となり中央のヘラ切り痕を残すものがみられる。杯蓋は天井部と口縁部との境界に鈍い稜をもち、口縁端部はやや外方に摘まれ内傾する段を有するが、（4）のように1条の沈線を施すことで段に代えるものがある。これに対し杯身は受部が横位に伸びるもののやや立ち上がりが貧弱で、（5）の口縁端部は（4）同様の段をもつが（6）は内傾する段が消失する。刀子（7）は刀身部11.0cmと大きめで、明瞭な背関をもつ。木質痕が観察される。鉄鏃は、平面柳葉

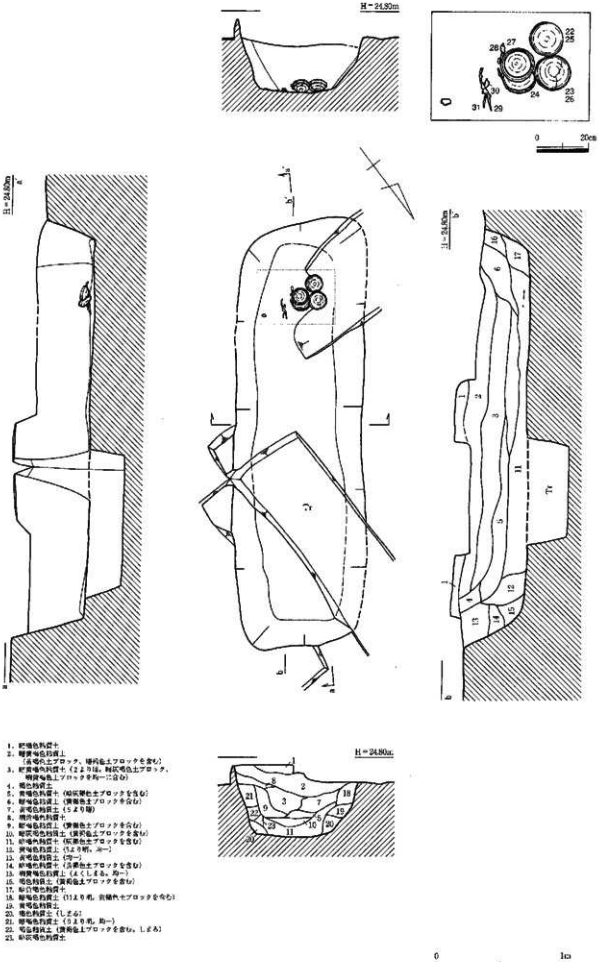


1. 暗褐色粘質土（赤褐色土ブロックをまだら）
2. 褐色粘質土（明黄色土ブロック、黄褐色ブロックを薄かに含む）
3. 黄褐色粘質土（暗褐色土ブロックを含む）
4. 暗褐色粘質土（赤褐色土ブロックをまだら）
5. 明黄褐色粘質土
6. 暗褐色粘質土
7. 黒褐色粘質土（赤褐色土ブロックをまだら）
8. 灰褐色粘質土（白土小塊、黄褐色ソフトブロックを含む）
9. 暗黄褐色粘質土（黄褐土ブロックを含む）
10. 赤褐色粘質土（ほくしまる）
11. 褐色粘質土
12. 暗褐色粘質土
13. 赤褐色粘質土
14. 灰黄褐色粘質土
15. 褐色粘質土（ぐとりを、よくしまる）
16. 黄褐色粘質土（暗灰色土ブロックを含む）
17. 灰黄褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
18. 明黄褐色粘質土
19. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
20. 明褐色粘質土
21. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
22. 暗灰褐色粘質土
23. 灰白褐色粘質土（褐色土ブロックを少な）
24. 暗黄褐色粘質土（23よりも暗、ルー）
25. 黄褐色粘質土（しまる）
26. 赤茶灰色粘質土（しまる、ぬ ）
27. 黄褐色粘質土
28. 明黄褐色粘質土
29. 灰褐色粘質土（暗灰色土ブロックを含む）
30. 褐色粘質土（ぐとりを、黄褐色土ブロックを含む）
31. 明黄褐色粘質土
32. 赤褐色粘質土（赤褐色土ブロックをまだら）

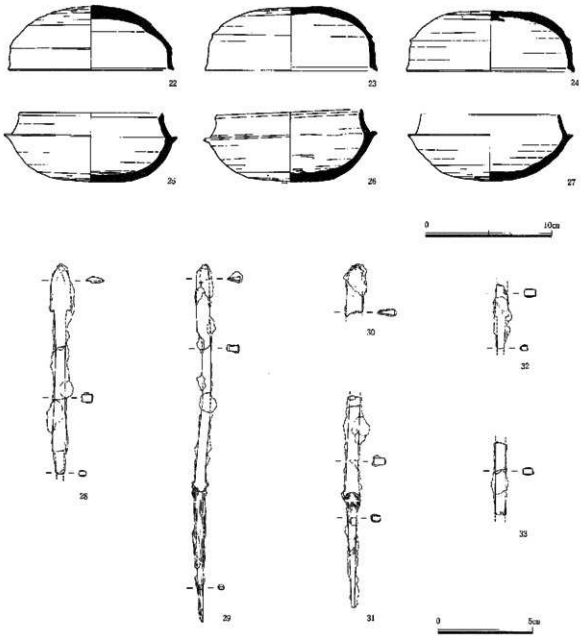
第93図　No11南 横枕36号墳第1主体部実測図（S＝1：30）



第94図　No.11南 横枕36号墳第1主体部出土遺物実測図



第95図　No11南　横穴36号墳第２主体部実測図（Ｓ＝１：30）



第96図　No.11南 横穴36号墳第２主体部出土遺物実測図

形で腸抉をもつ(８)以外は長頸鏃で、片刃の刀子状の鏃身(11)(12)、先端が方頭形で鑿状のもの(21)、鏃身部片切刃逆で片逆刺となるやや変わった形態(９)がある。

鏃②主体部（第95・96図、図版62・119・120）

墳頂部やや南西寄り、第１主体部の70cm程西で検出した。主軸はN-38°-Eをとり、第１主体部より東に軸を振る。盛土上から掘り込むが旧地表面をわずかに掘り下げる程度で地山面には達しない。墓壙平面は、やや南西が張り出す隅丸長方形である。規模は、長さ3.38m、幅1.02cm、深さ57cmを測る。墓壙埋土の断面観察から木棺の痕跡が認められ、第95図の第12～23層が裏込め土と考えられる。木棺の規模は、長さ2.2m、幅40cm弱、深さ40cm程度が想定される。

遺物は、南西壁から25cm程離れた床面で、須恵器蓋杯３組(22)～(27)と鉄鏃(28)～(33)を検出した。須恵器は一箇所に集中し、(22)(25)と(23)(26)は蓋をしたセット状態で、杯蓋(24)は内面に杯身(27)の底部が一部重なる状態で出土している。鉄鏃はこれら須恵器の東側で切先を南西小口側へ向け、(28)は

杯蓋(24)の下位で出土している。(25)(26)はよく似た形態、胎土、色調、質感で同一時の製作とみられる。また、(22)(27)についても元々はセットであったとみられ、6点を組み合わせようとした場合、出土した状態での組み合わせが最良であった。須恵器はいずれも似通った大きさで、天井部、底部ともに丸味をもち、中心部までしっかりヘラ削りするが(22)(27)のようにやや甘くなるものも見受けられる。

第97図　No11南 横枕36号墳 表土出土遺物実測図

杯蓋の口縁部はやや長めで端部は外方に摘み出され内傾する段を有する。天井部との境界の稜も甘くなる傾向が認められる。杯身の立ち上がりは長く、受部も比較的鋭利に横位へ摘み出され、口縁部は内傾する段を有するが(27)は無段となる。なお、内面中心部の円弧文(24)(25)(26)はそのままであったが、(22)(23)(27)は後にヨコナデを施している。全体的に、第1主体部の須恵器より古式の様相を示す。鉄鏃は長頸鏃で、鏃身平面三角形の(28)と片刃の刀子状の(29)(30)がある。なお、図化したこれら以外に、底面から土器細片と、埋土上層から外面に条痕の観察される縄文土器片が1点出土している。

〔その他の出土遺物〕

表土中から、須恵器壺の口縁部(34)が出土している他、墳裾や周溝埋土から土器細片数点が出土している。また、墳丘西側の旧表土付近で縄文土器細片が出土している。

横枕80号墳（第4・7・86・98～101図、図版4・11・63～65・120）

〔位置と現状〕

横枕80号墳は、調査区中央北東寄りの尾根稜線よりやや北側斜面側の、標高24.58～26.85mに立地する。南西に36号墳、北東に81号墳、南東に10号墳が配置し、このうち10号墳とは周溝部が大きく重複する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は12.6mである。調査前の観察では、明らかな古墳状の高まりが認められ、斜面高位側に弧状の凹みも認められた。ただ、西側の裾にあたる部分で段状の改変が行われており、墳丘部についても掘削が懸念された。

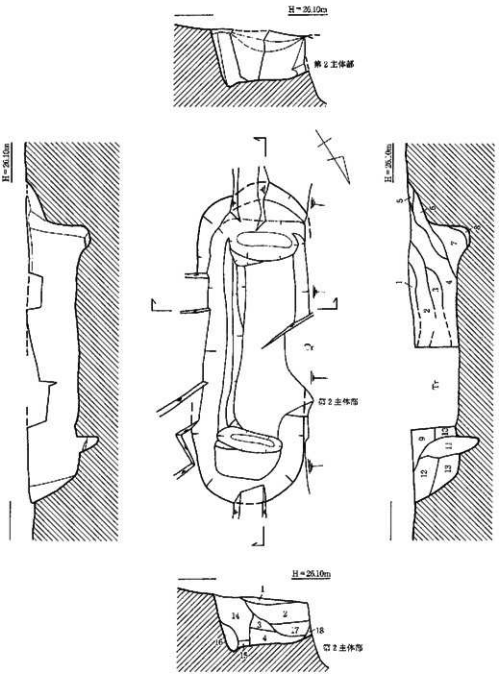
〔墳丘〕

表土下15cm弱で墳丘面を検出した。墳丘東側で標高26.85mを測る。墳丘は西側裾部が垂直に掘削されていたが、墳丘自体は良好な遺存状態であった。南東側の斜面高位側に周溝が検出された。周溝は10号墳の北西部を掘削しており、土層断面からも80号墳が10号墳より後出であることが確認された。盛土は最大80cmが遺存し、斜面低位の北西側墳丘下に旧地表面を検出した。墳丘の規模は、南北裾間で11.0m、東側周溝底から西裾間で10.5mを測る。南西側周溝から径11mの円墳が復元される。墳丘の高さは、北裾から2.27mを測る。

墳丘は、斜面の傾斜を利用して造られており、北西裾部の地山成形と、斜面高位の南西側に幅2.5m、深さ60cm余りの大きめな周溝を掘削し、その土を斜面低位側から盛り始め、後は平坦な互層に盛って形づくられている。

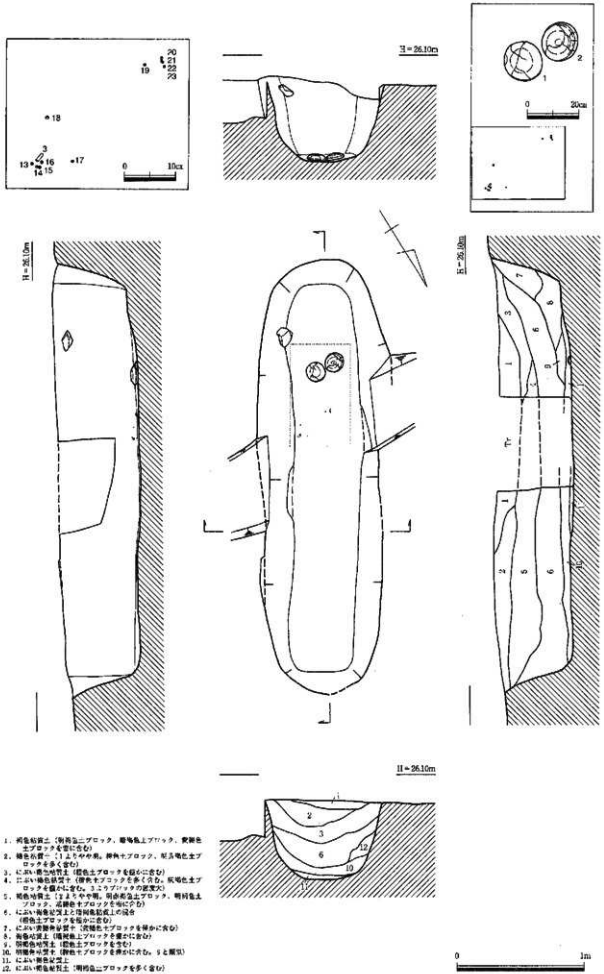
〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳丘面で精査を行ったが検出できず、墳丘に掘り入れたトレンチによって所在を確認した。墳丘の中心部、墳丘全体では南東斜面高位側に置く平坦部の北東端に、並列する2基を検出した。2基の主体部とも主軸を斜面の傾斜に対し直交し、第2主体部は第1主体部の西側壁を切る。また、2基の主体部とも墳丘の構築過程で埋葬されたもので、主体部上にはさらに60cm余りの盛土が検出された。



1．褐色粘質土（明褐色土ブロックを多く含む）
2．褐色粘質土（にぶい黄橙色土ブロックを含む）
3．褐色粘質土（2よりやや暗）
4．褐色粘質土（3よりも暗。黄褐色土ブロック、明褐色土ブロックを多く含む）
5．にぶい黄橙色粘質土（黄褐色土ブロック、暗褐色ローブロックを含む）
6．明赤褐色粘質土
7．褐色粘質土（明褐色土ブロックを多く含む）
8．褐色粘質土（7よりやや明。明褐色ローブロックを含む）
9．灰褐色粘質土
10．褐色粘質土（黄褐色土ブロック、明褐色土ブロックを多く含む。4に類似）
11．明褐色粘質土（黄褐色土ブロック、明赤褐色ローブロックを多く含む）
12．褐色粘質土（黄褐色土ブロックを多く含む）
13．褐色粘質土（12よりやや暗。黄褐色土ブロックを多く含む）
14．褐色粘質土（2・4よりも暗。赤褐色土ブロック、明褐色ローブロックを多く含む）
15．にぶい黄橙色砂質土
16．にぶい黄褐色砂質土（15よりやや明）
17．褐色粘質土
18．褐色粘質土（2よりやや明。17よりも黄色かかる。黄褐色土ブロックを含む）

第98図　No.11南　横枕80号墳第1主体部実測図（S＝1：30）



1．明色粘質土（明褐色土ブロック，暗褐色土ブロック，黄褐色土ブロックを雪に含む）
2．褐色砂質・シルトやや粗，褐色土ブロック，紫黒色土ブロックを多く含む）
3．にぶい橙色粘質土（橙色土ブロックを極小に含む）
4．にぶい橙色砂質土（褐色土ブロックを多く含む，灰褐色土ブロックを微小に含む。3こうブロックの変質大）
5．黒色砂質土（シルトやや粗，明赤褐色土ブロック，明褐色土ブロック，暗褐色土ブロックを微小に含む）
6．にぶい黄橙色粘質土と褐灰色粘質土の混合（橙色土ブロックを極小に含む）
7．にぶい黄橙色砂質土（黄橙色土ブロックを微小に含む）
8．黄色粘質土（褐灰色土ブロックを雪に含む）
9．明褐色粘質土（橙色土ブロックを含む）
10．明褐色砂質土（橙色土ブロックを微小に含む，9と類似）
11．にぶい黄色粘質土
12．にぶい明色粘質土（明褐色土ブロックを多く含む）

第99図　No11南　横穴80号墳第２主体部実測図（Ｓ＝１：30）

第1主体部（第98図、図版63・64）

墳丘平坦面の北西側で検出した。北西側盤を第2主体部に切られる。墳丘の構築初期段階で、わずかに盛土した上から地山面を掘り込んで作られている。墓壙の主軸は斜面の傾斜に直交するN-33°-Eをとる。墓壙平面は、隅丸長方形というより長楕円形を呈する。墓壙規模は、長さ2.56m、幅89cm、深さ44cmを測る。墓壙の底面には側板溝と小口板を固定する幅10～30cm、深さ5～15cmの溝状の掘り込みがある。木棺の内法は、長さ1.5m、幅50cm前後が想定される。遺物は出土しなかった。

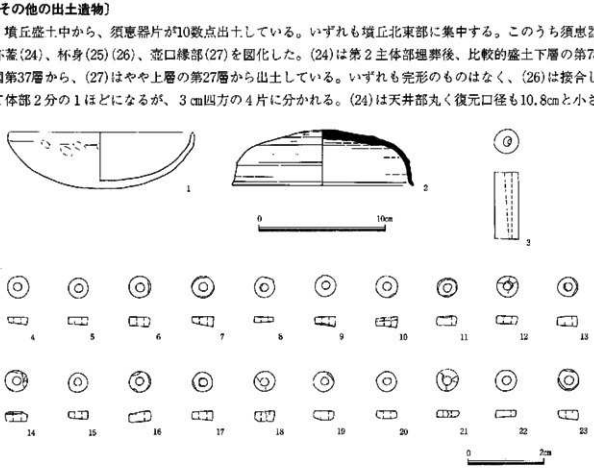
第2主体部（第99・100図、図版11・64・65）

墳丘平坦面の北西側で検出した。第1主体部の北西側盤を切る。墳丘の構築段階で、北西斜面低位に最大18cm盛土して平坦面を整えた後、その盛土上から第1主体部および地山面を掘り込んで作られている。墓壙の主軸は斜面の傾斜に直交するN-32°-Eをとる。墓壙平面は、隅丸長方形というより第1主体部同様の長楕円形を呈する。墓壙規模は、長さ3.47m、幅1.03m、深さ64cmを測る。墓壙埋土の断面観察から明確な木棺の痕跡は認められなかった。床面の凹み等から直葬の可能性が考えられる。

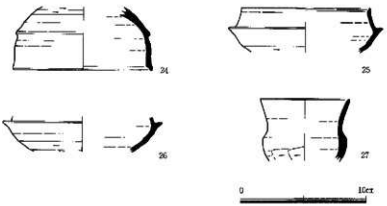
遺物は、南西壁から55cm程離れた床面で、上師器椀（1）、須恵器杯蓋（2）、さらに20cm程離れて臼玉と管玉（3）が出土した。（1）（2）はほぼ同じ口径・高さで、やや前後にずれるものの伏せて横位に並ぶ。出土状況から土器枕とみられる。（1）は径に対し浅い形態で、口縁端部は短く直立して丸く終える。（2）は天井部はやや丸く厚くなるが全体的に扁平で、口縁部と天井部の境界の稜は甘く、口縁端部は外方へ摘み出すことで内傾する段を作り出す。ヘラ削りはしっかりするが、中央部をわずかに削り残す。玉類は、出土位置から、図化した（4）～（23）を含む計26点の滑石製臼玉の中央部に、碧玉製の管玉（3）をあしらった首飾りとみられる。管玉（3）は径6.7mm、長さ1.78cm、臼玉は径5.1～5.6mm、厚さ1.1～2.9mmを測る。

〔その他の出土遺物〕

墳丘盛土中から、須恵器片が10数点出土している。いずれも墳丘北東部に集中する。このうち須恵器杯蓋（24）、杯身（25）（26）、壺口縁部（27）を図化した。（24）は第2主体部埋葬後、比較的盛土下層の第78図第37層から、（27）はやや上層の第27層から出土している。いずれも完形のものはなく、（26）は接合して体部2分の1ほどになるが、3cm四方の4片に分かれる。（24）は天井部丸く復元口径も10.8cmと小さ



第100図　No.11南 横枕80号墳第2主体部出土遺物実測図



第101図　№11南 横枕80号墳盛土出土遺物実測図

い。口縁部は長く端部は外方に摘み出されて内傾する段を有する。(25)は立ち上がりが長く口縁部は内傾する段をもつが、底部ヘラ削りの範囲がややド位におさまる。(27)は子持壺の一部と考えられるが、同様の片はみられなかった。

横枕81号墳（第4・7・86・102図、図版4・65・66）

〔位置と現状〕

横枕81号墳は、調査区北東の境界部、尾根稜線上よりやや北側斜面側の標高27.16～29.33mに立地する。南西に80号墳、10号墳が配置し、このうち10号墳とは裾部が一部重複する。81号墳の東側丘陵にも古墳が分布する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は15.16mである。調査前の観察では、調査区東側丘陵先端部から点々と続く古墳状の高まりが認められ、81号墳もはっきりとした高まりと斜面高位側に弧状の凹みが認められた。ただ、北西側は比較的急斜面となっており墳丘の流失が懸念された。

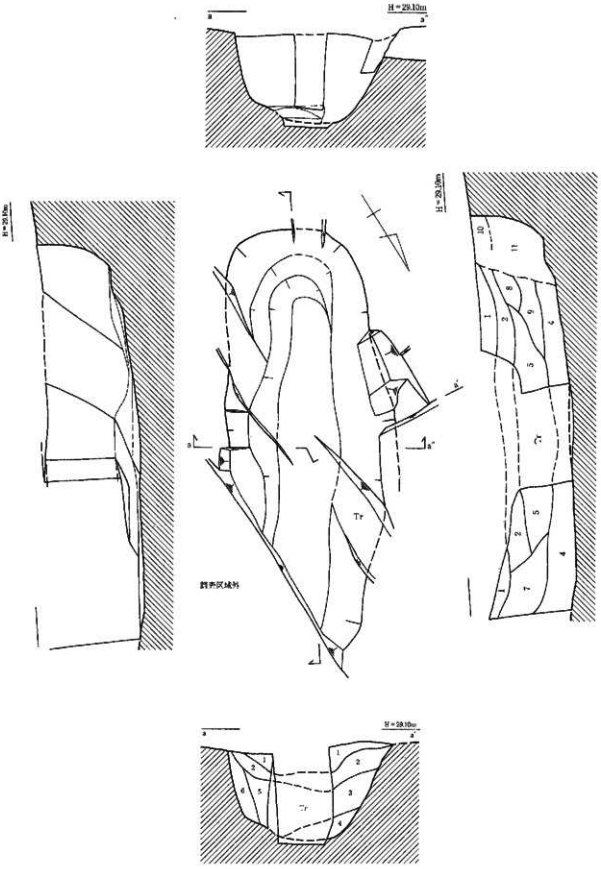
〔墳丘〕

表土下10～20cm前後で墳丘面を検出した。古墳の約半分は調査区域外となる。墳丘平坦部境界部付近で標高26.85mを測る。墳丘は東半分が未調査であり、南西側周溝は10号墳周溝で掘削されている。検出した南側周溝と未調査部分の観察より、古墳は南東側の斜面高位を大きく掘削し、墳丘平坦部も南東側に寄った位置と想定される。盛土は最大42cmが遺存し、斜面低位の北西側墳丘下に旧地表面を検出し、西裾で地山成形が観察された。墳丘の規模は、北裾から南周溝底間で10.4m、東側墳丘から径11m程の円墳が復元される。墳丘の高さは、北裾から2.17mを測る。

墳丘は、斜面の傾斜を利用して造られており、南側の周溝掘削と地山面を削り出し、斜面低位の北西側ほど盛土を厚く施している。

〔埋葬施設〕

埋葬施設は、調査区境界の墳丘平坦面で検出した。北東端は調査区外となる。盛土上から地山面を深く掘り込んで作られている。墓壙の上面には厚さ30cmにも及ぶ封土状の礫土が北側を中心に施されている。墓壙の主軸は斜面の傾斜に直交するN-31°-Eをとる。墓壙平面は、隅丸長方形というより長楕円形に近い。墓壙規模は、遺存長3.35m、幅1.33m、深さ78cmを測る。南東小口および側壁側でわずかな段をとり中央でやや凹む底面へ続く。墓壙中央にトレンチを掘削し、南東端は後に掘り足したことから断面が不統一となり、埋土の土層断面から明らかな木棺の痕跡は確認できなかった。遺物は墳丘周辺を含め出土しなかった。



第102図　No.11南 横枕81号墳主体部実測図（S＝1：30）

横枕82号墳（第4・7・86・103～105図、図版4・67・68・120・121）

〔位置と現状〕

横枕82号墳は、調査区南東の境界部、尾根稜線上から南へ下る斜面、標高24.30～27.00mに立地する。北西に10号墳、南に84号墳、南東に83号墳が配置し、このうち84号墳と裾部が一部重複する。調査区外の82号墳北側の丘陵上にも古墳が分布する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は12.3mである。調査前の観察では、調査区東側丘陵先端部から点々と続く古墳状の高まりが認められ、82号墳も同様にはっきりとした高まりと斜面高位側に弧状の凹みが認められた。

〔墳丘〕

表上下10cm前後で墳丘面を検出した。北東側の周溝の一部が調査区外となる。墳丘平坦面は斜面高位の北側へ寄り、平坦面北部で標高27.00mを測る。盛土は最大74cmをはかり、南側斜面低位ほど厚く施されている。旧地表面は墳丘北側を除く墳丘下で良好な状態で検出された。墳丘の規模は、北側周溝底から南裾間で10.6m、東側周溝底から西裾間で9.9mを測る。北側周溝の径からやや角張る10m程の円墳である。墳丘の高さは南裾から2.7mを測る。

墳丘は、斜面の傾斜を利用して造られており、北側の斜面高位に幅2～3m、深さ50～70cm程の周溝の掘削と地山面を削り、斜面低位の南側ほど盛土を厚く施して造られている。

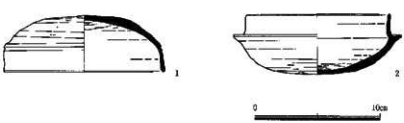
〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳丘平坦面中央、墳丘の中心やや北寄りで検出した。盛土上から掘り込むが、旧地表面まで達しない。墓壙の主軸は斜面の傾斜に直交方向のN-89°-Eをとる。墓壙平面は、隅丸長方形を呈する。墓壙規模は、長さ2.52m、幅1.37m、深さ48cmを測る。墓壙中央部にトレンチを掘削してしまったことから上層断面の観察が不十分な感があるが、東側第5・6層木棺の裏込め土のようにも見受けられるが、土層断面から明らかな木棺の痕跡は確認できなかった。

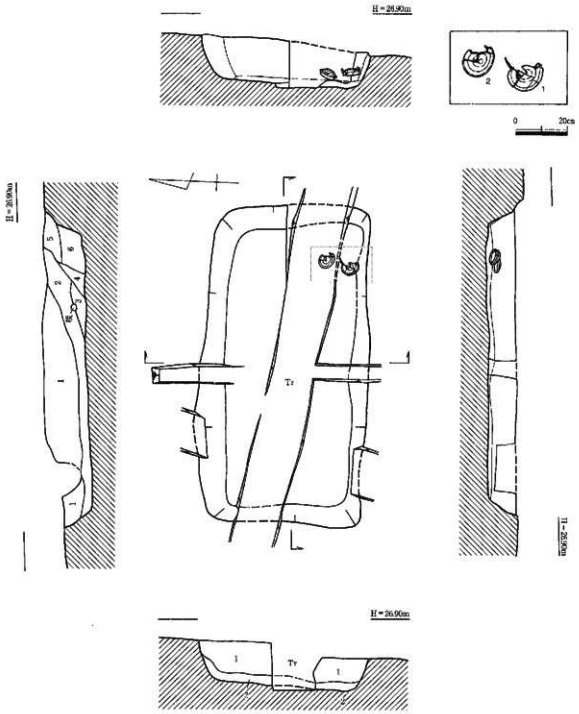
遺物は、墓壙南東隅の東壁から20cm程離れ、横位に並ぶ須恵器盞杯（1）（2）を検出した。（1）の東側に径25cm弱の木棋があり、床面から若干浮き（1）の東側に一部食い込むなど（1）（2）も棋の影響を少なからず受けているとみられる。（1）（2）とも内面を伏せてやや内側に傾斜して出土しており、上器枕と考えられる。（1）（2）は質感がよく似ており当初からのセットとみられる。天井部、底部とも丸味をもちヘラ削りはしっかりしているが、稜や端部が退化傾向を示す。（1）の口縁端部は弱い沈線を施すことで有段化を、天井部と口縁部の境界の稜も同様に1条の沈線を下位に周回させることで稜を強調している。（2）の口縁部端部は有段に意図は余くみられず丸く終える。内面は円弧文が明瞭である。

〔その他の出土遺物〕

表土および西側周溝埋土から平瓶（3）、同化していないが西裾部からかえりのある杯蓋片、表土から陶器碗（5）、墳丘盛土中から弥生上器甕（4）が出土している。いずれも82号墳に関連する遺物ではなく、（3）とかえりのある杯蓋片は他の古墳、調査区内では84号墳の時期に近い遺物である。（4）は今回の調査区では数少ない弥生上器であり、短く外反する口縁部外面平行沈線が観察される。

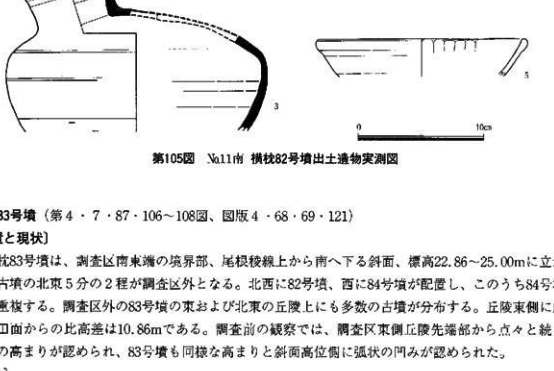


第103図　No.11南　横枕82号墳主体部出土遺物



1. 明赤褐色粘質土（1mx大の礫山礫、紫黄褐色砂質土ブロック、明赤褐色砂質土ブロックをごく僅かに含む）
2. 明赤褐色粘質土（黒土、粗礫粒含、明赤褐色砂質土ブロックを僅かに含む）
3. 赤褐色粘質土（やや硬い）
4. 明赤褐色粘質土（やや硬い）
5. にぶい赤褐色粘質土（硬い、明黄褐色土ブロックを僅かに含む）
6. 赤褐色粘質土（明石褐色ブロック、礫山礫を僅かに含む）

第104図　No.11南 横穴82号墳主体部実測図（S＝1：30）



第105図　No11南　横枕82号墳出土遺物実測図

横枕83号墳（第4・7・87・106～108図、図版4・68・69・121）

〔位置と現状〕

横枕83号墳は、調査区南東端の境界部、尾根稜線上から南へ下る斜面、標高22.86～25.00mに立地する。古墳の北東5分の2程が調査区外となる。北西に82号墳、西に84号墳が配置し、このうち84号墳と一部重複する。調査区外の83号墳の東および北東の丘陵上にも多数の古墳が分布する。丘陵東側に広がる水口面からの比高差は10.86mである。調査前の観察では、調査区東側丘陵先端部から点々と続く古墳状の高まりが認められ、83号墳も同様な高まりと斜面高位側に弧状の凹みが認められた。

〔墳丘〕

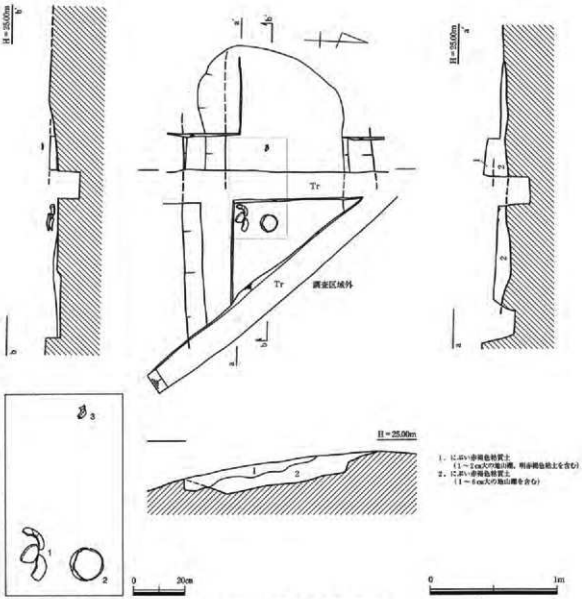
表土下10～20cm前後で墳丘面を検出した。北東側の墳丘5分の2程が調査区外となる。墳丘は主体部の遺存状況から上部がかなり流失しているとみられ、墳丘平坦面もその分広くなる。平坦面北側で現況、標高27.00mを測る。盛土は最大30cmをはかり、南側斜面低位ほど厚い傾向が認められる。旧地表面は墳丘北側を除く墳丘下で良好な状態で検出された。墳丘の規模は、検出した北西周溝から径11mの円墳が推測される。墳丘の高さは南裾から2.14mを測る。

墳丘は、斜面の傾斜を利用し、北側の斜面高位に幅2m、深さ50cm弱の周溝の掘削と地山面を削り、斜面低位の南側に盛土して造られているものと想定される。

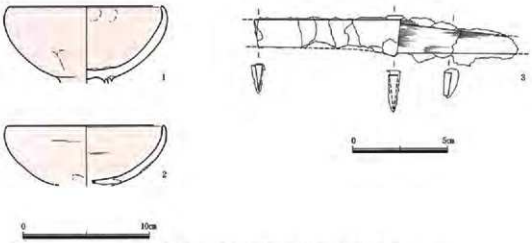
〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳丘中央部やや北寄りで検出した。東側は調査区域外となり、西側は流失して浅くなり壁面の立ち上がりは明瞭でない。墓壙は盛土上から掘り込まれるがかすかに旧地表面をかすめる程度である。遺存部分から、墓壙の主軸は斜面の傾斜に直交するN-85°-Eをとる。墓壙平面は、四隅が明瞭でないため不明であるが、西側から隅丸長方形と推定する。墓壙規模は、遺存長2.04m、幅1.51m、深さ20cmを測る。墓壙の上層は流土の可能性があり、底面も凹凸がみられ南側へ傾斜する。わずかな上層断面からは明らかな木棺痕跡は確認できなかった。

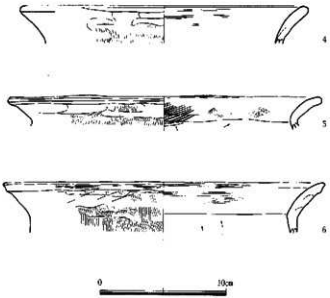
遺物は、検出部中央で土師器高杯（1）（2）、40cm程西へ離れて刀子（3）を検出した。（1）（2）は主体部検出時に誤って破損してしまったが、間を10cm程あけて横に並び内面を伏せた出土状況である。接合する短い脚部は打ち欠いたとみられる。これらは出土状況から上器枕と考えられる。（1）（2）はやや（1）が杯部深く肉厚であるが同様な形態とみられ、ともに杯部内外面赤彩される、口縁部は直立もしくはさらに内彎し、先端は細く内側へ伸ばす。ハ字状に開く高さ5cm程度の脚部が想定される。（3）は切先および茎尻を欠き、刀身部は細身で背関をもつ。茎部に木質が遺存する。



第106図　No.11南 横枕83号墳主体部実測図（S＝1：30）



第107図　No.11南 横枕83号墳主体部出土遺物実測図



第108図　No.11南 横枕83号墳周溝出土遺物実測図

〔その他の出土遺物〕

墳丘および北西側周溝埋土から叩き目のみられる須恵器胴部片、甕口縁部(4)(5)(6)が出土している。(4)(5)(6)はく字状で、頸部から大きく開き、肩部は大きく張らないものとみられる。体部および口縁部にやや粗いハケ目を施し、口縁端部付近は横位のナデを施す。83号墳より年代的にやや下る遺物と考えられる。

横枕84号墳（第4・7・87・109～111図、図版4・11・69～71・121・122）

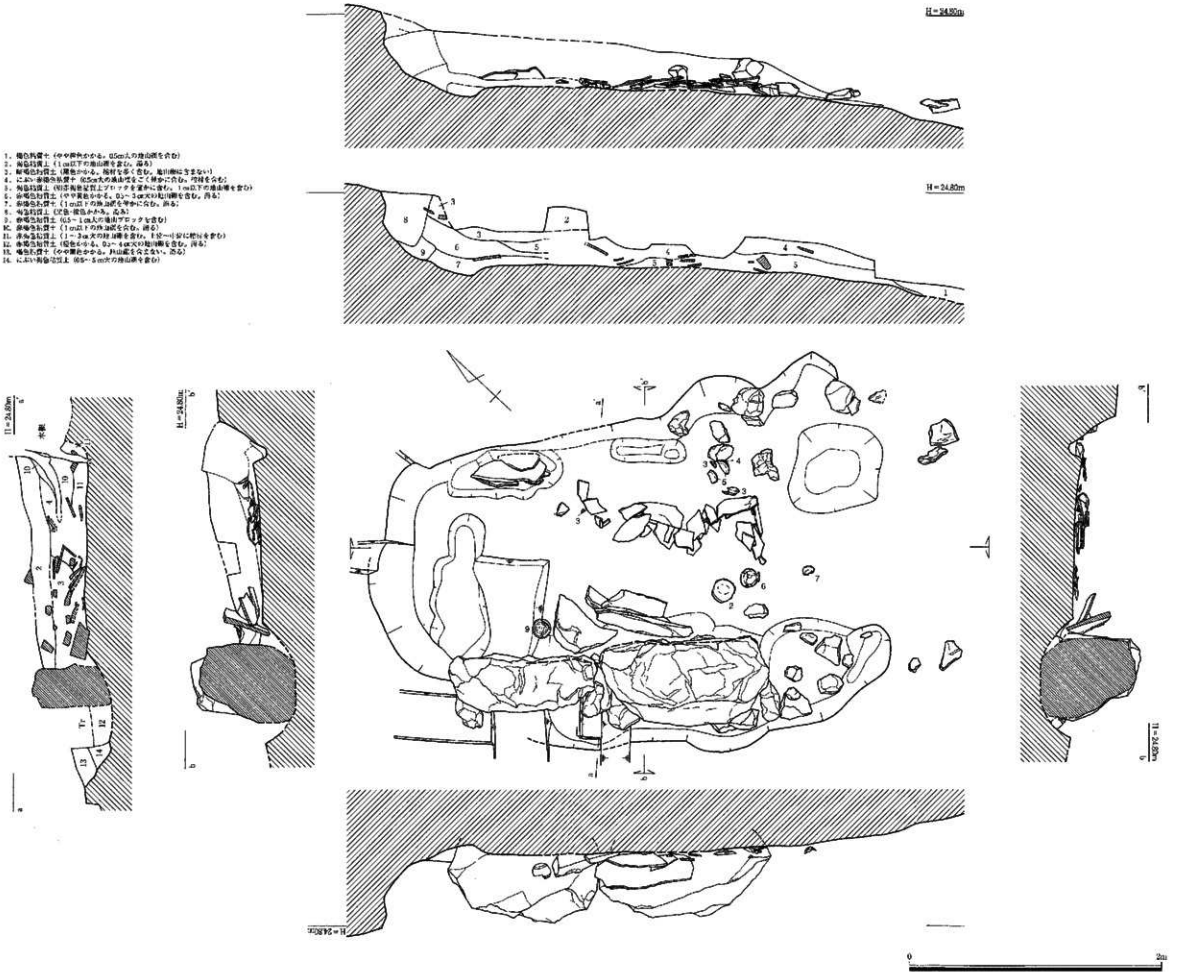
〔位置と現状〕

横枕84号墳は、調査区南東、尾根稜線上から南へ下る斜面、標高22.32～24.84mに立地する。No.11南調査区の中では位置的に斜面下位に立地する。北西に82号墳、北東に83号墳が配置し、それぞれ裾部を重複する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は10.32mである。調査前の観察では、82号墳と83号墳の下位にわずかな高まりが認められ、その中央に60×90×70cm大の岩2石が露頭していた。周辺には板石片が散乱しており、埋葬施設の棺材の一部とみられた。中央部に掘り入れたトレンチによって、横穴式石室を内部主体とする古墳であることが判明した。

〔墳丘〕

墳頂部は腐植土下は墳丘面で、石室上部を既に失っており土砂が流入していた。南側墳丘面も表土下10cm弱で検出した。墳丘の多くの盛土は削平、流失するが、現況で墳丘半坦面は古墳のかなり北側に寄り、石室北側で標高24.84mを測る。盛土は石室南側で最大10cmをはかり、旧地表面は墳丘北東部および南側の墳丘下で検出されたが、裾部は盛土とともにすでに流失していた。墳丘の規模は、北側周溝底から南裾まで8.3m、東西裾間で8.0mを測り。径8mの円墳である。現況の墳丘の高さは南裾から2.52mを測る。

墳丘は、82号墳、83号墳側の地形を上手く利用し、それぞれの周溝を再度掘り下げて84号墳の周溝としている。また、北側の斜面高位に地山を掘り込んで平坦面を造り、そこに石室を構築して墳丘を形造ったと想定される。



第109図　No.11南 横穴84号墳横穴式石室実測図（S＝1：30）

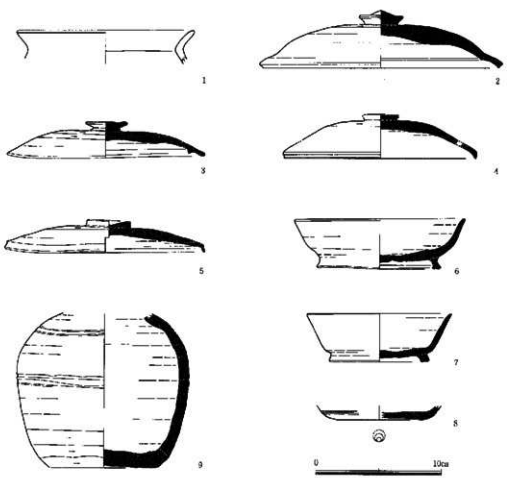
〔埋葬施設〕

墳丘北側で、谷側の南東方向に開口する横穴式石室を検出した。既に天井部を含め石材の多くを失っており、南側に腰石2石と棺材の一部が遺存する程度である。石の抜き取り痕から片袖の石室とみられ、主軸をN-46°-Wにとる。石室内は板石片を多量に含み、木板がはびこっていた。

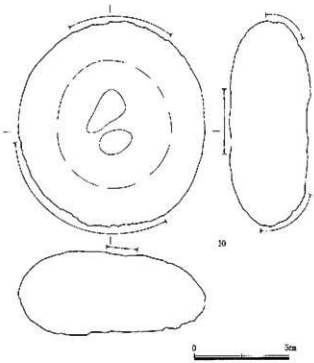
玄室は、石の抜き取り痕、腰石を設置する溝状の掘り込みなどから、奥壁幅1.3m、玄室長2.4m、玄門幅80cm前後が推測される。玄室最大遺存高は52cmである。玄室平面は長方形を呈する。羨道部は袖石の設置穴のみの検出であるが、墳丘全体をみても南東側1m弱で周溝でありそれほどの長さは考え難く羨道部は短いプランであったと考えられる。石室の全長は現況3.2m前後を測る。墓壙の規模と石の抜き取り痕等から、腰石は奥壁で1石ないし2石を用い、側壁はそれぞれ3石、斜面低位の南側は北側壁に比べかなり大きめの腰石を使用していたと考えられる。腰石を設置する溝状の掘り込みには、腰石を安置、調整するための板石が検出されている。

玄室内の左側壁側で、箱式石棺の残欠とみられる立った状態の板石を検出した。玄室入口付近でも、内側に倒れ込んだ石棺の隅とみられる部分があり、やや原位置を動いている可能性はあるものの、左側壁に沿って石棺を構築していたと考えられる。

遺物は玄室内で須恵器が点々とみられ、玄室入口で(7)、右袖石付近で(3)(4)(5)、石棺内側で(2)(6)、奥壁寄りで(9)を検出し、石室埋土から(1)(8)を出土している。須恵器はそれぞれ破損しており、完形のものはみられなかった。比較的残りの良い(2)(6)は内面を上に向けて出土しており、セット関係は成立しない。鉄器や玉類などが全く検出されず、遺物の出土状況からも、盗掘あるいは攪乱をかなり受けたと考えられる。須恵器杯蓋は、口縁部にかえりをもち宝珠状摘みを有する(2)(3)



第110図　No.11南 横穴84号墳石室内出土遺物実測図



第111図　№11南　横枕84号墳表土出土遺物実測図

と、口縁部のかえりは消失し円盤状の摘みをもつもの(4)(5)とに大きく分かれる。杯(6)(7)はともに底部ヘラ切り未調整で、(6)は底部と体部の境界が丸味をもち短く開く高台は端部を内外へ摘み出し、(7)は底部から屈曲して体部へ続き高台は短く開き端部は摘んで終える。(8)は杯の底部とみられるが、糸切りがはっきりと確認できる。壺の体部(9)は、底部円盤成形で体部の器壁はほぼ均衡化する。土師器甕(1)はほんの細片で、調整は剥落不明である。この他に石室埋上から(1)と同様な口縁部く字状甕の体部片が10点程出上している。粗いハケ目調整され、83号墳周溝出土遺物とよく似た質感である。

〔その他の出土遺物〕

墳丘表上中から、敲石(10)が出土している。扁平な楕円形の自然石で使用頻度が高い。

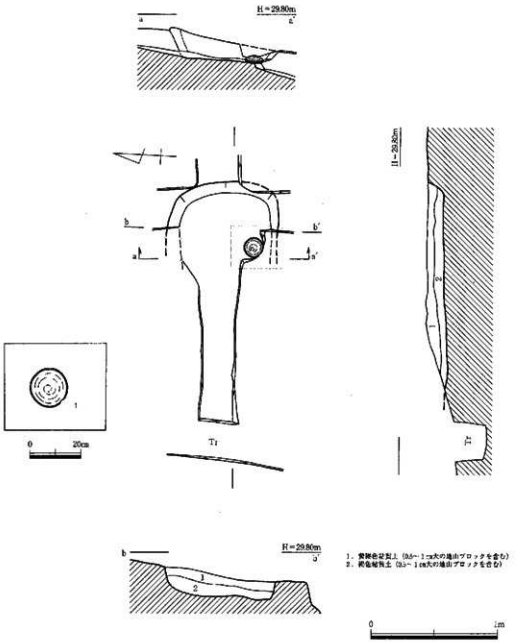
横枕85号墳（第4・7・87・112～114図、図版4・71・72・122）

〔位置と現状〕

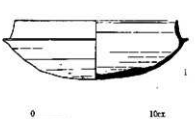
横枕85号墳は、調査区南端の丘陵鞍部から南へ下る斜面、標高22.32～23.18mに立地する。3.5m北西に36号墳が配置するが、東隣に一部重複する86号墳とともに、北東斜面上位の80号墳、10号墳、82号墳とは7～10mの間を隔て一線を介する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は10.32mである。調査前の観察では、南斜面に高さ30cm程の段が南北方向に掘削され、墳丘状の高まりや周溝状の凹みなどは認められず、鞍部からさらに下った斜面でもあり、古墳の存在は予想できなかった。36号墳に伴う表土除去の段階で周溝が検出され、確認のため掘り下げたトレンチにより存在が明らかとなった。

〔墳丘〕

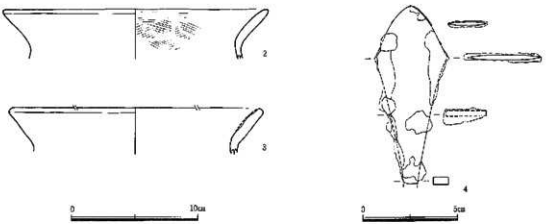
表土下20cm前後で墳丘面を検出した。耕作時に墳丘全体が上部削平されており、西側半分は段によってさらに深く掘削される。また、斜面であることから墳丘の南西2分の1弱が流失する。墳丘北側で標高23.18mを測る。盛土は最大10cmが遺存し、旧地表面は築造時には流失していたのか確認できなかった。墳丘の規模は、検出した北側周溝から径8～9mの円墳が復元される。現況の墳丘の高さは南裾か



第112図　No.11南 横枕85号墳主体部実測図（S＝1：30）



第113図　No.11南 横枕85号墳主体部出土遺物実測図



第114図　№11南 横杖85号墳出土遺物実測図

ら86cmを測る。

墳丘は、北側の斜面高位に幅２m、深さ60cm弱の周溝を掘削し、斜面低位の南側に盛土して造られているものと想定される。

〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳丘中央部やや北寄りで検出した。上部は削平および流失がかなりすすみ、西側は耕作時の段で掘削され、東壁周辺が遺存する状態である。墓壙に粘土上から地山をわずかに掘り込む。墓壙平面は、遺存する東部分から隅丸長方形と推定する。墓壙の主軸は斜面の傾斜に直交方向のN-87°-Eをとる。墓壙規模は、遺存長1.41m、幅88cm、深さ19cmを測る。底面はやや凹凸がみられ北から南へ傾斜する。わずかな上層断面からは明らかな木棺痕跡は確認できなかった。

遺物は、東壁から35cm離れた北壁寄り床面で、内面を伏せた須恵器杯身（１）を検出した。１点ではあるが11号墳主体部の出土例などから、土器枕の可能性が高い。（１）は径12.7cmと大きく、底部しっかりしたヘラ削りが中央まで施され、器壁は薄く仕上げられている、口縁端部内側には内傾する有段の名残りとみられる浅い沈線がめぐる。

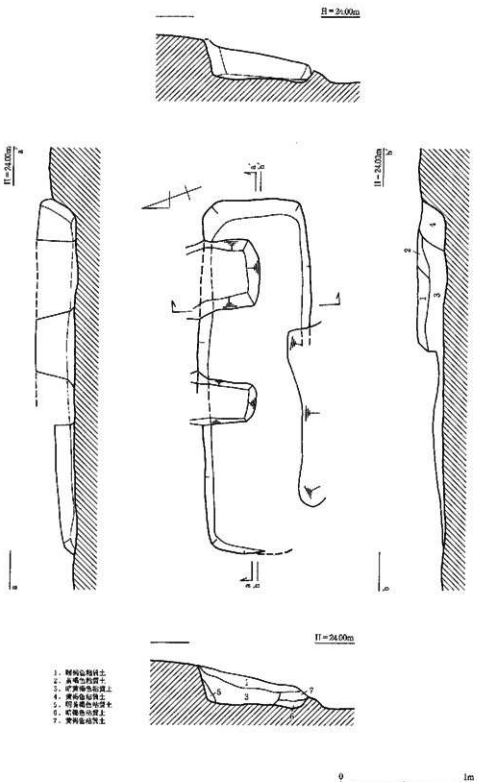
〔その他の出土遺物〕

北側周溝埋土上層から土師器甕の口縁部（２）（３）、主体部南側の表土中より鉄鏃の鏃身部（４）、その他周溝埋土や表土から須恵器や土師器細片数点が出土している。（２）（３）はく字状口縁部で、頸部の屈曲は滑らかで、（２）の口縁部内面に観察されるハケ目はそれほど粗くはなく重複して施される。（４）は鏃身部平面主頭形で、断面は平造である。出土位置から本来は主体部の遺物であった可能性が考えられる。

横杖86号墳（第４・７・88・115・116図、図版４・73・74・123）

〔位置と現状〕

横杖86号墳は、調査区南端の南斜面、標高23.42～24.02mに立地する。北西裾部に36号墳が配置するが、西隣に一部重複する85号墳とともに、北東斜面上位の80号墳、10号墳、82号墳とは７～10mの間を隔てる。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は11.42mである。調査前の観察では、南斜面に高さ30～40cm程の段が南北方向に掘削され、南側で東へ屈曲して角をとり70cm程の段差となる。86号墳はちょうどこのコーナー部分を中心とした位置にあたるが、墳丘状の高まりや周溝状の凹みなどは認められなかった。段差斜面の精査によって古墳の可能性が濃厚となり、東西方向に掘り入れたトレンチより明らかとなった。



第115図　No.11南 横枕86号墳主体部実測図（S＝1：30）

〔墳丘〕

表上および流上下20cm前後で墳丘面を検出した。墳丘は耕作時の平坦面造成によって削平を受け、また流失などから主体部東側で盛土最大22cmを確認するにとどまり、周溝も東側の５分の１程度が遺存する程度となる。旧地表面も観察されなかった。現況で、墳丘北側で標高24.04mを測る。墳丘の規模は、遺存する東側周溝から７～８ｍ程度の円墳が推定される。墳丘の高さは東側周溝底から60cmを測る。

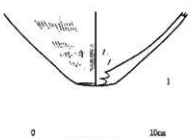
墳丘は斜面を利用し、高位に周溝を掘削して土を南西ほど盛りつくられたと推測される。

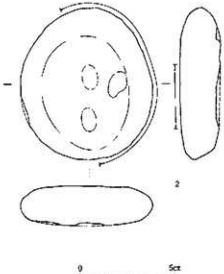
〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳丘北東寄りで検出した。上部は削平および流失がかなりすすみ、加えて主体部南側に径50cm程の木根があり、根の攪乱で土層観察にも支障をきたすような状態であった。墓壙は盛土上から地山をわずかに掘り込む。墓壙平面は、遺存部分から隅丸長方形とみられる。墓壙の主軸は斜面の傾斜に直交するN-71°-Eをとる。墓壙規模は、長さ2.82m、幅88cm、深さ30cmを測る。墓壙埋土の断面観察から木棺の痕跡が認められ、第115図第４～７層は木棺の裏込め土と考えられる。木棺の大きさは断面から推定して幅35cm弱、長さ２ｍ程度とみられるが西側は土層が浅くなり不明確である。墓壙北側に寄せて安置されている。遺物は何も出土しなかった。

〔その他の出土遺物〕

表土中から、敲石(２)、土器細片数点、ヘラ切り未調整の須恵器底部片、畑の段斜面から弥生土器底部(１)が出土している。(１)は底部はわずかな平底から大きく開きながら立ち上がる形態で、外面に縦ハケ目、内面にヘラ削りが観察される。82号墳盛上中から出土した甕口縁部と同様な時期の遺物である。(２)は長軸8.0cmと小ぶりで平面楕円形の扁平な自然石で、片面と側縁部に敲打痕が観察される。





第116図　№11南　横穴86号墳出土遺物実測図

横枕87号墳（第4・7・88・117・118図、図版4・74・75・123）

〔位置と現状〕

横枕87号墳は、調査区南西の尾根稜線よりやや南へ下る斜面、標高24.90～26.43mに立地する。調査区境界部に位置し、古墳の西側半分程は調査区外となる。北東駿部に36号墳、尾根稜線を隔てた北側斜面に11号墳が配置する。斥陵東側に広がる水田面からの比高差は12.90mである。調査前の観察では、調査区西際の南斜面に階段状の平坦面が造成されており、墳丘状の高まりや周溝状の凹みなどは認められなかった。境界部に掘り入れたトレンチによって、斜面高位を削り南東側へ均しかなりの客土があることが明らかとなり、同時に整際で土師器椀２点が出土した。非常に混じりの多い客土のような埋土であったため、当初は古墳の埋葬施設と考え難かったが、表土除去後周溝の検出などによって古墳と判明した。なお、北側墳丘下にSK-18が検出されている。

〔墳丘〕

表土および流土下20cm弱で墳丘面を検出した。墳丘は耕作時の平坦面造成によって掘削、削平を受け、主体部北側で盛土は最大26cmを確認するにとどまる。周溝も北側で４m程を検出した程度である。旧地表面は観察されなかった。現況で、墳丘北側で標高26.43mを測る。墳丘の規模は、遺存する周溝や裾部の状況から径９m程度の円墳が推定される。墳丘の高さは南裾から1.53mを測る。

墳丘は斜面を利用し、北西側斜面高位に周溝を掘削して土を南東ほど盛りつくられたと推測される。

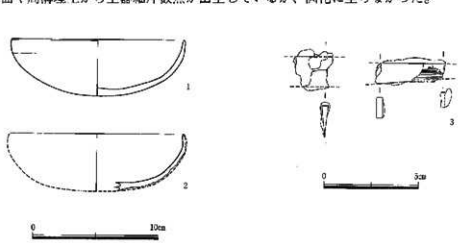
〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳丘中央よりやや北西寄りで検出した。西側壁面は調査区外で、墓壙上部は削平される。墓壙は盛土上から地山をかすかに掘り込む。墓壙平面は、遺存部分から隅丸長方形と想定される。墓壙の主軸は斜面の傾斜に直交方向のN-25°-Eとる。墓壙規模は、長さ2.94m、遺存幅1.05m、深さ27cmを測る。墓壙埋土の断面は軸に対し良好な状態で設定できなかったが、第118図第３・４層は棺の裏込め土とみられ、木棺直葬と考える。木棺の大きさは推定するに到らなかった。

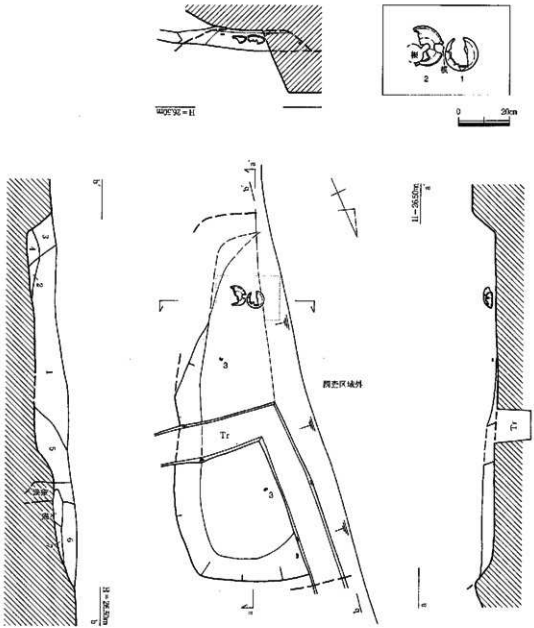
遺物は、南壁から46cm程離れた床面で土師器椀（１）（２）、その北側に刀子（３）が1.06mほど離れて、さらに北壁斜面で土器細片が出土した。（１）（２）は木棺の攪乱とトレンチ掘り下げ時に上部を削ってしまったが本来完形の椀であり、伏せて横位に並べた状況から上器枕と考えられる。（３）については、棺の攪乱などはなく、棺の陥没で動いた可能性はあるもののほぼ原位置を保っていると思われ、埋土からこれら以外に鉄片は出土していない。（１）（２）は径や高さなどの法量、形態ともほぼ同様で、（２）は丸味が強く口縁端部も内彎する傾向がみられる。（３）は関部を欠損するが、遺存する刀身や茎部から比較的大きめの刀子であったとみられる。

〔その他の出土遺物〕

墳丘検出面や周溝埋土から土器細片数点が出土しているが、図化に至らなかった。



第117図　No11南 横枕87号墳主体部出土遺物実測図



第118図　No.11南 横枕87号墳主体部実測図（S＝1：30）

2. その他の遺構、出土遺物の調査

No.11南　SK-02〔第7・119図、図版76〕

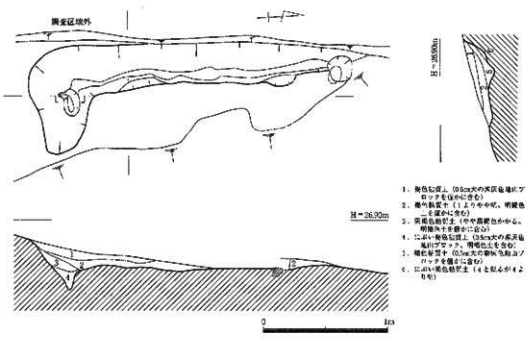
調査区北西端、11号墳の北西斜面上位の標高26.34～26.71mに位置する。北西端は調査区外となる。南東にSK-03が配置する。平面は現況L字状を呈し、北東側は急斜面となっており流失したとみられるが、コ字状であった可能性もある。主軸は斜面の傾斜に対し平行なN－2°－Wをとる。規模は、長さ2.70m、幅86cm、深さ40cmを測る。南北方向で溝状に深くなり、南北端に径20cm、深さ10cm余りの小ピットがみられる。一見して竪穴住居跡の壁溝のようであるが北東側は急斜面となっており、周辺にピットや遺物等は検出しなかった。

No.11南　SK-03〔第7・120図、図版76〕

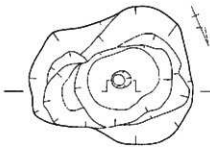
調査区北西端、尾根稜線より北東へ下る斜面の標高25.28～26.75mに位置する。北西2.5mにSK-02、南東7.5mにSK-18が、北東に11号墳、南に87号墳が配置する。土坑平面は東側が張り出す不整な楕円形状を呈し、主軸はN－77°－Wをとる。規模は、長軸1.26m、短軸1.10m、深さ1.27mを測る。断面は不整なU字状で、東壁で中位に階段状の段をとる。埋土は12層に分かれ、第1～6層については別遺構の可能性がある。底面中央で小ピットが検出された。長径15cm、短径13cm、深さ19cmを測る。遺物は何も出土しなかった。

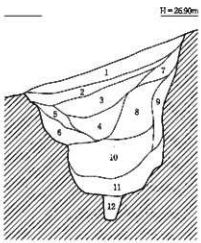
No.11南　SK-04〔第7・121図、図版2・4・76〕

調査区南側の南西に下る斜面、標高23.15～22.45mに立地する。南東に86号墳、南西に85号墳が配置する。耕作時に造成された平坦面によって上部は削平を受ける。土坑平面は隅丸長方形を呈し、主軸は斜面の傾斜に直交するN－46°－Wをとる。規模は、長軸82cm、短軸64cm、深さ60cmを測る。断面形はやや角張るU字状である。埋土は3層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。



第119図　No.11南 SK-02実測図（S＝1：30）

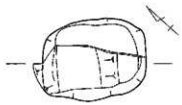


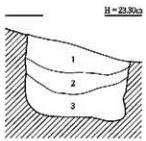


0　50cm

1．褐色粘質シルト（0.5cmの炭化土或山ブロックを微かに含む）
2．褐色粘質シルト（1.よりも暗色かある。しまる）
3．粘色粘土（3.よりやや軟）
4．褐色粘質土（3.よりも、炭化を微かに含む）
5．灰褐色粘質土（黒褐色かある。炭化を微かに含む）
6．灰褐色粘質土（1.2.5.6.、シルト質）
7．褐色粘質土（1.2.5.6.、ややシルト質）
8．灰褐色粘質土（4.よりも暗。炭化を含む）
9．灰褐色粘質土（ややしまる。褐色土を微かに含む）
10．灰褐色粘質土（0.5cm大の褐色土ブロック、炭化を含む。よくしまる）
11．灰褐色粘質土（10.よりも、褐色かかる。0.5cm大の炭化を多く含む。0.5cm大の褐色土ブロックを微かに含む。粘土ブしまらない）
12．褐色粘質土（0.5cm大の褐色土ブロック、炭化土を含む）

第120図　No.11南 SK-03実測図（S＝1：30）





0　50cm

1．にぶい灰褐色粘質土
2．褐色粘質土
（にぶい黄褐色粘質土、明褐色粘質土ブロックを含む）
3．灰褐色粘質土（明褐色粘質土ブロックを含む）

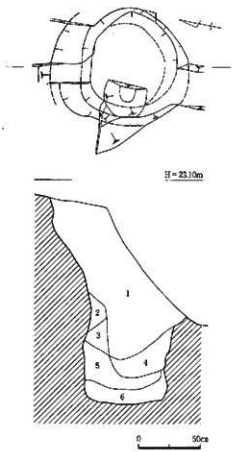
第121図　No.11南 SK-04実測図（S＝1：30）

No.11南　SK-05（第7・122図、図版77）

調査区南端の南西に下る斜面、標高21.31～22.96mに立地する。86号墳の墳丘下にあたり、北西5mの斜面上位にSK-04が配置する。耕作時に造成された平坦面によって上部南下半は大きく掘削される。土坑平面は不整円形を呈する。規模は長軸1.08m、短軸94cm、深さ1.56cmを測る。断面は壁面中位でややすぼまり上面で開く不整なU字状である。堀土は6層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

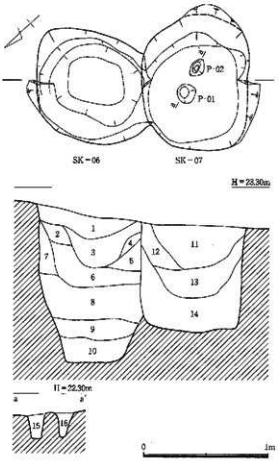
No.11南　SK-06（第7・123図、図版77）

調査区南、丘陵鞍部から南へ下る緩斜面、標高21.90～23.16mに立地する。丘陵鞍部中央に占地する36号墳の南裾部にあたる。周辺の南斜面一帯には土坑10基弱が集中し、SK-06は南西壁をSK-07に切られる。土坑平面は東がやや尖る不整な楕円形を呈する。主軸はN-49°-Eをとる。規模は、遺存長86cm、短軸86cm、深さ1.22mを測る。断面は不整なU字状で、壁中位まで広がりそこから直立気味に立ち上がる。堀土は10層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。



1．褐色砂質土（やや黒ずかかる）
2．褐色砂質土（1より明）
3．褐色砂質土（1より暗，よりやや密）
4．褐色砂質土（1よりやや暗，やわらかい）
5．にぶい褐色砂質土（やわらかい）
6．褐色砂質土（4よりやや暗，やわらかい）

第122図　No.11南 SK-05実測図（S＝1：30）



1．にぶい黄褐色砂質土（0.5cm大の明黄褐色土ブロック，褐色土を含む）
2．赤褐色粘質土（0.5cm大の暗灰色チャブロック）
3．にぶい黄褐色砂質土（1.5より暗，粘性，ややもろく少ない，しまる）
4．黄褐色砂質土（3cm大の明黄褐色土ブロック含）
5．赤褐色粘質土（4より少や明，粘性を増す）
6．にぶい黄褐色砂質土（褐色土の混入なし，よくしまる）
7．にぶい黄褐色砂質土（6より暗，明黄褐色土を所々に含む）
8．褐色粘質土（0.5cm大の明黄褐色ッブロックを含む，よく混じった土）
9．黄褐色砂質土（炭片を多く含む，ややシルト質，粘質層のような状態，広範囲）
10．黄褐色砂質土（9よりやや明るいかゞ，よくしまる）
11．にぶい黄褐色粘質土（0.5cm大の明灰褐色ッブロックを含む，ややシルト質，上部片々）
12．褐色砂質土（1cm大の黄褐色土ブロック，上層片々含む）
13．褐色砂質土（12よりやや暗，炭片を含む）
14．褐色粘質土（2～3cm大のにぶい黄褐色ッブロックを含む）
15．極にぶい褐色砂質土（明黄褐色粘質土を僅かに含む，ややシルト質）
16．黒褐色粘質土（明黄褐色土を含む，しまり弱い）

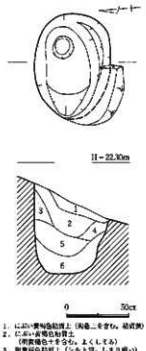
第123図　No.11南 SK-06・07実測図（S＝1：30）

No.11南　SK-07（第7・123図、図版77）

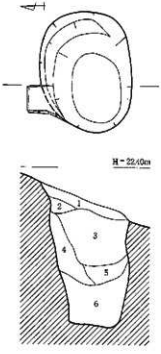
調査区南、丘陵鞍部から南へ下る緩斜面、標高22.15～23.10mに立地する。丘陵鞍部中央に占地する36号墳の南裾部にあたる。周辺の南斜面一帯には土坑10基弱が集中し、SK-07はSK-06の南西壁を切る。土坑平面はやや不整な楕円形を呈する。主軸はN-49°-Wをとる。規模は、長軸1.07m、短軸83cm、深さ84cmを測る。断面は底部がやや角張るU字状で、底面からほぼ同様な傾斜で直線的に立ち上がる。埋土は4層に分かれる。底面やや東寄りで小ピット2基を検出した。小ピットは6cm程の間隔をおき、径11～15cm、深さはともに19cmである。遺物は第11・12層中より縄文土器細片が20点ばかり出土している。いずれも体部片で、一部条痕および擦痕を観察するものが認められる。

No.11南　SK-08（第7・124図、図版77）

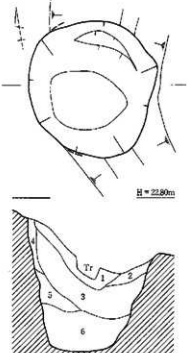
調査区南端、丘陵鞍部から南へ下る斜面、標高21.41～22.13mに立地する。丘陵鞍部中央に占地する36号墳の南裾一帯には土坑10基弱が集中するが、その中でも下位に位置する。西2mにSK-09、北側80



1. にぶい黄橙色粘土（褐色二を含む、硬質）
2. にぶい黄橙色粘土
（粘質橙色十を含む。よくしまる）
3. 明黄褐色粘土（シルト質、しまり弱い）
4. 黒褐色粘土
（黒褐色一を含かに含む、しまり弱い）
5. にぶい黄橙色粘土（ややもろい。1cm大の明黄橙色土ブロックを少々、黒色を微かに含む。よくしまる）
6. にぶい黄橙色粘土（ややもろい。明黄橙色土を含む。黒色を微かに含む。よく混じった土）



1. 灰褐色粘質土（2cm大の明黄褐色土ブロックを含む。0.5cm大の黒色ブロックを微かに含む）
2. 明黄褐色粘土（しまり強、ややシルト質。
（明黄褐色十を含む。黒色を微かに含む。しまる）
4. 明黄褐色粘土
（3cmまで明。0.5cm大の黒色土ブロック、褐色土を含む）
5. 黄橙色粘質土（3cmまで。3.5cm大の明黄色ブロックを微かに含む。黒色土を含む。3cmまり弱い）
6. 黄橙色粘質土（3cmまで明。0.5cm大の黒色土ブロックを含む。よくしまる）



1. にぶい黄橙色粘質土（1cm大の明黄橙色土ブロック、0.5cm大の黒色ブロックを微かに含む。黒色土を含む）
2. 明黄褐色粘質土（しまり強い。ややシルト質。
3. にぶい黄橙色粘質土（1cm大の明黄橙色土ブロックを多く含む。0.5cm大の黒色土ブロックを少かに含む。よく混じった土）
4. 明黄褐色粘質土（3cmまで明。しまり弱い）
5. にぶい黄橙色粘質土（3cmまで。0.5cm大の明黄橙色土ブロックを含む。こく色じった土）
6. 黄橙色粘質土（明黄褐色粘土を含む。よく混じった土。ブロック状でなくこくはえている）

第124図　No.11南 SK-08実測図（S＝1：30）

第125図　No.11南 SK-09実測図（S＝1：30）

第126図　No.11南 SK-10実測図（S＝1：30）

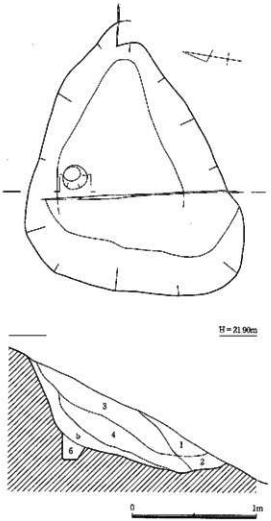
cm斜面高位にSK-17が配置する。土坑平面は楕円形を呈する。主軸は斜面に直交するN 88°-Wをとる。規模は、長軸84cm、短軸61cm、深さ68cmを測る。断面はU字状で、南壁中位および西底部でわずかに段をとる。底面北東寄りで小ピット状のわずかな凹みを検出した。長径18cm、短径16cm、深さ3cmを測り埋土は第6層と同様である。遺物は何も出土しなかった。

No.11南　SK-09（第7・125図、図版78）

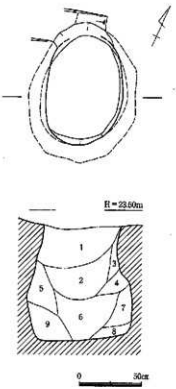
調査区南端、丘陵鞍部から南へ下る斜面、標高21.13～22.28mに立地する。丘陵鞍部中央に占地する36号墳の南裾一帯には土坑10基弱が集中するが、その中でも下位に位置する。東2mにSK-08、西1.7m SK-10が配置する。土坑平面は楕円形を呈する。主軸は斜面に直交するN-85°-Eをとる。規模は、長軸97cm、短軸73cm、深さ1.04mを測る。断面は底部が角張る不整なU字状で、北壁の立ち上がりは南に比べて緩やかで上面付近で段をとる。埋土は6層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.11南　SK-10（第7・126図、図版78）

調査区南端、稜線から南東へ下る斜面、標高21.58～22.64mに立地する。丘陵鞍部中央に占地する36号墳の南裾一帯には土坑10基弱が集中するが、その中でも下位に位置する。東1.7mにSK-09が、北東



1．黄橙色粘質土（2cm大の暗赤色土ブロック多，黒粒色土を局部的に含む，しまり弱い）
2．灰褐色砂質土（1よりやや明，しまり弱い，1のような赤こりが入し）
3．下層色粘質土（30cm入の有長褐色土，地色ややきめに含む）
4．黒褐色粘質土（明褐色ーブロックを僅かに含む）
5．明褐色砂質土（褐色土を含む，黒色粒土をごく入鉄に含む，しまり弱い）
6．褐色粘質土（褐色土を含む，しまり弱い）



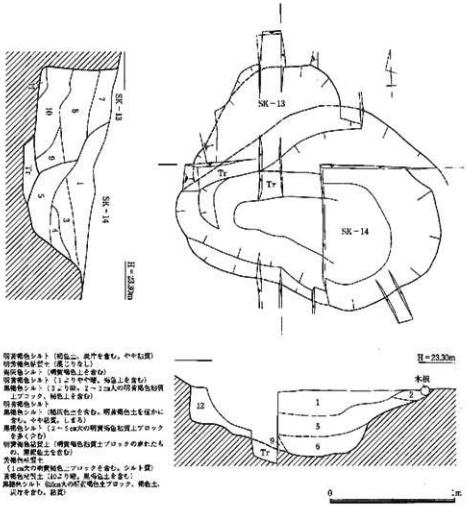
1．灰黄褐色粘質土（0.5cm大の灰色地山ブロック，0.5cm大の明黄褐色土ブロックを微かに含む）
2．灰赤褐色粘質土（1よりやや黄色かかる，2cm大の灰色粘土ブロック，1cm大の明黄褐色土ブロックを含む）
3．黄褐色粘質土（シルト質）
4．黒褐色粘質土（1より明）
5．にぶい黄褐色粘質土（2・6より明，明黄褐色土を含む）
6．灰黄褐色粘質土（1cm入の灰色粘土ブロックを僅かに含む，しまり弱い）
7．淡黄褐色粘質土（6よりやや明，黒粒を含む）
8．黄褐色砂質土（シルト質）
9．にぶい黄褐色粘質土（ややシルト質，しまり弱い）

第127図　No.11南 SK-11実測図（S＝1：30）　　**第128図　No.11南 SK-12実測図（S＝1：30）**

2.2mにSK-14が配置する。土坑平面はやや角張る不整円形を呈する。規模は、長軸1.07m、短軸98cm、深さ94cmを測る。断面は底部が角張る不整なU字状で、壁面には凹凸があり細かな段をとって立ち上がる。埋土は6層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.11南　SK-11（第7・127図、図版78）

調査区南西端、稜線から南東へ下る斜面、標高20.82～21.75mに立地する。丘陵核部中央に占地する36号墳の南裾一帯には土坑10基弱が集中するが、その中でも最も下位に位置する。急斜面に位置することから、南側は流失がすすむ。土坑平面は隅丸三角形である。　心の主軸は斜面に直交するN-82°-Eをとる。規模は、長軸2.12m、短軸1.73m、深さ69cmを測る。断面は椀状で、底面は南へ傾斜する。底面北側で、径19cm、深さ22cmを測る小ピットを検出した。埋土は6層に分かれ、斜面上位から流れ込んだ様相を示す。第3・4層は黒褐色粘質土であった。遺物は何も出土しなかった。



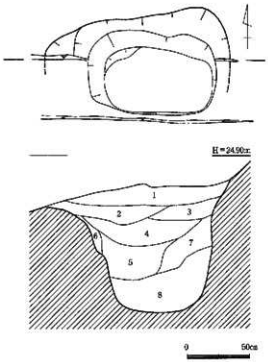
第129図　No.11南 SK-13・14実測図(S＝1：30)

No.11南　SK-12（第7・128図、図版79）

調査区南側、稜線から駿部への屈曲部南東斜面、標高22.46～23.38mに立地する。丘陵鞍部中央に占地する36号墳の南裾一帯に集中する土坑群の中では上位に位置する。南東30cmにSK-13が配置する。土坑平面は楕円形で、主軸は斜面に直交するN-20°-Wをとる。断面袋状となり、上面の規模は、長軸98cm、短軸60cm、深さ91cmを測る。上坑中位が最も広がり、その規模は、長軸1.12m、短軸85cmである。埋土は9層に分かれる。遺物は埋土中位から縄文土器細片2点が出土している。

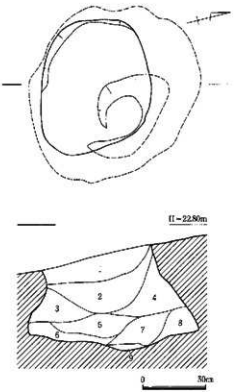
No.11南　SK-13（第7・129図、図版79）

調査区南側、稜線から駿部への屈曲部南東斜面、標高22.58～23.22mに立地する。丘陵鞍部中央に占地する36号墳の南裾一帯に集中する土坑群の中では北東上位に位置する。北西30cmにSK-12が配置する。SK-13は南側にSK-14が大きく上に重なり、南側の詳細は不明となり、南北断面から推定するにとどまる。土坑平面は楕円形と推定され、主軸は斜面に直交するN-24°-Eをとる。規模は、遺存長90cm、幅88cm、深さ56cmを測る。上坑断面は底面の角張るU字状と推定される。埋土は6層が確認され、第7・8・12層は黒褐色シルトであった。遺物は何も出土しなかった。



1. 表層黒色粘質土
2. 暗色粘質土（しまる）
3. にぶい黄褐色粘質土（0.2～5cmの焼土ブロックを微かに含む）
4. にぶい赤褐色粘質土（ややしまる。炭片を含む）
5. 暗褐色粘質土
6. 暗褐色粘質土（やややや軟。焼土ブロックを含む）
7. にぶい赤褐色粘質土（ややしまる。焼土ブロックを僅かに含む）
8. にぶい黄褐色粘質土（ややしまる。焼土ブロックを含む）

第130図　No.11南 SK-16実測図（S＝1：30）



1. にぶい黄褐色粘質土
（①褐色かかる。0.5～1cmの明黄褐色ナブロック、砂質土を含む）
2. にぶい黄褐色粘質土
（①よりも暗褐色で多く含む。0.5cm大の明黄褐色土を含む）
3. にぶい黄褐色粘質土（①～②と暗。明黄褐色やや顕著に含む）
4. 褐色粘質土（明黄褐色土を含む）
5. 褐色粘質土（②より明。1cm大の明黄褐色土ブロック、明黄褐色土を含む）
6. にぶい黄褐色粘質土（明黄褐色かかる。炭片を含む）
7. 黄褐色粘質土（④よりややかた。しまり悪い）
8. 黄褐色粘質土（0.5～3cmの紫黄褐色ナブロックを含む）

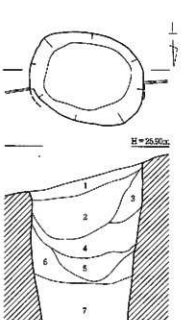
第131図　No.11南 SK-17実測図（S＝1：30）

No.11南　SK-14（第7・129図、図版79）

調査区南側、稜線から鞍部への屈曲部南東斜面、標高22.53～23.18mに立地する。丘陵鞍部中央に占地する36号墳の南裾一帯に集中する土坑群の中では北東上位に位置する。南西2.2mにSK-10、東1.8mにSK-07が配置する。SK-13の南側に大きく重なるが、東側は上位からの流土が著しく、検出の段階でトレンチやグリッドで掘り窪めた痕を残す。土坑平面は北側が広がる雫状不整な楕円形と推定され、主軸はN-80°-Wをとる。規模は、長軸2.11m、短軸1.56m、深さ52cmを測る。土坑の横断面は底面の尖る不整な椀状で、上部で屈曲して広がる。埋土は9層が確認され第5層は黒褐色シルトである。遺物は何も出土しなかった。

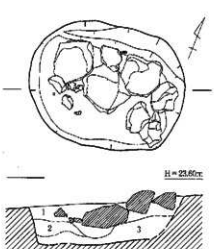
No.11南　SK-16（第7・130図、図版79）

調査区中央やや北寄り、稜線から鞍部への屈曲部北側斜面、標高23.66～24.71mに立地する。西側斜面高位に位置する80号墳の西裾部にあたる。土坑南側は墳丘検出の際のトレンチによって上部掘削される。平面は底面同様に隅丸長方形を呈するとみられる。主軸は稜線に平行するN-85°-Wをとる。規模は長軸1.48m、短軸84cm、深さ1.01mを測る。土坑の断面はU字状で、上面で屈曲して広がる。埋土は8層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。



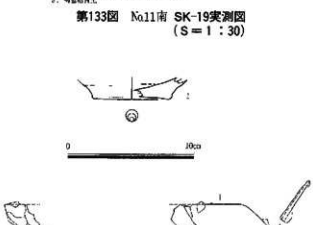
1. にぶい黄褐色砂質土（0.5cm大の黒色土ブロックを薄かに含む。粘性を帯びる）
2. にぶい黄褐色砂質土（1よりやや明。0.5cm大の黒色土ブロック、炭化物を多く含む）
3. にぶい黄橙色礫混土（1～3cm大の黒色土ブロックを含む）
4. 黒褐色砂質土（2・3よりも灰色がかる。しまり弱い）
5. 黒褐色粘質土（4よりも暗。ごまり弱い）
6. 黒褐色砂質土（5よりも明。粘土質粘性を有る。しまり弱い）
7. 暗灰色粘質土（明黄褐色土、6黒褐色土ブロックを含む。とくに粘土しまり弱い）

第132図　No.11南 SK-18実測図
（S＝1：30）



1. 褐色砂質土
2. 黄褐色粘質土（暗褐色土ブロックを含む）
3. 明黄褐色土

第133図　No.11南 SK-19実測図
（S＝1：30）



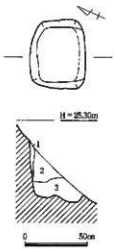
第134図　No.11南 SK-19出土遺物実測図

No.11南　SK-17（第7・131図）

調査区南側、丘陵鞍部から南へ下る斜面、標高21.80～22.64mに立地する。丘陵鞍部中央に占地する36号墳の南裾一帯に集中する土坑群の中では中位に位置する。南80cmにSK-08、北西2.1mにSK-07が配置する。平面は不整な楕円形を呈し、主軸は斜面に直交するN-74°-Wをとる。断面袋状となり、上面の規模は、長軸1.04m、短軸87cm、底面で長軸1.04m、短軸1.35mを測る。深さは80cmを測る。底面は東側がやや凹む。埋土は9層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

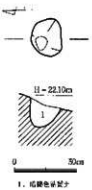
No.11南　SK-18（第7・132図、図版2・4・80）

調査区西端、稜線からやや南東に下る斜面、標高24.33～25.77mに立地する。87号墳の墳丘下に位置する。5m北西の稜線を越えた北東斜面にSK-03が配置する。土坑北側は墳丘検出の際のトレンチによって上部掘削される。平面は楕円形を呈し、主軸は斜面傾斜に平行でN-75°-Wをとる。土坑規模は、長軸94cm、短軸70cm、深さ1.34mを測る。断面は底面でしっかり角をとる逆台形である。埋土は7層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。



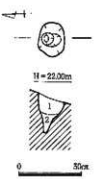
1．砂質土粒質土（古代かかる）
2．明褐色粘質土（0.5cm以内の粒子ブロックを含む）
3．にぶい黄褐色粘質土（0.5～1cmの粒子ブロックを多量に含む。赤褐色粒子を多く含む）

第135図　No.11南 SK-20実測図
（S＝1：30）



1．暗褐色砂質土

第136図　No.11南 P-01実測図
（S＝1：30）



1．暗褐色粘質土
2．褐色粘質土

第137図　No.11南 P-02実測図
（S＝1：30）

No.11南　SK-19（第7・133・134図、図版80・123）

調査区中央部、丘陵鞍部から南へ下る斜面、標高23.08～23.46mに立地する。丘陵鞍部中央に占地する36号墳の南裾部にあたる。南西3.5mにSK-06が配置する。上坑平面は楕円形を呈する。主軸は斜面に直交するN-80°-Eをとる。規模は、長軸1.24m、短軸98cm、深さ32cmを測る。断面は逆台形状で、東壁はやや緩やかな立ち上がりである。埋土は3層に分かれる。土坑北側の第1層中に15～40cm大の角礫を検出した。角礫は上下に重なることはなく、並べた様子もみられない。遺物は角礫間から土師器杯底部（1）、刀子の切先部（2）、鎌（3）が出土した。（1）は復元底径5.9cm、糸切り痕が観察される。（2）は切先先端は丸い。（3）は鎌の彎曲部分とみられ、背側で角をとる。周辺の南斜面一帯には土坑が集中するが、それらとはやや様相を異とし、古墳より下る時期と考えられる。

No.11南　SK-20（第7・135図）

調査区南東、稜線から南へ下る斜面、標高24.65～25.15mに立地する。82号墳の墳丘南東斜面に位置する。南側ほど大きく削平もしくは流失を受け浅くなる。上坑平面は隅丸長方形を呈し、主軸はN-66°-Eをとる。規模は、長軸54cm、短軸44cm、深さ36cmを測る。断面は逆台形状で、底面は凹凸がみられ南へ傾斜する。埋土は3層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.11南　P-01（第7・136図）

調査区南端、稜線から南西へ下る斜面、標高21.85～22.07mに立地する。西2.3mに同様な規模のP-02が配置する。85号墳の墳丘南側に位置し、耕作の平坦面造成の際の段付近にもあたる。規模は、長径30cm、短径24cm、深さ21cmを測る。埋土は1層で、遺物も出土しなかった。

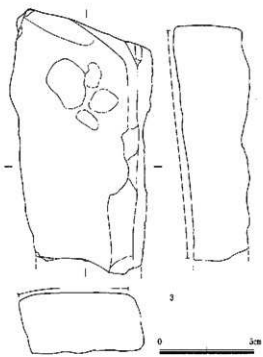
No.11南　P-02〔第7・137図〕

調査区南端、稜線から南西へ下る斜面、標高21.60～21.92mに立地する。東2.3mに同様な規模のP-01が配置する。85号墳の墳丘南側に位置し、耕作の平坦面造成の際の段付近にもあたる。規模は、長径27cm、短径21cm、深さ20cmを測る。埋土は2層で、底部へ向けて尖る。遺物は何も出土しなかった。

No.11南　遺構外の出土遺物〔第138～140図、図版80・123〕

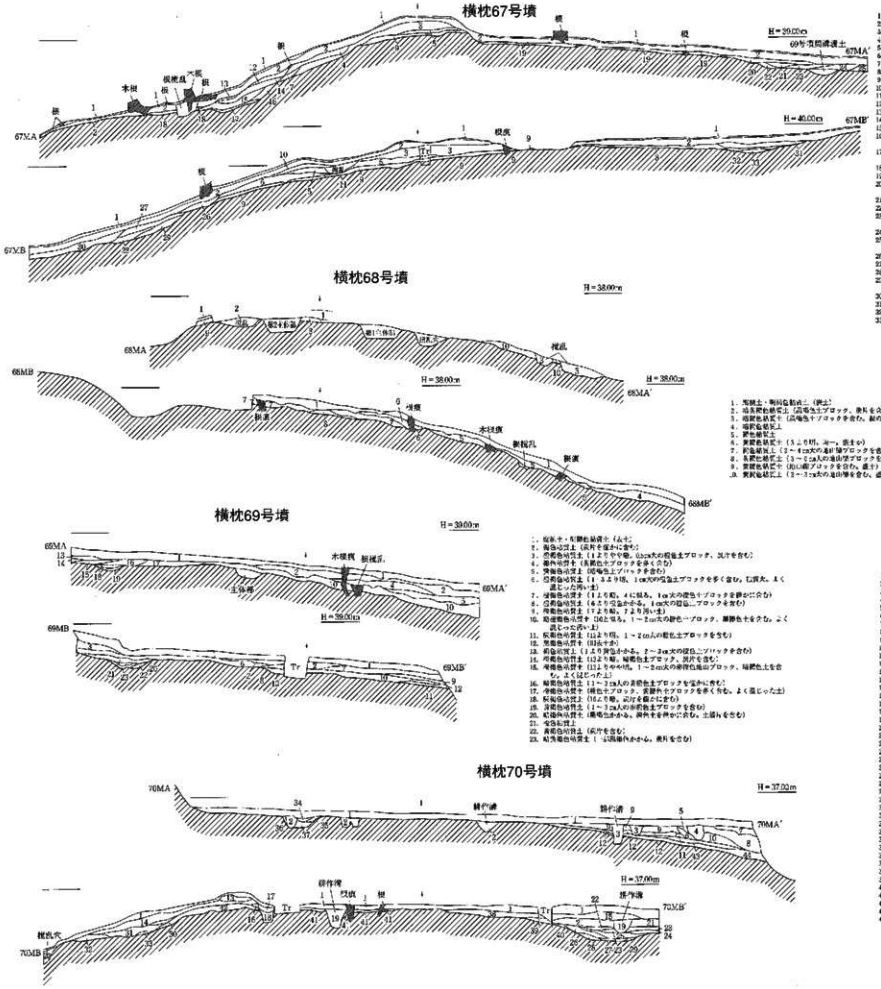
遺構外の出土遺物として、36号墳の周辺や調査区東側斜面で須恵器や土器細片などが出土している。主に表土中の出土であり、点数としてはそう多くはなく、中には鋼製の煙管の焚口部分など新しい遺物も含まれる。このうち調査区北側の、稜線から鞍部への屈曲部北側斜面、標高23.33m付近のほぼ地山面で比較的大きめの縄文土器片(1)(2)が出土している。36号墳の北側周溝から1mの位置である。深鉢(1)は口径31.5cmが推定され、内外面条痕後工具で軽く削る。鉢(2)は口縁部で強く内彎し、外面に沈線間に縄文を観察する。砥石(3)は36号墳の北側斜面の表土中より出土したもので、一面にわずかに擦痕が認められる。

第138図　No.11南　縄文土器出土状況実測図(S＝1：20)

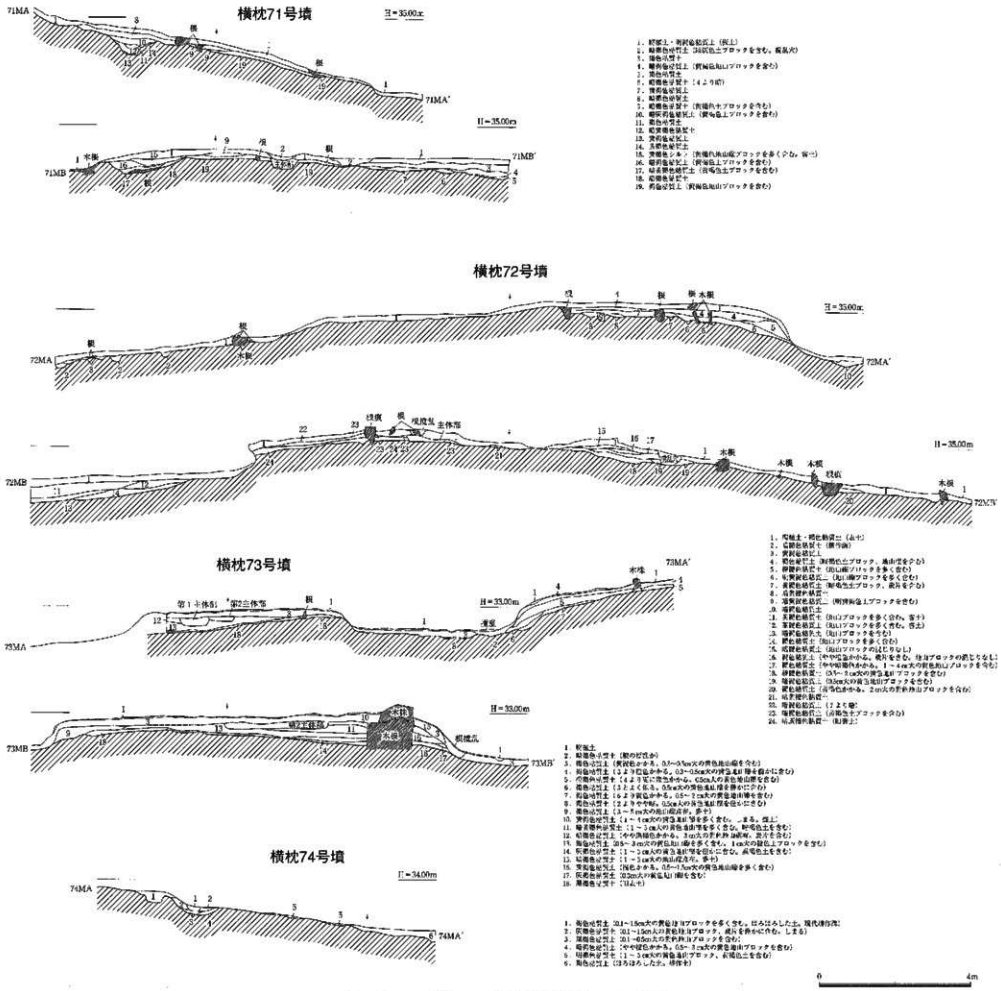


第140図　No.11南　遺構外出土遺物実測図(2)

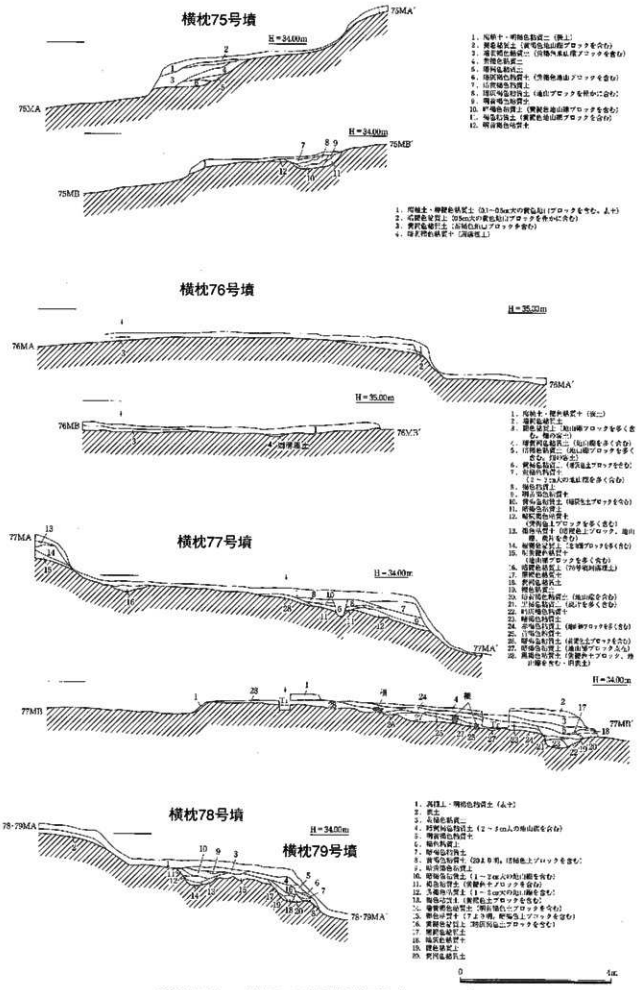
第139図　No.11南　遺構外出土遺物実測図(1)



第141図　No.12 横枕67～70号墳墳丘断面図（S＝1：100）



第142図　No.12 横枕71～74号墳墳丘断面図（S＝1：100）



第143図　№12 横枕75～79号墳墳丘断面図（S＝1：100）

第５節　横枕No.12区の調査

1. 横枕67～79号墳の調査

横枕67号墳（第５・８・141・144～146図、図版５・12・82・83・124）

〔位置と現状〕

横枕67号墳は調査区北西端に位置し、西から伸びる丘陵の稜線頂部からやや北東寄りの標高37.00～39.54mに立地する。南に69号墳、南東に68号墳が隣接する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は22mを測る。調査前の観察では、稜線頂部にあたる部分は東側平野部へ向けての眺望が開け、立地的に古墳の存在が予想された。ただ、調査区北半分の西側は階段状の平坦面に造成されて、稜線頂部西側は大きく改変されており、墳頂部とみられる部分にも無数の根掘り穴が認められた。古墳の形、規模などは予測できなかった。掘削された段を利用したトレンチにより、古墳の存在が明らかとなった。

〔墳丘〕

表土下10～25cm前後で墳丘面を検出した。古墳の墳丘南西側はコ字形に大きく改変されていたが、北側については比較的良好な遺存状況であった。墳頂部で標高39.54mを測る。盛土は墳頂部で36cm、北東斜面で28cmが遺存する。南西は旧地表および地山面まで掘削しており、南東側裾部も確認できなかった。旧地表面は北東墳丘下で確認され、北側斜面裾部分については造成前に流失していたか、地山成形および盛土する際に上方から掻き出したとみられる。主体部の墓壙の深さを考慮した場合、遺存する墳丘についても上部流失しているものとみられるが、墳丘は東西方向にやや長い方墳で、墳丘規模は、西側周溝底から東側裾間で16.1m、北側裾から南裾間で15m弱と推測される。墳丘の高さは、2.54mを測る。

墳丘は主に地山を大きく掘削して形を造り出しており、尾根高位の西および南西に3.5m程の溝を掘削することで尾根と切り離し墓域を区画している。盛土は斜面低位の北東側から盛土しており、墳頂部で36cm、北東斜面で28cmの盛土が遺存する。なお、東側に配置する68号墳との関係は、十層断面から確認はできなかったが、南東側の墳丘を一部掘削しており、位置関係からも68号墳が後出と考えられる。

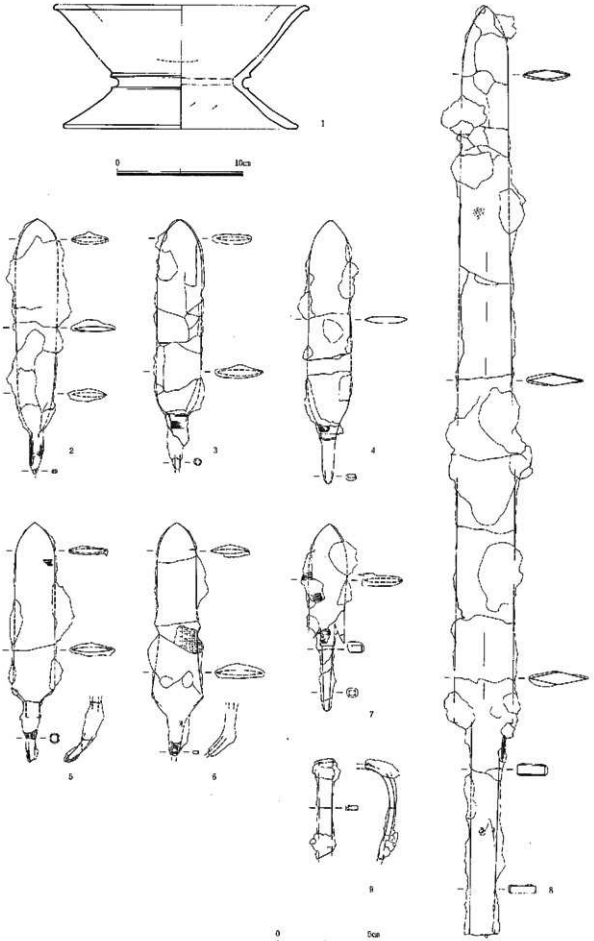
〔埋葬施設〕

埋葬施設は、墳丘の中央部やや北西寄りで検出した。墓壙の北東６分の１程を除き南西側は平坦面造成の際に大規模な削平を受け、わずかに６cm前後の深さが遺存する程度であり、遺存する墓壙の北東６分の１程についてもやや上部を削平されているとみられる。平面形は隅丸長方形である。墓壙の主軸は斜面に平行するN-66°-Wをとる。墓壙の規模は、現況で長さ4.45m、幅1.67m、深さ69cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、木棺の痕跡が確認された。第145図の第４・８・14層は棺の裏込め土とみられる。木棺の大きさは断面から推定して幅45cm程度と考えられる。

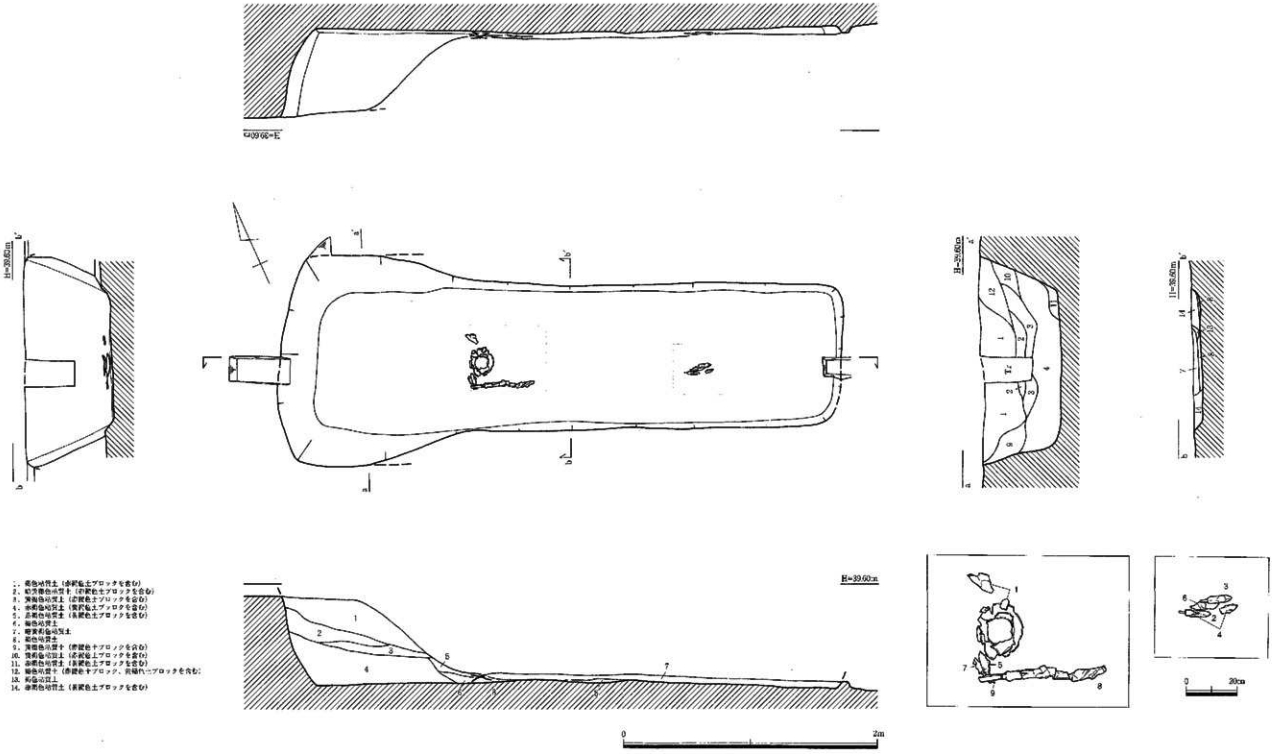
遺物は北東壁から1.2m離れた床面で、鼓形器台（１）、その南西側に鉄鏃（５）（７）と鉄剣（８）、器台（１）から1.5m南東に鉄鏃（２）（３）（４）（６）を検出した。（１）は土圧で潰れ根の攪乱を受け遺存状態は劣悪であったが、出土位置と打欠きから土器枕と考えられる。鉄剣（８）は被葬者の右側に剣先を足元へ向けて置き３点の鉄鏃を右頭部に置き、残り４点を足元に置く。東部の鉄鏃については元々鏃身部のみの副葬であったと考えられる。（１）は遺存状態が悪く受部は復元できるが、脚台部に対し受部が大きく、底端部および口縁部はそれほど引き伸ばしされることなく鈍く終える。鉄鏃は（７）を除いて鏃身部９～11cm前後と人型で、それぞれ少しずつ形態の異なる柳葉形である。（７）はやや小型で柳葉形、逆刺をもつ。（２）（３）（４）は明確な関部を持たずなだらかに茎部へ続き、（５）（６）は山形関である。（６）は鏃身部の中央に山形の突出部を持つ。鉄剣（８）は全長48.9cmを測り、刀身に鎬をもつ。茎部に目釘孔１をもち責金具（９）が出土している。

〔その他の出土遺物〕

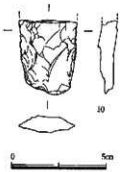
北東表土中よりサヌカイト製の打製石器（10）が出土している。石槍の基部とみられ先端側は欠く。



第144図　№12 横枕67号墳主体部出土遺物実測図



第145図　No.12 横枕67号墳主体部実測図（S＝1：30）



第146図　No.12 横枕67号墳表土出土遺物実測図

横枕68号墳（第5・8・141・147～150図、図版5・84・85・124）

〔位置と現状〕

横枕68号墳は調金区北側に位置し、西から伸びる丘陵の稜線頂部からやや北東寄りの斜面、標高36.18～37.72mに立地する。西に67号墳、南西に69号墳、南に70号墳が隣接する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は21.18mを測る。調査前の観察では、67号墳の東側斜面低位にテラス状のわずかな平坦面が観察され、位置的に67号墳に付随する埋葬施設が存在する可能性が考えられた。ただ、周辺は木根掘り起こしの撹乱穴が随所にみられ、北東側は急斜面となっており、はっきりとした高まりや周溝状の凹みは確認できなかった。67号墳東側裾検出時に東へ延びる溝および第1主体部の墓壙の検出から古墳と判明した。

〔墳丘〕

表土下6～25cm前後で墳丘面を検出した。古墳の墳丘南側は耕作時の平坦面造成で掘削されていた。周溝の遺存状況からも、東側は流失がすすむ。盛土は第2主体部東側で最大26cmを確認したに過ぎず、旧地表面も観察されなかった。墳丘は第1主体部南の標高37.72mを測る。主体部の墓壙の深さを考慮した場合、遺存する墳丘についてももう少し盛土が存在したとみられる。墳丘は西側の周溝の形態を考慮した場合径10mの円墳が考えられるが、撹乱穴や流失および立地を考慮した場合、南北10mの方墳とみた方が妥当と思われる。墳丘の高さは、1.54mを測る。

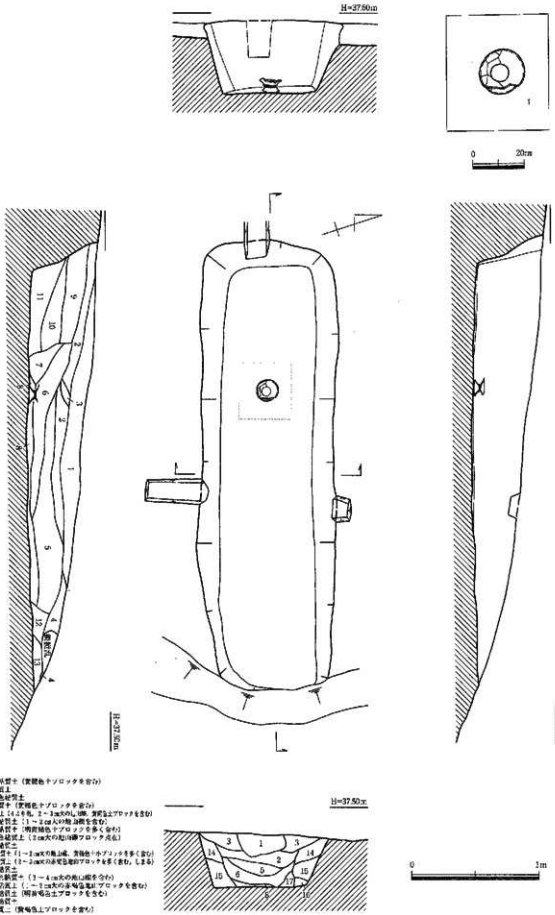
墳丘は主に西側斜面高位に溝を掘削して東側へ盛り墳丘をつくりだしているとみられ、裾部の地山掘削は確認できなかったが、地形を利用して元々そう大きな盛土はなされなかったものと考えられる。なお、西側に配置する67号墳との関係は、土層断面から確認はできなかったが、67号墳の南東側の墳丘を一部掘削しており、位置関係からも68号墳が後出と考えられる。また、南に配置する70号墳は68号墳の南を切っており、出土遺物の検討からも70号墳が後出と考えられる。

〔埋葬施設〕

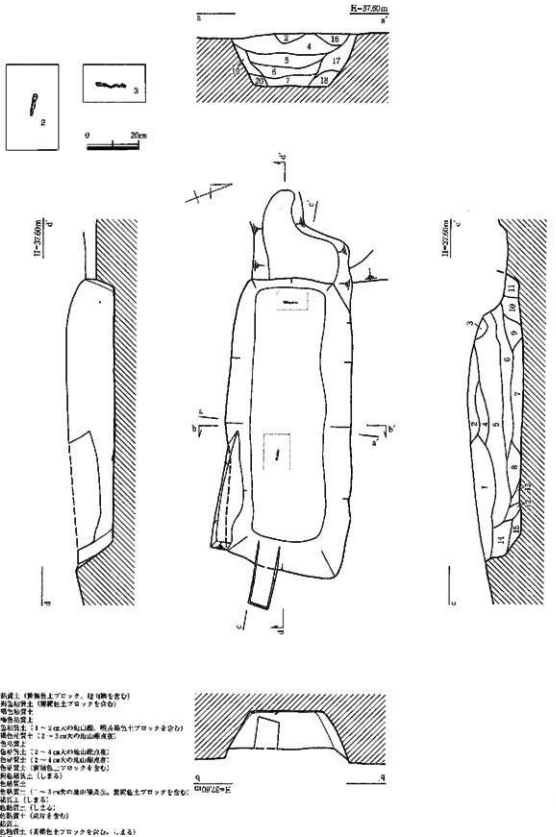
埋葬施設は、墳丘西寄りで斜面傾斜に対し平行して横位に並ぶ2基を検出した。このうち第1主体部は墳頂部西側中央部に位置し、第2主体部は第1主体部から1.3m南に離れて南側斜面高位側に並列する。位置関係や墓壙規模などから第1主体部が中心埋葬であることが明らかである。

第1主体部（第147・149図、図版84・85・124）

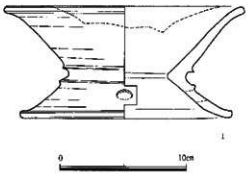
墳丘平坦面の西側中央部で検出した墓壙の東壁は後世の根掘り穴によって掘削される。墓壙は盛土上から地山面を深く掘り込んでいる。平面は隅丸長方形を呈する。墓壙の主軸は丘陵斜面の傾斜に平行し、67号墳の主体部と平行するN-71°-Wをとる。墓壙の規模は、現況で長さ3.58m、幅1.05m、深さ51cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、木棺の痕跡が確認された。第149図の第9～16層は棺の裏込め土とみられる。木棺の大きさは断面から推定して長さ1.9m、幅40cm、深さ35cm程度と考えられる。



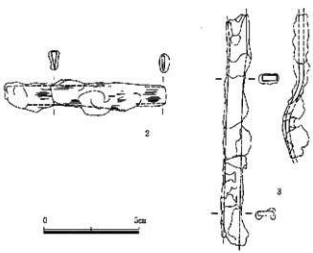
第147図　No12 横枕68号墳第１主体部実測図（Ｓ＝１：30）



第148図　No.12 横穴68号墳第２主体部実測図（Ｓ＝１：30）



第149図　No.12 横枕68号墳第１主体部出土遺物実測図



第150図　No.12 横枕68号墳第２主体部出土遺物実測図

遺物は西壁から1.9m離れた床面で鼓形器台（１）を検出した。受部の一部は打ち欠きされ、出土位置から土器枕と考えられる。（１）は脚台部に対し受部は大きく開き、高さがやや押さえ気味である。全体的に肉厚で、口縁端部および底端部は外方への伸びがみられない。脚部に円孔１が穿孔される。受部打ち欠きもやや浅めである。

第２主体部（第148・150図、図版85・124）

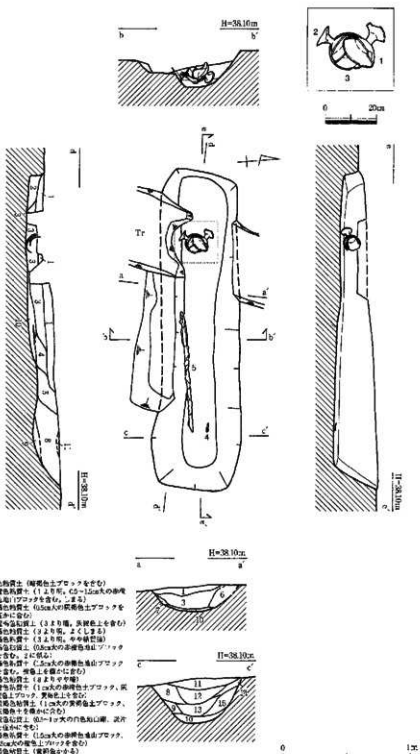
墳丘平坦面の南西部で検出した。墓壙の西壁は後世の根掘り穴によって掘削される。墓壙は盛土上から地山面を深く掘り込んでいる。平面は隅丸長方形を呈する。墓壙の主軸は丘陵斜面の傾斜に平行および第１主体部に平行するN-68°-Wをとる。墓壙の規模は、現況で長さ2.34m、幅1.00m、深さ43cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、木棺の痕跡が確認された。第150図の第11・14・15・17～20層は棺の裏込め土とみられる。木棺の大きさは断面から推定して長さ1.65m、幅30cm、深さ35cm程度と考えられる。

遺物は東壁から63cm離れた床面で刀子（２）、西壁から11cm離れ床面から10cm程浮いて鏃と推定される鉄器（３）を検出した。（３）は棺の裏込め土中の出土である。（２）は全体が銹化して木質に覆われ明確な形態が不明瞭であるが、全長8.4cmと小型である。（３）は長方形の断面から茎部で、一部が彎曲する。

横枕69号墳（第5・8・141・151～153図、図版5・85・86・124・125）

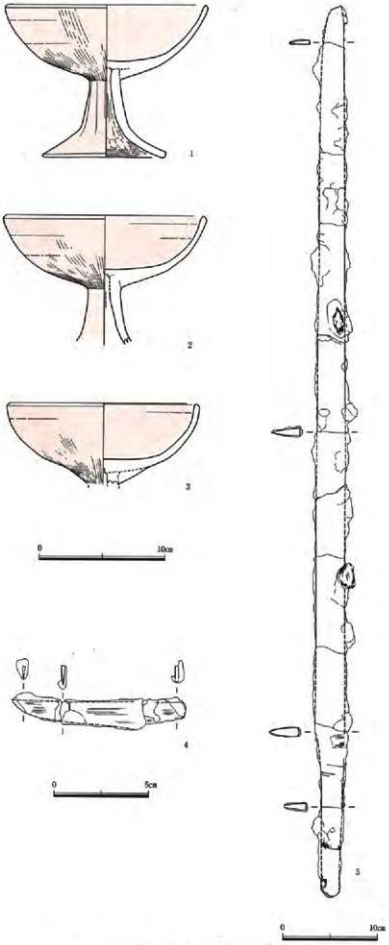
〔位置と現状〕

横枕69号墳は調査区北側に位置し、西から伸びる丘陵の稜線やや西寄りの標高37.21～38.15mに立地する。北に67号墳、南東に70号墳、北東に68号墳が隣接する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は22.21mを測る。調査前の観察では、67号墳の南東部に8×20m程の平坦面が広がり、その平坦面の南東側は1.5m程の段差をとって同様な平坦面に改変され、東側はさらに大きく掘削されて崖状に堕ちて



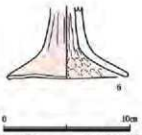
1. 橙色粘質土（暗褐色土ブロックを含む）
2. 明橙色粘質土（1より明、0.5～1.5cm大の赤褐色砂ブロックを含む、しまる）
3. 橙褐色粘質土（0.5cm大の灰褐色土ブロックを混ぜて含む）
4. 暗橙褐色粘質土（3より暗、灰褐色土を含む）
5. 橙褐色粘質土（3より明、よくしまる）
6. 橙褐色粘質土（3より明、やや軟質）
7. 橙褐色砂質土（0.5cm大の赤褐色砂山ブロックを含む、よく締まる）
8. 橙褐色粘質土（0.5cm大の赤褐色砂山ブロックを含む、明色土を微かに含む）
9. 橙褐色砂質土（4よりやや暗）
10. 黄褐色砂質土（1cm大の赤褐色土ブロック、灰褐色土ブロック、黄褐色土を含む）
11. 明褐色砂質土（1cm大の黄褐色土ブロック、灰褐色土を微かに含む）
12. 明褐色砂質土（0.5～3cm大の白色砂山礫、炭片を含むこともある）
13. 褐色砂質土（1.5cm大の赤褐色砂山ブロック、0.5cm大の褐色土ブロックを含む）
14. 灰褐色砂質土（炭粉を含かる）
15. 暗褐色砂質土（13より暗、赤褐色土、炭片を含む）

第151図　No.12 横枕69号墳主体部実測図（S＝1：30）



第152図　No.12 横枕69号墳主体部出土遺物実測図

いた。面的には小規模な古墳であれば立地可能に思われたが、南西側はかなりの客土を行って平坦面を造成しており、現状で古墳状の高まりや周溝上の凹み等は全く観察されず、旧地形の確認のため掘り下げたトレンチに溝や高杯が出土したことから、古墳と判明した。



第153図　№12 横枕69号墳周溝出土遺物実測図

〔墳丘〕

墳丘は既に上面を大きく削平されており、南東および南西側は完全に掘削され弧状の周溝から北東部４分の１程度が遺存する状態である。表土、流土および客土下20～35cm前後で地山面が露出した。わずかに古墳南東部の崖付近で旧地表と盛土８cmがわずかに遺存する程度であった。北側で地山に掘り込まれた深さ15～28cmの周溝底部付近が弧状に検出された。周溝の径から、12mから最大で南東に位置する70号墳同様の径15m前後が推定される。ただ径15mとなると70号墳と大きく重複することから70号墳より規模は小さく径13m前後と考えられる。墳丘の最高所は第１主体部南の標高37.21mを測る。主体部の墓壙の深さを考慮した場合、遺存する墳丘についても数10cmは盛土が存在したとみられる。現状で墳丘の高さ94cmを測る。

墳丘は地形を利用し、主に北西側斜面高位に溝を掘削して南東側へ盛土し墳丘を造り出しているとみられる。なお、67号墳、70号墳との関係は、土層断面から確認はできなかったが、出土遺物から67号墳、70号墳より後出と考えられる。

〔埋葬施設〕

墳丘北側寄りで斜面の傾斜に対し直交方向の軸をもつ埋葬施設１基を検出した。墓壙はわずかに検出した盛土中から地山面を掘り込んでいる。平面は隅丸長方形を呈し、主軸はN-85°-Wをとる。規模は長さ2.54m、幅71cm、深さ36cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、明瞭な木棺痕跡は認められなかった。墓壙横断面は椀状で底部の凹みの状況から直葬の可能性が考えられる。

遺物は、西壁から45cm離れた床面で高杯３点（１）（２）（３）が組み合わさった状態で出土した。（３）の脚部を欠き、杯部内に完形の（１）（２）を重ね入れ、東側に開口する空間がみられる。土器枕と考えられる。土器枕から１m程離れた被葬者の右手側には長さ93.6cmの鉄刀（５）が切先を足元側へ、刃部を墓壙壁へ向けて安置される。さらに鉄刀（５）の切先から10cm離れて刀子（４）が切先を（５）同様東へ向けて出土している。赤彩された（１）（２）（３）は同様な形態および法量で、土器枕の受けに使用された（３）は他よりやや杯部深く口縁部の彎曲も強めで全体的に肉厚である。（４）は全長9.2cmを測り、全体が銹化して鞘や柄の木質に覆われ明確な形態が不明瞭である。（５）は銹化して関部の形状が不明瞭である。刀身は切先へ向けて徐々に幅や厚みを減じ切先は丸い。茎部に目釘孔１を確認、木質や巻締痕も観察される。

〔その他の出土遺物〕

北側周溝から高杯脚部（６）が出土している。脚部完存で、土器枕に使用された（３）と接点はないものの同一個体である可能性が大きい。赤彩され、脚柱部外面工具ナデ、脚裾部内面は成形時の指頭圧痕が顕著である。

横枕70号墳（第５・８・141・154～159図、図版５・12・87・88・89・125）

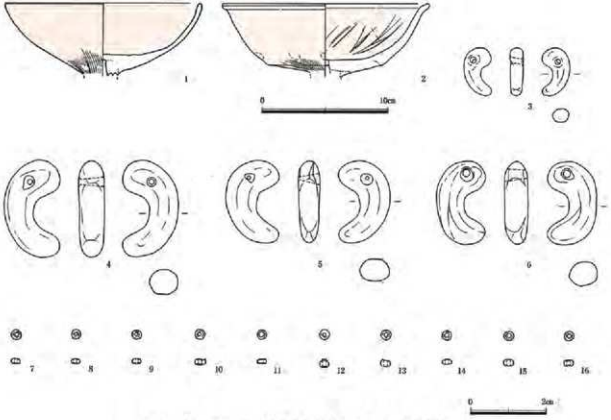
〔位置と現状〕

横枕70号墳は調査区北側に位置し、西から南東へ下る丘陵のほぼ稜線上、標高35.18～36.59mに立地する。北東に68号墳、北西に69号墳、南に71号墳が重複する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は20.18mを測る。調査前の観察では、69号墳の位置する平坦面の1.5m下段に10×14mの平坦面が広がり、その南西および南西側は１m弱の崖となり再び平坦面へと続く。稜線より北東寄りの斜面側では自然地形が遺存する。10×14mの平坦面は斜面高位側が地山面を大きく掘削しており斜面低位側に大量の客土が行われ平坦面に造成されていた。改変が著しいため、現状では古墳状の地形は全く認められなかった。旧地形の確認のため掘り下げたトレンチに周溝状の溝が検出したことから、古墳の存在が明らかとなった。

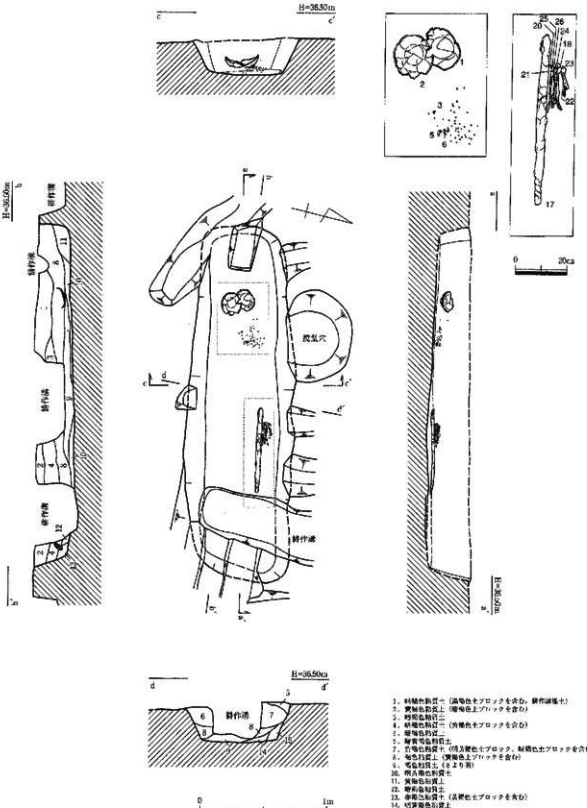
〔墳丘〕

墳丘は既に上面を大きく削平されており、表土下15cm前後で地山面が露出し、加えて直線あるいは円弧状の溝が錯綜していた。北側斜面高位の弧状の周溝と、南側斜面低位に旧地表面と10cm弱の盛土が遺存する状態であった。東裾部もやや流失してはいるがその形を留めており、完全に掘削されているのは南東側と南西側の崖による掘削である。弧状の周溝は北側で地山に掘り込まれた深さ20～30cm程度、全体では５分の２程度が確認された。周溝の径から、古墳規模は15m前後の円墳が復元される。現状で墳丘の高さ1.41mを測る。

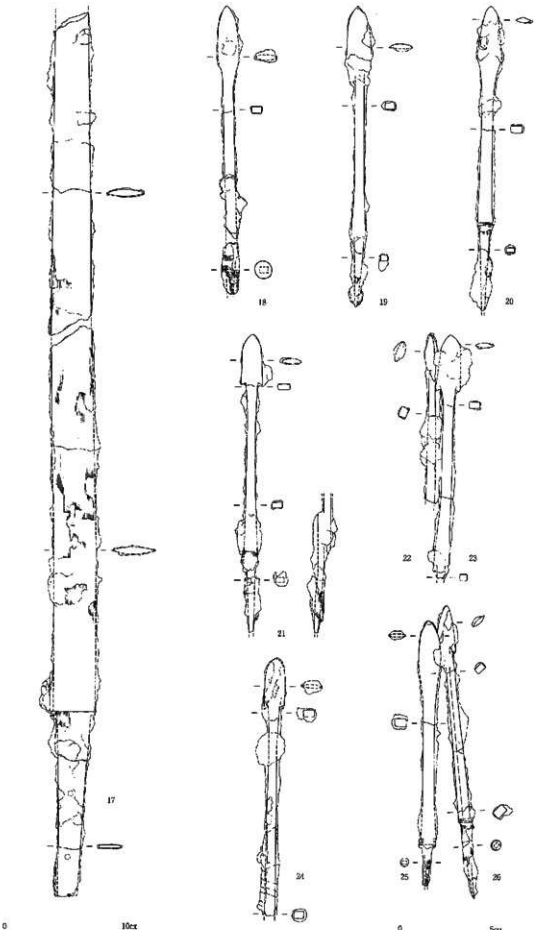
墳丘は地形を利用し、主に北西側斜面高位に溝を大きく掘削して南東側へ盛土し墳丘を造り出していると みられる。なお、68号墳、69号墳、71号墳との関係は、土層断面から確認はできなかったが、出土



第154図　No12 横枕70号墳主体部出土遺物実測図（１）



第155図　No.12 横枕70号墳主体部実測図（S＝1：30）



第156図　No.12 横枕70号墳主体部出土遺物実測図（2）

遺物から68号墳、69号墳より後出と考えられる。71号墳との関係は捉えられなかったが、南東裾部が71号墳の北側周溝周辺にくることから、墓面の土層や周溝埋土の状況を考慮すると71号墳が後出であった可能性が考えられる。

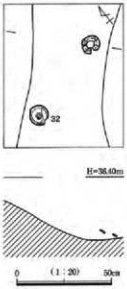
〔埋葬施設〕

墳丘北側寄りで斜面の傾斜に対し直交方向の軸をもつ埋葬施設1基を検出した。墓壙の上面および北側にかけて肥料穴とみられる円弧状の溝が掘り込まれており、両端部を中心として墓壙の両所を掘削されていた。墓壙は地山面を深く掘り込んでおり、平面は隅丸長方形を呈する。主軸は斜面の傾斜に直交するN-76°-Eをとる。規模は現状で長さ2.82m、幅85cm、深さ30cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、明瞭な木棺痕跡は認められなかった。

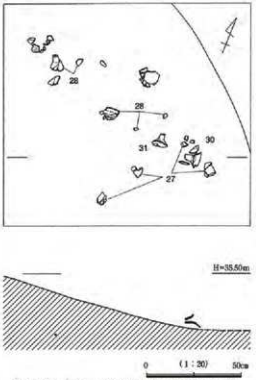
遺物は、西壁から45cm離れた床面からやや浮いた状態で高杯2点(1)(2)が組み合わさった状態で出土した。(1)(2)はともに脚部を欠き、杯部内面を上に向け口縁部が5～6cm重なり凹むように組み合わせ、かつ東側へ傾いた出土である。高杯から北東30cm付近に玉類が集中することや位置的にみても、これらの高杯は土器枕と考えられる。玉類は、小玉で10cm程度の比高差が認められるものの、20cm内外の範囲に集中しており、並んだ勾玉の出土状態から埋葬時を比較的反映しているとみられ、被葬者の胸部を飾ったと考えられる。さらに被葬者の左手側には、切先方向を頭位側へ向けた鉄剣(17)、その外側に同様に鏃身部を頭位側へ向けた鉄鏃8点が整然と並んだ状態で検出された。(1)(2)はともに赤彩され、杯部の形態がやや異なり、(1)は杯部椀形、(2)は有段で、杯底部から屈曲して彎曲しながら立ち上がり口縁部で外方へ屈曲して伸びるやや珍しい形態である。(2)の口縁部に引き伸ばしがみられたため口径に違いがあるが、杯部内の丸味や外形の高さもほぼ同様である。(2)には内面に放射状の暗文が施される。玉類は、勾玉、小玉の組み合わせで、勾玉5点、ガラス小玉175点余りが出土している。勾玉は大きく大小に分かれ、(4)(5)(6)の大が瑪瑙製、(3)の小がガラス製である。なお、脆弱で図化できなかったが、(3)に類似したガラス製勾玉1点が出土している。ガラス小玉は良く似た法量、色調で、このうち(7)～(16)を図化した。鉄剣(17)は切先を欠くものの、遺存長69.4cmを測り、剣身部の鎬は不明瞭である。直角の関部で茎部に目釘孔2を確認する。全体に鞘、柄木質が遺存する。鉄鏃(18)～(26)は、鏃身部の平面が長三角形で長さも同様な長頸鏃で、鏃身関部に形態差が認められる。茎部に木質および巻締痕が観察される。

〔その他の出土遺物〕

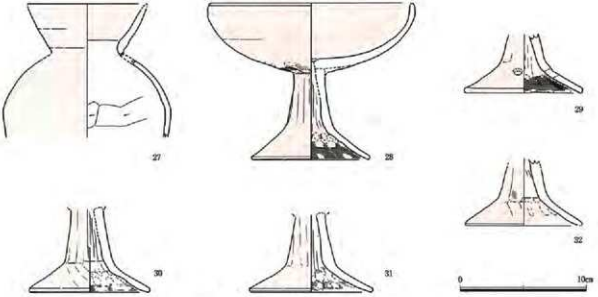
北側周溝から高杯脚部2点が35cmほどの距離を置いて出土している。土器枕に使用された(1)(2)と接点はないものの同一個体である可能性も考えられる。内面脚根部にハケ目が顕著であるかどうかの違いはあるものの、ともに赤彩されほぼ同じ脚部径で、同様な形態になるとみられる。このうち(32)を図化した。脚柱部外面工具ナデ、脚裾部内面は成形時の指頭圧痕が顕著である。また、北東根斜面で壺や高杯がまとまって出土している。いずれも赤彩され、高杯脚部は同様な形態、法量、調整技法である。杯部の明瞭な(28)は主体部出土の高杯(1)に比べて口径がやや大きく口縁部付近で強く内彎し直立気味に立ち上がる。杯底部から口縁部にかけて器壁が(1)より均衡化する。壺(27)は、口縁部逆ハ字状に開き、体部は球形化する。



第157図　No.12 横枕70号墳北西周溝内土器出土状況実測図（S＝1：20）



第158図　No.12 横枕70号墳東周溝内土器出土状況実測図（S＝1：20）



第159図　No.12 横枕70号墳周溝出土遺物実測図

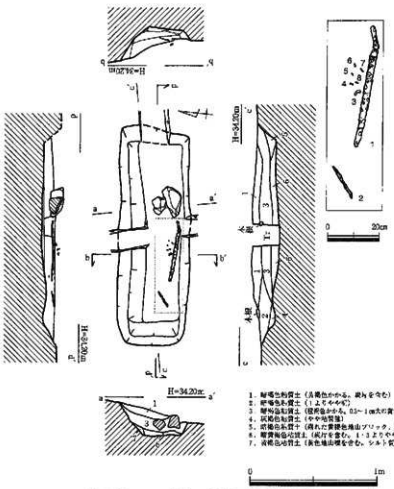
横枕71号墳（第5・8・142・160・161図、図版5・13・89・90）

〔位置と現状〕

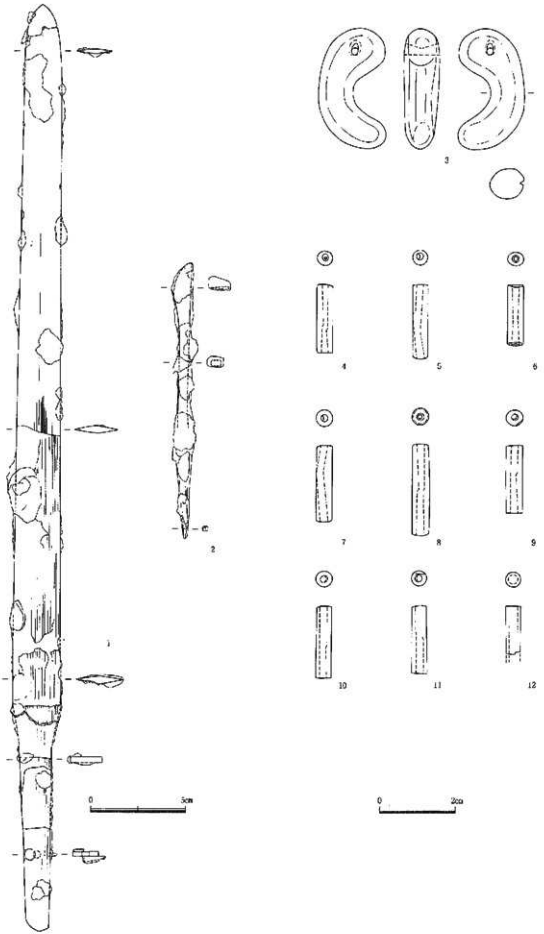
横枕71号墳は調査区中央やや北側に位置し、南東へ伸びる稜線から南西へ下る斜面、標高33.07～34.22mに立地する。丘陵東側に広がる水田面からの比高差は18.07mを測る。北西に70号墳が配置する10×14mの広い平坦面の1.4m下段に8×3m程の三角形状の平坦面があり、その平坦面の東側は古道を挟んでややなだらかな南東斜面となり、さらにその先は急傾斜で谷部へ続く。南西側は30cm程度の段をとり、階段状の平坦面へと続く。調査前の観察では、北側の1.4mほどの崖の状況から、斜面高位側で地山面を大きく掘削して斜面低位側に客土を行い平坦面に造成されているようであるが、それほどの客土は認められず、わずかに段をとって南側鞍部へ続く。改変が著しいため、現状では古墳状の地形は全く認められなかった。旧地形の確認のため掘り下げたトレンチに周溝状の溝を検出したことから、古墳の存在が明らかとなった。

〔墳丘〕

墳丘は既に上面を大きく削平されており、表土・流土下10～20cm前後で墳丘面を検出した。盛土は主体部周辺で10cm程度が確認され、北東側の弧状の周溝が古墳の形状を留めており、南西側は崖によって完全に掘削されていた。弧状の周溝は北側で地山に掘り込まれた幅1.3m、深さ42cm程度、全体では3分の1弱が確認された。周溝の径から、古墳規模は8m弱の円墳が復元される。現状で墳丘の高さ1.15mを測る。



第160図　№12 横枕71号墳主体部実測図（S＝1：30）



第161図　No.12 横枕71号墳主体部出土遺物実測図

墳丘は地形を利用し、主に北側斜面高位に溝を大きく掘削して南側へ盛土し墳丘を造り出しているとみられる。なお、70号墳との前後関係は捉えられなかったが、70号墳の南東裾部が71号墳の北側周溝周辺にくることから、崖面の土層や周溝埋土の状況を考慮すると71号墳が後出であった可能性が考えられる。

〔埋葬施設〕

墳丘北側寄りで斜面の傾斜に対し直交方向の軸をもつ埋葬施設1基を検出した。墓壙はわずかに遺存する盛土上から地山面を掘り込んでいるが、削平および流失などで南側ほど浅くなる。平面は隅丸長方形を呈する。主軸は斜面の傾斜に直交するN-86°-Eをとる。規模は現状で長さ1.75m、幅56cm、深さ27cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、明瞭な木棺痕跡は認められなかった。

遺物は、東壁から60cm程離れて鉄剣(1)と玉類、さらにその西側に鉄鏃(2)が出土している。玉類は勾玉1点と管玉9点の組み合わせで、墓壙中央部のトレンチ掘り下げ時に管玉4点が鉄剣の関部付近の北側で出土しており、玉類は埋葬時の状態をほぼ保ち被葬者の胸部を飾ったと考えられる。よって、東側が頭位とみられ、鉄剣は被葬者の左側に剣先側を足元へ向け、足元付近には鉄鏃を副葬したと考えられる。なお、鉄剣の切先は折れて本体の5cm東側下位で検出されている。また、鉄剣の東側に自然石2ケが出土しており、位置的には被葬者の頭頂部あたりであるが、通常石枕に用いるような精美な石でなく不釣合いな二石でもある。流入の可能性も捨てきれず現状では判断し難い。鉄剣(1)は全長48.9mを測り、剣身の錆はやや不明瞭、斜角関で茎部に日釘穴1を確認する。前面に鞘、柄木質が観察される。鉄鏃(2)は鏃身部刀子形で長頸鏃である。勾玉(3)および管玉(4)～(12)は良質な滑石製で、丁寧に研磨される。勾玉は長さ3.2cm、管玉は(8)が径、長さともやや大きいが、他は径4mm弱、長さ1.61～2.0cmとほぼ同様な作りである。

横枕72号墳（第5・8・142・162・163図、図版5・13・91・92・125）

〔位置と現状〕

横枕72号墳は調査区南側の中央部に位置し、主屋神社北側の標高38mの丘陵から西へ延びさらに南西へ屈曲して下る丘陵の変換部、標高33.83～35.35mに立地する。三方周囲に古墳が密接し、東側に76号墳、南側に77号墳、北側に75号墳、やや数m離れた北西に74号墳、南西に73号墳が配置する。丘陵南側に広がる水田面からの比高差は13.73mを測る。墳頂部を平面L字形の高台としてその周辺は階段状の平坦面に改変され、特に東側及び南側は高さ0.7～1mの段をとり、著しい掘削である。調査前の観察では、72号墳の高まりはある程度地形を反映したものとみられ、古墳の存在が予想されたが、上部はかなりの削平を受け、東側の著しい削平のため、尾根高位に観察されるべく周溝の存在も認められず、古墳自体の範囲・規模については全く予想できない状況であった。

〔墳丘〕

墳丘は既に上面を大きく削平されており、表土下10～20cm前後で墳丘面を検出した。盛土は主体部周辺で10cm程度が確認され、明確な周溝は認められなかった。東側は崖によって完全に掘削されていた。第8図の墳丘遺存図から主体部を中心として同心円状の等高線が古墳の形状を示しており、明確な周溝や地山成形の痕跡は認められないものの、古墳規模が15m弱の円墳が想定される。現状で墳丘の高さ1.52mを測る。

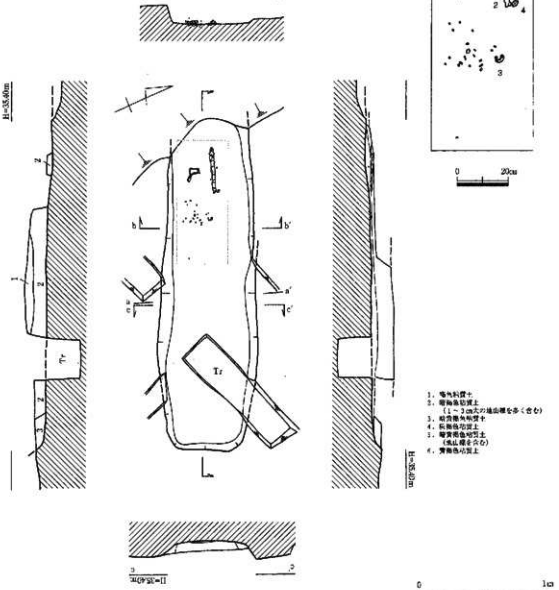
墳丘は丘陵変換部の自然地形を利用し、東側の丘陵を切り離し、周囲の地山掘削によって造営されたとみられる。周囲の古墳との前後関係は捉えられなかったが、立地や古墳規模から、調査区南側の古墳において、中心的な存在と推察される。

〔埋葬施設〕

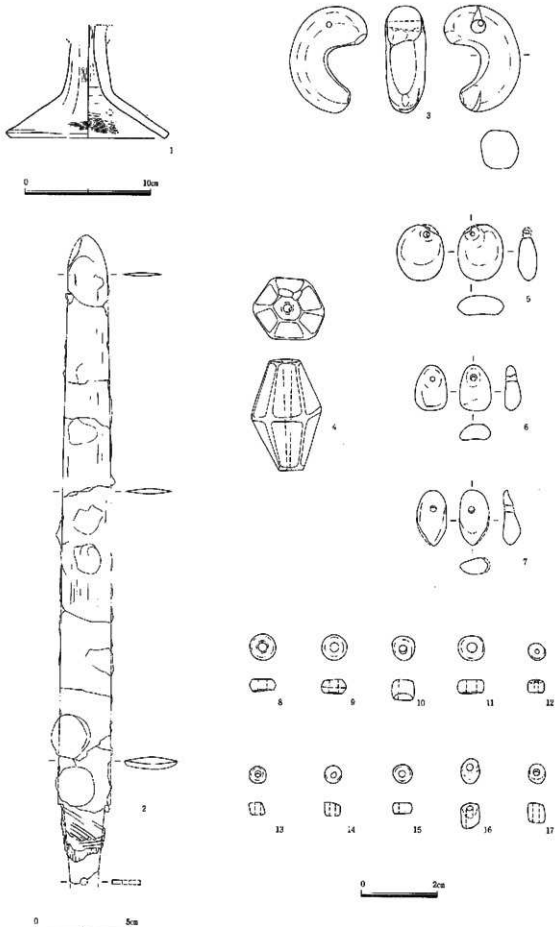
墳丘中心部で尾根稜線に対し平行な軸をもつ埋葬施設1基を検出した。墓壙はわずかに遺存する盛土

上から地山面をわずかに掘り込んでいるが、削平で深さ17cm程度の遺存である。また、北西側の壁面は平坦面造成時の段によって掘削される。墓壙平面は隅丸長方形を呈するとみられる。主軸はN-66°-Wをとる。規模は遺存長2.65m、幅75cm、深さ17cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、木棺痕跡が認められ、第162図の第3～6層は裏込め土と考えられる。土層断面から木棺幅は40cm程度と推定される。

遺物は、墓壙西側の床面で、高杯脚部(1)、鉄剣(2)、玉類が検出された。鉄剣は剣先を北西へ向け墓壙西側の中央部に、その南西隣に壁面側へ底部を向けた高杯脚部、その10数cm南東に玉類がまとまって出土しており、高杯や鉄剣の周囲でも小玉の出土が認められる。鉄剣や高杯は墓壙検出時にはほぼ露出しているような状況で、第2層中から(1)と同一個体とみられる赤彩および暗文の施された有段高杯



第162図　No.12 横枕72号墳主体部実測図(S＝1：30)



第163図　No.12 横枕72号墳主体部出土遺物実測図

の杯部片が出土しており、位置的に土器枕であった可能性も否定できない。高杯(1)は脚部径12.1cmと大きめで、内面の指頭圧痕もそれほど顕著でなく内外赤彩するが。鉄剣(2)は茎尻部欠損するが遺存長34.2cmを測り、剣身部の鎬は不明瞭で鹿角両関をもち全面に木質が観察される。土類は、翡翠製勾玉(3)、水晶製切子玉(4)、翡翠製不整円玉(5)～(7)、碧玉製臼玉(8)(9)、ガラス製小玉32点、石製とみられる小玉13点と多様である。勾玉(3)、切子玉(4)はともに片面穿孔で、材質・作りともやや粗雑な印象である。特に不整円玉(5)～(7)は風化のためか光沢がなく、余材を利用して製作されたように見受けられる。小玉はガラス製の淡紺色と淡青色、石製とみられる灰オリーブ色とに大きく分類でき、全体的にやや形が歪なものが目立つ。

横枕73号墳（第5・8・142・164～174図、図版5・7・14・15・92～96・126・127）

〔位置と現状〕

横枕73号墳は調査区南西端に位置し、土屋神社北側の標高38mの丘陵から西へ延びさらに南西へ屈曲してドり丘陵南の平野部を見ドろす尾根頂部、標高31.77～32.75mに立地する。北東の丘陵高位には72号墳、東側の別尾根側にやや離れて77号墳、78・79号墳が配置する。丘陵南側に広がる水田面からの比高差は11.67mを測る。調査は、古墳のほぼ半分ほどが調査範囲となり、尾根先端側が調査区域外となる。調査前の観察では、73号墳の周溝を利用し拡張したとみられる平坦面があり、墳頂部とみられる調査区境界の高台も上部は削平を受けているものとみられ、さらに墳丘は調査区外で南東側は段状に改変されていた。周溝とみられる凹みの状況から古墳のおおよその規模が予想され、比較的規模の大きな古墳と推察された。

〔墳丘〕

表土ド15～20cm前後で墳丘面を検出した。北東側墳丘裾部を掘削され、墳丘上面も主体部の遺存状況から大きく削平されていることが判明した。最高所は第2主体部北東側で標高32.75mを測る。盛土および旧地表は墳丘北東側の第1主体部の南西周辺あたりまでは遺存しており、第2主体部南側では互層に盛上された状況が観察され、原いところで最大53cmが確認された。南西側は崖によって旧地表を含め墳丘は完全に掘削されていた。遺存する北東周溝底部や墳丘から、古墳の規模15m弱の円墳が想定される。現状で南東裾から墳丘の高さ1.52mを測るが、削平された墳丘上面や南西の調査区域外の状況から、本来さらに1m近くは高さがあったと推察される。

墳丘は南西へ下る丘陵頂部の自然地形を利用し、北東丘陵高位側に弧状の周溝を大きく掘削して北東側の丘陵を切り離すことで墓域を設定し、周囲の地山掘削と斜面低位側ほど厚く盛土することによって墳丘を構築している。

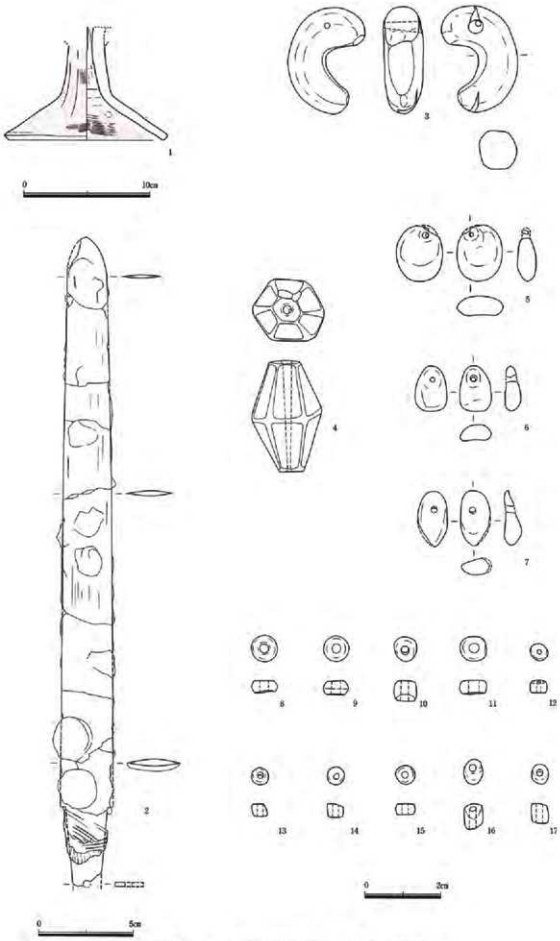
〔埋葬施設〕

墳丘中心部やや北東側で尾根稜線に対し直交する軸をもつ埋葬施設2基を検出した。2基の主体部は盛土上から掘り込まれており墓壙底面は旧地表面に達しない。また、ほぼ同様な主軸、平面形態・規模をもち、第2主体部南西壁が第1主体部の北東壁を切る重複関係である。

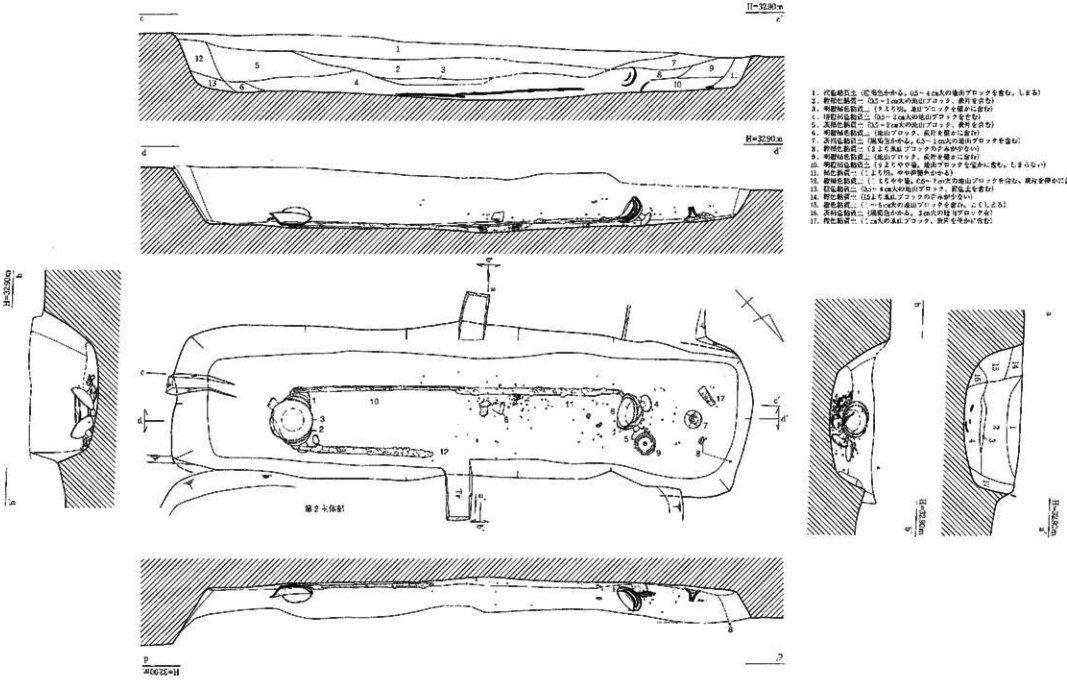
第1主体部（第164～170図、図版7・14・15・93～95・126）

墳丘中央やや北東側で検出した。墓壙は盛土上から掘り込んでいるが旧地表および地山面には達せず、上部削平され深さ最大31cmの遺存である。墓壙平面は隅丸長方形を呈する。主体部の主軸はN-47°-Wをとる。規模は長さ3.07m、幅82cm、深さ31cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、木棺痕跡が認められ、第170図の第11～17層は裏込め土と考えられる。土層断面から木棺の規模は長さ2.5m程度、幅40cm弱と推定される。北西壁側でやや複雑な土層断面となる。

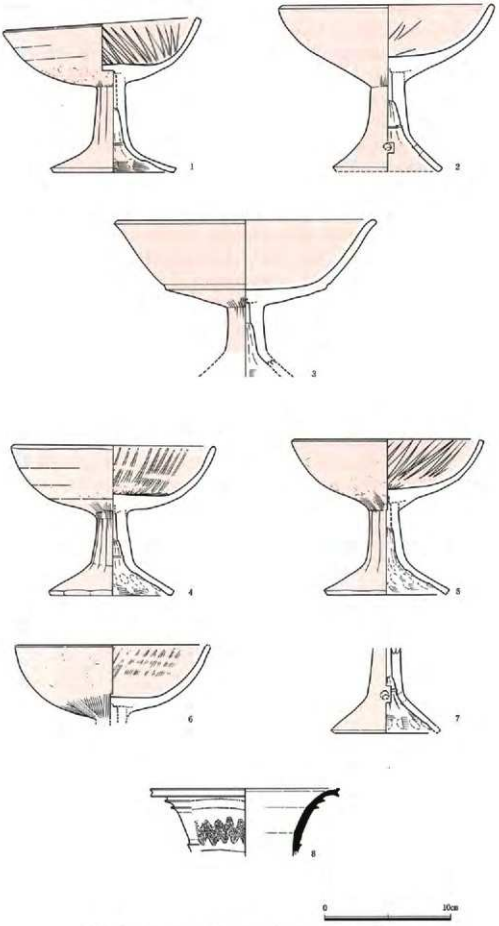
遺物は、銅鏡、鉄刀、鉄剣2点、袋状鉄斧、刀子3点、針状鉄製品、琥珀製勾玉2点、琥珀製棗玉1点、翡翠製棗玉4点、碧玉製管玉25点、ガラス製小玉274点、滑石製臼玉3点、高杯6点、須恵器壺口



第163図　№12 横枕72号墳主体部出土遺物実測図

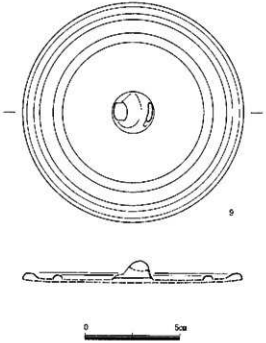


第164図　No.12 横枕73号墳第1主体部実測図（S＝1：20）

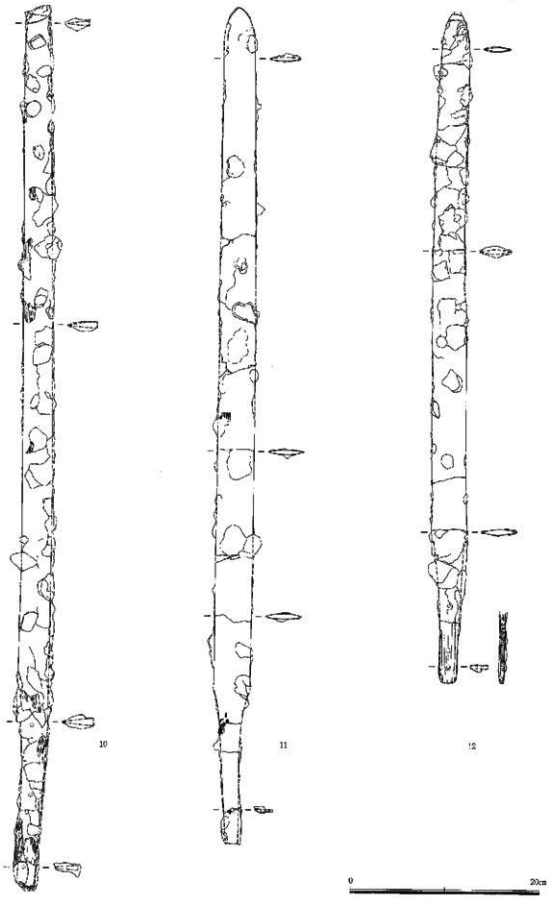


第165図　№12 横枕73号墳第１主体部出土遺物実測図（１）

縁部、土器細片と、その種類・数ともに豊富である。高杯は、墓壙両端にそれぞれ高杯３ケを組み合わせた状態で出土しており、上器枕と考えられる。高杯脚部を打ち欠き、その杯部を支えるようにして左右に別の高杯を配置する。土器枕間は1.62mを測り、高杯の形態から南東側の土器枕が北西側よりやや古い様相を示す。土器枕間の両、片側に鉄剣および鉄刀を置き、西壁側では刃部を被葬者側へ向けた鉄刀(10)と鉄剣(11)の切先が５cm程度重なる。北西側の土器枕の周辺には、北東高杯脚部に銅鏡（９）、土器枕から23cm離れて高杯脚部（７）、その両側に須恵器壺口縁部（８）、袋状鉄斧(17)、土器枕の10cm弱南東側に勾玉、桑玉が、土器枕を中心として管玉が、淡緑色ガラス小玉は墓壙の北西側半分程度くらいまでの範囲に分布し、特に鉄剣(11)の剣身部中央周辺に集中する傾向が認められる。おそらく、南東側の被葬者を埋葬後木棺が形を留めている状態で北西側から追葬したと考えられ、その際に淡緑色ガラス小玉175点は上半身を中心としてまかれたか、被葬者を覆った布等に縫いこまれたものであった可能性があると考えられる。なお、濃紺色の極小ガラス小玉99点は、埴土の水洗中に検出したものが多く、現地で位置が明らかなのはわずかである。当初の見落としを含め本来はさらに点数があったと考えられ、淡緑色ガラス小玉と同様な性格と考えられる。北西側の層序に乱れが一部認められることから、北西小口側から追葬されたと推測される。上器枕に使用された高杯６点は、杯部が有段の（３）を除き椀形の高杯で、内面に暗文が施され法量や形態に若干の差が認められる時期の所産で、時期差を求めるには至らない。有段の（３）が法量や段の施し方、脚部などからやや古手の様相が窺え、土器枕の組み方から（１）～（３）が（４）～（７）に比べやや古いと考えられる。（８）は、木棺の中央部と北側枕の北部と三片に分かれて出土しており、口縁端部や稜などの特徴からこの地域に須恵器が入ってきた時期のごく初期段階のものとみられる。（９）は、外径11.6cmを測る銅鏡である。トレンチ掘削時に外縁を一部破損してしまったが、全体的に錆化が進んで脆弱となっており、周囲の土ごと取り上げ保存処理を行っている。鏡背の文様も、取り上げた時点では明らかとなっておらず、鉦が一方に潰れる。掲載した実測図もやや略測的なものである。Ｘ線写真から、外区から鋸歯文、山形文、圏線、斜鋸歯文をめぐらし、蕨手状の文様が展開する。鉄製品は、鉄刀(10)が92.7cm、鉄剣(11)が88.2cm、(12)が70.5cm、といずれも身が長く大型で柄には目釘穴と木質が遺存する。刀子３(13～15)はいずれも小型で特に(14)は全長3.4cm余りと護身と



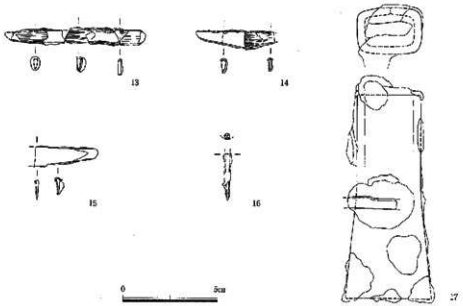
第166図　No12 横枕73号墳第１主体部出土遺物実測図（２）



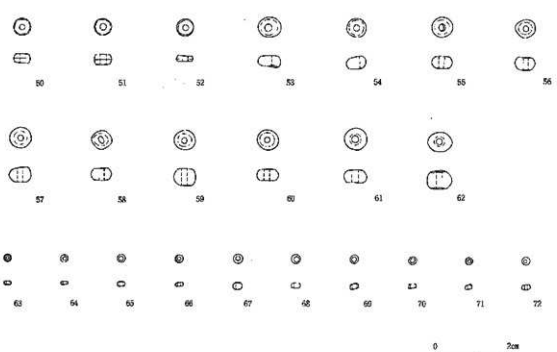
第167図　No.12 横枕73号墳第1主体部出土遺物実測図(3)

いうより日用具である。鉄鏃の茎部あるいは針状鉄製品(16)は、三本を束ねたような被断面となっている。袋状鉄斧(17)は長さ10.8cm、無肩で平面が短冊形であるが刃部でやや広がり、袋部断面が隅丸方形である。

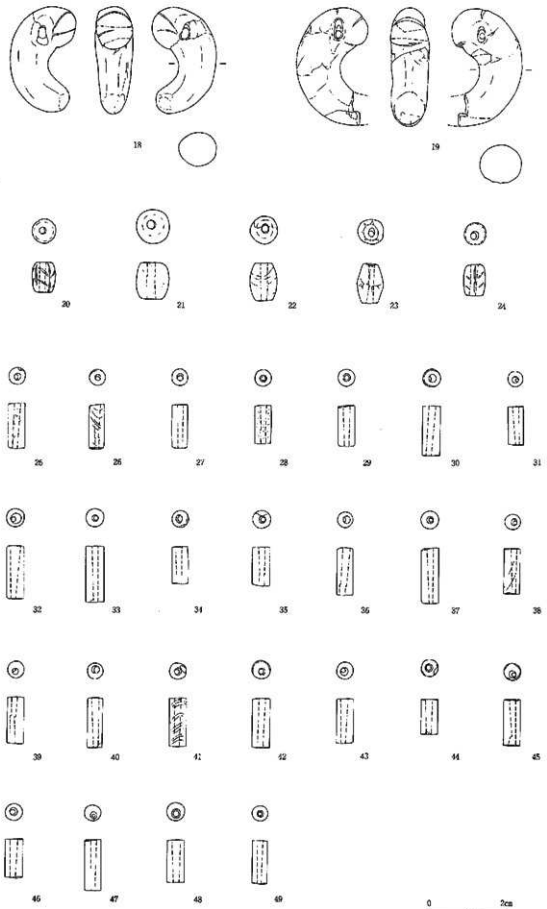
勾玉は琥珀製2点以外に同質の破片数点が確認され、(18)(19)はいずれも丁字頭である。棗玉5点は、琥珀製1点、翡翠製4点の内獣でこのうち翡翠製2点に綾杉状の文様が線刻される。碧玉製管玉25点(25～49ほか)はいずれも長さ9.3～13.8mm、径4.2～4.9mm測り、明緑灰色である。ガラス製小玉は径4.3～7.9mm、長さ2.2～4.6mmを測る淡緑色(53～62ほか)と径1.7～2.6mm、長さ0.8～2.2mmを測る濃紺色(63～72ほか)、滑石製小玉3点(50～52ほか)が見られる。



第168図　No.12 横枕73号墳第1主体部出土遺物実測図(4)



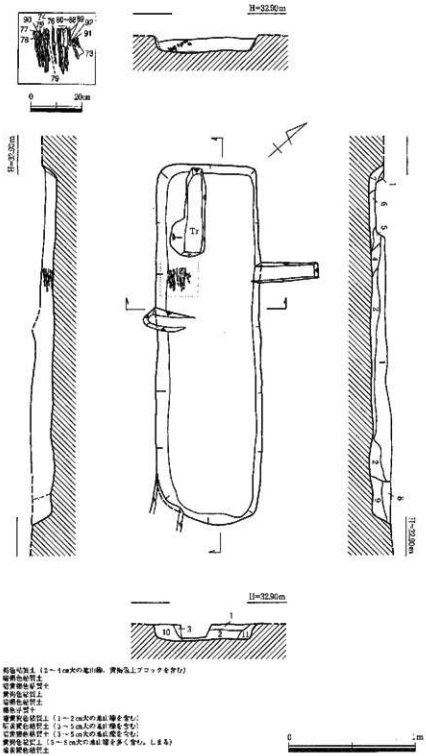
第170図　No.12 横枕73号墳第1主体部出土遺物実測図(6)



第169図　No12 横穴73号墳第１主体部出土遺物実測図（５）

第2主体部（第171～173図、図版95・96・1269）

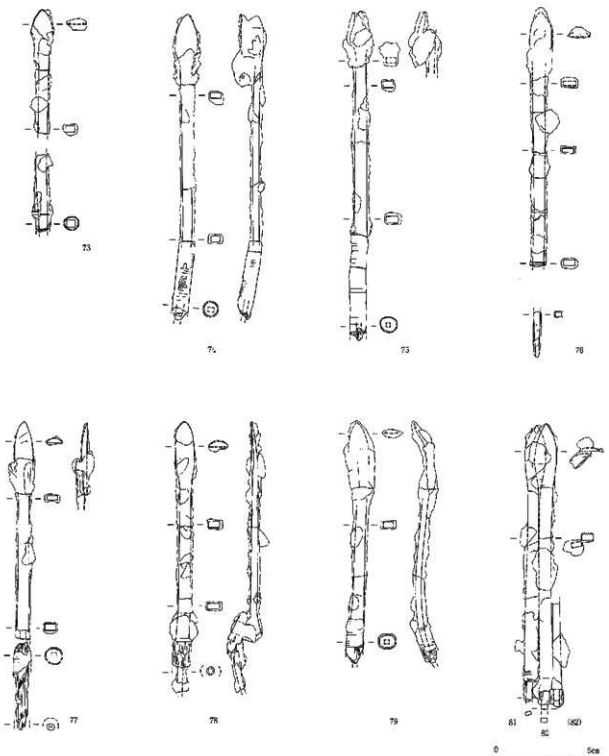
墳丘中央やや北東寄りで検出した。第1主体部の北東壁を切る切り合い関係である。墓壙は盛土上から掘り込んでいるが旧地表および地山面には達せず、上部削平され深さ最大18cmの遺存である。墓壙平面は南東側が丸みをもつ隅丸長方形を呈する。主体部の主軸はほぼ第1主体部同様のN-48°-Wをとる。規模は長さ2.86m、幅85cm、深さ18cmを測る。墓壙埋土の断面観察から、木棺痕跡が認められ、第171図の第6～11層に裏込め土と考えられる。土層断面から木棺の規模は長さ1.8m程度、幅40cm弱と推定される。



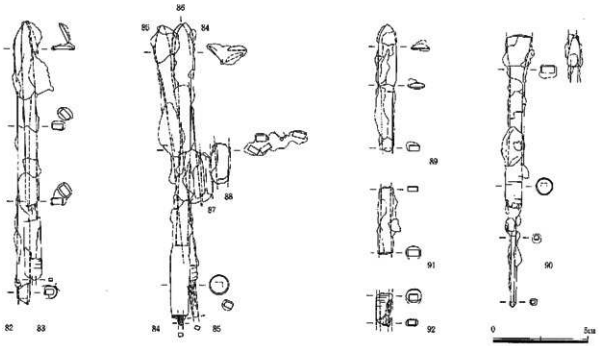
1. 粗砂混黒土（1～4cm大の礫出現、黄褐色土ブロックを含む）
2. 暗黄色砂質土
3. 明黄色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 暗褐色砂質土
6. 褐色砂質土
7. 暗黄褐色砂質土（1～2cm大の礫粒等を含む）
8. 明黄褐色砂質土（2～5cm大の礫粒等を含む）
9. 暗黄褐色砂質土（3～5cm大の礫粒度を含む）
10. 黄褐色砂質土（3～5cm大の礫粒等を多く含む、しまる）
11. 暗黄褐色砂質土

第171図　№12 横枕73号墳第2主体部実測図（S＝1：30）

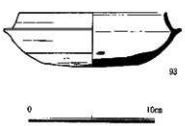
遺物は、北西小口から70cm離れた西壁沿いで鉄鏃17点が出土している。切先を北西小口側に向け横一列に揃えた状態で、板状のものに乗っていたのか壁面側へ傾斜する。鉄鏃(73～90)はいずれも長頸鏃で、鏃身部は多少の形態差は認められるものの三角形状である。茎部は樹皮で巻締められ木質も良好に遺存していた。頭位は鉄鏃の副葬状況から北西側と推定される。



第172図　No.12 横枕73号墳第２主体部出土遺物実測図(１)



第173図　No.12 横枕73号墳第２主体部出土遺物実測図（２）



第174図　No.12 横枕73号墳出土遺物実測図

〔その他の出土遺物〕

北東側周溝の表土中から須恵器杯身(93)が出土している。73号墳の北東側斜面高位は畑作に伴う改変が著しく、72号墳の裾に展開する77号墳の遺物である可能性が大きい。(93)は口縁部が細長く内傾し、先端は先細りとなる。底部内面に当て工具痕の円弧文が観察される。

横枕74号墳（第５・８・142図、図版５・96・97）

〔位置と現状など〕

横枕74号墳は調査区中央やや南の西端に位置し、玉屋神社北側の標高38mの丘陵から西へ延びる尾根頂部を占拠する72号墳北西裾部に位置する。一帯は後世の畑作による耕作溝をはじめ大きく改変を受けており、尾根高位側に弧状の溝がわずかに遺存する状態である。溝の西側は耕作土下は地山であり、埋葬施設や盛土は検出されなかったものの周囲の状況から古墳の周溝と判断した。遺存する周溝は断面図から標高33.06～33.52mを測り、深さ46cmが確認される。丘陵南側に広がる水田面からの比高差は12.96mを測る。調査前の観察では、72号墳の西側はなだらかな斜面となっており、古墳状の高まりは全く認められなかった。表土を除去した段階で、周溝が検出され埋土は黒褐色粘質土が基調である。周溝はやや角張るものの弧状を呈しており、径８mほどの円墳と推察される。

遺物は表土および耕作溝から須恵器壺もしくは甕の体部２片が出土している。

横枕75号墳（第５・８・143図、図版５・97）

〔位置と現状など〕

横枕75号墳は調査区中央やや南の東端に位置し、玉屋神社北側の標高38mの丘陵から西へ延びる尾根頂部を占拠する72号墳北裾部に位置する。一帯は後世の畑作による階段状の改変を大きく受けており、尾根高位側に弧状の溝がわずかに遺存する状態である。溝の北東側は大きく段状に掘削されている。埋葬施設は検出されなかったものの南側に盛土とみられる層が一部認められることや周囲の状況から古墳の周溝と判断した。遺存する周溝は標高32.82～33.60mを測り、深さ78cmが確認される丘陵南側に広がる水田面からの比高差は13.5mを測る。調査前の観察では、72号墳の北側は谷部へ続く斜面となっており、古墳状の高まりは認められなかった。周溝は斜面高位の南東側ほど深くなる傾向が認められ、弧状に遺存する状況から径10mほどの円墳と推察される。遺物は出土しなかった。

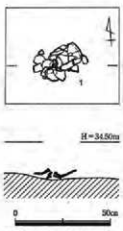
横枕76号墳（第５・８・143・175・176図、図版５・98・127）

〔位置と現状など〕

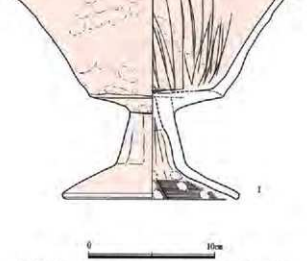
横枕76号墳は調査区南東端に位置し、玉屋神社北側の標高38mの丘陵から西へ延びる尾根の稜線上よりやや南斜面側に立地する。西側の尾根頂部には72号墳が占拠し、南側尾根下位に78、79号墳が位置する。東側半分強は調査区域外である。72号墳との境界付近にわずかに東側へ弧を描く溝が検出され、明確な埋葬施設や盛土は確認されなかったものの、周囲の状況から古墳の周溝と判断した。一帯は後世の畑作による階段状の改変を大きく受けており、72号墳の高まり以東は10m四方弱の平坦地に改変されていた。遺存する周溝は標高34.10～34.15mを測り、深さ５cmが確認される。丘陵南側に広がる水田面からの比高差は14.05mを測る。周溝は耕作土下で検出され、周囲の地形や弧状に遺存する周溝から径15mほどの円墳であった可能性が考えられる。

〔出土遺物〕

古墳中心部よりやや南西寄りの地山面で高杯（１）が出土している。脚部を西へ向け杯部内面は東側へ傾けた状態であった。主体部の遺物である可能性もあり周辺の精査を行ったが検出に及ばなかった。出土状況から攪乱による二次的な出土とは考え難く、出土位置や時期的なことを考慮すると土器枕であった可能性も考えられる。（１）は赤彩された有段高杯で、杯部は深く大きく外反する形態である。脚部は裾部で強く屈曲して大きく開く。杯部内面には底面に一方向、口縁部は放射状の暗文を施す。



第175図　№12 横枕76号墳墳頂部土器出土状況実測図（S＝１：20）



第176図　№12 横枕76号墳墳頂部出土遺物実測図

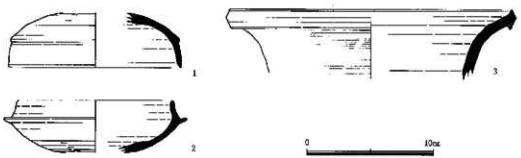
横枕77号墳（第５・８・143・177図、図版５・98・99・127）

〔位置と現状、墳丘など〕

横枕77号墳は調査区南端に位置し、玉屋神社北側の標高38mの丘陵から西へ延びる尾根頂部を占地する72号墳の南裾部に立地する。東隣に78、79号墳が、西側５mに73号墳が配置する。南端は１m余りある段で掘削され、調査区域外でもある。調査前の観察では、一帯は後世の畑作による階段状の改変を大きく受けており、72号墳の南西側に15×18mほどの平坦面があり、東側にも30cmほどの段をとって同様な平坦面が広がる。旧地形の確認トレンチによって、これらの平坦面は尾根高位側を掘削して低位の南側に客土することで造成されており、トレンチ掘り下げによって周溝と旧地表面および盛土を確認した。周溝は北西側の約３分の１程度が検出され、中央西側一帯で旧地表面と最大25cmの盛土を確認した。埋葬施設は検出されなかった。現状で古墳の標高は32.33～33.75m、高さ1.4mを測る。丘陵南側に広がる水田面からの比高差は13.65mである。弧状に遺存する周溝から径12mほどの円墳であったと推察される。

〔出土遺物〕

遺物は、表土および周溝埋土から壺蓋の胴部片を主体とする須恵器片20点余りが出土している。このうち比較的遺存良好な（１～３）を図化した。杯蓋（１）は古墳中央やや南一帯の表土から細片となって出土しており、稜やや甘く口縁部も短く外傾するものの、端部は内傾する段の名残りが認められる。杯身（２）は77号墳東側の段斜面表土中から出土したもので、口縁端部は丸く納め、天井部２分の１下半をヘラ削りする。壺口縁部（３）は端部で上下に肥厚して屈曲する端面を持ち、頸部外面にカキ目を施す。



第177図　№12 横枕77号墳表土出土遺物実測図

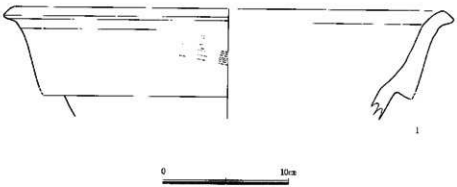
横枕78号墳（第５・８・143・178図、図版５・99・127）

〔位置と現状、墳丘など〕

横枕78号墳は調査区南東端に位置し、玉屋神社北側の標高38mの丘陵から西へ延びる尾根の稜線から南へ下った標高32.65～33.09mに立地する。尾根高位に76号墳が、下位の南側には79号墳が重複する。西隣には77号墳が配置する。南側は１m余りある段で完全に掘削され、東側は調査区域外となる。調査前の観察では、一帯は後世の畑作による階段状の改変を大きく受けており、６×11m程の平坦面となる。調査区東端に掘り下げた旧地形の確認トレンチによって、平坦面は尾根高位側を掘削して低位の南側に客土することで造成されており、周溝と盛土の一部を確認した。周溝は北西側の約４分の１程度が検出され、その周溝南側一帯で最大18cmの墳土を確認した。埋葬施設は検出されなかった。79号墳とはかなりの部分重複するが、上層断面から79号墳が後出と考えられる。丘陵南側に広がる水田面からの比高差は12.99mである。弧状に遺存する周溝から径10mほどの円墳であったと推察される。

〔出土遺物〕

遺物は、北西周溝埋土から土師器大型の壺口縁部(1)が出土している。厚手の複合口縁部で、口縁上端でやや外方に屈曲し角張って平坦面を持つ。下端部はわずかに下垂する程度で凸帯状とならない。外面にハケ目痕を観察する。



第178図　№12 横枕78号墳周溝出土遺物実測図

横枕79号墳〔第5・8・143・179図、図版5・99・127〕

〔位置と現状など〕

横枕79号墳は調査区南東端に位置し、玉屋神社北側の標高38mの丘陵から西へ延びる尾根の稜線から南へ下った標高32.22～32.83mに立地する。尾根高位に76、78号墳が、西隣には77号墳が配置する。南側を1m余りある段で掘削され、東側は調査区域外である。調査前の観察では、一帯は後世の畑作による階段状の改変を大きく受けており、6×11mほの平坦面となる。調査区東端に拡り下げた旧地形の確認トレンチによって、平坦面は尾根高位側を掘削して低位の南側に客土することで造成されており、78号墳北側周溝の0.5～1m南側に弧状の溝が確認された。78号墳と大きく重なり、盛土や明確な埋葬施設は確認されなかったものの、周囲の状況から古墳の周溝と判断した。周溝は北西側の約5分の1程度が検出され、深さ最大61cmを測る。78号墳とはかなりの部分重複するが、土層断面で確認した限りでは79号墳が後出と考えられる。丘陵南側に広がる水田面からの比高差は12.12mである。弧状に遺存する周溝から径8mほどの円墳であったと推察される。

〔出土遺物〕

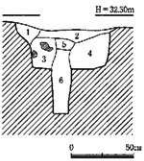
遺物は、第143図78・79号墳墳丘断面図第8層から須恵器蓋(1)が出土している。南側斜面に掻き出された土層中の遺物であるが、79号墳の周溝遺物である可能性が大きい。(1)は口径9.8cmと小型で、口縁部と天井部を介する稜はなく、天井部はヘラ削りされるが中心部のヘラ起し痕を残す。口縁端部を外方に摘み出し内傾する段を有する。

第179図　№12 横枕79号墳出土遺物実測図

2. その他の遺構、出土遺物の調査

No.12　SK-01（第８・180図、図版100）

調査区中央部の鞍部北側、標高31.72～32.44mに位置する。北東にSK-02が配置する。調査前の観察では、鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造り出しているが、わずかに微地形が観察される。SK-01が立地する北側尾根から鞍部へ下る傾斜変換部は高位側を平坦面造成のための段により掘削されており、SK-01の上面もかなりの部分上部を削平されている可能性が大きい。平面は隅丸方形状を呈し、主軸はN-71°-Wを振る。規模は長辺76cm、短辺71cm、深さ31cmを測る。断面は不整な台形状で、底面中央に径18cm、深さ35cmの小ピットがあり、検出面から最深66cmを測る。埋土は６層に分かれ、第５・６層は底面から立ち上がる様相を示す。遺物は何も出土しなかった。落とし穴と考えられる。

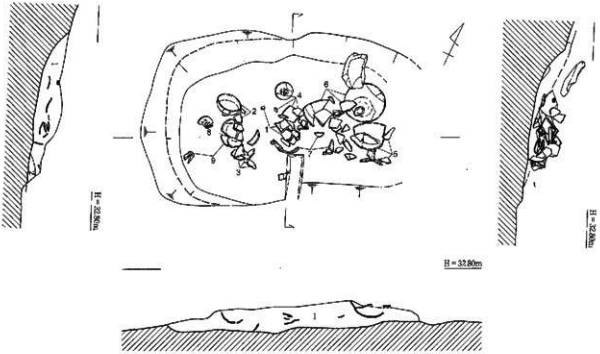


1. 暗褐色砂質土（シルト質）
2. 褐色粘質土（中小黄褐色がかる。0.5cm大の黄色地山ブロックを含む）
3. 灰褐色粘質土（1～3cm大の黄色地山ブロックを含む。シルト質）
4. 暗褐色砂質土（0.5cm大の黄色地山ブロック、炭粒がそこそこ含む）
5. 黒褐色砂質土（5より薄。0.5cm大の黄色粘土ブロックを含む）
6. 黒褐色粘質土（4・5より粘）

第180図　No.12 SK-01実測図（S＝１：30）

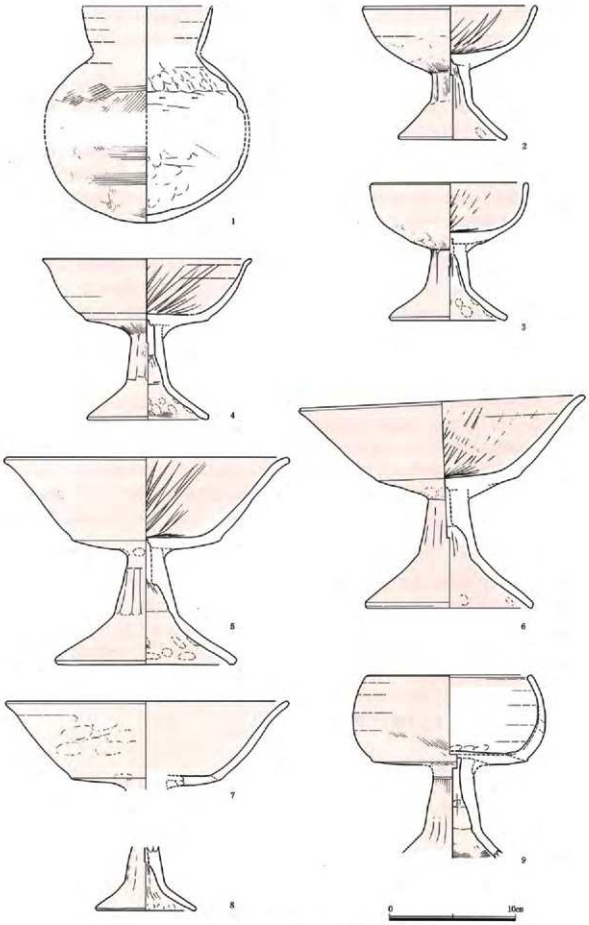
No.12　SK-02（第８・181・182図、図版100・101・127・128）

調査区中央部の鞍部北側、標高32.28～32.57mに位置する。西にSK-01、東にSK-03が配置する。調査前の観察では、鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造り出しているが、わずかに微地形が観察される。SK-02が立地する北側尾根から鞍部へ下る傾斜変換部は高位側を平坦面造成のための段により掘削されており、SK-02の上面もかなりの部分上部を削平されている可能性が大きい。また、71号墳の南裾周辺にもあたり、古墳との関連も考慮に入れる必要がある。遺存する北～南西側の壁面の状況



1. 暗褐色砂質土（黄褐色がかる。0.5cm大の黄色粘土ブロックを僅かに含む。Ⅳ層色土を含む）
2. 褐色粘質土（黄褐色がかる。3cm大の地山粒を含む）

第181図　No.12 SK-02実測図（S＝１：20）



第182図　№12 SK-02出土遺物実測図

から平面は楕円形状を呈すると見られ、主軸はN-63°-Eを振る。遺存規模は長軸143cm、短軸86cm、深さ15cmを測る。断面は皿状で、底面はやや凹凸が見られる。埋土は2層に分かれ、大部分は第1層暗褐色粘質土であり土器も第1層中から出土している。

遺物は、上坑の中心部に集中しており、北側では上層からの転落の可能性もあるが15cm大の拳山の角礫が出土している。土器は高杯7点と中型の壺1点から成り、赤彩される。壺は上坑の中心部分、壺の南西側に椀形高杯(2・3)とワイングラス形高杯(9)、北東側に有段高杯(4～7)が配置している。高杯は杯部と脚部が分かれた状態のものが目立ち、高杯ごとにまとまりがみられることからこの地で破砕されるなど一括廃棄されたと考えられる。壺(1)は口縁部外傾し先細りとなる。体部は球形で、外面ハケ目、内面肩部および底部指頭圧痕が顕著で中央部はヘラ削りする。高杯(2)(3)は全体的にやや器高が低く厚手の椀形高杯で、脚柱部が太く短いわりには脚裾部の屈曲がやや弱い。(9)は有段高杯と椀形高杯の折衷型のような形態で、有段高杯の口縁部を内側に彎曲させたものである。有段高杯(4～7)は、(4)がやや小形で杯部中央部が膨らみ口縁部で外方へ短く屈曲するなどやや椀形高杯を意識したような形態であるのに対し、(5～7)は杯底部から屈曲して外方へ大きく開き、脚部もそれに合わせて底径が大きい。なお(2～6)は杯部内面に赤彩後の暗文二段が観察される。脚部(8)は唯一脚部のない(7)とは別個体とみられ、SK-02の脚部の中では一番の小型である。

No.12　SK-03（第8・183図、図版100・101）

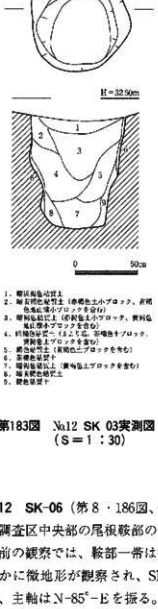
調査区中央部の鞍部北側、標高31.46～32.37mに位置する。北西にSK-02、南東にSK-04が配置する。調査前の観察では、鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造り出しているが、わずかに微地形が観察される。SK-03が立地する北側尾根から鞍部へ下る傾斜変換部は高位側を平坦面造成のための段により掘削されており、SK-03の上面もかなりの部分上部を削平されている可能性がある。平面は楕円形を呈し、主軸はN-69°-Eを振る。規模は長軸85cm、短軸78cm、深さ86cmを測る。断面は不整なU字状で、中位で段をとって垂直気味に立ち上がる。埋土は9層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-04（第8・184図、図版100・101）

調査区中央部の鞍部北側、標高31.48～32.30mに位置する。北西にSK-03、南西にSK-05が配置する。調査前の観察では、鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造り出しているが、わずかに微地形が観察され、SK-04は北側尾根から鞍部へ続く稜線からやや東側谷部へ下った斜面に立地する。平面は楕円形を呈し、主軸はN-73°-Eを振る。規模は長軸86cm、短軸77cm、深さ88cmを測る。断面はU字状である。埋土は10層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。断面の形状はやや異なるもののSK-03とほぼ同様な平面、法量である。

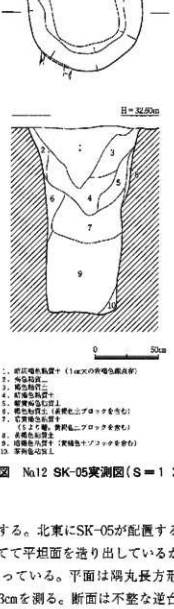
No.12　SK-05（第8・185図、図版100・102）

調査区中央部の尾根鞍部のやや北側、標高31.02～32.50mに位置する。南西にSK-06が配置する。調査前の観察では、鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造り出しているが、わずかに微地形が観察され、SK-05、SK-06の周辺部がやや小高くなっている。平面は楕円形を呈し、主軸はN-15°Wを振る。規模は長軸100cm、短軸90cm、深さ150cmを測る。断面は逆台形状である。底平面がやや角張る隅丸方形状となり、壁面は中位までほぼ垂直であるが上位でやや開いて立ち上がる。埋土は10層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。



第183図　No.12 SK 03実測図
（S＝1：30）

第184図　No.12 SK-04実測図
（S＝1：30）



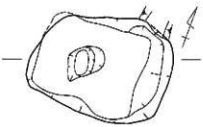
第185図　No.12 SK-05実測図（S＝1：30）

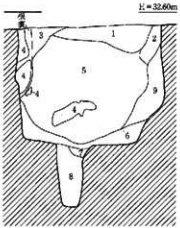
No.12　SK-06（第８・186図、図版100・102）

調査区中央部の尾根鞍部のやや北側、標高31.05～32.50mに位置する。北東にSK-05が配置する。調査前の観察では、鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造り出しているが、わずかに微地形が観察され、SK-06、SK-05の周辺部がやや小高くなっている。平面は隅丸長方形を呈し、主軸はN-85°-Eを振る。規模は長軸110cm、短軸85cm、深さ143cmを測る。断面は不整な逆台形状で、東壁が底面やや上位で段をとりほぼ垂直に立ち上がる。底面中央やや西寄りで不整な楕円形の小ピットを検出した。長径29cm、短径22cm、深さ48cmを測る。埋土は９層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-07（第８・187図、図版100・102）

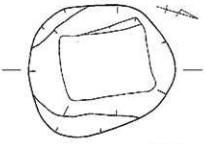
調査区中央部の尾根鞍部のやや北側、標高30.75～32.25mに位置する。東にSK-06が配置する。調査前の観察では、鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造り出しているが、わずかに微地形が観察され、SK-05、SK-06の周辺部がやや小高くなっており、そこからやや西へ下った斜面にSK-07は立地する。平面は不整な楕円形を呈し、主軸はN-24°-Wを振る。規模は長軸115cm、短軸103cm、深さ149cmを測る。断面は中位がやや膨らんだ逆台形で、底平面が隅丸方形となる。埋土は８層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

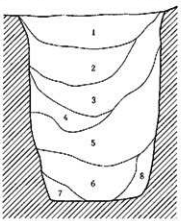




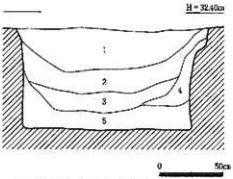
1．褐灰色粘質土
2．褐灰色粘質土（ややしまり）
3．褐灰色粘質土（褐黄褐色土ブロックを含む）
4．黄褐色粘質土
5．暗褐色粘質土
6．灰黄褐色粘質土（褐色土ブロックを含む）
7．暗褐色粘質土
8．褐色粘質土
9．褐褐色粘質土（黒褐色粒子ブロックを多く含む）

第186図　№12 SK-06実測図（S＝1：30）



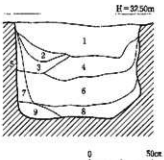


1．暗褐色粘質土
（焼土粒とブロック，黄褐色土ブロックを含む）
2．褐色粘質土
3．暗褐色粘質土（ややしまり，黄褐色土ブロックを含む）
4．暗黄褐色粘質土
5．黄黄褐色粘質土（ややしまり，粘褐色土ブロック，明石焼色ブロック，赤褐色土ブロックを含む）
6．褐褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
7．黄褐色粘質土
8．黄褐色粘質土（赤褐色土ブロックを含む）



1．暗褐色粘質土（黒褐色土ブロックを含む）
2．暗褐色粘質土（ややしまり，炭片を僅かに含む）
3．暗褐色粘質土（ややしまり，炭片を僅かに含む）
4．暗褐色粘質土（ややしまる）
5．暗色粘質土（ややしまる，炭片を僅かに含む）

第188図　№12 SK-08実測図（S＝1：30）



1．黒褐色粘質土（暗褐色土を僅かに含む）
2．黒褐色粘質土（赤褐色土を僅かに含む）
3．暗褐色粘質土（黒褐色土を僅かに含む）
4．暗褐色粘質土（赤褐色土を僅かに含む，粘炭あり）
5．暗褐色粘質土（赤褐色かーる）
6．暗褐色粘質土（4よりも暗）
7．褐褐色粘質土（5よりも暗，ややしまる）
8．褐色粘質土（赤褐色かーる，粘炭あり）
9．暗色粘質土（8よりも暗，炭質強）

第189図　№12 SK-09実測図（S＝1：30）

No.12　SK-08（第８・188図、図版100・103）

調査区中央部の尾根鞍部の南西側、標高31.46～32.26mに位置する。東側にSK-10～20の土坑群が配置する。調査前の観察では、鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を拡張しており、SK-08は稜線からやや下った立地であるが、周辺は南北方向の３条の耕作溝が掘り込まれるなど畑作の撹乱を受けた地帯であり、SK-08の上部もわずかながら削平されていると考えられる。元々は、南から下る尾根筋と鞍部との屈曲部辺りの立地と考えられる。平面は不整な楕円形を呈し、主軸はN-22°-Wを振る。規模は長軸152cm、短軸100cm、深さ81cmを測る。断面は北壁が上位で屈曲して立ち上がるものの壁面が垂直気味に立ち上がる逆台形で、底面は平坦である。埋土は５層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-09（第８・189図、図版100・103）

調査区中央部の尾根鞍部、標高31.67～32.43mに位置する。周辺にSK-10～20の土坑群が配置する。鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造成しており、SK-09は平坦面の中央南よりであるが、元々はほぼ稜線上で、南から下る尾根筋と鞍部との屈曲部辺りの立地と考えられる。平面は楕円形を呈し、主軸はN-22°-Wを振る。規模は長軸101cm、短軸70cm、深さ75cmを測る。断面は不整なU字状で、北壁に凹凸がみられる。底面はやや隅丸長方形の様相を示す。埋土は９層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-10（第８・190図、図版100・103）

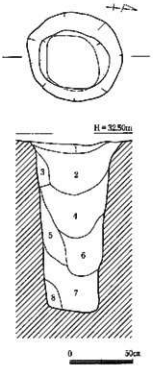
調査区中央部の尾根鞍部、標高31.08～32.44mに位置する。北東側にSK-09をはじめSK-10～20の土坑群が配置する。鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造成しており、SK-10は平坦面の中央南寄りであるが、元々はほぼ稜線上で、南から下る尾根筋と鞍部との屈曲部辺りの立地と考えられる。平面はやや不整な円形を呈し、規模は長軸75cm、短軸71cm、深さ133cmを測る。断面はやや不整な逆台形で、底面から急傾斜で立ち上がり上面付近で屈曲してやや緩やかとなる。埋土は８層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-11（第８・191図、図版100・104）

調査区中央部の尾根鞍部の南東、標高30.66～31.99mに位置する。西側にSK-16をはじめSK-10～20の土坑群が配置する。鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造成しており、SK-11は平坦面の南東であるが、元々は南から下る尾根筋と鞍部との屈曲部辺りで、鞍部から丘陵東側の谷部へやや下る斜面の立地である。平面はやや不整な楕円形を呈し、主軸はN-15°-Eを振る。規模は長軸97cm、短軸83cm、深さ131cmを測る。断面はわずかに袋状で、中位で狭まる形状である。埋土は５層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

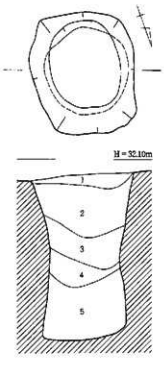
No.12　SK-12（第８・192図、図版100・104）

調査区中央部の尾根鞍部の南、標高31.98～32.54mに位置する。北側斜面下位にSK-09～20の土坑群が配置する。鞍部一帯は後世の畑作により南北尾根筋を掘削して尾根東西を埋め立てて平坦面を拡張しており、SK-12は平坦面の南端であるが、元々は南から下る斜面に立地しており、平坦面造成の折、上部をかなり削平されたとみられる。平面はやや不整な楕円形を呈し、主軸はN-24°-Wを振る。規模は長軸76cm、短軸39cm、深さ54cmを測る。断面は南側がやや角をとって底面から立ち上がる不整なU字状である。埋土は５層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。



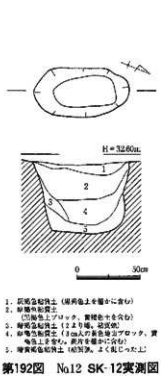
1．暗灰褐色砂質土
2．暗褐色砂質土
3．暗黄褐色砂質土
4．暗黄褐色砂質土
（直径硬質ブロックを僅かに含む）
5．黄褐色砂質土
6．暗褐色砂質土（炭褐色土ブロックを含む）
7．暗黄褐色砂質土（白褐色ブロックを含む）
8．黄褐色砂質土

第190図　№12 SK-10実測図
（S＝1：30）



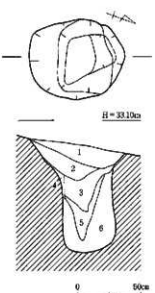
1．暗灰褐色砂質土
2．暗褐色砂質土
3．暗褐色砂質土
（2より暗，黄褐色土ブロックを含む）
4．暗黄褐色砂質土（炭褐色土ブロックを含む）
5．暗黄褐色砂質土（4より明，暗褐色土ブロック，明黄褐色上ブロックを含む）

第191図　№12 SK-11実測図
（S＝1：30）



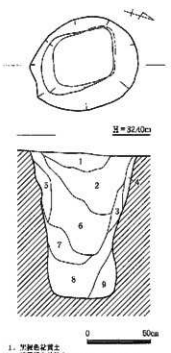
1．灰褐色砂質土（黄褐色土を僅かに含む）
2．暗褐色砂質土
（白褐色上ブロック，黄褐色土を含む）
3．暗褐色砂質土（2より暗，粘質が）
4．暗褐色砂質土（3cm大の黄色粒子ブロック，黄褐色上を含む，黄褐を僅かに含む）
5．暗黄褐色砂質土（粘質多，よく乾いた上）

第192図　№12 SK-12実測図
（S＝1：30）



1．灰褐色砂質土（混じり少なし）
2．淡褐色砂質土（1より明，褐色がかる）
3．灰褐色砂質土（1・2より暗，赤褐色がかる）
4．灰褐色砂質土
（1に似る，1cm大の赤色焼土ブロック多）
5．灰褐色砂質土（5より暗，黄褐色がかる，1cm大の白色粒子ブロックを含む）
6．赤褐色砂質土（5より明，黄褐色がかる，4cm大の黄色粒子ブロックを含む）

第193図　№12 SK-13実測図（S＝1：30）



1．黒褐色砂質土
2．暗灰褐色砂質土
3．褐色砂質土（炭褐色土ブロックを含む）
4．砂質褐色砂質土
5．灰褐色砂質土
6．暗褐色砂質土（炭褐色土ブロックを含む）
7．黄褐色砂質土
8．暗灰褐色砂質土（褐黄色土ブロックを含む）
9．黄褐色砂質土

第194図　№12 SK-14実測図（S＝1：30）

No.12　SK-13（第８・193図、図版100・104）

調査区中央やや南側、南から下る尾根斜面、標高32.06～32.96mに立地する。北西斜面下位にSK-12が配置する。周辺は南から下る尾根筋と鞍部との境界の緩やかな斜面で、後世の鞍部平坦面造成の折、掘削された段差が東西に延びる。SK-13は段部分にあたり、上部削平を受けているものとみられる。平面は不整な形を呈し、規模は長軸76cm、短軸63cm、深さ85cmを測る。断面はU字状で、埋土は６層に分かれるが、上面近くの第１・２層は後世の攪乱とみられる。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-14（第８・194図、図版100・105）

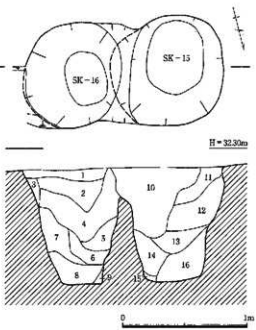
調査区中央部の尾根鞍部の南東、標高31.10～32.28mに位置する。北側にSK-09～20が展開する。鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造成しており、SK-14は平坦面の南東に位置するが、元々は南から下る尾根筋と鞍部との屈曲部辺りで、鞍部尾根筋より東側の谷部寄りの立地である。平面は不整円形を呈し、規模は長軸85cm、短軸72cm、深さ115cmを測る。断面は壁面に凹凸が見られるもののU字状で、底平面は角をとって隅丸方形状となる。埋土は９層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-15（第８・195図、図版100・105）

調査区中央部の尾根鞍部の南東、標高31.24～32.15mに位置する。東側に位置するほぼ同様な形態・法量のSK-16の西壁を切る。周囲にSK-09～20が展開する。鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造成しており、SK-15は平坦面の南東に位置するが、元々は南から下る尾根筋と鞍部との屈曲部辺りで、鞍部尾根筋より東側の谷部寄りの立地である。平面は不整円形を呈し、規模は長軸90cm、短軸88cm、深さ91cmを測る。断面は壁面中位より上で凹凸が見られるものの不整な逆台形である。埋土は７層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-16（第８・195図、図版100・105）

調査区中央部の尾根鞍部の南東、標高31.22～32.14mに位置する。西側に位置するほぼ同様な形態・法量のSK-15に西壁を切られる。周囲にSK-09～20が展開する。鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造成しており、SK-16は平坦面の南東に位置するが、元々は南から下る尾根筋と鞍部との屈曲部辺りで、鞍部尾根筋より東側の谷部寄りの立地である。平面は不整円形を呈し、規模は長軸85cm、短軸も復元85cm、深さ92cmを測る。断面は壁面に凹凸が見られるものの不整な逆台形である。埋土は９層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。



1．暗褐色粘質土
2．黒褐色砂質土（黄褐色土ブロックを含む）
3．赤褐色粘質土
4．暗褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
5．黒褐色砂質土（褐色土ブロックを含む）
6．暗褐色砂質土
7．黒褐色砂質土
8．暗褐色粘質土
9．黒褐色砂質土
10．黒褐色粘質土
11．暗褐色粘質土
12．暗色粘質土（明黄褐色土ブロックを含む）
13．暗赤褐色粘質土
14．暗褐色砂質土（淡黄褐色土ブロックを含む）
15．黄褐色砂質土
16．暗赤褐色粘質土（13より暗。明黄褐色土ブロックを多く含む）

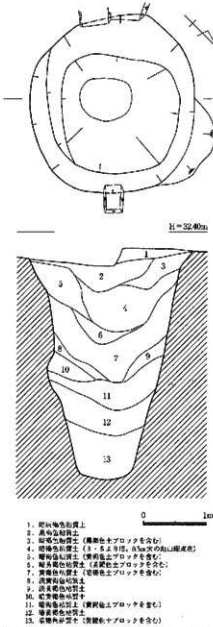
第195図　No.12 SK-15・16実測図（S＝1：30）

No.12　SK-17（第８・196図、図版100・105）

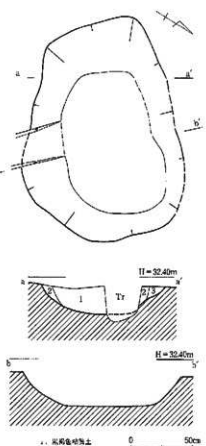
調査区中央部の尾根鞍部のやや南東、標高30.42～32.27mに位置する。西側のSK-18をはじめ南側にSK-09～20が展開する。鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造成しており、SK-17は平坦面の南東寄りに位置するが、元々は南から下る尾根筋と鞍部との屈曲部辺りで、鞍部尾根筋より東側の谷部寄りの立地である。平面は楕円形を呈し、主軸はN-45°-Eを振る。規模はNo.12調査区で検出した土坑のうち最大で、長軸143cm、短軸131cm、深さ182cmを測る。断面は東壁面に凹凸が見られるもののU字状で、小さな底面からすり鉢状に立ち上がる形状である。埋土は13層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-18（第８・197図、図版100・106）

調査区中央部の尾根鞍部、標高32.03～32.35mに位置する。下位にSK-19・20が重複する。北東側のSK-17をはじめ周囲にSK-09～20が展開する。鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平



第196図　No.12 SK-17実測図（S＝1：30）



第197図　No.12 SK-18実測図（S＝1：30）

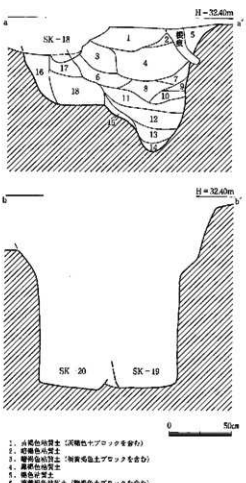
坦面を造成しており、SK-18は平坦面のほぼ中央部に位置するが、元々は南から下る尾根筋と鞍部との屈曲周辺部でほぼ稜線上の立地である。平面はやや不整な楕円形を呈し、主軸はN-47°-Eを振る。平面規模に対し浅く、規模は長軸171cm、短軸128cm、深さ22cmを測る。断面は椀状である。埋土は3層に分かれ、最上層の第1層は黒褐色粘質土である。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-19（第8・198図、図版100・106）

調査区中央部の尾根鞍部、標高31.33～32.35mに位置する。東側上層でSK-18に壁面を切られ、同じく東側でSK-20を切る。北東側のSK-17をはじめ周囲にSK-09～20が展開する。鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造成しており、SK-19は平坦面のほぼ中央部に位置するが、元々は南から下る尾根筋と鞍部との屈曲周辺部でほぼ稜線上の立地である。平面はやや不整な円形を呈し、規模は長軸118cm、短軸113cm、深さ143cmを測る。断面は中位やや上で段をとる逆台形である。西側で確認した土層断面では埋土は15層に分かれ、第4層は黒褐色粘質土でその上層に黄褐色粘質土が堆積する。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-20（第8・198図、図版100・106）

調査区中央部の尾根鞍部、標高30.33～31.82mに位置する。上層をSK-18、東側をSK-19に切られる。東側のSK-17をはじめ周囲にSK-09～20が展開する。鞍部一帯は後世の畑作により尾根の東西を埋め立てて平坦面を造成しており、SK-20は平坦面のほぼ中央部に位置するが、元々は南から下る尾根筋と鞍部との屈曲周辺部でほぼ稜線上の立地である。遺存状況から平面は楕円形を呈するとみられ、規模は遺存長71cm、短軸64cm、深さは現況で110cmを確認する。断面は上位で屈曲して広がるものの逆台形である。土層は西端断面での埋土3層の確認にとどまった。遺物は何も出土しなかった。



1. 赤褐色地質土（黒褐色土ブロックを含む）
2. 褐褐色粘質土
3. 暗明色粘質土（黒褐色土ブロックを含む）
4. 黒褐色粘質土
5. 褐色砂質土
6. 暗黄褐色粘質土（暗褐色土ブロックを含む）
7. 褐色砂質土
8. 黒褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
9. 暗黄褐色粘質土
10. 褐色粘質土
11. 黄褐色粘質土
12. 褐褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロックを多く含む）
13. 黒褐色粘質土
14. 灰褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
15. 黄褐色粘質土
16. 黄褐色地質土（褐褐色土ブロックを含む）
17. 灰黄褐色砂質土
18. 黒黄褐色砂質土

第198図　No.12 SK-19・20実測図（S＝1：30）

No.12　SK-21（第８・199図、図版100・106）

調査区中央やや北側の、北から下る尾根筋斜面、標高31.72～32.70mに位置する。斜面高位の３m北側に同様な形態・規模のSK-22が配置し、南斜面下位の鞍部に展開する土坑群とは４m弱離れる。SK-21の周辺は耕作土下が地山であり、上層に重なる71号墳の遺存状態からも多少なりとも上部は削平されているとみられる。平面はやや不整な楕円形を呈し、主軸はN－9°－Wを振る。規模は長軸78cm、短軸58cm、深さ95cmを測る。断面は底面から急傾斜で立ち上がり壁面に若干の凹凸があるものの逆台形状である。埋土は９層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-22（第８・200図、図版107）

調査区中央やや北側の、北から下る尾根筋斜面、標高32.49～34.39mに位置する。上層に71号墳が築造され、その折北側周溝によって土坑北側を掘削される。南斜面３m下位に同様な形態・規模のSK-21が配置し、鞍部に展開する土坑群とは約８m離れる。平面はやや不整な楕円形を呈し、主軸はN-23°-Wを振る。規模は長軸98cm、短軸65cm、深さ98cmを測る。断面は底面から比較的急傾斜で立ち上がり壁面に若干の凹凸があるものの逆台形状である。埋土は７層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-23（第８・201図、図版107）

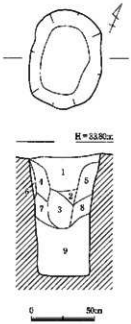
調査区北側の72号墳が立地する尾根頂部から西へ下る緩斜面、標高31.74～32.59mに位置する。東側斜面４m高位にSK-24が配置し、北側の鞍部に展開する土坑群とは14m弱離れる。72号墳の西側斜面は後世の畑作による平行な耕作溝が何条にも及び、周辺は東からの黒褐色の流土とともに厚い耕作土に覆われていた。SK-23の上層には本来74号墳が築造されており、現況ではその盛土も完全に削平され平坦面に造成されている。SK-23の上面も削平された可能性があり、現況も上部が耕作溝で一部掘削されている。平面はやや不整な楕円形を呈し、主軸はN－2°－Eを振る。規模は長軸68cm、短軸54cm、深さ82cmを測る。断面は不整な袋状で、特に西側の壁面は中位で膨らみ、東側は大きく入り込んだ底部から上面へかけて立ち上がる形状である。埋土は耕作溝埋土を除き６層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

No.12　SK-24（第８・202図、図版107）

調査区北側の72号墳が立地する尾根頂部から西へ下る緩斜面、標高32.15～33.25mに位置する。西側斜面４m低位にSK-23が配置し、北側の鞍部に展開する土坑群とは11m弱離れる。72号墳の西側斜面は後世の畑作による平行な耕作溝が何条にも及ぶ。SK-24の上層には74号墳が築造されており、現況ではその盛土も削平されて平坦面に造成されている。74号墳東側周溝の遺存状況からもSK-24の上面はかなり削平されていると考えられる。平面はやや不整な楕円形を呈し、主軸はN-71°-Wを振る。規模は長軸89cm、短軸73cm、深さ106cmを測る。断面は底面から比較的急傾斜で立ち上がり壁面に凹凸がみられるものの逆台形状である。埋土は６層に分かれる。遺物は何も出土しなかった。

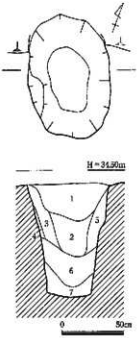
No.12　SK-25（第８・203図、図版108）

調査区南端に位置し、72号墳が立地する尾根頂部から南へ下る緩斜面、標高31.79～33.11mに位置する。周辺に同様な土坑はみられず、南側調査区域外の斜面低位に展開する可能性を残す。SK-25の上層には77号墳が築造されており、現況ではその盛土も一部を残すが北側を中心に掘削されて平坦面に造成されている。SK-25の上面も少なからず削平を受けていると考えられる。平面はやや不整な楕円形を呈し、主軸はN-61°-Wを振る。規模は長軸120cm、短軸102cm、深さ91cmを測る。断面は南隅で上面近くに段を有するが、不整な逆台形状で、南壁を除き底面から急傾斜で立ち上がる。底平面は隅丸長方形状



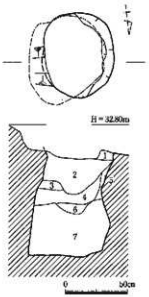
1. 暗褐色粘質土（やや黄褐色がかる。3.5cmの黄色粒状部を多く含む。炭片を微かに含む）
2. 暗褐色粘質土（0.5cmの黄色粒状部をよりより多く含む）
3. 褐褐色砂質土（1～2.5cm前。炭片を含む）
4. 暗黄褐色砂質土（0.3～0.5cmの黄色粒状部。炭片を含む）
5. 赤黄褐色砂質土（0.5cmの黄色粒状部を含む）
6. 黄褐色砂質土（1～2cmの赤色粒状部を含む）
7. 褐黄褐色砂質土（0.3cmの黄色粒状部を含む）
8. 暗褐色砂質土（0.5cmの赤色粒状部。炭片を微かに含む）
9. 暗褐色砂質土（やや黄色がかる。0.3～0.5cmの赤色粒状部。炭片を含む。砂質ややあり）

第199図　№12 SK-21実測図（S＝1：30）



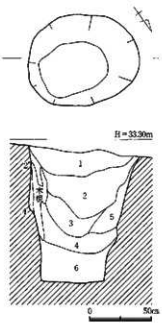
1. 暗褐色粘質土（2～3cm大の黄褐色土ブロック。0.5cmの黄色粒状部。炭片を含む）
2. 暗黄褐色粘質土（4～5cm大の崩れた状態のレンガを含む）
3. 暗褐色砂質土（1～2.5やや前。0.5cmの黄色粒状部を含む）
4. 褐褐色砂質土（やや明るかる。炭片を含む）
5. 暗黄褐色砂質土（1～2.5より前。やや明るかる。炭片を含む）
6. 暗黄褐色砂質土（0.5～1cmの黄色粒状部。炭片を含む）
7. 暗赤褐色砂質土（6.5より前。やや灰色がかる。炭を微小含まない）

第200図　№12 SK-22実測図（S＝1：30）



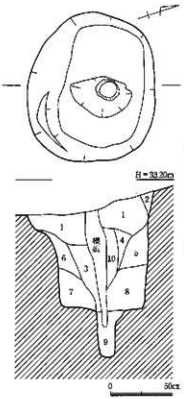
1. 褐色砂質土（薄灰色混土）
2. 黒褐色砂質土（暗褐色土を含む）
3. 暗赤褐色砂質土（黄褐色土ブロックを含む）
4. 黒褐色砂質土（1.5より明。暗褐色土を微かに含む）
5. 黒褐色砂質土（3～5cmの黄褐色土ブロックを含む）
6. 黒褐色砂質土（7.5より前。砂質やや強）
7. 黒褐色砂質土（6.5より前。砂質強）

第201図　№12 SK-23実測図（S＝1：30）



1. 暗褐色砂質土
2. 褐褐色砂質土
3. 暗黄褐色粘質土（黄山焼ブロックを含む）
4. 暗褐色粘質土（黄山焼ブロックを含む）
5. 淡黄褐色砂質土（1.5より明）
6. 黄褐色砂質土（黄山焼ブロックを多く含む）

第202図　№12 SK-24実測図（S＝1：30）



1. 黒褐色砂質土（2～3cm大の黄山ブロック。暗褐色土を含む）
2. 褐色粘質土（やや赤褐色がかる）
3. 黒褐色砂質土（1.5やや前）
4. 灰褐色粘質土（6.5cm大の黄山ブロックを微かに含む）
5. 褐褐色粘質土（やや黄褐色がかる。2～4cm大の黄山ブロックを少し含む）
6. 褐褐色粘質土（2～5cm大の黄山ブロックを多く含む）
7. 暗褐色砂質土（2～5cm大の黄山ブロックを多く含む）
8. 褐色粘質土（1.5より明。2～4cm大の黄山ブロックを多く含む）
9. 明褐色粘質土（やや赤褐色がかる。粘質土を含む）
10. 暗褐色砂質土（明色土を含む。柴の腐蝕）

第203図　№12 SK-25実測図（S＝1：30）

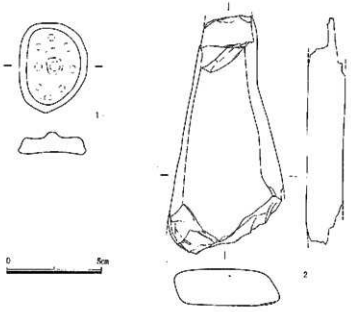
となり、中央に小ピットが検出された。小ピットは長径12cm、短径10cm、深さ36cmを測る。土坑全体で埋土は10層に分かれ、小ピット上に木根痕が伸びる。遺物は何も出土しなかった。

No.12遺構外の出土遺物（第204図、図版129）

遺構外の出土遺物として、調査区南側の平坦面および土坑が集中する鞍部の平坦面を中心として、わずかながら須恵器体部細片や河原石などが出土している。このうち蓋形の土製品（1）は77号墳の所在する平坦面から、磨製石斧（2）は72号墳の中心部周辺で出土したものである。（1）は乳褐色で硬く焼き締まり、摘み状の突起があり周辺に指頭圧痕がめぐる。（2）は撥形で、基部および刃部を欠損する。粘板岩製である。

No.12調査区北東トレンチ調査（第5図、図版108）

調査区北側の67号墳の位置する丘陵変換点から北東へ下る尾根の下位、標高28～29m付近に三日月状の平坦面が認められることから、尾根筋とそれにほぼ直交するトレンチを設定し、地山面まで掘り下げを行った。その結果、尾根と平坦面との屈曲部に地山掘削の痕跡は認められず、盛土状の層も認められなかった。現況平坦面のトレンチにおいても遺構状の落ち込みはなく、遺物も出土しなかった。自然地形と考えられる。



第204図　No.12 遺構外出土遺物実測図

出土遺物観察表

—記載事項について—

挿図番号　遺構ごとの実測番号、図版番号、付図内表示番号を統一して示す。

器　種　土器は形態的特徴から、壺・甕・高杯・低脚杯・器台・鉢・杯等の呼称を用い須恵器は、蓋杯・杯蓋・高杯・甕・瓶等の従来の呼称を用いた。部分名称の場合は（　）で表示。鉄製品は形態、使用痕等の観察から、鉄刀・鉄剣・鉋・刀子・鉄鏃・鉄斧・鉄鑿の名称を用いた。石製品は形態、使用痕等の観察から、砥石・石錘・磨石等の名称を用いた。

法　量　土器……口径：①　底径：②　最大胴径：③　器高：④をcmで示す。なお、（　）は復元値。〈　〉は推定値。ただし日安としての径の残存が7分の1以下を推定値とした。
石製品・鉄製品……長さ：L　幅：W　厚さ：Tをcmで示す。（　）現存値。

形態・手法の特徴　主要部分について記述した。土器については口縁部の内外面ヨコナデ調整を特別な場合以外は省略した。

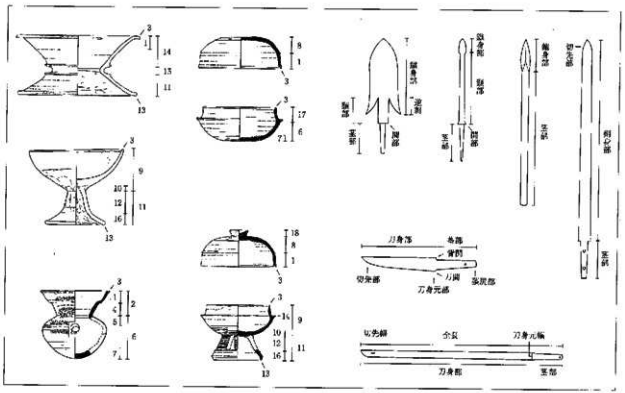
胎土・焼成・色調
① 胎土　砂粒の大きさとその量を示す。
② 焼成　良好(堅緻)・良(普通)・やや不良(やや軟)・不良(軟)の4段階に分けた。
③ 色調　主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合(外)・(内)で表示。

備　考　赤彩、黒斑、煤の有無等を記載。鉄・石製品は重量を記載。（　）は現存値。

遺物登録番号　出土地を調査区分の通し番号で表示。遺物台帳登録番号。

—**遺物実測図中における表示**—
須恵器：黒塗り　土器回転糸切り：◎
土器実測図のヨコナデ調整による稜：
遺物使用痕範囲：
石製品実測図摩滅範囲：
石製品実測図加工痕範囲：

—**土器の部分名称について**—　部分名称を略す場合は頭文字を（　）で表示。
1：口縁部　2：口頸部　3：口縁端部　4：頸部　5：肩部　6：体部　7：底部　8：天井部
9：杯部　10：杯底部　11：脚(台)部　12：脚柱部　13：脚端部　14：受部　15：接合部　16：裾部
17：立上り　18：つまみ



第205図　土器・鉄製品細部名称図

No.11北　横杭22号墳（第14図）

番号	器種	法量(cm) ①長 ②幅 ③厚 ④最大幅 ⑤径	形態・手法の特徴			残存状況		備考	遺物番号
1	土師器 須恵器	① 18.2 ② 18.5 ③ 8.5	須恵器か。 全体、色調共に須恵器系へと近似的に開き傾度が外反して頂部をもつ。	(外)	素ロナデ。 (内) 全面、宝石状ナデ。全部へラ削り。	①1～2mm砂粒を含む ②良好 ③暗褐色	(全) 1/2 (内) 1/4	全部 打欠 二箇所用孔	6
2	土師器 高杯	円孔 (9.8)	須恵器か。外反して大きく開き裾広がりに仕上げる。 脚柱部から外に円孔2箇所、3方向の可能性。	(外) (内)	横撫不明瞭。 上半へラ削り後ヨコナデ。 上半の段ヒダ目をナデ消す。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③赤	(脚) 2/3 (孔) 欠	黒斑有	5

No.11北　横杭23号墳（第17・18図）

1	土師器 杯	① 17.0 ② 16.1 ③ 5.4	浅形器台。 全体、色調共に須恵器系へと近似的に開き傾度が外反して凸面をもつ。	(外) (内)	横撫不明瞭。 全面、ヨコ方向撫痕。内面へラ削り痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③暗褐色	(全) 1/2 (台) 1	全部 打欠 土器新用孔	9
3	石 製	L 8.0 W 7.1 T 3.1	扁平な色紙石。 平面形は楕円形。	長軸両端部を四状に打欠き加工。両内端に使用痕。		①灰色系	破損完形	19g 多摩の安山岩	1

No.11北　横杭24号墳（第21・22図）

1	土師器 杯 台	① 18.2 ② 15.8 ③ (5.6)	須恵器か。 全体、色調共に須恵器系へと近似的に開き傾度が外反して凸面をもつ。	※胎土剥落不明瞭。		①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③黒褐色	(全) 2/3 (台) 1	全部 打欠 土器新用孔	9～16
2	土師器 壺	① (7.4) ② (10.0)	二段構成が特徴的にたちあがる。	(外) 横撫不明瞭。 (内) 剥落不明瞭。		①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③暗色	(口) 1/10 (体) 1/3		7 61M 22
3	石 製	L 6.3 W 5.2 T 1.1	扁平な多角石。 平面形は楕円形。	長軸両端部を四状に打欠き加工。両内端に使用痕。		①灰色	完形	44g 角閃石安山岩	8

No.11北　横杭25号墳（第24図）

1	土師器 壺 台	① (18.3) ② (17.4) ③ (10.4)	器形器台。 全体、色調共に須恵器系へと近似的に開き傾度が外反して凸面をもつ。	風化不明瞭。 (外) 横撫不明瞭。 (内) 全面丁寧なナデ。指の動き有。		①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③黒褐色	(全) 2/3 (台) 1	全部 打欠 土器新用孔	24
2	土師器 壺	① 22.5	鉢台口縁。 二段構成が特徴的に大きく開き肩部をもつ。 脚部に凸帯を巡らす。	(内外) 口縁部にヨコナデ以前のヨコハケ目が残る。 (外) 横撫痕ハケ目風凸凹状付。横撫痕いまヨコナデ。凸帯部まヨコナデ。		①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	(口) 1/2		25

No.11北　横杭26号墳（第27・28図）

1	土師器 高 杯	① 14.7 ② 9.4 ③ 11.9	浅状の杯形。脚形に近似みる。 口縁部は内傾して立ち上がり端部は丸い。 脚柱は細やかに開き、下半ヘハケ手に開いて裾部をもつ。	杯部 (内外) ナデ。外面に底部痕。 脚部 (外) 上半工具ナデ。下半ナデ。ハケ痕。 (内) 上半ハケ目を軽くナデ消す。下半ハケ目。成形時の指頭痕。		①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色　淡黄褐色	ほぼ完形	全形 黒斑 土器新用孔	20
2	土師器 高 杯	① 13.8 ② 8.7 ③ 10.8		杯部 (内外) ナデ。外面に底部痕。 脚部 (外) 上半工具ナデ。下半ナデ。 (内) ナデ。二本の絞り目を軽くナデ消す。成形時の指頭痕。		①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	杯部完形	全形 黒斑 杯部 盗 土器新用孔	21
3	土師器 高 杯	① 14.4 ② 8.4 ③ 11.0		杯部 (内外) ナデ。外面に底部痕。 脚部 (外) 二本二単ナデ。下方ナデ。 (内) ナデ。上半の絞り目を軽くナデ消す。成形時の指頭痕。		①2.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③暗黄褐色	(口) 1/2 (脚) 12/12	全形 脚部 盗 土器新用孔	22
4	須恵器 壺 杯 蓋	① (12.0)	口縁部は直下に下り端部は段を成し凹面とする。 天井部と口縁部を分ける段は浅く緩い。	(内外) ヨコナデ。口縁端部1条の沈線段ヨコナデ。		①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③灰色 (内)淡灰色	(口) 1/8 (天) 1/8		14
9	須恵器 有蓋高杯 蓋	つまみ 3.6 ① 11.8 ② 5.9	凹面を成す壺さん。 口縁部は直下に下り端部は段を成し凹面とする。 天井部と口縁部を分ける段は浅く緩い。	(内外) ヨコナデ。口縁内端1条の沈線段ヨコナデ。 (外) 天井部ヨコナデ。口縁部へ下削り。 (内) 天井中心部一方向のナデ。		①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③(外)淡灰色　淡黄色 (内)淡灰色	つまみ 1 (口) 1/4 (天)上半 2/3 (天)下半 1/3		6 10
10	須恵器 壺	① 20.8 ② 10.3 ③ 円孔 1.4	二段構成が特徴で端部は凹面をもつ。 口縁部は凹部で端端に張り出して最大張と同じ。もちろ。 口縁部与体部は大幅かに大きい。 底部は平ある。	(内外) ヨコナデ。口縁端部は1条の沈線段ヨコナデ。 (外) 口縁部には1条の沈状文を2段に施す。体部中位には2条の沈線段上下部に連続文と同一の工具で波紋状横文を施し縦沖状とする。底部はヘラ削り位中心部で平なナデ。 (内) 粘土ナデ。体部下半ナデ。指ナデ。円孔は小穴から空つ。		①1～2mm砂粒を含む ②良好 ③淡色　赤褐色	完形		7

No.11北　横杭59号墳（第29・34図）

図版番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④最大胴径 ⑤径	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	須恵器 蓋　杯 杯　蓋	① 13.1 ④ 5.1	天井部はなく、口縁部がやや外方に下り端部に段をなして凹面とする。 天井部と口縁部を分ける稜は鋭く段状に欠ける。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部1/2時計廻りのヘラ削り。 (内) 天井中心部に同心文工具痕。	①1/4以下の破片を多く含む 4～5mの破片を含む ②良 ③灰白色　灰色	完形	出器転用板	82
2	須恵器 蓋　杯 杯　身	① 11.6 (②8) 13.9 ③ 3.3	立ち上りは約横し端部に段をなして角張りとする。 傾斜は強く、受部は水平に近い。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部1/2時計廻りのヘラ削り。 (内) 底部に同心文工具痕。	①1～2mの破片を多く含む 4mの破片含む ②良 ③灰色　灰色	完形	二段転用板	83
15	土師器 甕	① 14.7 ③ 20.8	粗な二段。 口縁部は外横して端部は丸みをもつ。 体部は中位に最大径をもつ。	(外) ヘラ磨き。刷毛ハケ目後口縁ハケ目。下方不定方向のハケ目。 (底) 胴部ナデ。体部下半ヘラ削り。	①1mを越す破片を多く含む 2mの破片、3mの破片含む ②良 ③褐色　赤褐色	(周) 欠	煤付着 二次熱変	64 65
16	須恵器 有蓋高杯 蓋	つまみ 3.2 ① 11.5 ③ 5.7	間隔を広げつまみ。 口縁部は大。口縁部はやや外方に下り端部で段をなして凹面とする。 天井部と口縁部を分ける稜は鋭く段状に欠ける。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部1/2時計廻りのヘラ削り。つまみ貼付部ヨコナデ。 (内) 天井中心部を調整ナデ。	①2cm間隔の破片を多く含む 8mの破片含む ②良好 ③灰白青灰色 (底)灰色	(口) 1/4欠		40
17	須恵器 有蓋高杯 蓋	つまみ 2.7 ① 12.0 ③ 5.9		(内外) ヨコナデ。口縁補足は2条の沈線ヨコナデ。 (外) 天井部1/2時計廻りのヘラ削り。つまみ貼付部ヨコナデ。 (内) 天井中心部を調整ナデ。内面突二角形が僅かに残る。	①1.5mに下の破片を多く含む 9mの破片含む ②良 ③(外)灰白色　灰色 (内)灰白色	完形		71
18	須恵器 有蓋高杯 蓋	つまみ 2.8 ① 11.2 ③ 5.3		(内外) ヨコナデ。口縁端部に1条の沈線段ヨコナデ。 (外) 天井部1/2時計廻りのヘラ削り。つまみ貼付部ヨコナデ。 (内) 天井中心部を調整ナデ。	①1～2mの破片を多く含む 4mの破片含む ②やや良 ③灰灰色	(口) 1/8欠		42
19	須恵器 有蓋高杯 蓋	つまみ 3.8 ① 11.2 ③ 5.3		(内外) ヨコナデ。口縁端部は1条の沈線段ヨコナデ。 (外) 天井部1/2時計廻りのヘラ削り。つまみ貼付部ヨコナデ。 (内) 天井中心部を同心ナデ。円弧文工具痕が僅かに残る。	①1～3mの破片を多く含む 6mの破片含む ②良好 ③(外)灰色　灰灰色 (内)ライ灰色	(口) 1/8欠		38
20	須恵器 蓋	① (11.9)	口縁部は外方に下り端部で段をなして凹面とする。 天井部と口縁部を分ける稜は鋭き段状に欠ける。	(内外) ヨコナデ。口縁内面は1条の沈線段ヨコナデ。	①1mを越す破片を多く含む 3mの破片含む ②良好 ③(外)灰白 (内)灰灰色	(口) 1/4		20 24
21	須恵器 有蓋高杯	① 10.0 (②7) 12.6 ③ 8.1 ④ 9.3	立ち上りは内傾し端部で段をなして角張りとする。 杯底部は大で受部が外上方に延び。 傾部は内の字状に開き端部を下方につまみ出す。	(内外) ヨコナデ。口縁端部は1条の沈線段ヨコナデ。 (外) 杯部1/2時計回りのヘラ削り。脚部ヘラ磨。 杯、脚部の接合部ヨコナデ。 (内) 杯底部調整ナデ。 長方形状の透かし穴は外面から塗り。	①1～2mの破片を多く含む 3、4mの破片含む ②良 ③灰色　灰灰色	ほぼ完形	二次焼	8 33 36 39
23	須恵器 有蓋高杯	① (9.1) (②7) 12.1 ③ 7.8 ④ 9.3	立ち上りは内傾し端部で段をなして角張りとする。 杯体部は浅く受部は外上方に伸める。 脚部は内の字状に開き端部を下方につまみ出す。	(内外) ヨコナデ。口縁端部は1条の沈線段ヨコナデ。 (外) 杯部1/2反時計回りのヘラ削り。 杯、脚部の接合部ヨコナデ。 (底) 杯底部調整ナデ。	①1mを越す破片を多く含む 6.5mの破片有 ②やや不良 ③灰白色　灰色　黄灰色	(口) 1/5 (外) 1/3 (脚) 1		58
24	須恵器 有蓋高杯	① 9.5 (②7) 11.8 ③ 7.6 ④ 9.4	立ち上りは内傾し端部で段をなして凹面とする。 受部は外上方に伸める。	(内外) ヨコナデ。口縁内面は1条の沈線段ヨコナデ。 (外) 杯、脚部接合部ヨコナデ。 (内) 杯底部調整ナデ。	①1～2mの破片を多く含む 3、4mの破片含む ②良好 ③灰色	ほぼ完形	自然釉	52
25	須恵器 (杯部)	④ (9.9) (②7) 11.8	立ち上りは内傾し端部で段をなして凹面とする。 受部は外上方に伸める。	(内外) ヨコナデ。口縁端部は1条の沈線段ヨコナデ。	①1mを越す破片を多く含む 5mの破片含む ②良好 ③(外)灰灰色　灰色 (内)灰灰色	(口) 1/5		59
26	須恵器 壺	① 9.6 (②7) 12.8 ③ 4.7	口縁部に直線的に開き端部は丸く。 体部は下位に最大径をもち張り出す。 口縁部と底部の接続、体部上位に2条の沈線有。	(内外) ヨコナデ。 (外) 頸部に11～12条の波状文。頸部に波状文と同一工具によると思われる連続刺突文。底部ナデ。 (内) 体底部調整ナデ。円弧状の痕跡残。	①1～2mの破片を多く含む 5.9cmの破片有 ②良 ③灰灰色	ほぼ完形	二次焼	41
27	須恵器 壺	① 13.2	口部は中上位に最大径をもち張り出す。 体部上半に2条の沈線。	(内外) ヨコナデ。 (外) 頸部は2条の沈線で区画。ハケ工具による連続刺突文を押し引く。最部不定方向のナデ。 (内) 底部ナデ。円弧状の痕跡残。体部は荒。	①1～2mの破片を多く含む 5mの破片含む ②良 ③灰灰色　褐灰色	(体) 1	自然釉	60

No.11北　横杭59号墳（第34・35図）

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④最大径 ⑤厚さ	形態・手法の特徴		①粘土 ②胎土 ③焼成 ④色調	残存状況	備考	遺物番号
28	須恵器 杯	①　(13.6) ②　(10.6)	受部は内刃して開き端部で外に開いて丸い。 体部は「筒状」に近い形で、アキ状部屈曲の中に浅き凹線で下方に続める。 受部に接支形状。台脚に底を もつ。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　受部は2条の沈線で段に成次文を施した後、円形と手法の淳文を交互に出材に、下段はずれてあ ず。 受部底部は2条の沈線で区切った間に縦状文を2段に施す。上方形の可能性をもつ逆し字を重列に巡り。台脚部は底部際に2条の沈線で区切り、上段に三角刃の逆し字を施し下段は3方向と施設する。 (内)　無紋に自然釉の輪金紋。 逆し字は外形から巡つ。	①11.5cmの小粒を含む ②3mm角程度 ③良 ④淡灰色　灰色	(口)　1/8 (脚)　1部 (台)　./4		28M 2 3 59M 24 35 67 69 外　3 外　4
29	横瓶器 壺	①　24.0 ②　43.0 ④　(48.0)	口縁部は外反して鉢状部で開口し円形部を上方につまむ。 円形部を上端に最大径をもち胴部は徐々に後縁方向へとゆるやかに丸く。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　外面は2/3上位を縦方向の刷毛は、底部は穴 底方向の刷毛目と「最後刷毛の2/3を縦方向 ま上する。 胴部のヘラ目に平行方向に施す。 (内)　縦紋ナデ。部分は第2円盤で工具による工具痕。石部に同心円状、胴部は青海波状に施す。 胴部は外縁状に施す。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③灰色　褐灰色	(口)　1/10次 (体)　1/5次	自然釉	6　12 17～19 24　25 30～32 34　35 43～46 48～54 56　57 61　63 66　68 70　85

No.11北　横杭60号墳（第38～40図）

1	横瓶器 台付長頸壺	つまみ 3.2 ①　11.7 ③　8.0	底面をなすつまみ。 口縁部は直下に下り端部は段をなし円周とする。 天井部は山稜部を分ける線は浅く浅きに欠ける。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部2/3迄時計廻りのヘラ削り。つまみ貼付後ヨコナデ。 (内)　天井中心部平定方向のナデ。	①1～2mmの砂粒を多く含む 5mm程度含 ②不良 ③淡乳灰色	(口)　3/4 (天)　1	上器転用杯	49
2	横瓶器 台付長頸杯	①　10.2 (受)　12.4	立ちとは内側し海部で段をなして切面となる。 体部は丸く、受部は水平方向に出める。 胴部に3方向の凸三角。	(内外)　ヨコナデ。口縁内面は1条の沈線部ヨコナデ。 (外)　体部1/2迄時計廻りのヘラ削り。 胴部ヨコ目。 (内)　不明部分はナデ。 方形状の凸三角を外面から巡つ。	①1mm前後の砂粒を含む 2.5mm程度含 ②不良 ③淡灰色	(口)　3/4 (杯)　1	二器転用坏	45 47
3	横瓶器 高杯	①　13.6	杯体部は内湾して立ち上り口縁部で外反する。円弧部は大。 杯部外面に2条の沈線。 脚部にの字状に開き3方向の凸三角。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　杯底部調整はヘラナデ。円部又工具痕が残かに残る。 脚方形状の凸三角を外面から巡つ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外)淡灰色　灰色 (内)淡灰色	(外)　1 (脚柱)　1/3	自然釉 上器転用杯	2 60M 68
4	横瓶器 有脚高杯 蓋	つまみ 3.2 ①　22.0 ④　5.7	蓋部をなすつまみ。 口縁部は直下に下り端部は段をなし長蓋とする。 天井部とは稜部を分ける線は浅く紀きに欠ける。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部2/3迄時計廻りのヘラ削り。つまみ貼付部ヨコナデ。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③灰色 ④灰色	球状破形		35
5	横瓶器 鉢	①　9.8 ③　10.0 ⑤　10.8 円孔　1.5	口縁部は外傾して立ち上り口縁部で段をなして、軍に外傾する。 胴部は平面をなす。 胴部で最大径となし円孔1をもつ。 口縁部は修部辺り幅かに大きい。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　胴部に接角の痕跡あ。胴部も同一の底状とした後、下位もしっかりとヨコナデし最大円部位に接状文を施す。 底部ナデ、ヘラ削り痕を残す。 (内)　修部で平坦ナデ、ナデ。 孔は外部から穿つ。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③暗灰色 (内)1部淡灰色	ほぼ完形	一部欠	36
6	横瓶器 (蓋)	①　(11.5)	口縁部は東下に下り円部は段をなし円周をなす。 天井部と一稜部を分ける線は浅く浅きに欠ける。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部2/3迄時計廻りのヘラ削り。 (内)　天井部周囲ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む 4、5mm程度含 ②良 ③灰色 (天)七ビア色	(口)　1/10 (天)　1/4	自然釉	13 60
7	横瓶器 (杯部)	①　(10.5) (受)　(12.6)	口縁部は内傾し端部に段をもつ。 受部は水平方に延める。	(内外)　ヨコナデ。口縁端部は2条の沈線部ヨコナデ。 (外)　二条の凸帯。	①1mm前後の砂粒を含む 2、3mm程度含 ②良 ③灰色 (脚)七ビア色	(口)　1部 (体)　1/7		13 41
8	横瓶器 壺	①　(26.1)	口縁部は外反して開き端部で段をもち二方へつまむ。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　胴部平行ヘラ目、後縁ヨコナデ。 (内)　円盤文色で二段成。	①1mm前後の砂粒を含む 3mm程度含 ②良 ③(外)淡灰色　灰色 (内)暗青灰色　灰色	(口)　1/8	自然釉	43 62
9	石　製 Ⅱ	L　20.4 W　12.4 T　7.9	自然石。	1面に使用痕。使用頻度が高い。	20灰色	完形	3185g 石英安山岩	63
12	石　製	L　3.2 W　1.8 T　0.4	紡錘車。二角形石。	穿孔を行う大き目加工する。胴部四は完成後で使用状。	③灰色	完形	1.7g サヌカイト	37

No.11北　横杭61号墳（第41・44図）

横杭番号	器種	径長(cm) ①底径 ②口径 ③最大径 ④器高	形態・手法の特徴			①砂 土 ②粘 成 ③色 調	残存状況	備考	遺物注記番号
1	土師器 壺	① 24.4	複合口縁。 口唇部は外反して開き端面をもつ。 頸部に凸帯をもつ。	(外) 頸部横ハケ目、ケズリ後、接板ハケ目。 頸部に凸帯貼付後横ナデ。 (内) 指頭ナデ。体部内面不明瞭。	① 1 mm以下の砂粒を多く含む 4 mmの砂粒有 ②不良 ③灰褐色	(口) 1 (胴) 3/4	完全で黒焦痕有 胴部 打欠 土器転用有		56
2	土師器 器 台	① (18.8) ② 17.8 ④ 9.7	脚部番号。 受部、台脚共に端部方向へと直線的に開き端部で外反する。脚部は筒状をもつ。	全面風化剥落。 (外) 受部ヨコナデ。 (内) 接合部ナデ。全面ヘラ削り痕。	① 1 mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③橙色 1部褐色	ほぼ完存			54
3	土師器 器 台	① (11.8) ② 14.6 ④ 9.8 円孔 1.0	杯部は内湾する底部から直線的に外開し、口縁部へ続く。 杯部は底部から大きく開き杯部は丸みをもつ。中位に三方向の円孔。	全面風化剥落。 (外) 接合部ハケ目。 (内) 接合部ナデ、底部時の絞り目。 円孔は内面から穿つ。	○. mm以下の砂粒を有 ②良 ③橙褐色	(杯) ほぼ完存 (脚) ほぼ完存			55
4	土師器 器 台	② (14.3)	台脚は直線的に開き端部で外反する。脚部は筒状をつ。	受部以下風化剥落。 (外) 接合部ヨコナデ。内面剥落不明瞭。 (内) 接合部ナデ。台脚へヘラ削り。	① 0.5mm以下の砂粒を多く含む 5 mmの砂粒有 ②良 ③赤	(受) 1/6 (台) 1			40 4.
9	土師器 器 台	① 16.4 ② 17.2 ③ 9.9	脚部番号。 受部、台脚共に端部方向へと開き円形に開き杯部で外反する。脚部は筒状をつ。	(外) ヨコナデ。 (内) 受部、接合部剥落不明瞭。台脚へヘラ削り痕。	① 1 mm以下の砂粒を多く含む ②不良 ③暗褐色	(受) 1/2 (台) 1	受部 打欠 土器転用有		61

No.11北　横杭62号墳（第46図）

1	土師器 高 杯	① (4.6) ② 20.0 ④ 12.2	脚部の形態、脚部は筒状に開き端部で外反する。 口唇部は内湾して上方に延び内傾は1.5 mmとなる。 杯部は緩やかに開き下部で窄まり中央部に膨く。脚部は筒状をつ。	風化剥落する。 杯部 (外)ナデ。(内)ケズリ。 脚部 (外)ヨコナデ。ヨコハケ目。 (内)ケズリ、ヨコハケ目。 接合部 (外)ハケ目。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③暗褐色	(口) 1/4 (杯) 1/2 (脚)上半 1 (脚)下半 3/4	赤彩 黒斑有		14
2	土師器 台 付	② 9.0		風化剥落する。 杯部 (外)ナデ。次部後、接着。 脚部 (外)ヨコナデ。ヨコハケ目。次部時の絞り目。 接合部 (外)ハケ目。	①1 mm以下の砂粒を多く含む 5 mmの砂粒有 ②不良 ③暗褐色	(杯) 3/4 (脚)上半 1	赤彩 黒斑有		4 8 8 13

No.11北　横杭63号墳（第52・53・54図）

1	土師器 椀 台	① 17.6 ② 15.6 ③ 9.0	貼付台。 受部、台脚共に端部方向へと外反して開き貼付台外反し脚をもつ。	(外) ヨコナデ。 (内) 風化剥落不明瞭。接合部、台部へヘラ削り痕。	①1 mm以下の砂粒を多く含む 3 mmの砂粒有 ②やや不良 ③明褐色	(受) 1/4 (台) 1	受部 打欠 土器転用有	SX-08 : SX-08 4	
3	土師器 器 台	① (8.5) ② (16.0) ④ (3.2)		(外) ヨコナデ。 (内) 剥落不明瞭。	①1 mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③褐色	ほぼ完存	受部 打欠 土器転用有	SX 07 4	
6	土師器 坩	① (22.8)	複合口縁。 口縁部は外反して開き凸帯をもつ。	(外) 口縁部上部横ハケ目。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②不良 ③淡黄褐色	(口) 1/4		60M 61	
7	土師器 壺	① (22.5)	複合口縁。 口縁部は外反して開き端面をもつ。	(内外) 風化不明瞭。	①1～2 mmの砂粒を多く含む ②良 ③淡黄褐色	(口) 1/8	黒斑有	60M 30	
8	土師器 壺	③ (25.2)	胴部に凸帯をもつ。 胴部が張り出す。	(外) 次部は横部横ハケ目後打撃痕ハケ目、接ハケ。二次焼による変質剥落痕を残存部に観察。 (内) 横部ナデ、頸部は横ハケ。体部下部へヘラ削り。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む 1～2 mmの砂粒有 ②良 ③淡黄褐色	(体) 1/8		60M 61	
9	土師器 器 台	① 9.4 ② 10.9 ④ 9.0	二次焼による補修は無い。 台脚に黒斑部に八の字状に開き円形に広がる。	無風不明瞭。 (外) 接合部ナデ後台部へヘラ削り。 (内) 内面丁寧なナデ。	①1 mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③暗黄褐色	(杯) 1/2 (脚) 1/3	黒斑有	SD-01 : SD-01 2	

No.11北　横杭89号墳（第56図）

1	土師器 杯 身	① 16.7 ② 15.8 ④ 9.4	貼付台。 受部、台部共に端部方向へと直線的に開き端部で外反する。脚部は筒状をつ。	(外) ヨコナデ。 (内) 受部ヘラ削り。接合部ナデ。杯部ヘラ削り後丁寧なナデ。	①2.5mm粗砂の砂粒を含む 1～2 mmの砂粒有 ②良 ③橙色	(受) 1 (台) 3/4	台脚 打欠 土器転用有	SX-03 5	
2	土師器 杯 身	① 16.0 ② 14.6 ③ 8.3	貼付台。 受部、台部共に八の字方向へとやや外反しながら開く。脚部は筒状をつ。 接合部に被をとたない。	風化剥落。口縁部横部上部の花崗状平滑ナデ。 (外) 接合部ヨコナデ。台部に縦位2条のヘラ削り。 (内) 台部へヘラ削り後ナデ。	①1 mm以下の砂粒を含む ②良 ③明褐色	(受) 2/3 (台) 1	受部 打欠 土器転用有	SX-03 7	

No.11北　横枕90号墳（第58・59図）

特図番号	器種	法量(cm) ①口 ②底 ③最大径 ④高	形態・手法の特徴		①粘土 ②胎土 ③焼成 ④色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	土師器 甕	①　16.1 ②　15.8 ④　9.2	口縁部は外反気味に開き端部は大い。 体部は横に広がるなす形状。	底化制作。 (外)　体部中位ハケ目。 (内)　底部ナデ、指ナデ。 胴部に成形痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③橙褐色	(口)　4/5 (底)　1		SX-04 9 SX-04 10
2	須恵器 坩 杯	①　13.5 ④　6.7	天井部は丸味をもち口縁部へと内湾して下方へ続める。端部は丸をもつ。 4は天井部と口縁部を二条の沈線で分ける。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部2/3近時計回りのヘラ削り。 (内)　天井中心部一方向のナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③灰色	(口)　2/3 (天)　-	皿	SX 04 6
3	須恵器 坩 杯	①　(14.5) ④　4.3		(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部1/2近時計回りのヘラ削り。 (内)　天井中心部ナデ。指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(外)灰色 (内)灰色　セピア色	(口)　1/4 (天)　1/2	皿	SX-04 8 SX-34 14 SX-34 16
4	須恵器 甕 蓋	①　(28.4)		(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部蓋にヘラ切り後近時計回りのヘラ削り2回。 (内)　天井中心部一方向のナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む 1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③灰白色	1/4		SX-04 8
5	須恵器 甕 杯	①　12.9 (実)　(14.7) ④　5.8	立ちあがりは内傾して続く。 口がわ部をもつ。5～9の破線は隙を示す。 受部は体部から外上方へ伸める。 体部は5、7～9が先ふをもつ。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　体部1/2時ノ回りのヘラ削り。底部中心にヘラ記号。 (内)　底部円弧文工具痕をナデ消し。粗雑な痕。	①0.5mm以下の砂粒を含む 1～2mmの砂粒有 ②良好 ③灰色	(口)　1/2 (体)　1/3	自然釉	SX-04 5 SX-04 8 SX-04 11 SX-34 53
6	須恵器 甕 杯	①　(13.1) (実)　15.6		(内外)　ヨコナデ。 (外)　底部ヘラ切り。	①2.5mm前後の砂粒を含む 1～3mmの砂粒有 ②良好 ③灰色	(口)　1/4 (体)　3/5	自然釉 変色部	SX-04 7 SX-04 8 SX-04 6
7	須恵器 甕 杯	①　(12.1) (実)　(14.0) ④　4.4		(内外)　ヨコナデ。 (外)　体部1/3時計回りのヘラ削り。 (内)　底部ナデ、指かに円弧文工具痕。	①1mm以下の砂粒を含む 2～3mmの砂粒有 ②良好 ③灰色	(口)　1/7 (体)　3/5	内面釉	SX 04 7 SX-04 8 SX-04 16
8	須恵器 坩 杯	①　(13.4) (実)　(16.0) ④　3.9		(内外)　ヨコナデ。 (外)　体部1/2近時計回りのヘラ削り。 (内)　底部一方向のナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む 1～2mmの砂粒有 ②良好 ③(外)灰色　黒色 (内)緑色	(口)　7/8 (体)　1	自然釉 セット痕	SX-04 3
9	須恵器 蓋 杯	①　(12.6) (実)　(14.7) ④　3.5		(内外)　ヨコナデ。 (外)　体部2/3時計回りのヘラ削り。 (内)　底部円弧文工具痕をナデ消す。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mm前後、4mmの砂礫有 ②良好 ③灰色	(一)　1/8 (体)　1/3		SX-04 4 60M 9
10	須恵器 蓋 杯	①　(11.8) (実)　(14.3)		(内外)　ヨコナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外)褐灰色　灰色 (内)灰色 (釉)セピア色	/6	皿	SX-04 7 SX-04 14
11	須恵器 蓋	①　13.9	脚部に重厚感が強く。 体部は脚付近で中位に最大径をもつ。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　脚部、体部上半をカキ目。位調は幅いヨコナデ。 底部は不定方向のヘラ削り後ナデ。 (内)　底部かき目上凸で強く、成形痕が明の証拠。	○：mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③灰色	(実)　1 (体)中位 1/4欠		52M 6 SX-01 1 SX-01 3～6
12	須恵器 壺	①　12.2	普通は重厚中上半で最大径をもち底部に限り集中。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　体部下半部全方向の平行押ハケ目後底部ヘラ削り。 (内)　指頭、底部ナデ。成形時の証拠。	①1mm以下の砂粒を含む 2～4mmの砂礫、砂礫多 ②やや不良 ③淡灰色　灰白色	(体)　1	自然釉	SX-04 4 SX-06 7 60M 43
13	勾　石	L　19.9 W　9.3 T　5.5		自然石の長軸両端に使用痕。	⑤淡灰色	完存	1820g 角閃石安山岩	SX-04 13
14	砥　石	L　19.1 W　7.7 T　6.5		自然石の長軸両端に使用痕。	⑤淡灰色	完存	1492g 角閃石安山岩	SX 04 11

No.11北　SX-06（第63図）

1	土師器 壺	①　(11.6) ②　30.0	口縁部に向様して立ちとり、端面をもつ。底部に凸部を備える。 胴部から最大径へと緩慢に張り出す。	(外)　胴部凸部以外横ヘケ。年輪不定方向のハケ目。 (内)　胴部平行性跡を胴段に達した段状部ハケ目工具による横横間隔又を3段に渡し横移又とする。 (内)　胴部ヘラ削り後ナデ。成形時の指頭圧痕。 以下胴部不明瞭。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③黄褐色	(口)　1/6 (胴)　1/2		4
2	甕　石	・　11.3 W　3.6 T　3.4	自然石。	一面に使用痕。	②　砥灰緑色	完存	220g 石英斑岩	3

No.11北　SK-04（第69図）

挿図番号	器種	法量(cm) ①口 縁 ②底 部 ③最大径 ④器 高	形態・手法の特徴		①胎 土 ②焼 成 ③色 調	残存状況	備 考	遺物登録番号
1	磨製石斧	L (4.1) W 3.8 T 1.3	刃部。	刃部に使用痕。種類は緑色凝灰岩系。	①緻密 ②良 ③灰色	刃頭片　1	(36)g 弓長石	1

No.11北　SK-11（第76図）

1	土師器 坩器	④ 3.8	ハの字状に開き浅鉢は丸い。	外面　(内外)　ヘラ磨き。 内面　(外)　ヘラ磨き。 (内外)　全面タコナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む。 ②やや不良 ③橙色	(胴)　3/5		1

No.11北　SK-14（第80図）

-	鉄製品 (不明)	④ 5.0 ⑤ 27.4	錆状の金属製片。	重厚な作。 (外)　ナデ、成形時ヨコ長。 (内)　丁寧なナデ、板目痕まで残る。	①2～3mmの砂粒を多くまぜる 2～3mmの砂粒有 ②良 ③淡黄色　淡橙色	(胴、底)　1	黒斑不 薬多く付着 水滴痕多	1

No.11北　SD 03（第84図）

1	土師器 甕	① (13.8) ② (6.7) ④ (3.7)	L字状口縁部。底部から直線的に開き薄い。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　底部不明瞭。	①1mm以下の砂粒を含む 4mm大の赤褐有 ②良 ③赤褐色	:/2		1
2	土師器 鉢	② (27.7) ④ (27.2)	全口状の口縁部、端部は四角を分布部は厚う知覚に下方へ下る。	(外)　強都ナデ、細かいハケ目。我口縁部ナデ。底形 (内)　原体不明のナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③橙色	1/10	薬多く付着	:
3	土師器 (高坏)		先端。	脚部が多い。 (外)　ナデ、ハケ目痕。接続不明。 (内)　荒地工具による強いナデ、指ナデ。	①1mm以下長石の砂粒を含む 4mmの砂粒有 ②良 ③淡赤橙色	(脚)　3/8		1

No.11北　横枕古墳群（銅鏡、銅銭）

（単位）：cm

出土地	遺構番号	器種	L（長さ） W（幅） T（厚さ） （径）	其の他計測値	平面形等	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
22号横 第1主体部	第14図 3	銅鏡	D 径 (9.90) T 最大 0.27 T 最小 0.14	縁長 0.27 縁幅 0.25 花文 0.20 山形 0.14 鈕幅 0.16	平縁 平形	鏡元部は形の逆凹型状、内行花文鏡の鈕周部を外して直径に沿う。切り込を設いて成型する。縁端は外面へやや反る。鈕元は中央部で中心点から放射状、内行花文、山形文の内側に鈕幅と文字が交互に配されて「コ」が認める。	片	(19.2)g	5
23号横 第二	第15図 2	銅銭	D 径 (11.00) T 最大 0.58 T 最小 0.11		平縁 圓郭	鈕軍に外縁側面方向へやや反る。	小片	(6.3)g	2
39号横 第十	第36図 30	銅銭	D 2.41 T 0.13		円形	未鋳造品。表面文字無し。。方形孔。	完存	3.5x 2.5～3.6世紀	29

No.11北　横枕古墳群　鉄製品（鉄刀、鉄剣、刀子、鉇、鎧、他）

出土地	挿図番号	器種	全長	刀部 長さ	刀部 形態	茎部 長さ	茎部 形態	断面 刃部形態	断面 棟厚さ	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
22号横 第1主体部	第14図 4	鉄剣	(28.2)	17.6	鋒形	10.6	茎方形	両者二種類 刃身元部 茎元部 茎尻部	2.35 2.45 1.42 0.95	湾化する。 刃身は先端方向へ幅、厚を徐々に減らし、中心軸に沿をもつ。 走海両面、茎部に同茎元の可能性、を認める。	切元部欠	(70.7)g 布目痕跡	7
23号横 第2主体部	第15図 5	鉄鉾	(23.3)	(2.5)	凸状 鏡 円錐	(20.8)	長方形	刀身中央部 茎元部 茎中央部	0.95 0.80 0.70	湾化する。 刃部は共に個に反りをもつ。 茎部はほぼ一定幅とし、尻部で幅を減らす。	尻端部欠	(24.3)g	8 9 10 11
25号横 第1主体部	第21図 3	鉄剣	61.8	53.6	(鋒形)	11.2	長方形	刃身中央部 刃身中央部 刃身元部 茎中央部	3.20 3.40 3.40 1.40	湾化する。 倉造で丸平状に造がった状態で出土。刃部は元端方向へ幅、厚を徐々に減らし、中心軸の鎬は不明瞭。 茎身両面、茎部に貫孔2を穿穿。	完存	272g 布目痕	29
	第24図 4	他	22.4	3.5	凸状 鏡 円錐	18.9	長方形	刃身中央部 茎元部 茎中央部 茎尻部	0.92 0.63 0.60 0.63	湾化する。 先端部は反りをもつ。 茎部はほぼ一定幅とし尻部で幅を減らす。全体に厚薄部の抉部、茎尻部は等貫孔2穿穿等態。	ほぼ完存	(28.1)g	26 27 30 31
	第24図 6	刀子	(5.0)	(5.0)	二等辺 二角形			刀身中央部 刀身中央部	0.95 1.15	切先は丸い。	刀身部	(4.3)g	10 32

No.11北　横枕古墳群　鉄製品（鉄刀、鉄剣、刀子、鉇、鏃、他）

（単位）：cm

出土地	遺構番号	器種	全長	刀部 長さ	刀部 近距形	茎部 長さ	茎部 近距形	鞘	幅	厚さ	形態の特徴	残存状況	重量	遺物登録番号
26号墳 二号部	第27図 5	刀子	(12.3)	(7.7)	棟辺 三角形	4.6	長方形状	刀身元先端 刀身元刃 茎元刃 茎先刃	0.79 1.59 0.91 0.57	0.22 0.32 0.53 0.28	緩やかである。 両鎬をもつ。	切先部欠	(17.4)g 木質痕	15
59号墳 第2主体部	第32図 3	鉄剣	65.5		(後形)		長方形状	刺身中央部 刺身元部 茎中央部	3.00 3.30 2.75	0.70 0.70 0.45	強く、曲線する。 鞘身は先端力刃へ形。鞘を保かに反らす。鞘部は最後に木刃鞘。 刃部に鞘、切り留め及び鞘に直行。 関表鎬の鞘木質上に厚かい布目が一面に残り更にその上に麻全織目の布目痕跡。 茎部に目釘孔1。	光存	368g	72
60号墳	第40図 10	不明 鉄製品	(6.8)								平面形は扶鉄状態部で扁形、他端でいで鉄とし分形元をもつ。他の鉄製品一部が付着。鞘部に布目？	完存	38.3g	38
61号墳 第1主体部	第41図 5	刀子	5.6	4.7	二等辺 三角形		長方形	刀身切先部 刀身元部 茎先部	0.70 0.85 0.40	0.18 0.20 0.18	小型。刀関をもつ。 切先に丸い。	完存	3.17g 地同版？	59
62号墳 第1主体部	第42図 6	鉇状	12.4	6.3	山形 或 四角	6.1	長方形	刀身中央部 刀身元部 茎中央部	1.50 2.00 1.90	0.30 0.35 0.20	強化する先端部へと反りをもつ。 鞘口の基部から切り込方向へ鞘口 切と二回迄を使用し先端部方へ鎬を鞘部まで強調。 茎部は鞘部まで強調。	完存	27.5g	58
	第41図 7	鏃	8.8		二等辺 三角形			刀身切先部 刀身中央部 刀身元部	2.30 2.70 3.20	0.20 0.22 0.24	茎刃、鏃状角度には注意角。 鏃鞘端部は広く刃を出げる。 先端部は幅を減じて丸く納める。	完存	37.3g 布目痕	57
63号墳 第2主体部	第44図 10	鉇	13.7		二等辺 二角形			刀身切先部 刀身中央部 刀身元部	2.15 2.70 3.40	0.20 0.25 0.30	反り、刀関を有は鉇角。 茎形鞘部に沿て持り曲げる。 先端部に幅を減らし鋭のに向かる。	完存	55.3g	60
64号墳 主体部	第47図 3	大刀	(92.5)	(77.5)	二等辺 三角形	15.2	長方形状	刀身中央部 刀身元部 茎中央部	3.10 3.75 1.90	0.75 0.80 0.45	鋭化する。 関部に鞘、鞘木質が遺存する。 刀身元部に変色具痕。 茎部に目釘孔2。	切先部欠	(94)g 木質痕	12
65号墳 第1主体部	第52図 2	刀子	(3.2)		二等辺 三角形		長方形	刀身元部 茎中央部	0.34 0.94	1.56 0.14	刀関をもつ。	関部	(2.64)g 木質痕	SX-06 3
65号墳 第2主体部	第53図 4	鉄	(8.4)		凸状 鼎 門関	(6.8)	長方形	刀身元部 茎九中央部	1.00 0.70	0.18 0.20	強くする。 先端部刀前へと反りをもつ。 鉄金しないが4と5は1個体の鉄金。 茎部。	両端部欠	(10.48)g 木質痕	SX-06 3
	第53図 5	鉇	(6.8)				長方形	茎中央部 茎部	0.70 0.60	0.20		茎端部	(5.31)g	SX-06 2
69号墳 主体部	第56図 3	刀子	(6.1)	4.5	二等辺 三角形	(1.6)	長方形	刀身中央部 茎中央部	1.30 3.70	0.15 0.10	鋭化する。 切先は丸い。刀関をもつ。背鋼不明。	茎端部欠	(7.85)g	SX-06 5

No.11北　横枕古墳群　鉄製品（鉄鏃）

出土地	遺構番号	器種	全長 ①鏃身部 ②茎部 ③全部	鏃身部 平面形	鏃身部 断面形	鏃身部 鏃身部 W 幅 T 厚さ	鏃身部 逆刺	鏃身部 逆刺長	茎部 関部 平面形	茎部 関部 断面形	茎部 関部 W 幅 T 厚さ	茎部 茎部	茎部 所関部 W 幅 T 厚さ	形態の特徴	残存状況	重量	遺物登録番号
25号墳 第1主体部	第24図 5	鉄鏃	(15.60)			中央部 W 0.90				方形		不明部 W 0.40 T 0.40		鏃身強鋭化。断張して不明瞭。 尖い棒状茎部か、下半は円曲する。	西端部欠	(14.3)g 布目痕？	28
26号墳 主体部	第27図 6	鉄鏃	(12.67) ① 3.00	片刃形	中央部 W 0.70 T 0.20			長方形	中央部 W 0.30 T 0.30	長方形	中央部 W 0.40 T 0.30	長方形	中央部 W 0.35 T 0.35	茎関隙。 鏃身部は刀子形。	基端部欠	(10.9)g 小質痕 安鏃痕 布目痕？	18
					等辺 三角形												
	第27図 7	鉄鏃	(12.30) ① 3.20	片刃形	中央部 W 0.60 T 0.33			長方形状	中央部 W 0.60 T 0.37	長方形	中央部 W 0.35 T 0.35			茎関隙。 鏃身部は刀子形。	基端部欠	(14.3)g 木質痕 巻鏃痕	17
					等辺 三角形												
	第27図 8	鉄鏃	(16.10) ① 3.10 ② 5.70 ③ (4.30)	片刃形	中央部 W 0.75 T 0.20			長方形状	中央部 W 0.60 T 0.60	長方形	中央部 W 0.30 T 0.30			長頸鏃。 鏃身部は刀子形。	先端部欠	(15.3)g 木質痕	18 19
					等辺 三角形												
59号墳 第2主体部	第32図 4	鉄鏃	10.20 ① 4.00 ② 3.80 ③ 3.30	長三角形	中央部 W 1.55 T (0.20)	最狭 0.9			(角)	長方形	中央部 W 0.50 T 0.23	長方形	中央部 W 0.21 T 0.15	鏃身部は先端部からふくらかを ら種かに幅を増して逆刺で外反する。	ほぼ完存	(7.3)g 木質痕	76
				平面													

No.11北　横枕古墳群　鉄製品（鉄鏃）

（単位：cm）

出土地	挿図番号	器種	公長 ①鏃身部 ②頸部 ③茎部	鏃身部 平面形	鏃身部 断面形	鏃身部 W 最大 T 厚さ	鏃身部 逆刺	頸部 関部 平面形	頸部 関部 断面形	頸部 W 幅 T 厚さ	茎部 断面形	茎部 関部 W 幅 T 厚さ	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
29号墳第2主体部	第32図5	鉄鏃	(.0.15) ①(4.40) ②(2.90) ④ 3.25	長三角形 平造	中央部 W 1.10 T 0.10	鎬状	(角) 長方形		中央部 W 0.50 T 0.25	方形	中央部 W 0.20 T 0.20	鏃身部は先端部から幅を増しながら逆刺で外反する。茎部を折り返の巻頭痕、巻柄を鉄線で上端部を荷皮による鞘位の巻痕。	鏃身部欠	(6.8)g 布目痕？	75
	第32図6	鉄鏃	10.25 ③ 4.70 ③ 3.50 ③ 2.90	長三角形 平造	中央部 W 1.15 T 0.15	鎬状 0.9	長方形		中央部 W 0.50 T 0.30	長方形	中央部 W 0.25 T 0.20	鏃身部は先端部から幅を増しながら逆刺で外反する。鳴り鏑上端部を羽皮による鞘位の巻痕。	完存	6.7 鏃重 (14.5)g	80 81
	第32図7	鉄鏃	(6.80) ① 3.40 ② 3.50 ③(0.75)	二角形 平造	先端部 W 0.70 T 0.10	鎬状 0.9	角 長方形	元部 W 0.60 T 0.35	長方形	中央部 W 0.30 T 0.15	鏃身部は先端部から次くるも弓幅を増しながら逆刺で外反する。	茎端部欠	木質痕 巻柄痕	81
	第32図8	鉄鏃	(6.90) ① 4.00 ② 2.85 ③(0.55)	長三角形 平造	中央部 W 1.14 T (0.20)	鎬状 0.5	長方形	上位 W 0.60 T 0.28	長方形	中央部 W 0.42 T 0.25	鏃身部は先端部から幅を増しながら逆刺へ続く。	茎端部欠	(3.1)g 木質痕 巻柄痕 布目痕？	73
	第32図9	鉄鏃	11.15 ① 5.20 ② 3.80 ③ 3.20	長三角形 平造	中央部 W 1.18	鎬状 1.0	(角) 長方形	上位 W 0.30 T 0.25	方形状	中央部 W 0.25 T 0.20	鏃身部は先端部から幅を増しながら逆刺へ続く。	ほぼ完存	9-1 鏃重 (21.3)g 木質痕	80 81
	第32図10	鉄鏃	(7.40) ③ 3.60 ③ 3.20 ③(0.60)	長三角形 平造	中央部 W 1.00		台形状 長方形	中央部 W 0.45 T 0.25	方形状	元部 W 0.25 T 0.20	鏃身部は先端部から幅を増しながら逆刺へ続く。	茎端部欠	木質痕	81
	第32図11	鉄鏃	(7.50) ① 4.20 ②(3.40) ③(1.30)	長三角形 平造	中央部 W 1.30 T 0.25	鎬状 1.0	(角) 長方形	上位 W 0.63 T 0.18	方形	中央部 W 0.20 T 0.20	鏃身部は先端部から幅を増しながら逆刺へ続く。	茎端部欠	木質痕 巻柄痕	81
	第32図12	鉄鏃	(9.80) ① 1.60 ② 3.20 ③(3.00)	三角形 平造	中央部 W 1.05		長方形	中央部 W 0.50 T 0.20	長方形	端部 W 0.20 T 0.15	長頸鏃。	先端部欠	(3.36)g 木質痕 巻柄痕	74
	第32図13	鉄鏃	17.82 ③ 2.20	片刃形 二等辺三角形	元部 W 0.50 T 0.30		長方形	中央部 W 0.40 T 0.30	長方形	中央部 W 0.25 T 0.20	長頸鏃。鏃身部は刀子形。鏃広部は軸の端部が貫射。	完存	2.6g 木質痕	77 78 81
	第32図14	鉄鏃	(2.30) ②(2.30)						長方形	中央部 W 0.25 T 0.16		先端	(0.42)g 木質痕 巻柄痕	79
60号墳	第40図11	鉄鏃	(7.66)					中央部 W 0.46 T 0.37	長方形	元部 W 0.42 T 0.31	長頸鏃。 腐化により頸部部不明瞭。	頸部	(7.83)g 木質痕	45-②
62号墳主体部	第48図4	鉄鏃	(2.75) ①(2.75)	二角形 平造	中央部 W 1.40 T 0.20	1.0	長方形	上位 W 0.50 T 0.20				鏃身部	(2.33)g	1

No.11北　横枕61号墳第1主体部　出土玉類（第41図）

挿図番号	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)		穿孔	色調	重量(g)	材質	残存状況	備考	遺物登録番号	物録号
8	管玉	16.9	6.6	2.0	1.8	両面	淡緑黄色	(1.18)	碧玉	ほぼ完存			73-1

No.11北　横枕89号墳主体部　出土玉類（第56図）

挿図番号	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)		穿孔	色調	重量(g)	材質	残存状況	備考	遺物登録番号	物録号
4	小玉	3.7	3.3	1.8	1.1		淡青色 半透明	0.13	ガラス	完存	気泡有		SX-03 14-1

No.11南　横枕11号墳（挿91・92図）

挿図番号	部位	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高		製作・手法の特徴		色調	残存状況	備考	遺物整理番号
1	胴部 底部 体部	①　14.4 ②　4.5	口縁にまして器高が低い。 口縁部は外方へ伸ばしつつ方に下り緩傾斜をなす。 天井部と口縁部を境い。糸の痕跡が分ける。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部と胴へ向け切り放ちいっぱなし。その外周を時計逆方のヘラ削り2回調整。	①2.5mの砂粒を含む ②良好 ③灰色	完形	第1号墳出土？		30
2	胴部 口縁部 体部	①　13.7 ②　3.4	口径に比して器高が高い。 口縁部は水平部から外方へ下り緩傾斜をなす。 天井部と口縁部を強いヨコナデで分ける。	(内外)　ヨコナデ。口縁端面に1条の沈線強ヨコナデ。 (外)　天井部周辺へ向け切り放ちをナデとし、その外周を逆時計回りのヘラ削り2回調。 (内)　天井中心部ナデ。指頭圧痕。	①1.5mの砂粒を多く含む ②良好 ③外灰色 (内)灰黒色	ほぼ完形			32
3	胴部 口縁部 体部 底部	①　12.6 (実)　12.1 ②　5.4	立ち上がりは内傾した脚二段へつながる。 受部は外方へ開く。 体部は丸みをもつ。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　時計2/3を逆時計回りのヘラ削りをするが、中心部分ではヘラ起し痕を残す。 (内)　底部一方向のナデ、指頭圧痕。	①1～2mの砂粒を含む ②良好 ③明赤灰	完形			33
4	胴部 底部 体部 口縁部	①　12.2 (実)　14.5 ②　4.3	口径にまして器高が低い。 立ち上がりは内傾し端部は尖りがちい。 受部は胴部から水平気味に出める。 体部は丸みをもつ。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　体部2/3を逆時計回りのヘラ削り。 (内)　底面円刻文二重巻。	①1～2mの砂粒を含む ②良好 ③灰色	ほぼ完形	内黒土師		33
6	胴部 口縁部	①　(13.7)	口縁部は外反して開き端部で外側に段をもつ。	(内外)　ヨコナデ。 (内)　頸部ナデ、以下当て工具痕。	①1～2mの砂粒を含む ②良 ③淡黄灰色	(口)　1/12 (頸)　1/4	自然釉		15
7	口縁部 胴部	①　(9.8) ②　6.3 ③　5.4	口縁部は外側して開き端部は丸い。 底面を持つ。 最深部・最底部は胴部底縁部に寄る。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　底部回転糸切り。 (内)　底部中心に底部縁の回転糸切り痕が残り、外端三ナデ調しをする。	①1～2mの砂粒を含む ②良 ③褐色　褐色	(口)　1/9 (底)　1	須付鉢		17
8	土師器 (底部)	②　4.4	高台をそろり高を心は突出する。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　底部回転糸切り。	①0.5mは以下の砂粒 ②良好 ③明橙褐色	(底)　1			1
9	壺　瓶 甕　鉢	L　12.4 W　6.2 T　2.3	細部。 平面形は刀形状に整備とも刀身は板状。刀形底部。	刀等れし使用痕を解明。	①セリ子灰色、灰白色の芯	ほぼ完存		(360)g 鍔を手拭状(建南七十枚墳)	29

No.11南　横枕36号墳（挿94・96図）

挿図番号	部位	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高		製作・手法の特徴		色調	残存状況	備考	遺物整理番号
1	胴部 底部 体部	②　12.8 ③　4.7	天井部はあく。一体部は底平に下り円錐状後をもち外方につまる。 天井部と口縁部を分ける境線は残い。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部2/3を時計廻りのヘラ削り。後で位は1条の沈線ヨコナデ。	①2mの砂粒を多く含む ②良好 ③明灰色 (外)口縁)明灰色	完形	角形釉		12 44
2	胴部 口縁部 体部	①　12.9 ②　5.0	天井部はあく。口縁部は外方に下り緩傾斜をなす。 天井部と二段強を分ける線は弱い。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部2/3を時計廻りのヘラ削り。後で位は1条の沈線ヨコナデ。	①1mの砂粒の砂粒を多く含む ②やや不良 ③外灰色　灰褐色 (内)淡灰色	完形			19
3	胴部 口縁部 体部	①　13.9 ②　4.6	天井部は丸みがもち、二段部は外方に下り緩傾斜をなす。 天井部と口縁部を分ける境線は残い。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部2/3を逆時計廻りのヘラ削り。中心へヘラ起し。後で位は1条の沈線ヨコナデ。 (内)　天井下心部に民具工具痕を指頭ナデ調しする。わずかに残る。	①1mは以下の砂粒を含む ②良 ③4～6mの砂粒有	完形			16
4	胴部 底部 体部	①　13.8 ②　4.8		(内外)　ヨコナデ。口縁端面は1条の沈線強ヨコナデ。 (外)　天井部2/3を逆時計廻りのヘラ削り。中心にヘラ起し痕。後で位は1条の沈線強ヨコナデ。	①2～3mの砂粒を多く含む ②良 ③灰色	完形			17
5	胴部 口縁部 体部	①　11.8 (実)　14.1 ②　4.6	立ち上がりは内傾し、端部は尖りがちで、受部は胴部から水平方向に延める。 体部は丸い。	(内外)　ヨコナデ。口縁端面は1条の沈線強ヨコナデ。 (外)　体部2/3を時計廻りのヘラ削り。 (内)　底部中心一方向のナデ。	①1～2mの砂粒を多く含む ②良 ③赤 (外)灰色　淡灰色 (内)灰色	ほぼ完形	自然釉		15
6	胴部 口縁部 体部	①　10.7 ②　4.8	立ち上がりは内傾し、端部は丸い。 受部は胴部から水平方向に延める。 体部は丸い。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　底部2/3を時計廻りのヘラ削り。	①1～2mの砂粒を多く含む ②良 ③灰色	完形			18 45
22	胴部 口縁部 底部 体部	①　13.8 ②　5.2	天井部はあく。一体部は底平に下り円錐状後をもち外方につまる。 天井部と口縁部を分ける境線は残い。 22は23、24とは口縁部が違い。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部2/3を時計廻りのヘラ削り。中心にヘラ起し痕をかすかに残す。後で位は1条の沈線ヨコナデ。 (内)　天井部に同様ヨコナデ。	①1～2mの砂粒を多く含む ②良 ③外青灰色 (内)黒灰色	完形		25とセットで出土。	33
21	胴部 口縁部 底部 体部	①　13.5 ②　5.1		(内外)　ヨコナデ。口縁端面は1条の沈線強ヨコナデ。 (外)　天井部2/3を時計廻りのヘラ削り。 (内)　天井部に不整工具痕。	①1～2mの砂粒を多く含む ②良 ③やや不良 (外)淡黒灰色 (内)黒灰色	完形		26とセットで出土	35

No.11南　横枕36号境（第96・97図）

挿図番号	器種	法量(cm)口径 底径 器高 口縁部長径 器厚	形態・手法の特徴		残存部位	備考	遺物番号
24	坩型器 甕形 椀形	① 13.2 ④ 4.8	天井張は丸く、口縁部は底下に下り内傾び皮をもち外方につはる。 天井部と口縁部を分ける稜部は鈍い。	(内外) ヨコナデ。口唇端部は1条の沈線状ヨコナデ。 (外) 天井部1/2を時計逆りのヘラ削り、平心にヘラ起し痕。 (内) 天井部に円板文工具痕。	①1～2cmの移籍を多く含む 3、6mmの砂粒有 ②良 ③灰色	ほぼ完形	27とセットで出土	37
25	坩型器 壺形 椀形	① 11.1 (受) 3.5 ④ 5.5	立ち上がりは内傾し、胴部は緩やかな。 受部は外端から水平方向に続く椀部は丸い。	(内外) ヨコナデ。二条凹線は1条の沈線状ヨコナデ。 (外) 底部1/2を時計回りのヘラ削。 (内) 底部中心に円板文工具痕、放射状刷毛ヒナナデ調し。	①1～3mmの砂粒を多く含む 5mmの砂粒有 ②やや不良 ③(外)淡灰色　乳灰色 (内)淡色	完形	22とセットで出土	34
26	坩型器 壺形 椀形	① 11.0 (受) 13.8 ④ 5.5	(外) 底部1/2を時計逆りのヘラ削。 (内) 底部中心に円板文工具痕、放射状刷毛ヒナナデ調し。上下間に沈線状凹線の痕跡入り を数一箇所にた跡を残る。	①、～2mmの砂粒を多く含む 5、6mmの砂粒有 ②良 ③(外)灰色　乳灰色 橙灰色 (内)灰色	ほぼ完形	23とセットで出土	36
27	坩型器 壺形 椀身	① 10.8 (受) 13.0 ④ 5.3	立ち上がりは内傾し、胴部は丸みをもつ 受部は椀部から水平方向に続く椀部は丸い。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部1/2を時計逆りのヘラ削り。	①1～2cmの砂粒を多く含む、5、5mmの砂粒有 ②良好 ③(外)黄灰色 (内)橙灰色	完形	24とセットで出土	38
34	坩型器 壺	① (9.6)	口縁部は胴部内側へ大きく外反し内傾部を上方へつまむ。	(内外) ヨコナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰色	(口) 1/8		6

No.11南　横枕80号境（第100・101図）

1	二段器 椀	① 14.3 ④ 4.5	胴成して尻く体部から立ち上り口縁部で上方に終める。	(外) 口唇部ナデ。体部胴部不明瞭。成形時の指頭圧痕。 (内) ナデ。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②良 ③橙褐色	ほぼ完形	上部転用枕	17
2	坩型器 壺形 椀蓋	① 14.1 ④ 4.5	口縁に比して器高が低い。丸みをもつ天井部端からやや外方に下り端部で皮をもち外方につはる。天井部と口縁部を分ける稜は鈍かに現出する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部2/3を時計回りのヘラ起り後中心部ナデ。 (内) 天井中心部不定方向のナデ。	①1～2mmの砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ②やや不良 ③(外)灰色　淡黄灰色 (内)灰色 (蓋)ベージ色	ほぼ完形	十部転用枕 天井部内面に朱痕？	28
24	坩型器 椀形 椀身	① (10.6)	小型で器高が低い。 二段器は天井部から下方に下り端部で皮をもち外方につはる。天井部と口縁部を分ける稜は鈍さに欠ける。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部を時計回りのヘラ削。	①0.5mm以下の砂粒 ②やや不良 ③(外)灰色 (内)灰色 (蓋)ベージ色	1/4	自然釉	5 9 10 11
25	坩型器 椀形 椀身	① (10.0) (受) (2.5)	口唇部は内傾し端部で皮をもつ。 受部は体部から水平方向に続める。	(外外) ヨコナデ。 (外) 底部時計回りのヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む 2mmの砂粒有 ②良好 ③灰色	1/6		15
26	坩型器 椀形 椀身	(受) 12.5	受部は体部から外上方に続める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部時計回りのヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ②やや不良 ③(外)淡黄灰色　灰色 (内)淡黄灰色	1/2	自然釉	4 8 12 13
27	坩型器 壺	① (6.8) ③ (6.0)	口縁部は外反して開き端部は丸い。 体部よりこ段器が大きい。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部ヘラ削り。 (内) 底部ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む 4mmの砂粒有 ②良好 ③褐灰色	1/4	自然釉	6

No.11南　横枕82号境（第103・105図）

1	坩型器 壺形 椀蓋	① 12.4 ④ 4.5	天井部は丸く、口唇部は下方に下り端部は丸みをもつ。 天井部と口縁部を分ける稜は鈍い。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部3/4を時計逆りのヘラ削り。 (内) 稜下位は、条件は鈍稜をヨコナデ。 (内) 天井部円板文工具痕を軽くナデ調し。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③灰色	ほぼ完形	土部転用枕	5 6
2	坩型器 椀形 椀身	① 11.1 (受) 13.2 ④ 4.8	立ち上がりは上方に向かう傾斜は大きい。 受部は体部から外上方に伸びる。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部1/2を時計回りのヘラ削。 (内) 天井部円板文工具痕を軽くナデ調し。	①1～2mmの砂粒を含む ②良 ③灰色	ほぼ完形	土部転用枕 焼き歪	5
3	坩型器 壺	① (8.2) (底) (20.5)	体部中心を外れて開き口縁は対称。 口縁部は底部的に開き端部は丸い。 底部一部が焼成に伴う歪む。	(内外) ヨコナデ。 (外) 口縁部中位に2条の沈線。体部上半部に2条の沈線。 (内) 底部ヘラ削り。 (内) 口縁部、体部の稜の部ヨコナデ。 体部上位中心に放射状の打撃痕跡を観察。	①、～2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡赤色 (蓋)ベージ色	1/7	自然釉	2 4
4	蓋中土器 蓋	① (16.6)	二稜器は外反して開き口縁を多つ。	底化、製造による不明瞭。 (外) 口縁部に強条の平行沈線。 (内) 切離ヘラ削り痕、粗土板谷痕。	①1mm前後の砂粒を多く含む、2、3mmの砂粒有 ②やや不良 ③(外)淡紅色	(口) 1/8 (蓋) 1/5	黒斑有	7

No.11南　横枕82号墳（第105図）

掘図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大径 ④厚　高	形態・手法の特徴			①形　土 ②成　成 ③色　調	焼成	胎土	備考	遺物登録番号
5	鉢　脚 鉢	①（16.2）	未段口縁。 口縁部は外反して開く。	(外)　ヨコナデ。 (内)　左及後処理。		①密強な胎土 ②良好 ③①)灰白色 (他)灰白色	1/8			1

No.11南　横枕83号墳（第107・108図）

1	土師器 高　杯	①（11.9）	坐板の形態。 口唇部は内側で内側に終の端部は丸い。	剥落不明瞭。 外部（杯外）ナデ、成形痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③橙褐色	(口)　/6 (杯)　(11.2)	密彩 二部を用化			6 8
2	土師器 (杯部)	①　12.2		杯(外)ナデ、成形痕。	①0.5mm微量の砂粒を含む ②良 ③橙褐色	(底)　欠	赤彩 土師器用杯			7
4	土師器 壺	①（21.8）	くの字状口縁。 口縁部は外反して開き端部は、5は凸面、6は凹面をもつ。	(外)　指頭圧ハケ目。 (内)　口縁部横ハケ目。 (底内)　口縁部縦ハケ目。	①1mm微量の砂粒を含む ②良 ③橙褐色	1/9				3
5	土師器 壺	①（24.0）		(外)　横刷毛ハケ目。 (内)　口縁部横ハケ目。 (内外)　口縁部縦ハケ。	①1mm以下の砂粒を含む 4mmの砂粒有 ②良好 ③橙褐色	1/8				2
6	土師器 壺	①（25.0）		(外)　横刷毛ハケ目。 (内外)　二段ボ状ハケ目後強いナデ。口縁部ハケ状工具による仕上げ。	①.5mm以下の砂粒を含む 3mmの砂粒有 ②良 ③橙褐色	/7				3

No.11南　横枕84号墳（第110・111図）

1	土師器 壺	①（13.7）	くの字口縁。 口唇部は内傾して開き沖部は丸みをもつ。	(内外)　体部横深不明瞭。	①1mm以下の砂粒を多くそな 2mmの砂粒有 ②良 ③橙色	1/11	橙化著			7
2	須恵器 壺	つまみ 3.5 ①　15.3 かえり 15.8 ④　4.6	つまみは宝珠形。 天井部は器から身をもち口縁部へと下り端部は重をもつ。 口縁部内面にかえりをもち、かえりの先端は口縁内部より突出しをいる。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部1/3を逆時計回りのヘラ削り。 後ウエル処付、その広部部をヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②不良 ③淡灰褐色	つまみ　1 (口)　/5 (天)　-				3
3	須恵器 蓋	つまみ 3.3 ①　(15.6) かえり 12.8 ④　2.9	つまみは扁平。 天井部は器からみをもち口縁部へと下り端部は丸い。 口縁部内面にかえりをもち、かえりの先端は口縁部より突出しない。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部3/4を逆時計回りのヘラ削り。 後ウエル処付、その周縁部をヨコナデ。	①.5mm以下の砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ②やや不良 ③灰色	つまみ　1/3 (口)　1/5 (天)　1				6 7 8
4	須恵器 蓋	つまみ (3.9) ①　(14.9) ④　(3.5)	つまみは扁平。 天井部は器からみをもち口縁部へと下り端部は丸い。5は底部で4は上方につまみ、5は底部にて丸く作りる。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部1/2を逆時計回りのヘラ削り。 後ウエル処付、その周縁部をヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②不良 ③灰褐色	つまみ　1 (口)　1/6 (天)　1/2				9
5	須恵器 蓋	つまみ 3.6 ①　3.6		(内外)　ヨコナデ。 (外)　天井部1/2を逆時計回りのヘラ削り。 後ウエル処付、その周縁部をヨコナデ。 (内)　天井部中央が凹のまま。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②良好 ③灰色	つまみ　1 (口)　3/4 (天)　7/8	角形脚			6 7
6	須恵器 甲	①　13.1 ②　9.4 ④　4.1	二段構成外傾して端部を丸く収め。 高台端は内の空に成く。 底部と胴部の接合部分が丸みをもち、7は屈曲する。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　底部回転ヘラ切り未調整、底面台部取り。 高台接合部ヨコナデ。 (内)　底部平坦方向のナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む 2mmの砂粒有 ②良 ③(外)淡黄灰色 (内)淡灰色	ほぼ完形				4
7	須恵器 杯	①　11.8 ②　7.5 ④　3.9		(内外)　ヨコナデ。 (外)　底部回転ヘラ切り、底面台部取り。 高台接合部ヨコナデ。 (内)　底部ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰色	(口)　1/2 (底)　1/2				5
8	須恵器 (底部)	①　(6.4)	平底。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　底部回転糸切り後外周をナデとするが、糸痕が残る。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②不良 ③淡灰黄色　暗灰色	(底)　1/2				7
9	須恵器 壺	②　8.6 ④　(13.6)	平底。 肩部上位に最大径を持つ。	(内外)　ヨコナデ。 (外)　今紙上半に刷毛状の2条単位の波状を2段に施す。 後ウエルヨコナデ。 底部は十型成形。	①.5mm微細の砂粒を多く含む ②良 ③灰黒色	(体)上半　1/2 (体)下半　1	自然釉			2
10	臼　石	L　10.9 W　9.8 T　4.5	扁平で円形の自然石。	長軸両端の側縁部に使用痕。 1面に使用による凹み。	③黒色、灰白色の斑	完存		675g 地質に角閃石 石 花崗岩		9

No.11南　横杭85号墳（第113・114図）

掘図番号	番墳	法量(cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④最大胴径 ⑤厚	形態・手法の特徴		胎土 ①焼成 ②色調	残存状態	備考	遺物番号
1	須恵器 蓋杯 杯身	① 12.7 ② 14.6 ③ 4.7	立ちこがりは内傾し胴部は丸顔。 受部は徐徐から水平方向に伸びる。 体部は丸い。	(内外) ヨコナデ。 ／ (外) 受部5/4迄時計まわりのヘラ削り。 ／ (内) 底部一方向の幅いナデ。	①一mm以下の砂粒を多く含む。 3mmの白粒有 ②灰 ③明黄色	完形	セット横杭 土器転用杭？	2
2	土師器 坩	① (23.4)	この常滑行種。 口唇部は外傾し胴部に2が丸く、3は稜線をもつ。	(外) 口唇部ヨコナデ。 ／ (内) 口唇部ハケ目後ナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 1mmの白粒有 ②やや赤色 ③淡橙褐色	(口) 1/7		3 4
3	二重口縁壺			(内外) ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 3mmの砂粒大 ②赤 ③淡橙色	(口) 1/8		5

No.11南　横杭86号墳（第116図）

1	土師器 (高杯)	② (3.2)	ハさい底部は内彎を呈す。	(外) 表面ハケ目、底面ナデ。 (内) 表面粗面部多いがヘラ削り痕。	①2mm以下の砂粒を多く含む ②やや赤 ③淡大褐色	(底) 1/4	黒斑有	4
2	瓦	厚 8.0 巾 7.0 下 2.1	瓦下の粗円状の凹凸面。	長軸西端部から戻機部に使用痕。 1度に使用による薄み。	①白色	ほぼ完存	(142)g 石英粒上向	2

No.11南　横杭87号墳（第117図）

1	土師器 坩	① 13.5 ④ 4.5	内面して開く体部から口縁部へ続き1は二方、2は均斉に納める。 1の端部は肥る。	底化傾斜強い。	①1mm以下の砂粒を多く含む 4mmの砂粒有 ②赤 ③橙褐色	(口) 3/4 (底) 1	土器転用杭	SK 01 4
2	土師器 壺	① 13.5 ③ (4.5)		底化傾斜強い。	①1mm以下の砂粒を多く含む 4mmの砂粒有 ②赤 ③橙褐色	(口) 3/4	土器転用杭	SK-0 5

No.11南　SK-19（第134図）

:	土師器 (底部)	② (3.9)	底面をもつ。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底面内側点切り。	①0.3mm以下の砂粒を含む 1mmの砂粒有 ②赤 ③淡赤褐色	(底) 1/4		2

No.11南　溝構外（第139・140図）

1	博文土器 杯蓋	① (25.5)	体部から弯々に開いて立ち上る口縁部で二方への折り返部は丸い。	(外) 指痕あり、(内) ナデとし、ハケ上調整後ほぼ目を施す。 (口) ハケ目後弯々の凸部を擦き上により調整する。	①2mm以下の砂粒を多く含む 1mm、1mmの砂粒有 ②赤 ③(内)橙色 (外)橙色	(口) 1/8	煤付着	5
2	鐵土器 鉢		口縁部は内傾して立ち上がり内側に納め端部は丸い。 胴部の口縁部を もつ可能性。	(外内) 風化調整強い。 (外) 口縁端部に沿ってヘラ状工具1条、その下部に間隔約3条の凹線が内へ向かって4条に分割し、此端間に1条縁文を配置する。 (内) ハケ目後。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②赤 ③橙色	(口) 片		5
3	敲石	厚 (14.1) 巾 7.1 下 3.5	長軸1端部は丸顔。	使用痕、顔。	②底色に茶褐色の帯 (縁)	欠	(596)g 半化硬質	2

No.11南　横杭古墳群　鉄製品（刀子、鎌）

（単位：cm）

出土地	掘図番号	器種	全長	刃 長さ	刃 断面形	茎 長さ	茎 断面形	茎 刃部形状	茎 幅	茎 厚さ	形態の特徴	残存状況	保存	遺物番号
11号墳 主体部	第91図 3	刀子	9.2	4.2	二等辺三角形	5.0	長方形状	刀身切先部 刀身元部 茎尖部 茎底部	0.50 0.70 0.75 0.55	0.10 0.20 0.30 0.20	錆化する。周辺をもつ。 刀身は刃背から切縁に延、厚を減ら し切先を丸く納める。 茎底部に丸く納める。	完存	7.37g	27
36号墳 第1主体部	第96図 7	刀子	(15.1)	(11.0)	二等辺三角形		台形状	刀身切先部 刀身中央部 刀身元部 茎尖部	1.05 1.45 1.95 1.20	0.20 0.25 0.40 0.30	錆化する。研摩をもつ。 刀身は刃背から切縁に延、厚を減ら し切先を丸く納める。	両端欠	(6.63)g 木質炭	20 24 46
83号墳 主体部	第109図 3	刀子	(10.9)	(7.7)	二等辺三角形	(6.2)	長方形状	刀身切先部 刀身元部 茎中央部	1.45 1.95 1.20	0.40 0.45 0.40	錆化する。研摩をもつ。 刀身は刃背から切縁に延、厚を減ら す。	刀身部 茎部	(37.1)g 木質炭	9

No.11南　横枕古墳群　鉄製品（刀子、鎌）

（単位）：cm

出土地	遺構番号	器種	全長	法量 刀部 長さ	刀部 断面形	茎 長さ	茎部 断面形	茎部 計測箇所	茎部 幅	茎部 厚さ	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
37号墳 三体部	第117図 3	刀子		(2.1)	二等辺三角形	(3.7)	長方形	刀身部	1.60	0.35		刀身部 1部 茎部1部	(9.62)g 木質痕	SK-01 1 SK-01 2
								茎中央部	1.10	0.35				
								茎尻部	0.80	0.20				
SK-19	第134図 2	刀子	(2.0)	(2.0)	二等辺三角形			刀身切先部	1.25	0.20	切先部は丸い。	切先部	(1.07)g	3
	第134図 3	鎌	(5.6)		二等辺三角形		長方形状	刀身元部	3.10	0.25		両端部欠	(16.2)g	1
								茎元部	2.50	0.20				

No.11南　横枕古墳群　鉄製品（鉄鏃）

出土地	遺構番号	器種	全長 ①鏃身部 ②頸部 ③茎部	鏃身部 平面形 断面形	鏃身部 断面計測箇所 W 幅 T 厚さ	鏃身部 逆刺 逆刺長	頸部 広がり形 断面形	頸部 断面計測箇所 W 幅 T 厚さ	茎部 断面形	茎部 断面計測箇所 W 幅 T 厚さ	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
36号墳 第1主体部	第94図 8	鉄鏃	(10.80) ①(6.10) ②(5.85) ③(0.45)	長二角形	先端部 W 2.00 T 0.20	鏃抉 3.3	(角)	上位 W 0.60 T 0.30	長方形	元部 W 0.40 T 0.30	鏃身部は先端部から幅を増し絞中で广幅を縮く、側面を長くして鋭角とする。 茎中心線はやや左で一直線上から先端部へと刃を通り先端は鋭ともつ。	茎部欠	(20.66)g 木質痕	22 23
				平造			長方形							
	第94図 9	鉄鏃	(10.60) ③ 3.40		先端部 W 0.70 T 0.19	0.1 0.2		中央部 W 0.50 T 0.35	長方形	元部 W 0.40 T 0.25	長頸鏃。 鏃身部は先端部から幅を増し絞中で广幅を縮く、側面を長くして鋭角とする。 茎中心線はやや左で一直線上から先端部へと刃を通り先端は鋭ともつ。	茎部欠	(8.49)g 木質痕 茎巻痕	27 29
				片切刃造			板方形							
	第94図 10	鉄鏃	(1.65) ①(1.65)	片切刃造	中央部 W 1.00 T 0.20						鏃身先端部は9と酷似。	鏃身部	(0.62)g	46
第94図 11	鉄鏃	(3.50) ②(2.55) ③(7.45) ③(3.50)	片刃形 二等辺三角形	中央部 W 0.55 T 0.25			(角) 長方形	中央部 W 0.65 T 0.30	方形	中央部 W 0.16 T 0.18	長頸鏃。 鏃身部は刀子形。 鏃関部に別個体の木質付着。	関部欠	(7.94)g 巻痕板	25 26
第94図 12	鉄鏃	(5.02) ①(1.92) ④(3.15)	片刃形 二等辺三角形	先端部 W 0.65 T 0.20			長方形	上位 W 0.42 T 0.30			矢頸鏃。 鏃身部は刀子形。 別個体の木質付着	鏃身部	(3.63)g	14
第94図 13	鉄鏃	(3.85) ①(1.80) ④(2.05)	片刃形 二等辺三角形	中央部 W 0.65 T 0.20			板方形	中央部 W 0.45 T 0.30			鏃身部は刀子形。	鏃身部	(2.11)g	46
第94図 14	鉄鏃	(9.00) ①(3.70) ③ 5.30					矢方形	中央部 W 0.60 T 0.35	長方形	中央部 W 0.25 T 0.20	長頸鏃。	鏃身部欠	(5.99)g 木質痕	26 31 46
第94図 15	鉄鏃	(6.05) ①(3.35) ②(2.70)					(角) 長方形	中央部 W 0.45 T 0.30	方形	茎部 W 0.15 T 0.15	長頸鏃。	関部	(2.8)g 木質痕 巻痕板	27 31
第94図 16	鉄鏃	(6.25) ①(4.65) ③(1.60)					台形状 長方形	中央部 W 0.30 T 0.25	方形	茎部 W 0.20 T 0.25	長頸鏃。	頸部	(3.89)g 木質痕	27 46
第94図 17	鉄鏃	(2.25) ①(1.80) ③(0.45)					台形 長方形	中央部 W 0.40 T 0.30	長方形	茎部 W 0.41 T 0.30		鏃部	(0.69)g 木質痕 巻痕板	26
第94図 18	鉄鏃	(4.18) ①(4.08) ③(0.10)					台形状 長方形	元部 W 0.48 T 0.30				頸部	18-2鏃身 (8.50)g 巻痕板	13
第94図 19	鉄鏃	(5.13) ②(5.13)					長方形	中央部 W 0.42 T 0.27				鏃部		13
第94図 20	鉄鏃	(4.79) ①(2.44) ③(2.35)					台形状 板方形	中央部 W 0.42 T 0.25				鏃部	巻痕板	13
第94図 21	鉄鏃	13.66	方頭形 端刃造				長方形	中央部 W 0.42 T 0.32	長方形	中央部 W 0.38 T 0.23	長頸鏃。 鏃身部は方頭形、鏃部不明瞭。 茎部は鏃部方向へ幅を増すが広部不明瞭。	鏃部欠	(2.48)g 木質痕	20 46

No.11南　横枕古墳群　鉄製品（鉄鏃）

（単位：cm）

出土地	挿図番号	器種	全長 ①残存部 ②茎部 ③全部	幅 ④最大幅	厚 ⑤最大厚	断面形	逆刺	逆刺長	鏃部 断面形	鏃部 長さ	茎部 断面形	茎部 長さ	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
36号墳 第2主体部	第95図 28	鉄鏃	(11.12) ①2.35 ②7.43 ③(11.25)	三角形	柳葉部 W 0.96 T 0.22	片丸造	0.1		台形状		中央部 W 0.52 T 0.42	長方形	中央部 W 0.37 T 0.29	矢張無。	完存(95%)	(9.65)g	39
	第96図 29	鉄鏃	18.75 ①3.60 ②(8.15) ③(7.60)	片刃形	先端部 W 0.72 T 0.28	一等辺三角形			菱状		上位 W 0.50 T 0.38	長方形	中央部 W 0.26 T 0.19	長頸鏃。鏃身部に刀子形。	完存	13.57g	39 40
	第96図 30	鉄鏃	(2.73) ②(2.73)	片刃形	先端部 W 0.87 T 0.32	二等辺三角形								鏃身部は刀子形。	鏃身部	(2.5)g	40
	第96図 31	鉄鏃	(1.21) ①(5.38) ③5.93						台形状		中央部 W 0.54 T 0.41	長方形	上位 W 0.48 T 0.30	長頸鏃。	鏃身部欠	(10.43)g 茎長部	40
	第96図 32	鉄鏃	(3.40) ②(1.70) ③(1.70)						台形状		下位 W 0.37 T 0.45	長方形	中央部 W 0.39 T 0.28		茎部	(2.77)g	39
	第96図 33	鉄鏃	(3.86) ③(3.86)							長方形	中央部 W 0.51 T 0.34				鏃部	(2.66)g	42
86号墳	第114図 4	鉄鏃	(9.45) ③(9.45)	柳葉形	中央部 W 3.50 T 0.25	平造								幾分鏃は茎大部から先端に刀をもち、全形鏃方からと鏃部に鏃を残らす。身先部鏃は長方形。	鏃身部	(26.1)g	8

No.11南　横枕80号墳第2主体部　出土玉類（第100図）

挿図番号	種類	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)		穿孔	色調	重量 (g)	材質	残存状況	備考	遺物登録番号
3	管玉	17.8	6.7	2.2	2.0	片面	緑色	1.43	碧玉	完存		23-1
4	臼玉	2.7	5.3	2.0			オリーブ灰色	0.07	滑石	完存		24-1
5	臼玉	2.0	5.3	2.0			オリーブ灰色	0.08	滑石	完存		24-2
6	臼玉	2.6	5.6	2.0			オリーブ灰色	0.10	滑石	完存		24-3
7	臼玉	2.5	5.5	2.1			オリーブ灰色	0.09	滑石	完存		24-4
8	臼玉	1.9	5.2	2.1			オリーブ灰色	(0.06)	滑石	ほぼ完存		24-5
9	臼玉	2.5	5.3	2.1			オリーブ灰色	0.08	滑石	完存		24-6
10	臼玉	2.9	5.5	2.1			オリーブ灰色	0.11	滑石	完存		24-7
11	臼玉	2.5	5.2	2.1			オリーブ灰色	0.09	滑石	完存		24-8
12	臼玉	(2.1)	5.5	2.0			オリーブ灰色	(0.07)	滑石	ほぼ完存		24-9
13	臼玉	2.9	5.3	2.1			オリーブ灰色	0.11	滑石	完存		24-10
14	臼玉	2.8	5.4	2.1			オリーブ灰色	(0.11)	滑石	ほぼ完存		24-11
15	臼玉	2.1	5.3	2.1			オリーブ灰色	0.08	滑石	完存		24-12
16	臼玉	2.8	5.5	2.1			オリーブ灰色	0.10	滑石	完存		24-13
17	臼玉	2.5	5.3	2.1			オリーブ灰色	0.09	滑石	完存		24-14
18	臼玉	2.8	5.3	2.2			オリーブ灰色	0.10	滑石	完存		24-15
19	臼玉	2.6	5.3	2.0			オリーブ灰色	0.09	滑石	完存		24-16
20	臼玉	2.0	5.2	2.0			オリーブ灰色	0.06	滑石	完存		24-17
21	臼玉	2.0	(5.9)	(2.1)			オリーブ灰色	(0.05)	滑石	ほぼ完存		24-18
22	臼玉	2.0	5.2	2.0			オリーブ灰色	0.08	滑石	完存		24-19
23	臼玉	2.7	5.3	2.2			オリーブ灰色	0.09	滑石	完存		24-20
	臼玉	1.7	5.1	1.9			オリーブ灰色	0.06	滑石	完存		24-21
	臼玉	2.3	5.3	1.9			オリーブ灰色	0.09	滑石	完存		24-22
	臼玉	2.2	5.4	1.9			オリーブ灰色	0.08	滑石	完存		24-23
	臼玉	1.1	5.4	2.0			オリーブ灰色	0.05	滑石	完存		24-24
	臼玉	2.4					明オリーブ灰色	(0.04)	滑石	1/2		24-25
	臼玉	1.6					緑灰色	(0.02)	滑石	1/4		24-26

No.12　横杵67号墳（第144・146図）

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③底径 ④器厚	形態・手法の特徴			①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物整理番号
1	一部器台	① (19.4) ② (18.1) ④ (9.8)	筒形部台。 受部、台部共に強張りがへとの字状して開く。受部は端部で終息する。内面縦は丸みをもつ。	(外) (内)	ヨコナデ。 風化不明瞭。 赤彩へラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③黒褐色	(受) 2/3 (台) 1	受形　打欠 上器転用杯	14
10	打製石斧（基部）	L (3.6) W 3.0 T 0.9	両刃をもち中心軸に沿ちた。平面形は台形でムノをもち、刃部は先端方向へ幅がに幅を著すが欠失する。	打製により全面を加工する。		①極有原色	(完) 欠	(14)g リスタイト	1

No.12　横杵68号墳（第149図）

1	土師器 台 台	① 18.2 ② 15.7 ④ 8.9	無形部台。 受部、台部共に緩慢な方向へと外傾し端部で外反、内縁面をもつ。 脚部で台部に円孔1を穿す。	(外) (内)	ヨコナデ。 受部ヨコナデ。 台部風化不明瞭。 脚部に円孔1を外面より穿つ。	①2.5mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③暗褐色	(二) 2/3 (他) 1	受形　打欠 上器転用杯	2

No.12　横杵69号墳（第152・153図）

1	土師器 高 杯	① 25.6 ② 9.2 ④ 12.1	椀状の杯部。脚部は筒状を呈。 口縁部は外反して内面をもつ。 1の脚部は基部から緩やかに開き下半平ハカ等に開き端端面をもつ。	杯部 脚部	(外) 放射状のハケ目。 (内) 横撫で調整。 (内外) 口縁部ヨコナデ。 (外) 上半ユビ押さえ、下半ナデ。 (内) 上半縦方向を軽くナデ消し、下半ハケ目。 成形等の指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③赤褐色	(口) 1/3 (他) 1	赤彩 土器転用杯	3
2	土師器 高 杯	① (15.4)		杯部 脚部	(外) 放射状のハケ目。 (内) 横撫で調整。 (内外) 口縁部ヨコナデ。 (外) 上半縦方向をナデ消し、下半ハケ目。 (内) 上半縦方向を軽くナデ消し。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③灰褐色	(杯) 1/3 (脚) 上半 1	赤彩 土器転用杯	4
3	土師器 高 杯	① 14.5	椀状の杯部。 口縁部は内湾して上方に伸の端面をもつ。	杯部	(外) 放射状のハケ目。 (内) 横撫で調整。 (内外) 口縁部ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 3.5mm砂粒を含む ②良 ③褐色	(杯) 1	赤彩 土器転用杯	5
6	土師器 高 杯	② 9.0	脚部は基部から反やかに開き下半ヤハの平状に広き端端部は丸みをもつ。	脚部	(外) 上半工具ナデ、下半ナデ。 (内) 上半縦方向を軽くナデ消し、下半不明瞭なが ら成形時の指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③褐灰色	(脚) 1	赤彩	1

No.12　横杵70号墳（第154・159図）

1	土師器 高 杯	① 15.1	椀状の杯部。脚部は筒状を呈。 口縁部は内湾して上方に伸の端面はあい。	杯部不明瞭。 (外) 杯底部底部大ヨハケ。		①0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡黄褐色	(口) 2/3 (杯) 1	赤彩 土器転用杯	9 10
2	土師器 高 杯	① (16.0)	有段の杯部。 口縁部は外傾し端部で外反し丸く納める。	(外) 杯部ナデ、波形時の痕跡。杯底部ハケ目。 脚部後2段の端文、上段は放射状、下段不明瞭。		①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色	(杯) 1	赤彩 黒塗彩 土器転用杯	11
27	土師器 坩		二段張りは外傾して開き端部を欠く。	(外) 脚部前面不明瞭。 (内) 脚部下半ヘラ削り。		①1mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③橙褐色	(二) 1/3 (脚) 1部	赤彩	5 31 32 33 34
28	土師器 壺 形	① (15.7) ② (9.5) ④ 12.4	筒状の形状。 口縁部は外傾して上方に伸の端面はあい。 脚部は基部から緩やかに開いて下半で八の字状に開き端端面をもつ。	杯部 (内外) ナデ後口縁部ヨコナデ。 脚部 (外) 上半工具ナデ、下半ナデ。 (内) 上半縦方向を軽くナデ消し、下半ハケ目。 成形時の指頭圧痕。 赤彩後2段の端文、上段は放射状、下段不明瞭。		①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③暗褐色	(口) 1/8 (杯) 1/4 (脚) 上半 1 (脚) 下半 1	赤彩 鳥塗彩	3 23 23 27 29
29	土師器 壺 形	② 8.9 ④ 0.9	脚は基部から緩やかに開いて下半で八の字状に開き端端面をもつ。 29は本型に円孔2をもつ。	脚部 (外) 上半工具ナデ、下半ナデ。 (内) 上半縦方向を軽くナデ消し、下半ハケ目。 成形時の指頭圧痕。 29は円孔を外面から穿つ。		①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色	(脚) 下半 1/3 (脚) 下半 1/2	赤彩 鳥彩	1
30	二部器 高 杯	② 9.2				①1～2mmの砂粒を含む ②良 ③褐色	(脚) 上半 1/2 (脚) 下半 1/2	赤彩	33
31	土師器 高 杯	② (9.4)				①0.5mm前後の砂粒を含む 2mmの砂粒者 ②良 ③淡黄褐色	(脚) 上半 1 (脚) 下半 3/5	赤彩	30
32	土師器 高 杯			脚部不明瞭。 脚部 (外) 上半工具ナデ後、 (内) 上半縦方向を工具でナデ消し。 成形時の指頭圧痕。		①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	(脚) 1/21	赤彩	3

No.12 横杵72号墳（第163図）

埴輪番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④最大胴径 ⑤厚さ	形態・手法の特徴		①②上 ③④中 ⑤底	成形	焼不良	色調	胎土	出土位置	備考
1	土師器 高杯	②（12.4）	脚部は脚部から接ぎかに開いて上半ヤハの手法に関る脚部面をもつ。	脚部	(外)上半工具ナデ、下ロナデ。ハケ目痕。 (内)上半絞り目をニ方ナデ、下半ナデ後ハケ目。 成形時の指頭圧痕。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③緻密堅牢	(縦)上下 3/4 (横)下半 1/15	赤彩			5

No.12 横杵73号墳（第165・174図）

埴輪番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④最大胴径 ⑤厚さ	形態・手法の特徴		①②上 ③④中 ⑤底	成形	焼不良	色調	胎土	出土位置	備考
1	土師器 高杯	①　14.8 ②　9.3 ③　11.7	椀大の杯部。 口縁部は内傾して立ち上がり端部で丸をもつ。 脚部は筒部から緩やかに開き下半ヤハの手法に関る脚部をもつ。 2段下半孔に円孔1をもつ。	杯部 脚部	(外)ナデ後上半ヨコナデ、下半ハケ目、成型痕。 (内)ナデ。 (外)ナデ。 (内)上半工具ナデ、下半ナデ。 (外)2/3上に絞り目を残しナデ消し。中位に二条の工具痕。 1/3下半ナデ後ハケ目。成形時の指頭圧痕。 赤彩の痕跡が狭の端先を2段に施す。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③緻密堅牢	ほぼ完形	赤彩 二部転用杯			41
2	土師器 杯	①　6.3 円孔：0.6		全面剥落不明瞭。 杯部：(内)上下絞り目、1条の工具痕。 赤彩の痕跡が狭の端先、一段は放射状、下段は不明瞭。 円孔1を外面から穿つ。		①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③緻密堅牢	ほぼ完形	赤彩 二部転用杯			42 51
3	土師器 高杯	④：15.9	完存の杯部。脚部は差込み式。 口縁部は内傾して立ち上がり端部で外反し、端面をもつ。	全面風化が顕著。 脚部：(外)絞り目端ナデ消し。下半ハケ目痕。 杯部：(内)ハケ目痕。		①5mm以下の砂粒を含む ②良 ③緻密堅牢	杯部完存するが復元不可能	赤彩 土師転用杯			40
4	土師器 高杯	①　15.6 ②　9.3 ③　11.9	椀状の杯部。脚部は差込み式。 口縁部は内傾し端部に1が丸く、3は尖をもつ。 脚部は筒部から緩やかに開いて下半ヤハの手法に関る脚端面をもつ。	杯部：(外)ヨコナデ、成形痕。 (内)ナデ。 脚部：(外)下二具ナデ、下ヨナデ。 (内)上半絞り目を残しナデ消し。二条の工具痕。 下半ナデ後ハケ目。成形時の指頭圧痕。 赤彩：(外)ハケ目後粗いナデ。 赤彩の痕跡が狭の端先を2段に施す。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③良好 ④緻密堅牢	完形	赤彩 土師転用杯			38
5	土師器 高杯	①　14.6 ②　9.3 ③　12.4		杯部：(外)ヨコナデ。成形痕。 (内)ナデ。 脚部：(外)下二具ナデ、下ヨナデ。 (内)上下絞り目を残しナデ消し。下半ナデ後粗いハケ目。成形時の指頭圧痕。 赤彩：(外)ハケ目。 赤彩の痕跡が狭の端先を2段に施す。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③緻密堅牢	完形	赤彩 土師転用杯			39
6	土師器 壺	①：(5.1)	胴状の杯部。 二段落ちに開して立ち上がり端部を欠く。	(外)：直線大ハケ目後上半ナデ。成型痕。 (内)：風化不明瞭。 赤彩の痕跡が胴状の特文表。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③緻密堅牢	(横) 1	赤彩 土師転用壺			37	
7	土師器 杯	④：(8.0)	脚部は筒部から緩やかに開いて下半ヤハの手法に関る脚端面を欠く。 中位に円孔1をもつ。	(外)：風化が顕著不明瞭。 (内)：上半絞り目をナデ消し。下ヨナデ後ハケ目。成型痕の指頭圧痕。 円孔：2を外面から穿つ。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③緻密堅牢	(縦) ほぼ1	赤彩 風蝕有			32	
8	埴輪器 台	○　(14.5)	口縁部はラッパ状に外反し、口唇端部は一下に細めて面端面とする。 口縁部に2条、胴部に1条の強い横線で区画した間に波状文を施す。	(内外)：ヨコナデ。 (外)：横線間には条の波状文。 (内)：波状ナデ。	①1～2mmの砂粒を含む ②良 ③良好 ④焼成色	1/6	白色顔			4 29 30	
93	埴輪器 盌 杯 杯 身	①　(11.4) ②　(13.9) ③　4.3	立ち上がり内傾し胴部は凸部をもつ。 受部は体部から外上方に伸める。 体部は丸みをもつ。	(内外)：ヨコナデ。 (外)：体部2/3を逆時計回りのヘラ削り。 (内)：底部ナデ、一部に平坦文工具痕が残る。	①1～2mmの砂粒を含む ②良 ③良好 ④焼成	(口) 1/6 (杯) 1/2	赤彩 土器転用坏			1	

No.12 横杵76号墳（第176図）

埴輪番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③器高	形態・手法の特徴		①②上 ③④中 ⑤底	成形	焼不良	色調	胎土	出土位置	備考
1	土師器 杯	①　(26.8) ②　13.2 ③　17.3	有段の杯部。 一部欠損部から外反して立ち上がり端部は面をもつ。 脚部は筒部から緩やかに開いて下半ヤハの手法に関る脚端面をもつ。	杯部：(外)板状紐ナデ。成形痕。 (内)：ナデ。 脚部：(外)上半工具ナデ、マルナデ。 (内)上半絞り目を残しナデ消し。 下半ハケ目。成形時の指頭圧痕。 赤彩の痕跡が狭の端先、上段は放射状、下段は一方向とする。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③良好 ④焼成色	(口) 2/3 (杯) 1/2 (脚) ほぼ1	赤彩 土器転用坏			1 2	

No.12 横杵77号墳（第177図）

埴輪番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④最大胴径 ⑤厚さ	形態・手法の特徴		①②上 ③④中 ⑤底	成形	焼不良	色調	胎土	出土位置	備考
1	埴輪器 盌 杯 杯 身	○　(13.4)	大洗部はラッパ状。 口縁部は外反し端部は丸みをもつ。 受部は外上方に伸める。 天井部と口唇部を分ける稜は残い。	(内外)：ヨコナデ。 (外)：天井部反時計回りのヘラ削り。 (内)：天井部ナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③良好 ④焼成色	1/5					2 6 12
2	埴輪器 壺 杯 杯 身	①　(12.0) ②　(14.3)	口ゆ上ちは内傾し洗部は緩く。 受部は緩慢から外上方に伸める。 体部は丸みをもつ。	(内外)：ヨコナデ。 (外)：体部逆時計回りのヘラ削り。 (内)：ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③良好 ④焼成色	(口) 1/2 (杯) 1/3					7
3	埴輪器 壺	①　(22.0)	口縁部は外反し端部は上下方向に肥厚させる。	(内外)：ヨコナデ。 (外)：胴部外面縦位ヨコナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③(外)褐色 (内)灰白色 (胴)灰白色	(口) 1/6					1 2

No.12　横杖78号墳（第178図）

挿図番号	墓種	規模(cm) ①長 ②幅 ③最大長径 ④厚	形態・手法の特徴		残存状況	備考	遺物番号
1	二棺目 (石室部)	①（33.5）	緩勾配。 二棺目は外縁、屈折で外反して開くもの。	(外)　二段形ハケ目、以下無調。 (内)　風化は極不明瞭。	①2.2m以上の残存を多く含む 3mの移動有 ②丸 ④埋没色	(口)　1/12　施釉有	1

No.12　横杖79号墳（第179図）

1	須恵器 壺	①　9.8 ④　3.6	やや丸みをもつ天井部から内湾して下方へ納め、壁部は段をもつ。	(底外)　ヨコナデ。 (外)　天井部2/3を時計廻りのヘラ削り、中心にへラ状ミガ。 (内)　無ナデ。	①1.2m以上の残存を多く含む 3mの移動有 ②丸 ③M白色～灰色	完形	自然釉	1

No.12　SK-02（第182図）

1	土師器 壺	①　(9.9)	L字部は強く外反し、壁部を欠く。	(外)　強調帯、刷毛ハケ目。縦約不定方向のハケ目。 (内)　無調ナデ。横方向の強調圧痕、絞り目痕。 強調帯以ヘラ削り、絞りナデ。成形時の指頭圧痕。	(口)　2/2 (ヘ)上半　7/8 (底)　1 ③橙色	歪形		13 14
2	土師器 皿 杯	①　13.3 ②　8.4 ④　10.6	横状の形態。底部は強ふる。口縁部は2段に成形して縁部は丸味をもつ。 3は型抜して上方に折り返部は丸い。脚部は強調かを端やや広に開いて下端やハの字状に開き、脚端部は丸みをもつ。	形部　(外)ナデ。成形痕。 (内)ナデ。 脚部(外)ハケ目。 (内)上半工具ナデ、下半ナデ。 (内)ヘラ削り目痕。 底部の接合部は段の稜文を2段に施す。	①1m前後の残存を多く含む ②丸 ③内黒色	(外)　1 (内)上半　1 (脚)下半　1/2	赤彩	6 8
3	土師器 高 杯	①　(12.1) ②　9.3 ④　13.9		杯部　(外)ナデ。成形痕。 (内)ナデ。 接合部(外)ハケ目。 (内)上半工具ナデ、下半ナデ。 (内)ナデ、絞り目痕。 底部の接合部は稜文を2段に施す。	①0.6m以上の残存を多く含む ②丸 ③暗褐色	(口)　1/8 (脚)　(1/2)	赤彩	11
4	土師器 高 杯	①　(16.2) ②　9.4 ④　12.7	浅皿の形状。脚部は歪ふる。口縁部は4段ヨコ撫で成形。5～7は特に上端部や内反しとく細やか。 4～6の脚部は基部から徐々に開いて下方でハの字状に開き、脚端部は色調を変える。 7は脚部を欠く。	杯部　(外)ナデ。 接合部(内)ハケ目。 (内)ナデ、絞り目痕、指頭圧痕。 底部の接合部は稜文を2段に施す。	①0.5m以上の残存を多く含む ②丸 ③暗黄色	(口)　1/4 (杯底)　ほぼ1 (脚)　1	赤彩	7 17 15
5	土師器 高 杯	①　21.8 ②　13.8 ④　15.4		杯部　(内外)ナデ。 脚部　(外)ナデ工具ナデ、下半ナデ。 (外)ナデ、絞り目痕、ハケ目痕。 (内)ハケ目痕、絞り目痕。 底部の接合部は稜文を2段に施す。	①1m以上の残存を含む ②m以下の移動有 ③黄色 ④強性、埋没色	(口)　2/3 (脚)上半　1 (脚)下半　1/2	赤彩	1 2 3
6	土師器 杯	①　22.1 ②　12.9 ④　15.3		脚部不明瞭。 杯部　(外)上半工具ナデ。 (内)ナデ、絞り目痕、ハケ目痕。 (外)成形時の圧痕。 底部の接合部は稜文を2段に施す。	①1m以上の残存を多く含む 1.3mの移動有 ②丸 ③埋没色	(杯)　1 (脚受)　3/5	赤彩	8 4 5
7	土師器 高 杯	①　21.8		脚部不明瞭。 杯部　(外)ナデ、成形痕。	①0.6m以下の残存を含む ②丸 ③橙色	(口)上半　1/2 (杯)下半　5/8	赤彩	1 3 13
8	土師器 高 杯	②　7.8	脚部は基部から徐々かにかいいて下半でハの字状に開き、脚端部は丸みをもつ。	脚部不明瞭。 (外)　ナデ。 (内)　ナデ、絞り目痕。成形時の指頭圧痕。	①1.5m以下の残存を多く含む ②丸 ③橙色	(脚)上半　1 (脚)下半　3/4	赤彩	9
9	土師器 高 杯	①　(12.6)	浅皿の形状。脚部は歪ふる。口縁部は内反して尖端に沿の端面をもつ。	杯部　(外)ハケ目後ナデ。 (内)ナデ後杯底部一方向のナデ。 (内外)口縁部ヨコナデ。 脚部　(外)ナデ。上位にハケ目痕。 底部の接合部に工具のヘラ痕多出痕。	①0.5m以下の残存を含む ②丸 ③淡橙色	(杯)上半　1/4 (杯)下半　1/2 (脚受)　3/4	赤彩	7 8 10

No.12　遺構外（第204図）

1	土師器 甕	D　4.8 T　3.5 T　1.2	平面形は楕円形を。 1面につまみ状の突起をもつ。	平面方向成形及ナデ。成形時の指頭圧痕。	①0.5m以下の残存を含む ②長径 ③黒橙色	ほぼ完形		12
2	須恵器 杯	L　(12.7) W　6.1 T　2.0	底面は端部を欠く。 平面は歪形から方体に近しとなる。		②底色		(192)g 自然釉	11

No.12　横杖古墳群（銅鏡）

（単位：cm）

出土地	遺構番号	墓種	墓の規模・構造	形態の特徴	残存状況	銅質	遺物番号
79号墳 第1主体部	第166図 9	粘土槨	L (長さ) W (幅) T (厚さ) D (径) 平面形態 D T　最大　1.62 0.38	刀刃	表面が荒での両面にカ不明瞭であるが縁部外側は薄鋒性。外面は鋸面を多数かけ1条、あるいは2条を多くかくし、裏に強調、刃先の厚さが高る。M(はかり)手法に表現している面積の最低値。鋒に平坦部で鋸も一方にずれる。	安定		44

No12　横枕古墳群　鉄製品（鉄刀、鉄剣、刀子、鏃、鉄斧、他）

（単位）：cm

出土注	遺構番号	器種	全長	茎 刀部 長さ	茎 刀部 断面形	茎 茎部 長さ	茎 茎部 断面形	茎 断面 計測位置	茎 断面 幅	茎 断面 厚み	形態の特徴	残存状況	備考	遺物整理番号
67号墳 第1主体部	第14図 6	鉄剣	(45.9)	37.7	菱形	11.1	長方形	剣身切上部	2.50	0.50	錆化する。 刃部は先端方向へ幅、厚を徐々に減らし、中心軸には指を当てると、間部不明瞭。 茎部に目釘孔1を残然。	完存	252g 木質痕 有肩状	5
								剣身中央部	2.90	0.60				
								剣身元部1	3.10	0.70				
								茎元幅	1.50	0.50				
								茎尻幅	1.30	0.40				
	第14図 9	鉄剣（茎金具）						一括	0.65	0.25	湾曲する。	1/3	(5.41)g	6
68号墳 第2主体部	第15図 2	刀子	8.4		二等辺三角形		長方形状	刀身中央部	0.93	0.48	錆化、湾曲して不明瞭。 全面銹、鞘木炭が残存する。	完存	11.9g	4
	第15図 3	(刀)	(12.2)			(12.2)	長方形	茎尻上位	0.73	0.31	錆化著しく湾曲する。	関部欠	(15.32)g	3
								茎尻下位	0.85	0.25				
69号墳 主体部	第15図 4	刀子	9.2		二等辺三角形		長方形状	刀身切先部	0.70	0.16	錆化、湾曲して不明瞭。 全面銹、鞘木炭が残存する。	ほぼ完存	(13.72)g	7
								刀身中央部	1.02	0.25				
								茎尻部	0.93	0.20				
	第15図 5	大刀	93.6	76.3	二等辺三角形	17.3	長方形状	刀身切先部	2.17	0.52	錆化する。 刀身は刃関をもち切先方向へ幅、厚を減らし切先は丸い。背は不明瞭。 茎部は鞘木炭四面に巻鞘痕。 刀身右に木質。	完存	724g	8
								刀身中央部	2.98	0.85				
								刀身元部	3.16	0.99				
								茎中央部	2.31	0.73				
70号墳 主体部	第16図 17	鉄剣	(69.4)	(55.1)	(菱形)	14.3	長方形状	剣身中央部	2.98	0.55	錆化する。 剣身は先端方向へ幅、厚を徐々に減らし、中心軸の鋒は不明瞭。 全面銹、鞘木質が遺存し鞘角可能。 鞘面の3箇所に柱の木質付着。 茎25cmに目釘孔2の痕跡。	切先部欠	(426)g	12 13
								剣身元部	3.33	0.63				
								茎中央部	1.80	0.31				
71号墳 主体部	第19図 1	鉄剣	48.9	37.0	(菱形)	11.9	長方形	剣身切先部	1.85	0.25	錆化する。 刃部は先端方向へ幅、厚を徐々に減らし、中心軸の鋒に不明瞭。 全面銹、鞘木質が遺存し斜角両関。 茎部の目釘孔1に目釘が残る。	完存	150g	4 6
								剣身中央部	2.30	0.38				
								剣身元部	2.53	0.43				
								茎元部	1.70	0.30				
								茎中央部	1.40	0.25				
72号墳 主体部	第19図 2	鉄剣	(34.2)	30.0	(菱形)	(4.2)	長方形	剣身切先部	2.10	0.25	錆化する。 刃部は先端方向へ幅、厚を徐々に減らし、中心軸の鋒は不明瞭。 全面銹、鞘木質が遺存。斜角両関。茎部に目釘孔1を残存。	茎尻部欠	(102)g 巻鞘痕	6
								剣身中央部	2.60	0.30				
								剣身元部	2.90	0.40				
								茎中央部	(1.50)	0.25				
73号墳 第1主体部	第19図 10	大刀	93.1	75.3	二等辺三角形	17.8	長方形状	刀身切先部	2.50	0.50	錆化著しい。 刃は切先方向へ幅、厚を徐々減らし切先は丸い。背は不明瞭。 茎部は鞘木質元部に巻鞘痕跡。 茎部に目釘孔1。 茎部は鞘木質が茎尻部より長く遺存し最終公半長92.7cmを測る。	完存	1,000g 鞘を含む？	34
								刀身中央部	3.10	0.70				
								刀身元部	3.33	0.80				
								茎尻21	2.35	0.50				
	第19図 11	鉄剣	(85.2)	72.2	(菱形)	16.0	長方形状	剣身刃先部	3.31	0.43	錆化する。 剣身は先端方向へ幅、厚を徐々に減らし、中心軸の鋒は不明瞭。 鞘、鞘木質が遺存。斜角両関。 茎21cmに目釘孔1を残然。	ほぼ完存	(620)g	33
								剣身中央部	3.88	0.53				
								剣身元部	3.90	0.61				
								茎中央部	1.59	0.21				
	第20図 12	鉄剣	(70.3)	(55.6)	(菱形)	14.9	長方形状	剣身切先部	2.94	0.45	錆化著しい。 剣身は先端方向へ幅、厚を徐々に減らし、中心軸の鋒は不明瞭。 両関、茎部木質の両面に巻鞘痕と目釘孔3か。	切先端部欠	(510)g	35
								剣身中央部	3.40	0.55				
								剣身元部	3.80	0.60				
								茎元部	1.80	0.40				
	第20図 13	刀子	(7.0)	(3.7)	二等辺三角形	3.3	長方形	刀身中央部	(0.55)	(0.20)	錆化著しく一部欠損する。 鞘、柄木質が遺存。関前不明瞭。 茎尻は丸い。	関端部欠	(3.26)g	52 55
								刀身元部	0.65	0.18				
								茎中央部	0.73	1.80				
	第20図 14	刀子	(4.2)	2.7	二等辺三角形	(1.5)	長方形	刀身中央部	0.70	0.20	小型。 鞘、鞘木質が遺存。関前不明瞭。	茎尻部欠	(2.3)g 木質痕	52
								茎尻部	0.57	0.12				
	第20図 15	刀子	(3.4)	(0.7)	二等辺三角形欠	2.7		刀身元部	1.05	(0.20)	錆化著しく一部は削落する。 関間をもつ。茎尻は丸い。	茎部	(1.82)g 木質痕	48
								茎元部	0.80	0.20				
	第20図 16	鉄鏃 鉄製品	(2.5)								外側木質はほとんどが腐る。 内側の針状主体は先端がとも尖鋭しており鏃か。 断面はほぼ同一の円形。	欠失部	(0.6)g 木質痕	47
	第20図 17	鉄斧	L 10.8 W 4.5 T 0.4 D 3.4 D 2.5								方袋鉄斧。 平面形は船形で上半部は袋状、平面形は船形で上半部は袋状、刃部は水平。 袋部は全体に同じ、断面は楕円形状形状。	完存	231g	31

No.12　横枕古墳群　鉄製品（鉄鏃）

（単位：cm）

出土地	博物館番号	区分	種類	全長	身部 平面形	身部 断面形	身部 逆刺	頸部	頸部	茎部	茎部	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
				①現存値 ②残部 ③復原		幅部形 W 幅 T 厚さ		関部形	関部計測 W 幅 T 厚さ	頸部形	関部計測 W 幅 T 厚さ				
67号墳 主体部	第142図 2	鉄	鏃	(13.6) ① 1.1 ② (2.2)	中央部 W 2.15 T 0.35 平造	楕円形				方形	先端部 W 0.13 T 0.15	鏃身部に先端部にふくらをもち関を直線的に減らしながら身元部へ引き寄せる。	尖端部欠	(41.69)g 木質痕	10
	第142図 3	鉄	鏃	(13.2) ③ 10.5	先端部 W 1.80 T 0.20 平造	楕円形				方形	中央部 W 0.25 T 0.25	鏃身部は先端部にふくらをもち幅は直線的に一定とし身元部で尖頭する。	尖端部欠	(32.69)g 木質痕 他等痕	11
	第144図 4	鉄	鏃	(13.9)	中央部 W 2.25 T 0.30 （平造）	楕円形				長方形	尖端部 W 0.43 T 0.20		鏃身一部欠	(29.98)g 巻痕跡	9
	第144図 5	鉄	鏃	13.1 ① 9.6 ② (0.8) ③ (2.4)	中央部 W 2.15 T 0.30 平造	楕円形				方形	中央部 W 0.40 T 0.40	鏃身部に先端部にふくらをもち関は直線的に一定とし身元部で茎位に接続へ続く。	完存	35.04g 木質痕	7
	第144図 6	鉄	鏃	(12.3)	先端部 W 2.00 T 0.25 平造	楕円形				長方形	尖部 W 0.30 T 0.15	鏃身部は先端部にふくらをもち関では幅を直線的に一定とし中位で幅を最大に保ち、半端は身元方向へと直線的に減じ茎位に接続する。	尖端部欠	(32.77)g 木質痕 他等痕 金属痕	12
	第144図 7	鉄	鏃	10.0 ① 6.4 ② 1.2 ③ 3.5	楕円形 W 2.00 T 0.30 平造	中央部 W 2.00 T 0.30	角 反方形			長方形	中央部 W 0.35 T 0.30	鏃身部は先端部にふくらをもち半ヶ上に関を減らして茎部へ続く。	茎は先端部欠	(15.05)g 木質痕	8
70号墳 主体部	第156図 8	鉄	鏃	(5.2) ① 4.2 ② 0.9 ③ (2.0)	長三角形 W (1.10) T 0.30 平造	元部 W (1.10) T 0.30	角形 長方形	上位 W 0.52 T 0.40	長方形	長方形	中央部 W 0.47 T 0.33	鏃身部は先端部から関を増し元部に到ず。	尖端部欠	(3.75)g 巻痕跡	15
	第156図 19	鉄	鏃	(15.8)	長三角形 W 1.30 平造	中央部 W 1.30	台形状 長方形	下位 W 0.49 T 0.57	長方形	長方形	中央部 W 0.40 T 0.28	長頸鏃。 鏃身部は先端部から幅を減じ元部は不明瞭。	先端部欠	(14.96)g 木質痕	19
	第156図 20	鉄	鏃	(16.1) ① 4.3 ② 6.9 ③ (4.7)	長二角形 W 0.81 T 0.28 片鎬造	先端部 W 0.81 T 0.28	台形状 長方形	中央部 W 0.61 T 0.39	長方形	中央部 W 0.44 T 0.28	長頸鏃。 鏃身部は先端部から幅を増し元部は到ず。	先端部欠	(18.22)g 小質痕 巻痕跡	18
	第156図 21	鉄	鏃	(15.8) ① 2.7	長三角形 W 1.05 T 0.27 平造	中央部 W 1.05 T 0.27	0.1	台形状 長方形	中央部 W 0.38 T 0.31	長方形	完部 W 0.45 T 0.26	長頸鏃。 鏃身部は先端部から幅を増し逆刺へ続く。	先端部欠	(15.1)g 木質痕 巻等痕	16
	第156図 22	鉄	鏃	(8.9) ① 2.6 ② (7.0)	二角形 W 1.14 平造	中央部 W 1.14	(0.6)	長方形	中央部 W 0.56 T 0.38			長頸鏃。 鏃身部は先端部から幅を増し逆刺へ続く。	茎部欠	22.23g (30.32)g	14
	第156図 23	鉄	鏃	(12.9) ① 3.0 ② 3.3 ③ (0.7)	長二角形 W 0.94 T 0.33 平造	先端部 W 0.94 T 0.33	0.1	台形状 長方形	上位 W 0.58 T 0.53	方形状	完部 W 0.39 T 0.36		先端部欠	巻等痕	14
	第156図 24	鉄	鏃	13.6 ① (2.6) ② 11.0	長三角形 W 1.07 平造	中央部 W 1.07	0.2	長方形	下位 W 0.54 T 0.36			長頸鏃。 鏃身部は先端部から幅を増し逆刺へ続く。	先端部欠	(18.47)g 木質痕 他等痕	21
	第156図 25	鉄	鏃	(14.0) ② (2.5)	長三角形 平造	先端部 W 0.96		角形 長方形	中央部 W 0.60 T 0.38	長方形	中央部 W 0.30 T 0.16	長頸鏃。 鏃身部は先端部から幅を増し元部は到ずる。	先端部欠	25.26g (28.70)g 木質痕 巻等痕	17
	第156図 26	鉄	鏃	(15.5) ① 2.7 ② 9.0 ③ (4.1)	三角形 平造	先端部 W 0.88 T 0.25	0.3	台形状 長方形	元部 W 0.68 T 0.46	長方形		尖頭鏃。 鏃身部は先端部から幅を増し逆刺へ続く。	先端部欠	木質痕 巻痕跡	17 20
71号墳 土器墓	第161図 2	鉄	鏃	(14.7) ① (3.2)	片刃形 二等辺三角形	中央部 W 0.88 T 0.15		長方形状	中央部 W 0.50 T 0.30	方形	完部 W 0.17 T 0.20	長頸鏃。 鏃身部はしんそ形。 鋼化等施して部関部へ明瞭。	先端部欠	(14.87)g	3
73号墳 第2土体部	第172図 73	鉄	鏃	(10.8)	三角形 片丸造	中央部 W 1.00		長方形	中央部 W 0.33 T 0.30	方形状	完部 W 0.46 T 0.40	長頸鏃。 茎部は柄が良好に残り木質茎六方材140.80cmを測り、その一部に樹皮の朽ち金属を観察する。	先端部欠	(10.77)g	6 9
	第172図 74	鉄	鏃	(16.1) ① (2.7)	三角形 片丸造			長方形	下位 W 0.25 T 0.30	長方形	中央部 W 0.36 T 0.27	長頸鏃。茎部は柄が良好に残り外周を樹皮で巻き、遺存良好で横断面で0.83cmを測る。	先端部欠	(16.49)g	21
	第172図 75	鉄	鏃	(17.4)				長方形	下位 W 0.66 T 0.34	方形状	完部3 W 0.25 T 0.25	長頸鏃。 鏃身部は鉄化部残により不明。茎部は柄が良好に残り小金を用度で巻等、遺存良好で横断面で0.9cmを測る。	先端部欠	(19.63)g	22

No.12 横枕古墳群　鉄製品（鉄鏃）

（単位：cm）

出土地	遺構番号	器種	長 ①鏃身部 ②茎部 ③茎組	鏃身部 平面形	断面形	茎部 平面形	断面形	関・鎬 平面形	断面形	茎 断面形	茎部 断面形	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
79号墳 第2下層部	第172図 76	鉄鏃	(16.0) ① (12.4)	(三角形) W 1.14	中央部 W 1.14		元部 W 0.60 T 0.32	長方形	中央部 W 0.34 T 0.24		長頸鏃。 鏃身部は鍛化層剥離により不明瞭。	第2下層欠	(13.34)g 木質痕 巻押痕	19
				片丸造			長方形							
	第172図 77	鉄鏃	(5.0) ① 4.1 ② 7.3 ③ 4.6	長三角形	中央部 W 0.83 T 0.29		元部 W 0.62 T 0.38	方形状	元端部 W 0.17 T 0.14		長頸鏃。 鏃身部は先端部から欠かに屈を増し先端方向へと斜行する。	尖端部欠	(12.74)g 木質痕 巻押痕	23
				片丸造			長方形							
	第172図 78	鉄鏃	(14.3) ① 3.1 ② 8.5 ③ 2.7	長三角形	中央部 W 1.00 T 0.32		中央部 W 0.60 T 0.37				長頸鏃。 鏃身部は先端部で幅を増し、ほぼ一定幅に沿って先端で斜行する。関部は先端方向へと斜行する。	尖端部欠	(14.51)g 木質痕 巻押痕	25
				片丸造			扁方形							
	第172図 79	鉄鏃	(12.8)		先端部 W 0.76		中央部 W 0.52 T 0.32	方形状	元端 W 0.36 T 0.25		長頸鏃。 鏃身部は鍛化層剥離によりW面。茎関部は偶に茎は外面を樹皮で巻押、横断面で約0.58cmを測る。	尖端部欠	(14.94)g	20
				(片丸造)			長方形							
	第172図 80	鉄鏃	(15.2) ① 3.5	長三角形	中央部 W 1.20 T 0.20		中央部 W 0.60 T 0.35	方形状	中央部 W 0.35 T 0.25		長頸鏃。 鏃身部は先端部から幅を増した後元部方向へ斜行する。 茎は長幅は鏃が良好に残り外面を樹皮で巻押、遺存良好で横断面で0.9cmを測る。	尖端部欠	約一40 木質痕 巻押痕 (69.25)g	16
				片丸造			長方形							
	第172図 81	鉄鏃	(14.7) ① 3.5	長三角形	中央部 W 1.20 T 0.20		中央部 W 0.60 T 0.30	方形状	元部 W 0.30 T 0.20			尖端部欠	木質痕	17
				片丸造			長方形							
	第172図 第173図 82	鉄鏃	(15.1)	長三角形	中央部 W 1.20 T 0.20		中央部 W 0.60 T 0.35	方形状	元部 W 0.45 T 0.30			尖端部欠		15
				片丸造			長方形							
	第173図 83	鉄鏃	(13.8)	長三角形	中央部 W 1.00 T 0.20		中央部 W 0.60 T 0.35	扁方形	上位 W 0.20 T 0.15			尖端部欠		〃
				片丸造			長方形							
	第173図 84	鉄鏃	(16.0)	長三角形	中央部 W 1.20 T 0.25		中央部 W 0.55 T 0.35	方形状	尖端部 W 0.25 T 0.20		長頸鏃。 鏃身部は先端部で幅を増し、ほぼ一定幅に沿って先端で斜行する。茎部は鏃が良好に残り外面を樹皮で巻押、遺存良好で横断面で1cmを測る。	尖端部欠	34～88 鉄片 (61.57)g	11
				片丸造			長方形							
	第173図 85	鉄鏃	(15.5)	長三角形	中央部 W 1.20		中央部 T 0.30	方形状			長頸鏃。 鏃身部は先端部から留を増した後元部方向へ斜行する。茎部は鏃が良好に残り外面を樹皮で巻押、遺存良好で横断面で1cmを測る。	尖端部欠		12
				片丸造			長方形							
	第173図 86	鉄鏃	(9.7)	長三角形	中央部 W 1.00		中央部 W 0.65 T 0.25				長頸鏃。 鏃身部は錆膨により不明瞭。	茎部欠		13
				片丸造			長方形							
	第173図 87	鉄鏃	(2.6) ② (2.6)				中央部 T 0.30					頭部		
							長方形							
	第173図 88	鉄鏃	(1.9) ② (1.9)				中央部 W 0.65 T 0.30					頭部		
							長方形							
	第173図 89	鉄鏃	(5.8) ① 3.6 ② (3.2)	長三角形	中央部 W 1.00		中央部 W 0.50 T 0.30				無茎鏃。 鏃身部に小種欠で幅を増しは一定幅に沿って先端で斜行する。 鏃身部に他の鉄鏃の一部付着。	鏃身部	(7.77)g	10
				片丸造			長方形							
	第173図 90	鉄鏃	(13.8)				上位 W 0.70 T 0.36	方形	中央部 W 0.25 T 0.25		長頸鏃。 鏃身部は鍛冶連鏃し小剥離で凸部端の可能性もある。 茎部に鏃が良好に残り外面を樹皮で巻押、遺存良好で横断面で0.9cmを測る。	先端部欠	(18.77)g	24
							長方形							
	第173図 91	鉄鏃	(3.6) ② (3.6)				下位 W 0.65 T 0.35				他の鉄鏃の一部付着。	鏃部	(4.85)g 巻押痕	7
							長方形							
	第173図 92	鉄鏃	(1.8) ③ (1.8)					長方形	上位 W 0.50 T 0.35		茎部に鏃が良好に残り外面を樹皮で巻押、遺存良好で横断面で0.8cmを測る。	茎部	(0.98)g	8

No.12 横枕70号墳主体部 出土玉類（第154図）

挿図番号	種類		長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)		穿孔	色調	重量 (g)	材質	残存状況	備考	遺物番号
3	勾	玉	12.5	5.3	1.4	1.2		緑黄色	0.39	ガラス	完存	気泡有	42- 2
4	勾	玉	25.5	9.3	2.3	1.2	片面	茶褐色 淡緑色	(3.11)	メノウ	ほぼ完存		42- 1
5	勾	玉	21.8	8.6	3.0	0.8	片面	茶褐色 半透明	(2.10)	メノウ	ほぼ完存		42- 3
6	勾	玉	21.9	8.3	3.3	1.7	片面	茶褐色 半透明	(2.20)	メノウ	ほぼ完存		42- 4
7	小	玉	1.5	2.6	0.9			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 1
8	小	玉	1.6	2.6	0.9			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 2
9	小	玉	1.4	2.3	0.8			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 3
10	小	玉	1.6	2.7	1.0			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 4
11	小	玉	[illegible]	2.5	1.2			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 5
12	小	玉	2.0	2.5	1.0			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 6
13	小	玉	1.9	2.6	0.9			淡青緑色 半透明	(0.01)	ガラス	ほぼ完存	気泡有	44- 7
14	小	玉	1.4	2.2	1.0			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 8
15	小	玉	1.7	2.4	1.0			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 9
16	小	玉	1.8	2.5	1.0			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 10
	小	玉	1.8	2.6	0.6			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 11
	小	玉	1.6	2.6	0.4			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 12
	小	玉	1.6	2.4	0.8			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 13
	小	玉	1.9	2.4	0.7			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 14
	小	玉	1.7	2.6	0.6			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 15
	小	玉	2.2	2.9	0.6			淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 16
	小	玉	2.1	2.9	0.6			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 17
	小	玉	1.7	2.6	0.7			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 18
	小	玉	1.8	2.6	0.8			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 19
	小	玉	2.1	3.0	0.8			淡緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 20
	小	玉	2.2	2.9	0.5			淡緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 21
	小	玉	2.7	3.8	0.9			淡緑色 半透明	0.04	ガラス	完存	気泡有	44- 22
	小	玉	1.9	3.0	0.5			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 23
	小	玉	1.6	2.5	0.5			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 24
	小	玉	1.6	2.4	0.4			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存		44- 25
	小	玉	1.8	2.6	0.6			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 26
	小	玉	1.7	2.6	0.4			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 27
	小	玉	2.1	3.8	0.9			淡青緑色 半透明	0.04	ガラス	完存	気泡有	44- 28
	小	玉	2.1	3.4	0.6			淡青緑色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44- 29
	小	玉	2.1	3.2	0.7			淡青緑色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44- 30
	小	玉	1.7	2.7	0.7			淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 31
	小	玉	2.1	3.1	0.4			淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 32
	小	玉	2.1	3.3	0.5			淡青緑色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44- 33
	小	玉	2.1	3.2	0.6			淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 34
	小	玉	1.7	3.1	0.5			淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 35
	小	玉	1.9	3.4	0.7			淡青緑色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44- 36
	小	玉	1.8	3.2	0.6			淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 37
	小	玉	1.9	3.2	0.6			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 38
	小	玉	1.8	3.1	0.6			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 39
	小	玉	1.1	2.5	0.7			淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 40
	小	玉	1.9	3.1	0.6			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 41
	小	玉	1.7	3.0	0.5			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 42
	小	玉	2.1	3.6	0.5			淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44- 43
	小	玉	2.1	3.3	0.7			淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44- 44
	小	玉	2.3	3.3	0.5			淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44- 45
	小	玉	1.8	3.1	0.5			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 46
	小	玉	1.7	3.0	0.6			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 47
	小	玉	1.8	3.4	0.9			淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44- 48
	小	玉	1.8	3.1	0.5			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 49
	小	玉	1.9	3.0	0.6			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 50
	小	玉	1.5	2.8	0.7			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 51
	小	玉	2.0	3.1	0.7			淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44- 52
	小	玉	1.7	2.8	1.0			淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 53
	小	玉	1.8	2.9				淡青色 半透明	(0.01)	ガラス	1/2	気泡有	44- 54
	小	玉	1.7	3.0	0.4			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 55
	小	玉	1.5	2.9	0.6			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 56
	小	玉	1.7	2.9	0.6			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 57
	小	玉	1.8	3.1	0.6			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 58
	小	玉	1.7	2.8	0.7			淡青緑色 半透明	(0.01)	ガラス	1/2	気泡有	44- 59
	小	玉	1.7	2.5	0.5			淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 60
	小	玉	1.8	3.0	0.6			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 61
	小	玉	1.7	2.6	0.4			淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44- 62
	小	玉	2.0	3.3	0.5			淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44- 63
	小	玉	2.3	3.4	0.7			淡青緑色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44- 64
	小	玉	1.8	3.0	0.7			淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44- 65

No.12 横枕70号墳主体部 出土玉類

整理番号	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	穿孔	色調	重量(g)	材質	残存状況	備考	遺物収納番号
	小玉	1.9	3.3	0.4		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-66
	小玉	1.6	3.0	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-67
	小玉	2.0	3.5	0.6		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-68
	小玉	1.8	3.0	0.4		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-69
	小玉	2.0	3.1	0.5		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-70
	小玉	1.7	3.1	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	2/3	気泡有	44-71
	小玉	1.7	3.0	0.8		淡青色 半透明	0.02	ガラス	破存	気泡有	44-72
	小玉	1.6	2.6	0.5		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44-73
	小玉	1.7	2.9	0.4		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-74
	小玉	1.7	2.9	0.4		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-75
	小玉	1.7	2.6	0.6		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44-76
	小玉	1.9	2.5	0.6		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44-77
	小玉	2.0	3.3	0.5		淡青緑色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-78
	小玉	1.7	2.5	0.6		淡青色 半透明	0.01	ガラス	破存	気泡有	44-79
	小玉	1.9	3.0	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-80
	小玉	2.0	3.0	0.4		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-81
	小玉	1.7	3.0	0.5		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-82
	小玉	1.7	2.5	0.5		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44-83
	小玉	1.6	3.1	0.5		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-84
	小玉	2.0	3.2	0.6		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-85
	小玉	2.0	3.5	0.5		淡青色 半透明	0.03	ガラス	破存	気泡有	44-86
	小玉	1.8	3.0	0.5		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-87
	小玉	1.9	3.2	0.8		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-88
	小玉	2.3	3.3	0.5		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-89
	小玉	1.8	3.1	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-90
	小玉	2.1	3.3	0.6		淡青色 半透明	0.03	ガラス	破存	気泡有	44-91
	小玉	1.7	2.9	0.5		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-92
	小玉	1.6	3.1	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-93
	小玉	2.4	4.4	1.0		淡青緑色 半透明	0.05	ガラス	完存	気泡有	44-94
	小玉	1.7	3.1	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-95
	小玉	1.7	2.5	0.6		淡青緑色 半透明	0.0	ガラス	完存	気泡有	44-96
	小玉	2.0	3.7	0.4		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-97
	小玉	1.9	2.6	0.5		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44-98
	小玉	2.3	4.1	0.9		淡青色 半透明	0.05	ガラス	完存	気泡有	44-99
	小玉	1.7	3.0	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-100
	小玉	2.1	3.2	0.5		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-101
	小玉	1.6	3.1	0.7		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-102
	小玉	1.7	3.1	0.7		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-103
	小玉	1.9	3.3	0.5		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-104
	小玉	2.1	3.2	0.7		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-105
	小玉	1.8	2.7	0.6		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存		44-106
	小玉	1.7	2.5	0.6		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存		44-107
	小玉	1.6	2.6	0.5		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存		44-108
	小玉	2.0	3.4	0.6		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-109
	小玉	1.8	3.3	0.6		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-110
	小玉	1.7	3.0	0.5		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-111
	小玉	1.8	3.0	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	破存	気泡有	44-112
	小玉	1.9	3.1	0.5		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-113
	小玉	2.1	3.3	0.6		淡青色 半透明	0.03	ガラス	破存	気泡有	44-114
	小玉	1.9	3.4	0.6		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-115
	小玉	1.7	2.9	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	破存	気泡有	44-116
	小玉	2.2	3.3	0.6		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-117
	小玉	1.8	3.0	0.7		淡青色 半透明	0.02	ガラス	破存	気泡有	44-118
	小玉	2.1	3.5	0.7		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-119
	小玉	2.1	2.9	0.6		淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	破存	気泡有	44-120
	小玉	2.3	3.2	0.8		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-121
	小玉	2.1	3.2	0.8		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有	44-122
	小玉	1.6	3.1	0.7		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-123
	小玉	1.5	2.5	0.5		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44-124
	小玉	2.0	3.2	0.6		淡青色 半透明	0.03	ガラス	破存	気泡有	44-125
	小玉	1.7	2.5	0.5		淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44-126
	小玉	1.6	2.5	0.5		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有	44-127
	小玉	1.8	3.0	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	破存	気泡有	44-128
	小玉	1.8	3.0	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-129
	小玉	1.7	3.0	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有	44-130
	小玉	1.5	2.8			淡青色 半透明	(0.01)	ガラス	1/2	気泡有	44-131
	小玉	1.5	3.1			淡青色 半透明	(0.01)	ガラス	1/2	気泡有	44-132
	小玉	2.0	3.2			淡青色 半透明	(0.01)	ガラス	1/2	気泡有	44-133
	小玉	1.9	3.1			淡青色 半透明	(0.01)	ガラス	1/2	気泡有	44-134

No.12　横杖70号墳主体部　出土玉類

挿図番号	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	穿孔	色調	重量(g)	材質	残存状況	備考	遺物番号	物袋番号
	小木	2.1	3.4			淡青色 半透明	(0.02)	ガラス	1/2	気泡有		44-135
	小玉					淡青色 半透明		ガラス	破片			44-136
	小玉	1.2	2.0	0.5		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有		44-137
	小木	2.3	3.3	0.7		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有		44-138
	小玉	1.3	2.4	0.7		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有		44-139
	小玉	1.9	3.3	0.6		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有		44-140
	小玉	1.7	3.2	0.6		淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-141
	小玉	2.2	3.3	1.2		淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-142
	小玉	1.2	2.3	0.6		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有		44-143
	小玉	1.6	2.5	0.7		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有		44-144
	小木	1.7	2.6	0.6		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有		44-145
	小玉	1.6	2.6	0.7		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有		44-146
	小玉	1.7	2.5	0.5		淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有		44-147
	小玉	2.0	3.1	0.8		淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-148
	小玉	1.8	3.1	0.6		淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-149
	小玉	1.8	3.1	0.6		淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-150
	小玉	2.0	3.2	0.7		淡青色 半透明	0.03	ガラス	完存	気泡有		44-151
	小木	1.8	3.0	0.5		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-152
	小玉	1.8	2.9	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-153
	小玉	1.5	2.8	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-154
	小玉	1.5	3.0	0.5		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-155
	小玉	2.0	2.8	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-156
	小玉	1.6	3.0	0.7		淡青色 半透明	(0.02)	ガラス	ほぼ完存	気泡有		44-157
	小玉	2.2	2.8	0.6		淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-158
	小木	1.6	3.0	0.7		淡青緑色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-159
	小玉	1.6	2.6	0.5		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有		44-160
	小玉	1.8	3.1	0.7		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-161
	小玉	1.5	2.9	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-162
	小玉	1.7	2.6	0.8		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-163
	小玉	1.8	2.7	0.6		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存			44-164
	小玉	1.6	2.9	0.5		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-165
	小木	1.6	2.4	0.7		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有		44-166
	小玉	2.5	2.9	0.8		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-167
	小玉	1.9	2.7	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-168
	小玉	1.8	3.1			淡青色 半透明	(0.02)	ガラス	1/2	気泡有		44-169
	小木					淡青色 半透明		ガラス	破片	気泡有		44-170
	小玉	1.8	2.5	0.5		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有		44-171
	小玉	1.9	2.8	0.7		淡青色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有		44-172
	小木	1.7	3.0	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-173
	小玉	1.7	3.1	0.6		淡青色 半透明	0.02	ガラス	完存	気泡有		44-174
	小玉	1.7	2.4	0.6		淡青緑色 半透明	0.01	ガラス	完存	気泡有		44-175

No.12　横杖71号墳主体部　出土玉類（第161図）

挿図番号	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	穿孔	色調	重量(g)	材質	残存状況	備考	遺物番号	物袋番号
3	勾玉	32.0	12.5	3.0	2.0	両面	緑オリーブ灰色	6.60	滑石	完存		12-1
4	管玉	18.0	4.0	1.8	1.5	両面	青緑灰色	0.55	滑石	完存		13-1
5	管玉	19.5	4.0	2.0	1.8	両面	青緑灰色	0.57	滑石	完存		13-2
6	管玉	20.1	4.2	2.0		両面	緑灰色	0.43	滑石	完存		13-3
7	管玉	20.0	4.2	1.9		両面	オリーブ灰色	0.51	滑石	完存		13-4
8	管玉	24.0	4.3	2.0		両面	オリーブ灰色	0.77	滑石	完存		13-5
9	管玉	18.0	4.4	1.8		両面	オリーブ灰色	0.51	滑石	完存		13-6
10	管玉	19.0	4.1	2.0	1.9	両面	オリーブ灰色	0.51	滑石	完存		13-7
11	管玉	18.0	4.1	1.9		両面	緑灰色	0.51	滑石	完存		13-8
12	管玉	(12.0)	4.0	2.0		オリーブ灰色	(0.25)	滑石	一部破欠			13-9

No.12　横杖72号墳主体部　出土玉類（第163図）

挿図番号	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	穿孔	色調	重量(g)	材質	残存状況	備考	遺物番号	物袋番号
3	勾玉	28.0	13.0	3.5	1.5	片面	孔色、緑色	(8.19)	ヒスイ	ほぼ完存		12-1
4	切子玉	29.0	18.5	3.0	1.2	片面	無色 透明	10.12	水晶	完存		11-1
5	玉	14.5	12.0	1.4	1.0		乳色	(0.84)	ヒスイ?	ほぼ完存		10-2
6	木	12.0	8.2	1.6	1.4		乳色	(0.30)	ヒスイ?	ほぼ完存		10-1
7	玉	14.5	8.0	1.6	1.8		乳色	(0.30)	ヒスイ?	ほぼ完存		10-3
8	管玉	3.1	6.8	2.4			乳色	(0.16)	管玉	ほぼ完存		14-1
9	管玉	3.9	6.8	2.5	2.3		乳色	0.18	管玉	完存		14-2
10	小木	5.4	5.9	1.9	1.7		淡青色 半透明	(0.23)	ガラス	ほぼ完存 気泡有		14-3

No.12　横杖72号墳主体部　出土玉類（第163図）

検図番号	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	穿孔	色調	重量(g)	材質	残存状況	備考	遺物番号	物番号
11	小玉	3.8	6.0	2.6		淡青色 半透明	(0.22)	ガラス	1/2以完存	気泡有	14-4	
12	小玉	3.5	4.5	1.2		青緑色 半透明	(0.09)	ガラス	1/2以完存	気泡有	14-5	
13	小玉	3.2	4.4	1.5		青緑色 半透明	0.09	ガラス	完存	気泡有	14-6	
14	小玉	3.5	4.7	1.8	1.2	青緑色 半透明	0.11	ガラス	完存	気泡有	14-7	
15	小玉	3.0	5.0	1.6		淡青緑色 半透明	0.10	ガラス	完存	気泡有	14-8	
16	小玉	3.7	5.0	1.7		青緑色 半透明	(0.16)	ガラス	1/2以完存	気泡有	14-9	
17	小玉	4.7	4.8	1.6	1.4	緑青色 半透明	0.15	ガラス	完存	気泡有	14-10	
	小玉	2.6	4.2	1.3		淡青色 半透明	0.06	ガラス	完存	気泡有	14-11	
	小玉	4.5	4.3	1.3		淡青色 半透明	0.11	ガラス	破片	気泡有	14-12	
	小玉	2.0	5.3	1.5		灰オリーブ色	0.08	石?	完存		14-13	
	小玉	2.7	5.0	1.3		灰オリーブ色	0.10	石?	完存		14-14	
	小玉	2.7	3.9	1.2		淡青色 半透明	0.06	ガラス	完存		14-15	
	小玉	4.1	4.5	1.8		淡青色 半透明	0.11	ガラス	完存	気泡有	14-16	
	小玉	1.6	4.9	1.6		灰オリーブ色	0.06	石?	完存		14-17	
	小玉	3.2	4.2	1.2		淡青色 半透明	0.08	ガラス	完存	気泡有	14-18	
	小玉	4.2	4.6	1.1		淡青緑色 半透明	0.13	ガラス	完存	気泡有	14-19	
	小玉	3.3	4.3	1.8	1.2	淡青色 半透明	0.09	ガラス	完存	気泡有	14-20	
	小玉	2.4	5.5	2.0	1.5	淡黄色 半透明	0.10	ガラス	完存	気泡有	14-21	
	小玉	2.4	5.3	1.4	1.2	灰オリーブ色	0.10	石?	完存		14-22	
	小玉	2.2	5.1	1.7	1.6	灰オリーブ色	0.07	石?	完存		14-23	
	小玉	3.5	5.0	1.7	1.5	黄褐色 半透明	0.14	ガラス	完存	気泡有	14-24	
	小玉	2.0	4.5	1.2		淡褐色 半透明	0.04	ガラス	完存	気泡有	14-25	
	小玉	3.0	3.9	1.2		淡青緑色 半透明	0.07	ガラス	完存	気泡有	14-26	
	小玉	2.5	4.0	1.1		淡青色 半透明	0.06	ガラス	完存	気泡有	14-27	
	小玉	2.6	5.3	1.5		灰オリーブ色	0.10	石?	完存		14-28	
	小玉	2.4	5.4	1.5		灰オリーブ色	0.09	石?	破片		14-29	
	小玉	5.2	6.6	1.9	1.6	淡青色 半透明	(0.30)	ガラス	1/2以完存	気泡有	14-30	
	小玉	1.6	4.6	1.5		淡青緑色 半透明	0.04	ガラス	完存	気泡有	14-31	
	小玉	2.9	4.1	1.4	0.9	淡青色 半透明	0.07	ガラス	完存	気泡有	14-32	
	小玉	2.9	4.7	1.2		淡青色 半透明	0.08	ガラス	完存	気泡有	14-33	
	小玉	2.5	4.3	1.3		淡青色 半透明	0.07	ガラス	完存	気泡有	14-34	
	小玉	3.1	4.1	1.0		淡青色 半透明	0.07	ガラス	完存	気泡有	14-35	
	小玉	4.1	3.9	1.0		淡青色 半透明	0.09	ガラス	完存	気泡有	14-36	
	小玉	3.8	4.6	1.9	1.5	淡青緑色 半透明	0.10	ガラス	完存	気泡有	14-37	
	小玉	2.8	3.8	1.1		淡青色 半透明	0.05	ガラス	完存	気泡有	14-38	
	小玉	2.8	5.0	1.6		淡黄色 半透明	0.09	ガラス	完存	気泡有	14-39	
	小玉	2.6	3.8	1.2		淡青色 半透明	0.05	ガラス	完存	気泡有	14-40	
	小玉	1.7	5.1	1.6		灰オリーブ色	0.05	石?	完存		14-41	
	小玉	1.9	5.0	1.5		灰オリーブ色	0.06	石?	完存		14-42	
	小玉	2.9	5.2	1.2		灰オリーブ色	0.11	石?	完存		14-43	
	小玉	2.2	5.1	1.6		灰オリーブ色	0.10	石?	破片		14-44	
	小玉	1.9	5.2	1.6		灰オリーブ色	0.07	石?	完存		14-45	
	小玉	2.3	5.3	1.6		灰オリーブ色	0.09	石?	完存		14-46	
	小玉					淡青緑色 半透明		ガラス	破片		14-47	

No.12　横杖73号墳第1主体部　出土玉類（第169図）

検図番号	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)		穿孔	色調	重量(g)	材質	残存状況	備考	遺物番号	物番号
	勾玉?						赤褐色		コハク	破片		62-1	
	勾玉?						赤褐色		コハク	破片		62-2	
18	勾玉	28.2	11.5	5.6	3.5	両面	赤褐色～暗褐色	(2.42)	コハク	1/2以完存		62-3	
19	勾玉	31.2	12.6	5.5	4.0	両面	赤褐色～暗褐色	(2.92)	コハク	尾部 欠		62-4,5	
	勾玉?						赤褐色		コハク	破片		62-6	
	勾玉?						赤褐色		コハク	破片		62-7	
	勾玉?						赤紫色		コハク	破片		62-8	
	勾玉?						赤褐色		コハク	破片		62-9	
20	管玉	7.9	6.3	1.7	1.5	両面	乳白色、緑色	0.97	ヒスイ	完存		65-1	
21	滑石	9.5	8.6	2.6	2.0	両面	褐色	(0.48)	コハク	1/2以完存		65-2	
22	管玉	10.3	7.3	2.1	1.6	両面	明白色、緑色	0.93	ヒスイ	完存		65-3	
23	管玉	10.2	7.0	2.0	1.7	両面	オリーブ灰色、乳白色	0.93	ヒスイ	完存		65-4	
24	管玉	8.3	5.9	1.9	1.5	両面	乳白色～緑灰色	0.59	ヒスイ	完存		65-5	
25	管玉	11.7	4.4	1.8	1.3	片面	明緑灰色	(0.31)	碧玉	1/2以完存		63-1	
26	管玉	11.9	4.3	1.6	1.3	両面	オリーブ灰色	0.32	碧玉	完存		63-2	
27	管玉	11.6	4.4	1.8	1.3	片面	明緑灰色	0.30	碧玉	完存		63-3	
28	管玉	10.2	4.5	1.7	1.3	両面	明緑灰色	0.31	碧玉	完存		63-4	
29	管玉	11.0	4.6	2.0	1.4	片面	明緑灰色	0.30	碧玉	完存		63-5	
30	管玉	12.9	4.7	2.1	1.5	片面	明緑灰色	0.37	碧玉	完存		63-6	
31	管玉	10.4	4.2	1.9	1.3	片面	明緑灰色	0.24	碧玉	完存		63-7	

No.12　横穴73号墳第１主体部　出土玉類（第169・170図）

図面番号	種類	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	穿孔	色調	重量 (g)	材質	残存状況	備考	遺物番号
32	管玉	13.8	4.8	2.7	1.3	片面	明緑灰色	0.43	緑色凝灰岩	完存	63- 8
33	管玉	11.5	4.9	2.2	1.9	片面	明緑灰色	0.53	碧玉	完存	63- 9
34	管玉	9.9	4.4	2.9	1.3	片面	暗紫灰色	(0.25)	碧玉	破損完存	63- 10
35	管玉	10.5	4.7	2.7	1.3	両面	明緑灰色	0.32	碧玉	完存	63- 11
36	管玉	12.7	4.3	1.9	1.4	両面	明緑灰色	0.33	碧玉	完存	63 12
37	管玉	14.6	4.8	1.9	1.0	片面	明緑灰色	0.52	碧玉	完存	63- 13
38	管玉	12.0	4.4	1.9	1.1	片面	明緑灰色	(0.30)	碧玉	破損完存	63- 14
39	管玉	12.3	4.4	1.5	1.3	両面	明緑灰色	0.35	緑色凝灰岩	完存	63- 15
40	管玉	13.3	4.3	2.0	1.3	片面	明緑灰色	(0.34)	碧玉	破損完存	63- 16
41	管玉	12.8	4.6	1.6	1.3	両面	明緑灰色	0.43	碧玉	完存	63- 17
42	管玉	13.3	4.9	1.7	1.1	片面	明緑灰色	0.50	緑色凝灰岩	完存	63- 18
43	管玉	12.1	4.9	2.0	1.2	片面	暗緑灰色	0.36	碧玉	完存	63 19
44	管玉	9.3	4.0	1.9	1.4	片面	暗緑灰色	0.28	碧玉	完存	63- 20
45	管玉	12.4	4.5	1.7	1.0	両面	明緑灰色	0.34	碧玉	完存	63- 21
46	管玉	10.5	4.6	1.9	1.4	片面	明緑灰色	0.31	緑色凝灰岩	完存	63- 22
47	管玉	13.7	4.4	1.9	1.0	片面	緑灰色	0.44	碧玉	完存	63- 23
48	管玉	11.9	4.7	2.2	1.5	片面	明緑灰色	0.38	碧玉	完存	63- 24
49	管玉	11.6	4.2	1.5	1.0	片面	緑灰色	0.33	緑色凝灰岩	完存	63- 25
50	臼玉	2.6	4.3	1.3			淡青灰色	0.06	滑石	完存	64 178
51	臼玉	2.8	4.4	1.4			淡青灰色	0.07	滑石	完存	64-179
52	臼玉	1.7	4.3	1.4			淡青灰色	0.04	滑石	完存	64-180
53	小玉	3.4	6.0	1.8			淡緑色	(0.14)	ガラス	破損完存	気泡有	64- 1
54	小玉	3.5	5.4	1.5			淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64 2
55	小玉	3.1	5.3	1.7			淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64- 3
56	小玉	3.3	5.3	1.5			淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64- 4
57	小玉	4.0	5.8	1.5			淡緑色	0.17	ガラス	完存	気泡有	64- 5
58	小玉	3.1	5.5	1.7	1.2		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64- 6
59	小玉	4.5	5.6	1.5			淡緑色	0.17	ガラス	完存	気泡有	64- 7
60	小玉	3.0	5.5	1.5			淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64- 8
61	小玉	3.5	6.0	1.8			淡緑色	0.16	ガラス	完存	気泡有	64 9
62	小玉	4.9	6.3	1.5			淡緑色	0.21	ガラス	完存	気泡有	64- 10
	小玉	3.7	6.0	1.4			淡緑色	0.16	ガラス	完存	気泡有	64- 11
	小玉	3.9	5.2	1.5			淡緑色	0.14	ガラス	完存	気泡有	64- 12
	小玉	3.9	5.2	1.4			淡緑色	0.14	ガラス	完存	気泡有	64 13
	小玉	3.5	5.5	1.5	1.3		淡緑色	0.14	ガラス	完存	気泡有	64- 14
	小玉	4.2	5.1	1.2			淡緑色	0.15	ガラス	完存	気泡有	64- 15
	小玉	4.0	5.3	1.5			淡緑色	0.14	ガラス	完存	気泡有	64- 16
	小玉	4.0	5.3	1.3			淡緑色	0.19	ガラス	完存	気泡有	64 17
	小玉	3.3	5.6	1.8	1.3		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64- 18
	小玉	3.7	6.3	2.0			淡緑色	0.18	ガラス	完存	気泡有	64- 19
	小玉	2.8	5.2	2.0			淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64- 20
	小玉	3.6	5.2	1.2			淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64 21
	小玉	3.8	6.3	2.0			淡緑色	0.17	ガラス	完存	気泡有	64- 22
	小玉	4.9	5.9	1.4			淡緑色	0.22	ガラス	完存	気泡有	64- 23
	小玉	2.5	5.5	1.4			淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64- 24
	小玉	3.2	5.5	1.6			淡緑色	0.14	ガラス	完存	気泡有	64- 25
	小玉	3.8	5.3	1.4			淡緑色	0.14	ガラス	完存	気泡有	64- 26
	小玉	2.7	4.7	1.2			淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64- 27
	小玉	3.8	5.5	1.4			淡緑色	0.15	ガラス	完存	気泡有	64- 28
	小玉	3.6	4.9	1.0			淡緑色	1.12	ガラス	完存	気泡有	64- 29
	小玉	2.7	5.0	1.4			淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64- 30
	小玉	3.4	5.8	1.5			淡緑色	0.15	ガラス	完存	気泡有	64- 31
	小玉	2.7	4.8	1.2			淡緑色	0.08	ガラス	完存	気泡有	64- 32
	小玉	3.2	5.0	1.5			淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64- 33
	小玉	3.8	5.0	1.3			淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64- 34
	小玉	2.7	5.6	1.7	1.4		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64- 35
	小玉	2.5	5.3	1.4			淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64 36
	小玉	3.4	5.3	1.6			淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64- 37
	小玉	3.1	5.3	1.6			淡緑色	0.14	ガラス	完存	気泡有	64- 38
	小玉	2.9	5.9	1.5			淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64- 39
	小玉	4.1	5.9	1.6			淡緑色	0.17	ガラス	完存	気泡有	64 40
	小玉	2.9	4.9	1.4			淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64- 41
	小玉	2.7	5.4	1.5			淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64- 42
	小玉	3.0	5.4	1.5			淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64- 43
	小玉	2.9	4.7	1.2			淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64 44
	小玉	2.8	4.8	1.4			淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64- 45
	小玉	2.8	5.2	1.4			淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64- 46
	小玉	3.6	4.9	1.3			淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64- 47
	小玉	3.3	4.3	1.3			淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64- 48

No.12　横枕73号墳第1主体部　出土玉類

挿図番号	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	穿孔	色調	重さ(g)	材質	残存状況	備考	遺物番号
	小玉	3.4	5.4	1.4		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-49
	小玉	3.3	5.1	1.6		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-50
	小玉	3.1	5.5	1.3		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-51
	小玉	3.1	5.3	1.4		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-52
	小玉	3.3	6.0	1.7		淡緑色	0.16	ガラス	完存	気泡有	64-53
	小玉	2.7	5.4	1.5		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-54
	小玉	3.1	5.8	1.3		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-55
	小玉	3.1	5.2	1.5		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-56
	小玉	3.2	5.6	1.4		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-57
	小玉	2.9	7.9	0.9		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-58
	小玉	3.5	4.7	1.0		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-59
	小玉	3.2	4.9	1.2		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-60
	小玉	3.4	5.4	1.2		淡緑色	0.14	ガラス	完存	気泡有	64-61
	小玉	3.3	5.3	1.1		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-62
	小玉	3.8	5.3	1.0		淡緑色	0.14	ガラス	完存	気泡有	64-63
	小玉	3.2	5.2	1.8		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-64
	小玉	2.9	5.6	1.1		淡緑色	0.16	ガラス	完存	気泡有	64-65
	小玉	3.7	4.9	0.9		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-66
	小玉	2.9	5.2	1.2		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-67
	小玉	3.8	5.3	1.1		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-68
	小玉	3.2	5.3	1.2		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-69
	小玉	3.8	5.2	1.2		淡緑色	0.14	ガラス	完存	気泡有	64-70
	小玉	3.0	5.6	1.5		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-71
	小玉	2.9	5.3	1.2		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-72
	小玉	3.5	4.8	1.4		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-73
	小玉	3.4	5.3	1.5		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-74
	小玉	3.4	5.1	1.4		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-75
	小玉	2.3	5.2	1.6		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-76
	小玉	3.3	5.2	1.3		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-77
	小玉	2.9	4.9	1.3		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-78
	小玉	3.5	5.6	1.2		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-79
	小玉	2.7	5.8	1.5		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-80
	小玉	3.1	5.0	1.8		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-81
	小玉	2.6	5.0	1.0		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-82
	小玉	2.9	5.5	1.5		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-83
	小玉	2.7	4.9	1.1		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-84
	小玉	3.2	5.0	1.1		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-85
	小玉	3.4	5.4	1.2		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-86
	小玉	3.0	5.1	1.6		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-87
	小玉	3.3	5.3	1.4		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-88
	小玉	2.9	5.6	1.9　1.4		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-89
	小玉	3.4	5.1	1.1		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-90
	小玉	2.7	4.8	1.2		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-91
	小玉	3.0	5.1	1.0		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-92
	小玉	3.4	5.0	1.0		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-93
	小玉	3.3	5.1	1.0		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-94
	小玉	3.2	5.0	0.9		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-95
	小玉	2.2	5.2	1.1		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-96
	小玉	3.4	5.3	1.1		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-97
	小玉	3.1	5.8	1.4		淡緑色	0.14	ガラス	完存	気泡有	64-98
	小玉	3.5	5.3	1.2		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-99
	小玉	2.7	5.1	1.4		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-100
	小玉	2.3	4.8	1.2		淡緑色	0.07	ガラス	完存	気泡有	64-101
	小玉	3.6	5.4	1.2		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-102
	小玉	3.8	5.4	1.3		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-103
	小玉	3.1	5.0	1.6		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-104
	小玉	3.0	5.2	1.3		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-105
	小玉					淡緑色		ガラス	破片	気泡有	64-106
	小玉	3.1	5.0	1.0		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-107
	小玉	3.7	5.4	1.2		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-108
	小玉	3.1	5.7	1.9		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-109
	小玉	2.4	5.2	1.3		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-110
	小玉	3.1	5.7	1.9		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-111
	小玉	3.1	4.1	1.0		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-112
	小玉	3.0	4.3	1.2		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-113
	小玉	4.6	4.5	1.0		淡緑色	0.16	ガラス	完存	気泡有	64-114
	小玉	3.3	4.8	1.2		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-115
	小玉	3.3	5.1	1.4		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-116
	小玉	3.0	5.5	1.2		淡緑色	0.15	ガラス	完存	気泡有	64-117

No.12　横枕73号墳第１主体部　出土玉類（第170図）

図番号	種類	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	穿孔	色調	重量 (g)	材質	残存状況	備考	遺物整理番号
	小玉	3.2	3.5	1.2		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-118
	小玉	2.6	3.0	1.2		淡緑色	0.08	ガラス	完存	気泡有	64-119
	小玉	2.6	3.2	1.4		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-120
	小玉	3.3	3.1	1.0		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-121
	小玉	2.7	3.3	1.4		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-122
	小玉	3.0	4.6	1.2		淡緑色	0.08	ガラス	完存	気泡有	64-123
	小玉	3.6	5.1	0.9		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-124
	小玉	3.8	5.2	1.8		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-125
	小玉	3.4	5.6	1.5		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-126
	小玉	2.6	5.2	1.5		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-127
	小玉	3.2	5.4	1.2		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-128
	小玉	2.7	5.1	1.0		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-129
	小玉	2.8	5.3	1.3		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-130
	小玉	2.4	5.6	1.6		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-131
	小玉	3.5	4.7	1.0		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-132
	小玉	3.0	5.2	1.4		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-133
	小玉	3.6	4.8	1.1		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-134
	小玉					淡緑色		ガラス	破片	気泡有	64-135
	小玉	2.6	3.2	1.3		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-136
	小玉	2.9	5.2	1.3		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-137
	小玉	3.1	5.0	1.2		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-138
	小玉	2.8	4.9	1.0		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-139
	小玉	3.2	4.8	1.1		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-140
	小玉	2.6	4.7	1.5		淡緑色	0.07	ガラス	完存	気泡有	64-141
	小玉	2.6	4.8	1.0		淡緑色	0.08	ガラス	完存	気泡有	64-142
	小玉	2.8	5.1	1.8		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-143
	小玉	4.3	5.5	1.2		淡緑色	0.15	ガラス	完存	気泡有	64-144
	小玉	3.0	5.4	1.6		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-145
	小玉	3.4	5.1	1.5		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-146
	小玉	3.3	5.2	1.9		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-147
	小玉	4.3	5.2	1.2		淡緑色	0.16	ガラス	完存	気泡有	64-148
	小玉	3.0	4.9	1.0		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-149
	小玉	3.3	5.1	1.2		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-150
	小玉	3.1	5.2	1.6		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-151
	小玉	3.2	5.2	2.0		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-152
	小玉	2.0	5.3	1.0		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-153
	小玉	3.8	5.2	1.7		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-154
	小玉	2.4	5.3	1.3		淡緑色	0.08	ガラス	完存	気泡有	64-155
	小玉	2.9	5.2	1.4		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-156
	小玉	3.0	5.6	1.6		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-157
	小玉	4.0	5.2	1.2		淡緑色	0.15	ガラス	完存	気泡有	64-158
	小玉	2.9	4.8	1.0		淡緑色	0.09	ガラス	完存	気泡有	64-159
	小玉	3.8	5.1	1.3		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-160
	小玉	2.7	5.2	1.3		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-161
	小玉	3.2	6.2	1.5		淡緑色	0.11	ガラス	完存	気泡有	64-162
	小玉	2.7	4.9	1.8		淡緑色	0.08	ガラス	完存	気泡有	64-163
	小玉	3.6	5.6	1.3		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-164
	小玉	3.4	5.1	1.8		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-165
	小玉	2.9	5.6	1.5		淡緑色	0.12	ガラス	完存	気泡有	64-166
	小玉	3.5	6.0	1.5		淡緑色	0.17	ガラス	完存	気泡有	64-167
	小玉	3.5	5.3	1.3		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-168
	小玉	3.5	5.9	1.6		淡緑色	0.15	ガラス	完存	気泡有	64-169
	小玉	3.4	5.6	1.5		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-170
	小玉	2.3	5.1	1.5		淡緑色	0.08	ガラス	完存	気泡有	64-171
	小玉	3.0	5.2	1.4		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-172
	小玉	3.6	6.0	1.3		淡緑色	0.16	ガラス	完存	気泡有	64-173
	小玉	3.2	5.3	1.4		淡緑色	0.10	ガラス	完存	気泡有	64-174
	小玉	2.2	5.6	1.0		淡緑色	0.08	ガラス	完存	気泡有	64-175
	小玉	3.5	5.8	2.0		淡緑色	0.13	ガラス	完存	気泡有	64-176
	小玉	3.6	5.6	1.5		淡緑色	0.15	ガラス	完存	気泡有	64-177
63	小玉	1.2	2.1	0.8		高雅色	0.02	ガラス	完存		64-181
64	小玉	1.2	2.1	1.0		高雅色	0.0	ガラス	完存		64-182
65	小玉	1.6	2.3	1.3		濃紺色	0.02	ガラス	完存		64-183
66	小玉	1.2	2.1	0.8		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-184
67	小玉	2.0	2.6	1.0		高雅色	0.02	ガラス	完存		64-185
68	小玉	1.4	2.6	1.3		濃紺色	0.02	ガラス	完存		64-186
69	小玉	1.6	2.3	1.3		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-187
70	小玉	1.4	2.2	1.3		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-188
71	小玉	1.4	2.1	0.7		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-189

№12　横枕73号墳第１主体部　出土玉類（第170図）

挿図番号	種類	長さ(cm)	径(mm)	孔径(mm)	穿孔	色調	重量(g)	材質	残存状況	備考	遺物番号
72	小丸	1.6	2.4	0.8		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-190
	小丸	1.6	2.3	1.2		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-191
	小丸	1.3	2.1	0.9		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-192
	小丸	1.4	1.9	0.8		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-193
	小丸	1.5	2.3	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-194
	小丸	1.7	2.2	1.2		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-195
	小丸	2.0	2.6	1.2		淡褐色	0.02	ガラス	完存		64-196
	小丸	1.8	2.0	0.9		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-197
	小丸	1.1	2.0	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-198
	小丸	1.8	2.1	0.8		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-199
	小丸	1.0	2.2	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-200
	小丸	1.5	1.9	0.9		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-201
	小丸	1.5	2.0	0.9		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-202
	小丸	1.1	2.0	1.2		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-203
	小丸	1.1	1.8	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-204
	小丸	1.5	2.1	0.9		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-205
	小丸	1.4	2.4	0.8		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-206
	小丸	1.2	2.2	1.1		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-207
	小丸	1.4	2.2	0.9		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-208
	小丸	1.2	2.0	0.8		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-209
	小丸	1.2	1.9	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-210
	小丸	1.2	2.5	1.1		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-211
	小丸	1.4	2.5	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-212
	小丸	1.6	2.2	1.2		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-213
	小丸	1.6	2.5	1.0		淡褐色	0.02	ガラス	完存		64-214
	小丸	1.3	2.4	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-215
	小丸	1.3	1.8	0.8		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-216
	小丸	1.4	1.9	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-217
	小丸	1.1	2.1	0.9		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-218
	小丸	1.1	2.0	0.8		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-219
	小丸	1.1	2.0	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-220
	小丸	1.2	2.2	0.9		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-221
	小丸	1.1	2.1	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-222
	小丸	1.4	2.6	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-223
	小丸	1.3	1.9	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-224
	小丸	1.7	2.1	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-225
	小丸	0.9	2.4	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-226
	小丸	1.6	2.5	1.1		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-227
	小丸	1.2	2.0	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-228
	小丸	1.5	2.2	1.2		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-229
	小丸	0.9	2.1	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-230
	小丸	1.2	1.7	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-231
	小丸	1.7	2.4	1.1		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-232
	小玉					赤色		ガラス	破片		64-233
	小丸	1.3	1.9	0.9		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-234
	小丸	1.5	1.9	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-235
	小丸	1.8	2.0	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-236
	小丸	1.2	2.2	1.1		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-237
	小丸	1.5	2.0	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-238
	小丸	1.3	2.2	1.1		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-239
	小丸	1.6	1.8	0.8		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-240
	小丸	1.5	2.3	1.1		淡褐色	0.02	ガラス	完存		64-241
	小丸	1.4	2.2	1.1		淡褐色	0.02	ガラス	完存		64-242
	小丸	1.7	2.4	0.8		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-243
	小丸	1.1	2.3	1.4		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-244
	小丸	1.3	2.0	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-245
	小丸	1.9	2.2	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-246
	小丸	1.6	2.1	1.1		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-247
	小丸	2.0	2.3	0.9		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-248
	小丸	2.2	2.2	1.0		淡褐色	0.02	ガラス	完存		64-249
	小丸	1.2	2.0	0.7		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-250
	小丸	1.1	2.0	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-251
	小丸	1.7	2.3	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-252
	小丸	1.5	2.3	0.9		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-253
	小丸	1.5	2.0	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-254
	小丸	1.9	2.0	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-255
	小丸	1.9	2.3	1.0		淡褐色	0.02	ガラス	完存		64-256
	小丸	1.2	2.4	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-257
	小丸	1.6	2.0	1.0		淡褐色	0.01	ガラス	完存		64-258

No.12　横枕73号墳第１主体部　出土玉類

穿孔部寸法	種類	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	縦孔	色調	重量 (g)	材質	残存状況	備考	遺物登録番号
	小玉	1.9	2.3	0.8		濃紺色	0.02	ガラス	完存		64-259
	小玉	1.1	2.3	0.9		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-260
	小玉	1.4	2.1	1.0		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-261
	小玉	1.2	1.9	1.0		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-262
	小玉	2.1	2.1	1.0		濃紺色	0.02	ガラス	完存		64-263
	小玉	1.1	2.1	0.9		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-264
	小玉	1.9	2.4	1.0		濃紺色	0.02	ガラス	完存		64-265
	小玉	1.4	2.4	0.9		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-266
	小玉	1.9	2.3	1.0		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-267
	小玉	1.5	2.3	1.1		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-268
	小玉	1.8	1.9	1.0		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-269
	小玉	1.5	2.4	1.2		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-270
	小玉	1.7	2.5	1.3		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-271
	小玉	1.7	2.0	1.1		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-272
	小玉	1.7	2.4	1.3		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-273
	小玉	2.6				淡青灰色		石？	1/2		64-274
	小玉	2.0	2.0	1.2		紺紺色	0.01	ガラス	完存		64-275
	小玉	1.9	2.1	1.1		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-276
	小玉	0.8	2.2	1.0		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-277
	小玉	1.1	2.2	1.0		紺紺色	0.01	ガラス	完存		64-278
	小玉	1.8	2.2	1.1		紺紺色	0.01	ガラス	完存		64-279
	小玉	1.1	2.2	1.2		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-280
	小玉	1.4	2.3	0.7		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-281
	小玉	1.9	2.1	0.4		濃紺色	0.01	ガラス	完存		64-282

第6節　まとめ

調査地はNo11北区、No11南区、No12区の三調査区に分かれ、いずれも横枕集落京面の独立丘陵中に位置する。この独立丘陵は、標高30～50mの五つほどの高まりに分かれ、全体ではひとつの低丘陵として成り立っている。丘陵東側には平野が開け、1.3kmほどで中国山地から日本海へと注ぐ千代川へ続く。今回、横枕古墳群No11北区、No11南区、No12区の調査から、古墳39基、帰属が不明瞭な埋葬施設3基、落とし穴を含む土坑58基、溝状遺構2条、ピット状遺構2基を検出した。出土した遺物は、鉄剣、鉄刀、鉾、鉄鏃などの各種鉄製品、玉類、銅鏡のほか、土器と石製品がコンテナ(容量54×34×20cm)約47箱分である。時期的には、縄文土器および弥生土器が数点、古墳時代前期、中期、後期の遺物、中近世の遺物数点である。今回の調査は古墳を対象とした調査であったが、古墳築造以前や古墳の時期とはやや時期を隔てた遺構も少なからず検出している。ここでは、調査によって明らかになった事柄にいくつか検討を加えまとめとしたい。

1．古墳について

現在分布が確認されている横枕古墳群中の古墳91基のうち、今回39基を調査しその内容が明らかとなった。また、平成11～13年度には、横枕集落背後の丘陵で41～44、52～58号墳の計11基の古墳が調査されている[6]。

なお、横枕古墳群の範囲や名称は、現在の行政区分に由来する部分が大きく、地形的に連綿と続く千代川左岸丘陵の一部分を横枕古墳群として呼称している。現在の地名では、鳥取市横枕、上味野、竹生にまたがる。横枕集落前面の低丘陵と背後の標高150mもの丘陵とを同一の枠で扱っても良いのかなど、現在の区分をそのまま独立した古墳群とする扱いは注意が必要である。同一丘陵の北東に立地する篠田古墳群や下味野古墳群、南西に隣接する玉津古墳群などもある程度念頭に入れて検討するべきであろう。ただ、現状では横枕古墳群をはじめ周辺地域で綿密な古墳の分布踏査が十分とは言えず、今後に残した課題は多い。今回調査地は、No11北区、No11南区、No.12区の三調査区に分かれ、各調査区は小さな谷を隔てて隣り合う小尾根に立地する。地理的には近接するもののその様相はやや異とし、尾根ごとに特色を有する。それぞれの調査区について気づいた点を記す。

横枕No.11北区

今回の調査区のうち北側にあたり、独立丘陵中の中央部、標高32～36mの北東―南西に延びる尾根筋およびその東斜面標高25mにかけての立地である。ちょうど横枕集落北東背後の標高153mの丘陵変換部から東へ下る尾根筋(横枕と上味野地区を介する)に全長23.2mの前方後円墳である55号墳を含む後期の古墳群(平成11～13年調査)が築造されるが、その尾根とは谷を挟んで向かい合う位置でもある。

ここでは、22～26、59～64、88～91号墳の計15基の古墳が明らかとなった。盛土こそ確認できなかったが地山加工が認められるSX-10については61号墳と同様に平坦面を造成することに主目的をおいた古墳と推察され、SD-03についても古墳の周溝の可能性が考えられる。流失や調査区外のため埋葬施設などが検出されず内容が不明瞭な古墳もあるが、時期が特定できる古墳の内訳は、古墳時代前期7基、中期4基、後期2基である。

前期古墳の墳形はすべて方形で、中期以降は円墳である。方墳は墳丘の長辺が、23号墳が13.8m、25号墳が12.8m、61号墳が推定12m、その他が10mあるいは10m弱の規模で、高さも24号墳の2.1mを最高に1.4～2mと、飛び抜けて傑出した規模のものは見られない。ただ、立地や副葬品などの面から、標高約36mの尾根頂部を占地する25号墳が盟主と考えられる。89号墳、63号墳、61号墳は明らかに25号墳を意識した配置となっており、出土遺物の点からみても、25号墳では鉄剣、鉄鏃、鉾、刀子と他を抜き出た豊富な鉄製品を出土している。またいずれも前期古墳の埋葬施設から鼓形器台が出土しているが、25号墳の器台は径も器高も他よりやや大きく古式の様相を示す。ただ、尾根筋の22号墳から25号墳の築造順については、25号墳の器台が22～24号墳のものより古い要素をもつがそれほどの形式差でもなく、土

器だけで一概に築造順を言い切るのは難しい。いずれにせよ、尾根筋に占墳前期の方(形)墳が築造されており、おそらく22号墳以北の3基の古墳についても同様な時期とみられ方墳である可能性が高い。

方墳の築造方法としては、基本的に尾根の高位と低位を溝によって分断しさらに地山を方形に成形して若干盛土することで築造されている。溝については隣り合う古墳と共有するような状況が見受けられる。盛土の程度の差はあるものの、弥生時代の墳墓のつくりと共通する部分である。これが89号墳以降時期をおき、中期も中葉になって23号墳の南斜面側に62号墳、その下位に60号墳が築造され、25号墳から東へ下る小尾根筋に26号墳と、後期直前にその間の緩斜面に59号墳が築造されている。空間の制約からか一部重複する状況で築造が進む。ただ、前期の古墳の存在は周知されていたようで、決して尾根筋へ及ぶことはなかった。円墳の規模は、径17.1mの59号墳を筆頭に、13mが1基、10～12mが3基、8m以下3基で構成される。円墳の築造方法としては、尾根の高位側に弧状の深い周溝を掘り込み、その上を主に斜面低位側に高く盛ることで築造されている。特に径17.1m、高さ6mの59号墳は周溝の北西上場から底までの比高差が3.7mあり、盛土も1.6mほどが確認される。立地条件にもよるが、方墳より円墳の築造のほうが労力的にははるかに大変であったと思われる。

埋葬施設は、前期古墳の中でも尾根筋の方墳22～24号墳は尾根や墳丘の主軸に対し並行し、25号墳とそれを取り巻く古墳では直交する傾向にある。中期の円墳では斜面の傾斜に対し直交する。また、前期と中期では、墓壙の大きさや二段墓壙であるか否かなどの違いもみられ、前期は二段墓壙をとるものの方が多く、墓壙の長軸でみると前期が3.5～5.5m、中期で3.3～4.4mと中期の方が全体に墓壙縮小化の傾向が窺え、棺規模についても同様である。前期はいずれも木棺直葬が採用されるが、中期、後期になると引き続き木棺直葬が主体でありながらも直葬や箱式石棺など多様な展開がみられる。幅広で法量的にやや変則的な91号墳や副次的な埋葬施設であるSX-05で箱式石棺が採用されているが、導入にはあまり積極的ではなかったようで一般化した様相はみられない。特に、59号墳第1主体部では角礫を用いた覆い状の並びがあり、石棺とは全く異質である。26号墳の墓壙上の石列は、横枕53号墳(平成12年度調査；径11.5m・円墳)で同様に二対の石列を墓壙上層に設置しその石間で須恵器片が出土するなど26号墳よりやや時期が下るものの共通点がみられ、墓標あるいは葬送儀礼の一端を示すものなのか等地域色を含め今後の資料の増加を待ちたい。

また、No11北区で特筆すべき事項に、前～中期古墳を通じて多くの古墳に鉄製品が副葬されていることに注目したい。やはりポイントとなる古墳とそれを取り巻く古墳に集中する傾向があり、鉄器の組み合わせから、鉄剣・鉄刀は上位に格付けされ、次いで鉄鏃が、工具である鉇・鎌・刀子は鉄製品としては単品で副葬されることが多い。さらに23号墳では故意に折り曲げられた鉄剣、鉇が副葬されており、今後の大きな課題である。また、破鏡が、隣り合う22、23号墳のいずれも棺外で出土していることが大きく挙げられる。22号墳の内行花文鏡は破面が再加工されており、23号墳の鏡も元々完今な状態ではなかった可能性が強く、墓壙上で供献されたと考えられる。前期で棺外での鏡の出土は、この周辺では服部18号墳第1主体部の墓壙上層で捩文鏡[12]、広岡81号墳第1主体部の頭位墓壙北東隅のテラス屈曲部で内行花文鏡が完形で出土している[13]。ともに円墳で、服部18号墳は方墳から円墳への過渡期の築造である。転用枕である鼓形器台から22、23号墳とは僅かに古くなりそうであるがそれほど時期差は感じられない。この時期は鏡に対して副葬品というより葬送儀礼に伴う供献的な意味合いが強かったとも考えられよう。

また、前期から中期にかけて、土器転用枕の保有率が高く、内容が明らかとなっている古墳の墳丘平面図に位置する埋葬施設16基のうち、13基でその保有が確認された。中心主体とみられる埋葬施設についてはほぼ保持しているといって良い。鼓形器台以外にも壺や高杯、須恵器壺杯・高杯が枕に用いられており、一棺内に複数検出される例もみられた。

以上、No11北区では古墳時代前期前葉に方(形)墳の築造が尾根筋に始まり、盟主である23号墳を中心

として展開する。その後、一旦築造は途絶えるが中期中葉に再開し、一部重複しながら斜面下位へと築造が進む状況が明らかとなった。

横枕No.11南区

今回の調査区のうち中間部にあたり、No.11北区の南側の東西方向に延びる小尾根に立地する。主に標高30m程の二つの高まりから成る尾根で、その間の鞍部を中心とした部分が調査対象地である。調査地は尾根先端部では東側に平野部が広がるものの、調査した鞍部は隣接的で見通しがきかず、南北に小谷を挟んでそれぞれ隣り合う小尾根にNo.11北区およびNo.12区が視界に入る程度である。

調査して明らかとなった10、11、36、80～87号墳の計11基の古墳は、流失などで内容が不明瞭な古墳もあるが、切り合い関係なども考慮して、時期別には古墳時代中期2基、後期7基の内訳となる。踏査から、調査区東側の尾根先端側においても、尾根線上にやや規模の大きめの古墳が立地するだけでなく尾根斜面にも古墳が密集し、No.11北区よりさらに空間があれば築造するといった状況が見受けられる。

検出した古墳はすべて円墳で構成され、規模は36号墳の径13.6mを最高に80～83号墳が11m前後、10、11号墳が10m弱、84～87号墳が9～8mである。36号墳は後期前葉の築造で、鞍部の中心に位置し規模が他より大きく、85、86号墳の配置や鉄器類の出土からも中心的な古墳であることは間違いないが、36号墳以東に位置する古墳は丘陵先端部からの流れの中で展開する様相を示す。特に、81、10、80号墳は周溝の切り合いから80号墳が後出であり、出土遺物から中期後葉の年代が与えられる。これらと近接する東側の尾根先端平坦部に分布する数基の古墳もおそらく同様な時期と推察される。また、鞍部を隔てた30m弱の尾根頂部にも数基の古墳が分布するが、それらの流れとみられる87号墳は、埋葬施設の土器から中期後葉の年代が与えられ、ややもすれば西に展開する古墳は東の尾根先端部の古墳より古い可能性を残す。いずれにせよ、現段階ではこの尾根に古墳の築造が始まったのは中期に入ってからと考えられよう。また、尾根斜面下位に立地する古墳ほど新しい様相を示し、82、83号墳は後期前半の築造で、内部主体を横穴式石室とする84号墳は終末期と考えられる。

84号墳以外の埋葬施設は、流失などから不明瞭なものも見られるが、木棺直葬を主体とし、箱式石棺は採用されていない。主体部の主軸も斜面の傾斜に対し直交する。二段墓壙をとるのは36号墳第1主体部のみであり、墓壙規模から見ると長軸が中期は2.9～3.5m、後期は2.8～4.4mの範疇である。墳丘規模も考慮する必要があるが、いずれにせよ墓壙の大きさはあまり変わらないか後期の方が大きい場合もあるようである。また興味深いことに、No.11南区では須恵器蓋杯が棺外で出土しており、土器枕以外に墓壙内にまとまった土器が供獻されている。この近辺では後期以降、鈴山2号墳[4]、桂見13号墳[5]をはじめ墓壙内に蓋杯あるいは多量の須恵器を検出しており、今回の36、11号墳は比較的初期例であろう。副葬品では刀子や鉄鏃など鉄器を単品でもつものが多く、そういった意味では80号墳の玉類の出土は別の観点が必要であろう。中期から後期にかけて土器枕の保有率も変わらず高く、高杯や椀、須恵器蓋杯が採用されている。11号墳の杯蓋は85号墳杯身同様単独であっても出土位置などから土器転用枕として用いられたと考えられる。80号墳の土師器椀と須恵器杯蓋の組み合わせは稀有な例である。

以上No.11南区では、尾根を構成する尾根先端と調査地西側の尾根頂部からの古墳築造の流れの中に位置付けられ、中期後葉に、頂部から破線へ下る尾根筋付近に築造が始まる。そして後期前葉、鞍部中心部に規模、副葬品ともにやや優位にある36号墳が築造され、85、86号墳は36号墳を意識して展開する。この時期、須恵器の墓壙内への供献と新しい要素も入ってくる中、埋葬施設は木棺直葬を採用し、棺内に土器転用枕を据え、鉄器の副葬も細々と続く。まず刀子、加えて鉄鏃と、ある程度副葬品の序列が決まっていたようである。84号墳は、これらの古墳とはやや時期を隔て、後期終末に墳丘斜面に築造されている。このように一部周溝を重複しながらも斜面下位へと築造が進む状況が明らかとなった。

横枕No.12区

今回の調査区のうち南側にあたり、横枕集落東面の独立丘陵中、最も標高が高く広域の丘陵の東側に

位置する。No11北区、No11南区と異なり、東および南側への視界が大きく開けた立地である。標高40mの丘陵最東端には北からやや東向きへ軸を振る全長70mの前方後円墳、横枕13号墳が尾根頂部を占地する。調査地は標高も50m近い頂部から東へ140m程迄の南東へ屈曲する丘陵変換部と、13号墳から西へ延び南西へ下る尾根、その間をつなぐ鞍部とに分けられる。

ここでは、67～79号墳の計13基の古墳が明らかとなった。調査地は残念ながら後世の耕作の影響を受け、古墳上部を中心として削平、掘削されたものが多く、古墳あるいは埋葬施設の法量的な部分についてはいずれも遺存値であり、二段墓壙になるか否か、出土遺物などを含め不透明な部分も多い。時期が特定できる古墳のうち、前期2基、中期6基、推定で中後期1基、後期4基である。前期古墳は方墳で、中期以降は円墳である。規模的には前期の67号墳が長辺16.1m、高さ2.5mと今回の三調査区中最大規模の方(形)墳であり、中期の円墳でも径15m級が3基、13m級1基、12m級1基と相対的に古墳規模が一回り大きい。前期古墳である67号墳は、尾根東側の平野部を望む眺望の良い場所に立地する。68号墳は67号墳から南へ下る斜面に位置し、67号墳に付随的な古墳と考えられる。また、調査地の東尾根に立地する13号墳の存在は大きく、実際には前期古墳以外は13号墳を意識し、展開する古墳と考えられる。

埋葬施設は、上部削平で本来の墓壙規模が不明なものが多いながら、前期の墓壙長軸2.3～4.5m、中期は1.8～3.1mであり、この調査区でも前期の方が大きい傾向が窺える。前期、中期を通して木棺直葬を採用し、上器転用枕を棺内に据える。土器枕は前期が鼓形器台なのに対し中期は高杯を用いるが、高杯でも据え方にバラエティがみられる。また、出土品では、鉄剣や鉄刀、鉄鏃、刀子、鎧などの各種鉄製品の他、玉類を追加して副葬する古墳が目立つ。これらは単に男女や出自の別、築造時期の問題ではなく調査区全体の傾向のようであり、立地などからも、既に前期の67号墳の時期から中期全般を通してNo11北区、No11南区に対する優位性が窺められよう。それは墓地の選択が計画的に行われ、ほぼ同時期のNo11北区の前期古墳群が一尾根を隔てた立地であることから、No12区とは一線を介する状況であったことが看取できる。よって、13号墳の築造も偶然的ではなく、ある程度前期頃から基盤ができていたと考えられる。前期前葉から中葉の築造である67、68号墳後、次いで築造されるのが73号墳、あるいは72号墳で、中期中葉でも古い時期とみられる。この前期古墳との間の空白期に13号墳が築造されたとも推察できよう。73号墳以降、時期をあまり隔てず15m級の円墳が相次いで築造されており、さらにその古墳の周囲にはやや規模の小さい古墳が取り巻く。後期に入ると、前半で不確かな状況ではあるが、しばらくはやや大きめの古墳が築造されるも、No11北区、No11南区同様に斜面下位へと小規模に展開していく様子が窺える。

横枕No.11北区　古墳・埋葬施設一覧表

名称	墳丘	埋葬施設							出土遺物		備考	時期
	形状・規模	主体部名	埋葬方位等	掘形規模 長辺×短辺×深さ(m)	掘形規模 中軸断面	墓壙等 長辺×短辺×深さ(m)	墓壙等 断面	方位	埋葬遺物	埋土・周溝その他		
横枕22号墳	方墳 10.6×2.0	第1主体部	(未検査墓)	―		隅丸長方形	3.96×1.58×0.43	N-44°-E	鉄形器台・鉄剣・鉄鏃・真珠(埋土上位)	埋土下層より須恵器 土師枕		古墳時代前期末 中葉
		第2主体部	(未検査墓)	―		隅丸長方形	3.86×1.12×0.38	N-91°-E	鏃			
横枕23号墳	方墳 5.8×1.70	主体部	未検査墓	3.[illegible]×0.5×0.44		隅丸長方形	3.05×2.26×1.00	N-17°-E	鉄剣	鉄鏃(複数) 石製(滑石)	24号墳より先行か 土師片	古墳時代前期 中葉
横枕24号墳	方墳 10.6×2.1	主体部	未検査墓	2.1×0.35×0.17	舟形	隅丸長方形	3.96×1.60×2.59	N-9°-E	鼓形器台	石製(滑石)	土器片	古墳時代前期 中頃
横枕25号墳	方墳 12.8×1.4	第1主体部	未検査墓	2.4×0.5×0.38	舟形	隅丸長方形	3.62×1.21×0.69	N-77°-W	鼓形器台・鉄剣 鉄・金・鉄鏃・刀子		土師枕	墳丘SX 06 古墳時代前期 前葉
		第2主体部	遺存	―		隅丸長方形	1.25×0.60×0.26	N-55°-W	刀子片			

名称	墳丘 形状・規模	埋葬施設 主体部名	構造方法等	棺形態 長さ×幅×高さ(m)	墓壙等 平面形	墓壙等 長さ×幅×深さ(m)	方位	副葬品 種類・施設	墳丘・周溝その他	備考	時期
横穴 36号墳	円墳 9.6×2.25	主体部	直葬		隅丸方形	3.28×1.12×0.529	N 11° E	鉄鏃・鉄剣・刀子	須恵器・坩(関係)・器台	墓壙上に石列 土器枕	古墳時代中期
横穴 59号墳	円墳 7.1×6.0	第1主体部	(木棺直葬)	――	隅丸長方形	4.34×1.63×0.41	N-34°-E	須恵器		土器枕	古墳時代中期末葉
		第2主体部	木棺直葬	2×0.5×0.40	隅丸長方形	4.40×1.80×0.78	N 44° E	鉄剣・鉄鏃(刃先外小)・刀子	須・須有蓋高杯・壺・鉢・器台		
横穴 60号墳	円墳 12.7×2.9	主体部	?		――	――	(N-65°-E)	鉄加工品・鉄剣・鉄斧・刀子	須有蓋高杯・鉢・器台・刀子	墳丘・周溝・埴輪・土器枕	古墳時代中期末葉
横穴 61号墳	方墳 (12)×2.4	第1主体部	木棺直葬	3.5×0.65×0.68	隅丸長方形	4.25×0.71×0.91	N-75°-W	鉄鏃・鉄剣・鉄斧・刀子・管玉	須恵器台・壺・器台・須・須有蓋高杯	土器枕	古墳時代前期中葉
		第2主体部	木棺直葬	3×0.55×0.40	(隅丸長方形)	3.48×1.45×0.82	N 85° W	鉄剣・鉄鏃		土器枕	
横穴 62号墳	円墳 (12)×2.6	主体部	木棺直葬	――	隅丸長方形	3.55×1.85×0.93	N-85°-E	鉄斧・鉄刀・鉄鏃		土器枕	古墳時代中期中葉
横穴 63号墳	方墳 5.8×1.6	第1主体部	木棺直葬	2.5×0.4×(0.15)	隅丸長方形	4.15×1.02×0.38	N-59°-E	鉄鏃・刀子	小形器台・壺	土器枕	古墳時代前期末葉
		第2主体部	木棺直葬	2.3×0.5×0.43	隅丸長方形	5.88×1.92×0.93	N-62°-E	鉄鏃・鉄剣		土器枕	
横穴 64号墳	円墳 (10)×3.2	主体部	――	――	――	――	――		須恵器片・埴輪片	天平が3重巡り	――
横穴 65号墳	円墳 (6)×1.6	主体部	――	――	――	――	――		土器片	新1/2墓壙、西西溝 (SX-05)	――
横穴 66号墳	方墳 (10)×1.7	主体部	木棺直葬	(1.1)×0.5×0.44	隅丸長方形	(2.96)×1.24×0.64	N-64°-W	鉄剣・鉄鏃・刀子・ガラス小玉		土器枕	古墳時代前期後葉
横穴 90号墳	円墳 (8)×1.6	遺物	――	――	――	――	――	――	須・須有蓋高杯・壺・器台		古墳時代後期後葉
横穴 91号墳	円墳 (8)×2	主体部	木棺直葬	(1.54)×2.9×0.67	隅丸長方形	2.63×2.05×0.99	N-22°-W			前1/4墓壙	(古墳時代後葉)
		SX-05	横式石室	1.58×0.65×0.6	隅丸長方形	2.50×1.23×0.67	N-20°-W	須恵(墓土)		88号墳の東側	(古墳時代後期)
		SX-06	?	――	隅丸長方形	3.63×1.68×0.66	N-5°-E	鉄・鉄鏃		36号墳の西側	古墳時代前期中葉
		SX-10	木棺直葬	(1.99)×0.4×0.35	隅丸長方形	2.50×1.40×0.72	N-5°-E				(古墳時代前期)

( ) 基本値、( ) 推定

横穴No.11南区　古墳一覧表

名称	墳丘 形状・規模	埋葬施設等 主体部名	構造方法等	棺形態 長さ×幅×高さ(m)	墓壙等 平面形	墓壙等 長さ×幅×深さ(m)	方位	副葬品 種類・施設	墳丘・周溝その他	備考	時期
横穴 10号墳	円墳 10.4×2.1	主体部	?		(隅丸長方形)	(1.83)×1.45×0.19	N-64°-W				(古代時代後期)
横穴 11号墳	円墳 10.8×4.4	主体部	木棺直葬	2.1×0.4×0.4	隅丸長方形	3.92×1.35×0.71	N-65°-W	須恵器・刀子		土器枕か? 埴輪遺物	古代時代後期中葉
横穴 36号墳	円墳 13.6×1.7	第1主体部	木棺直葬	2.5×0.5×0.38	隅丸長方形	4.40×2.00×0.70	N 10° E	刀子・鉄鏃・鉄製杯	須恵器・土師器片	埴輪遺物	古代時代後期後葉
		第2主体部	木棺直葬	2.2×0.4×0.4	隅丸長方形	3.38×1.02×0.67	N-35°-E	鉄鏃・須恵器		埴輪遺物	
横穴 60号墳	円墳 11.0×2.3	第1主体部	木棺直葬	1.5×0.5×0.32	長楕円形	2.56×0.69×0.44	N 31° E				古代時代中期末葉
		第2主体部	直葬?	――	長楕円形	3.47×1.03×0.64	N-32°-E	須・須有蓋・台付・管玉	須片(墓土中)	土器枕	
横穴 91号墳	円墳 11.0×2.2	主体部	?	――	長楕円形	(3.33)×1.33×0.78	N 31° E				(古墳時代後期)

名称	墳丘 形状・規模	埋葬施設等 主体部 墓壙	埋葬施設等 主体部 棺	埋葬施設等 主体部 棺 長さ×幅×高さ(m)	埋葬施設等 主体部 墓壙	埋葬施設等 主体部 墓壙 長さ×幅×深さ(m)	埋葬施設等 主体部 方位	出土遺物 遺骨・人骨	出土遺物 副葬品	出土遺物 埴輪・その他	備考	時期
横穴 92号墳	円墳 (9.6×2.7)	未検出	?	――	開口 長方形	2.52×1.37×0.76	N-80°-E	成人男性	須恵器・鉄刀	埴輪・鉄鏃片	十時枕	古墳時代後期
横穴 93号墳	円墳 (11×2.1)	土坑墓	?	――	開口 長方形	(2.00)×1.21×0.2	N-85°-E				土器枕	古墳時代後期 中期
横穴 94号墳	円墳 8.3×2.5	横穴式石室		玄室2.4×1.3×(0.5)	(片袖)	石室:m3.2	N-45°-E	男・幼童骨・壮	鉄刀	鉄鏃	横式石室破壊	古墳時代後期 終末
横穴 95号墳	円形 (5)×0.9	土坑墓	?	――	開口 長方形?	(1.41)×0.28×0.3	N-87°-E	成人男性	須恵器		二部枕か	古墳時代後期
横穴 96号墳	円墳 (8)×0.6	土坑墓	木棺直葬	2×0.35×0.28	開口 長方形	2.82×0.98×0.3	N-71°-E			勾玉		古墳時代後期 中葉
横穴 97号墳	円墳 (10)×1.5	土坑墓	木棺直葬	――	開口 長方形	2.95×1.05×0.27	N-85°-E	成人男性	鉄・刀子		土器枕	古墳時代中期 後葉

( ) 遺存値、< > 推定

横穴No.12区　古墳一覧表

名称	墳丘 形状・規模	埋葬施設等 主体部 墓壙	埋葬施設等 主体部 棺	埋葬施設等 主体部 棺 長さ×幅×高さ(m)	埋葬施設等 主体部 墓壙	埋葬施設等 主体部 墓壙 長さ×幅×深さ(m)	埋葬施設等 主体部 方位	出土遺物 遺骨・人骨	出土遺物 副葬品	出土遺物 埴輪・その他	備考	時期
横穴 67号墳	方墳 (5.2×2.5	未検出	木棺直葬	(2)×0.45×(0.8)	開口 長方形	4.45×1.67×0.69	N 68° W	熟年男性	鉄刀・鉄鏃		土器枕か・十器枕	古墳時代末
横穴 68号墳	方墳 (10×1.5	第1 主体部	木棺直葬	1.9×0.4×0.35	開口 長方形	3.08×1.05×0.51	N-71°-W	熟男骨か			土器枕	古墳時代前期 中葉
		第2 主体部	木棺直葬	1.65×0.3×0.35	開口 長方形	2.34×1.00×0.43	N 68° W	刀子・鉄				
横穴 69号墳	円形 (5)×0.9	二体部	棺	――	開口 長方形	2.54×0.71×0.36	N-85°-W	鉄斧・鉄刀・刀子			土器枕	古墳時代中期 中葉
横穴 70号墳	円墳 (15)×1.4	主体部	?	――	開口 長方形	2.82×0.85×0.30	N 76° W	青年・壮・熟・成・鉄鏃・鉄斧・小刀	高杯・壺	土師枕・二部枕平		古墳時代中期 中葉
横穴 71号墳	円形 (8)×1.2	土坑墓	?	上部削平	開口 長方形	(1.75)×0.56×0.27	N-86°-E	鉄鏃・鉄鎌・勾玉・管玉			二部枕平	古墳時代中期
横穴 72号墳	円墳 (15)×1.5	主体部	木棺直葬	×0.4×	開口 長方形	2.65×0.75×0.17	N 66° W	高齢・強壮・幼・壮・青年・成・壮・小・不明・鉄刀・鉄鏃・鉄斧・勾玉・管玉・鉄・鉄製品			鉄平	古墳時代中期 中葉
横穴 73号墳	円墳 (15)×1.5	第1 主体部	木棺直葬	2.3×0.4×一	開口 長方形	3.07×0.82×0.31	N-47°-W	成年・壮・熟・鉄鏃・鉄刀・鉄斧・勾玉・管玉・鉄・鉄製品			土器枕 上部削平	古墳時代中期
		第2 主体部	木棺直葬	1.8×0.4×一	開口 長方形	2.86×0.85×0.18	N-48°-W	鉄鏃				
横穴 74号墳	円墳 (8)×0.5	削平	――	――	――	――	――	――	須恵器片			(古墳時代後期)
横穴 75号墳	円墳 (10)×0.8	削平			――	――	――	――				(古墳時代中期 後葉)
横穴 76号墳	円墳 (.5)×一	削平?	――	――	――	――	――	――	馬具(金玉地金具)		土器枕?	古墳時代中期 後葉
横穴 77号墳	円墳 (12)×1.4	削平							須恵器・鉄鏃・管玉片			(古墳時代後期)
横穴 78号墳	円墳 (10)×一	削平	――	――	――	――	――	――	鉄(鏃か)			(古墳時代後期)
横穴 79号墳	円墳 (8)×一	削平							須恵			(古墳時代後期)

( ) 遺存値、< > 推定

鳥取平野地域における横枕古墳群

横枕古墳群は、現在91基の古墳の分布が確認されているが、詳細な踏査がなされておらず今後さらに数の増加が予想される。ただ、平成11～13年度の調査と今回の調査を合わせると古墳の調査数は計50基となり、鳥取市内でもこれだけまとまった数を調査した古墳群は数少ない。古墳群中最大の前方後円墳である13号墳が平成8年の踏査による発見[6]であることから、未確認の前方後円墳が周辺部に存在する可能性も十分にあり得る。同古墳群の解明は始まったばかりであり、千代川左岸地域の丘陵部の各古墳群も近年調査が進んでいることから、地域全体で考えていく段階に入ったとも言えよう。

現在の状況から判断する限り、横枕古墳群では、古墳時代前期の古墳は、千代川沿岸の平野部を見下ろす平野縁辺部の尾根上に立地するようである。墳形は弥生時代から系譜を引く方形を基調とし、円墳は採用されていない。服部古墳群では前期前葉に方(形)墳から円墳への移行が確認でき、3基単位の小単位の中において隣り合う古墳間に方形から円墳への変化が見られる[7]。広岡古墳群では前期中葉、方墳と円墳が非存する時期を経て小尾根単位での移行となっている[8]。横枕古墳群では、これらと同時期あるいはやや後出する時期を含めて数多く前期古墳が検出されたが、方(形)墳から円墳への移行は見られない。今のところ円墳の登場は中期に入ってからである。

また、箱式石棺の導入もかなり遅れ、基本的に中心主体への採用は行われず、後期に入ってもその状況は継続していく。例外的に六部山古墳群では箱式石棺の導入は円墳の採用前からで、前期中葉期、方墳の中心主体に箱式石棺が用いられている[9]。服部古墳群では前期前葉期円墳の採用後、箱式石棺を意識してか補助的に木棺小口に板石を用いたり、裏返めに石を用いたりするなどの埋葬施設が検出されている。これは右岸地域の広岡古墳群でも同様なことが言え、石棺採用当初は中心主体でなく副次的な埋葬施設に用いられている。千代川右岸地域では箱式石棺の中心主体への導入が本格化するのは前期後葉とみられ、石材などの供給事情の無からくるのか、中後期を含め全般的に箱式石棺が多用されている。千代川左岸地域の下味野古墳群では墳形の変化や箱式石棺の導入時期については不明であるが比較的箱式石棺が重用されており、円墳への移行は横枕古墳群同様遅れるようである。

なお、横枕古墳群では、前期末から中期前葉期の古墳が確認されていない。これは鳥取平野地域全般でも稀薄となる傾向があり、それまで累々と築造されていた前期小規模古墳が転機を迎えたかのように造墓活動が一旦弱まる。それは一時的に小規模古墳の築造規制があったかのようであり、奇しくも六部山3号墳や古郡家1号墳など大形前方後円墳の築造時期にもあたる。全長70mの前方後円墳である横枕13号墳についても、周囲の古墳の状況から当該期と推定され、鳥取平野南西地域の首長墓の可能性が高いと考える。

その後、横枕古墳群では中期中葉頃古墳の築造が再開し、前期古墳の尾根下位に15m級の比較的大形の円墳が造られるようになる。当初はその系譜が続き周囲に小形の円墳が従うといった状況も見受けられる。ただ、時期が下るにしたがって古墳自体の規模が細小化していき後期に入って条件の悪い尾根斜面へと逐次築造されるようになっていく。中には、中期末に横枕集落北東背後の標高の高い丘陵上へと立地を変えるものが現われる。これを象徴するかのように横枕44号墳は尾根上の横穴式石室であり、おそらく横枕地域での導入期の石室と考えられる[10]。その後、内部主体を横穴式石室とする古墳は50、51号墳のように現在横枕集落が営まれている丘陵裾あるいは尾根の縁辺部に築造されるようになる。

横穴式石室の採用以前、横枕古墳群での中心主体の埋葬形態は木棺直葬が主流で、箱式石棺は用いられたとしても付随的な埋葬施設に限定されている。鉄製品の副葬が目立ち、比較的副葬品の少ない中～後期の小規模古墳においても多くの場合何らかの副葬品が納められている。また、土器転用枕が前期から中期、後期を通じて盛んに用いられ、転用器種や据え方などに様々なバラエティが見られる。

このように横枕古墳群では、方(形)墳から円墳への移行が遅れ、中後期にいたるまで箱式石棺はあまり使用せず木棺直葬を主流とし、土器転用枕と鉄製品の副葬が行われるという特色を有する。北に位置する下味野古墳群では、これまでに古墳15基の調査が行われており[11]、円墳への変化や箱式石棺の採用

時期については今のところはっきりしないが、中期に入っても方(形)墳が残り、全般に鉄製品の副葬が目立つ。これに対し、千代川右岸地域の広岡、六部山古墳群[23]などでは、比較的早くに円墳への移行や箱式石棺の導入が窺え、中期から後期にかけて内部主体が箱式石棺で副葬品は漸石製品程度か持たないものが多い。こうした横枕周辺地域での豊富な鉄製品の副葬は一目に値し、中期前半期を中心としてこの周辺に一大勢力の存在を示唆するものであろう。

また、横枕67号墳と22～25号墳の関係のように同一古墳群内であっても各支群の検討から優位的立場にある小集団の存在が看取でき、これら小集団は古墳の有する諸属性から、伝統的弥生墓制の系譜上にある。前期から中期へ至る横枕古墳群の変遷において造墓活動の盛衰や最大の画期である13号墳(前方後円墳)の築造は、それ以前の小地域単位での新たな墓制受容の枠を越え、対外的にも中心的役割を果たした地域集団が古墳時代の体制下へ取り込まれていく過程と捉えることができよう。

こうして鳥取平野地域の古墳群を見ていくと、円墳や箱式石棺など新しい要素は、同一期に採用されたのではなく、小地域単位で差があることは明らかである。入り方もそれは受け入れる側がある程度主体的に行った結果であろうと想定される。千代川左岸沿岸部の丘陵に展開する古墳群を北から見ていくと、徳尾、古海、釣山、服部、下味野、篠田、横枕古墳群と、粗密の差はあれ各古墳群で発掘調査が行われている。さらに南の、鳥取平野への南西口に位置する倭文古墳群でも調査が予定されており、その調査成果が期待されている。これらの地域は、湖山池沿岸地域、千代川右岸の平野南部地域とはやや異なった様相を見せるようであり、千代川左岸地域においても、北側のより湖山池沿岸地域に近い徳尾、古海地域と横枕地域とでは当然異なった展開が予想される。

いずれにせよ、横枕古墳群の調査を通して千代川左岸沿岸地域のみならず鳥取平野地域全般の古墳時代の動向を僅かながら窺い知ることができた。新規要素の導入時期とその入り方、その他の特色など、古墳群単位で比較・検討することで、鳥取平野地域での古墳時代の様相が小規模古墳の調査からでも推察できるのではないかと思われる。今後のより具体的な進展が期待される。

土器転用枕および一棺複数埋葬について

今回の調査に於いて、横枕古墳群では、古墳時代前期から中期、後期を通して各埋葬施設での上器転用枕の保有が極めて多いことが挙げられる。No11北区、No11南区、No12区を合わせ、埋葬施設が明らかな38基のうち、その保有率は約7割の26基であり中心主体に限定するとその保有率は更に上昇する。各自が主体的に取り入れたというより、完全に地域に根づいた墓制の一部であるといって良い。この近辺では、広岡古墳群でも土器転用枕の保有率の高さが知られており、箱式石棺の石枕と土器棺を除くと前期古墳では実に7割を超えるものの中期以降はそれほど顕著でなくなる。

また今回、ひとつの古墳群で前期から中期、後期と各期の土器枕の様相が明らかとなり、枕の各器種への移り変わり、枕の据え方、組み方の変遷とともに各種豊富な事例が次々と明らかになった。大きくは上師器から須恵器へと変遷するがこれまで周辺地域を含めおおよそ①から④への流れが見受けられる。①口縁部(脚部)の一部を打欠いた鼓形器台→②壺・甕口縁部あるいは高杯各1個を使用→③高杯3個を組み合わせるもの→④須恵器蓋杯を2個伏せて並べたもの

これ以外に、②では口縁の一部打ち欠きの有無や壺の口縁部が上を向くか底面に接するか、高杯1個体をそのまま常位で使用、あるいは脚部を欠いての使用、③は脚の全てを打ち欠きして中央の杯部を支えるように据えたり、脚の打ち欠きは中央の高杯のみで残り2点を横位にして両側から支えるものとの別がある。また、④が定型化する前に、椀2個を伏せて使用、脚を打欠いた高杯2個を伏せて並べるものが見られる。横枕古墳群ではこの他にも、須恵器の高杯の脚を打ち欠いて組み合わせたもの、椀と須恵器蓋杯を伏せて並べたもの、須恵器杯蓋あるいは杯身1個を用いたもの[24]など他の古墳群ではみられない様々なバラエティが見られる。

このように、鼓形器台の衰退や高杯の形式が変化し須恵器が登場する中においても、常に被葬者の枕

をたむけるという意識が長期にわたり持続し墓制の一部として定着している。様々な土器を用いての試行錯誤的な様子が垣間見え、他の古墳群では見ることのない、各形態が定型化する以前の段階と考えられよう。よって枕の保有率をも考え合わせると、この地域に土器転用枕の初源を求めても差し支えはないと思われる。そして土器枕が浸透していく中で椀形高杯3個を組み合わせたものや須恵器蓋杯を伏せたものなどといった代表的な使用例が様式として確立し、各地へ広がっていったと推察される。

土器転用枕の初源については、この周辺での弥生時代の墓制が不透明であることから土器枕がどのような契機で採用されるようになったのかは不明である。因幡地域では、弥生時代後期前葉に鳥山貌懸平2号墓[14]で円礫を用いた石枕状の施設が散見される程度で、鼓形器台が墳墓に供されることは白体も事例が少なく、服部3号墓を例に後期後葉、墓壙上の供献行為として壺などとともに出土するに過ぎない。鼓形器台が枕として採用になった後も枕をもつ同一墓葬上で鼓形器台が供献される例が横枕61号墳、倉見4号墳[15]など複数例あり、単純に供献用のものが棺内に入ったという性格でない事が判る。元来、鼓形器台は古墳時代に入って形式的な変化が他の壺や甕、高杯などと比較して極度に見られなくなり、中葉に近づくとその傾向は一層顕著となる。大槻、棺内で検出されるのはこの鼓形器台と鉄製品であることから、時期を鼓形器台の特徴によって決定せざるを得ない場合が多い。鼓形器台は、全体の大きさ、受部に対する脚台部の大きさ、器壁の厚さ、接合部の衰退化などが時期決定の根拠とされる。よって、古墳時代前期の中ではっきりとした時期決定は現状では難しい面もある[16]。いずれにせよ鼓形器台の転用枕は弥生時代には見られず、今のところ古墳時代初頭期の古墳にも確認できない。古墳時代への墓制変容の中で墳形や埋葬施設等の新しい要素を受け入れる以前、遅くとも古墳時代前期前葉には小規模古墳と南着した形で採用される。導入後は因幡地方を中心に一気に広がりをみせるばかりか、山陰系土器の代表的器種である鼓形器台が功を奏したのか、岡山県北部や広島県北部、兵庫県および京都府北部など他の土器文化圏である地域へも広がりを見せ、須恵器の蓋杯の枕に至っては、更にその圏域を広げる。

なお、葬送儀礼を考えていく上での参考として、枕に使用された高杯の打ち欠きされたとみられる脚部が古墳の周溝で出土する例が横枕69号墳、70号墳で確認された。予め打ち欠いて用意するものではなく、被葬者を埋葬する時点で打ち欠いて枕を据えたとも考えられる。すべての場合と限らないが、今後葬送儀礼を具体的に復元していく過程で一つの資料となろう。

また、土器転用枕の検出から被葬者の頭位が分かり、複数の枕が検出される例が今回も確認された。複数の枕が検出される例は、既に広岡古墳群、面影古墳群、服部古墳群などで報告され、木棺であることから人骨の遺存はみられなかったものの複数埋葬の可能性を指摘されているところである[17]。特に今回調査の№12区横枕73号墳について特記すれば、両小口側に高杯3個体を用いた枕を設け、副葬品の配置状況から二体がそれぞれ時期を隔てて埋葬された状況が窺える。主体部の土層断面の観察から長さや幅からみて木棺サイズは一体用であり、同時埋葬はスペース的に無理がある。また、剣や大刀の配置や土器枕の高杯の形式などから南側の方が古く、棺が朽ちる前に南側を片付け、北側の被葬者が追葬されたと考えられる。この他に、89号墳では鼓形器台が並列して出土しており、この周辺では比較的稀有な例である。なお今回の調査で墳丘平坦部に複数の埋葬施設を検出するものがあり、その頭位について土器転用枕や副葬品の配置から検討を試みた。11号墳、22号墳、61号墳、63号墳、59号墳などほとんどの場合、頭位は互い違い方向のようである。同一墓壙内に埋葬するか、別墓壙にするのかの要因は現代からでは推察し難いが、頭位を互い違いに埋葬するのはある程度の決まりごとであった可能性も考えられる。

以上、今回は土器転用枕の集成がかなわなかったが、前期古墳が比較検討され古墳時代の墓制を考えていく上で、土器転用枕や同時埋葬の課題は鳥取平野周辺地域にとって避けて通れる問題ではないであろう[18]。

2．古墳以外の遺構、遺物について

今回の古墳の調査に伴い、土坑58基、溝状遺構２基、ピット状遺構２基を検出した。土坑の多くは、古墳築造前の時期であり、底面中央に小ピットが検出された落とし穴と思われる土坑が14基確認されている。多くは出土遺物が共伴せず、時期不明のものが多い中、埋土中に縄文土器が出土した土坑が４基あり、うち１基は底面に小ピットが検出されなかった土坑である。

調査区別にみると、土坑がNo11北区で15基、No11南区で18基、No12区で25基が検出されており、このうち底面に小ピットを検出した土坑および深さなどの法量や周囲の状況などから落とし穴と考えられる土坑は、No11北区で７基、No11南区で12基、No12区で22基の計41基である。No11北区では尾根筋から南東斜面へ下る位置に比較的集中し、中には尾根筋に立地するものもみられる。No11南区では尾根筋から鞍部へ下る斜面にも点在するが、鞍部からさらに南西へ下る斜面部分に特に集中する。No12区では尾根筋からほぼ鞍部間近の斜面および鞍部一帯に集中する。ある程度計画性があったのか、落とし穴が東西方向に並びそれに沿って落とし穴の掘られない帯状の空間が観察される。また、No12区では比較的底面に小ピットがあるものが少なく、①平面および底面の形状が不整円形の土坑、②やや小型で平面および底面の形状が楕円形および長楕円形の土坑、③平面は不整円形を呈するものが多いが底面が隅丸方形あるいは隅丸長方形の土坑と大まかに３タイプに分けられる。No11北区、No11南区においては①が主体を占めまれに③のタイプも見受けられるが、No12区のように明確には類別できないようである。縄文土器はNo11北区、No11南区で検出されており、特にNo11南区では鞍部からややくぼった北斜面の地山面で深鉢と浅鉢の口縁部（第139図）が出土している。しかし、三調査区を通して縄文時代の遺物は量的にごく限られ数少ない。ただ、縄文時代、比較的寒態の不明な鳥取平野南の縁辺部において低丘陵に少なからず生業の痕跡が認められたことは大きな成果であったと思われる。

弥生時代の遺物は、No11南区においてわずかに後期の底部と甕口縁部が出土したにすぎず、SK-02が段状遺構の可能性を残すものの住居跡あるいは土坑などの弥生時代の顕著な遺構は検出されなかった。近年の調査から、平成12年度の横枕集落背後丘陵における古墳の調査に伴い標高100m付近で弥生中期の土器が点在[18]し、下味野古墳群の調査でも標高75m付近で弥生時代中後期の遺物や、標高40～50mで中期中葉～後葉の竪穴住居跡棟を検出している[20]。いずれにせよ、今回の調査対象地は平野に面した低丘陵で絶好の集落立地と思われるが、古墳築造以前も後も集落として利用されることはなかった。もちろん、今回調査した範囲外に内包する可能性はあるが、今回の遺物の出方を考慮するとこの丘陵地に大規模な弥生集落が存在するとは考え難い。弥生時代中期後半、後期と集落遺跡が台頭、拡散していく中で、後期後葉からの遺跡数の拡大は因幡地方においても顕著である。その中でも墳墓とセット関係にある集落跡の所在確認は重要課題である。横枕地域においても、古墳群を造営した人々、造営の基盤を築いた人々の集落の存在は今のところ明らかとなっておらず、現在の集落と重なる形で分布していたのであろうと推測するに留まる。今後古墳研究の進捗に伴いこうした問題も取りざたされてくるであろう。

土坑状遺構一覧表

調査区	遺構名	法量 (cm) 長軸	短軸	深さ	底面標高 (m)	平面形	断面形	主軸方向	出土遺物	備考	時期
No11北	SK-01	58	40	14	29.89	楕円形	不整皿状	N-68°-E	丹線		近世
No11北	SK-02	121	50～67	32	31.31	不整長楕円形	逆台形	N 6°-E	須恵器・瓦器椀片・瓦片・丹線		近世
No11北	SK 03	131	83	112	32.96	不整楕円形	不明（方形か？）	N-60°-E		底部小ピット	古墳時代後期
No11北	SK-04	(125)	124	105	34.18	不整楕円形	不整逆台形	N-36° E	逆台石斧	底部小ピット	
No11北	SK-05	118	114	136	34.09	不整円形	小型方形か？	——		底部小ピット	
No11北	SK-06	335	266	118	32.23	不整隅丸長方形	不整階段	N-7°-E			
No11北	SK-07	113	93	51	31.65	不整楕円形	不整階段	N-78°-W			
No11北	SK 08	100	90	185	30.49	小型楕円形	逆台形	N-62°-E		底部小ピット	古墳時代後期
No11北	SK-09	128	79	158	33.59	不整楕円形	不整逆台形	N 48° W	縄文一部底部片	底部小ピット	縄文時代

調査区	遺構名	法量(cm) 長径	短径	深さ	床面標高(m)	平面形	断面形	主軸方向	出土遺物	備考	時期
No11北	SK-10	(76)	(66)	(99)	33.68	不整楕円形	逆台形	N-40°-W		底部小ピット	53号墳飛鳥期
No11北	SK-11	84	35	24	34.24	長楕円形	不整逆台形	N-62°-E	弥生時代		古墳時代初頃
No11北	SK-12	66	63	26	30.63	不整円形	鍋状	——			
No11北	SK-13	97	69	14	30.73	楕円形	皿状	N 21° E			
No11北	SK-14	115	(88)	180	26.87	不整円形	逆台形	——	縄文土器底部	底部小ピット	縄文時代
No11北	SK 15	118	58	51	25.41	やや不整な長楕円形	不整鍋状	N-53°-E			SD-03以前
No11南	SK-02	273	85	40	26.34	(L字状)	——	N-2°-W		縦状遺構か	
No11南	SK-03	125	110	127	25.28	不整楕円形	不整U字状	N-77°-W		底部小ピット	
No11南	SK-04	82	64	60	22.65	隅丸長方形	U字状	N 46° W			
No11南	SK-05	108	94	106	21.34	不整円形	不定U字状	——			
No11南	SK 06	(86)	56	122	21.82	不整楕円形	不整U字状	N-49°-E			
No11南	SK-07	107	83	84	22.15	やや小型な楕円形	U字状	N 49° W	縄文土器細片	底部小ピット	縄文時代
No11南	SK-08	84	61	68	21.41	楕円形	U字状	N-68°-W		底部小ピット	
No11南	SK-09	97	73	104	21.13	楕円形	不整U字状	N-85°-E			
No11南	SK-10	107	98	92	21.38	不定円形	不整U字状	——			
No11南	SK-11	212	123	68	20.82	隅丸三角形	鍋状	(N-82°-E)		底部小ピット	
No11南	SK-12	122	85	91	22.46	楕円形	深U	N 20° W	縄文土器細片		縄文時代
No11南	SK-13	(90)	(86)	(15)	22.38	楕円形	U字状	N-24°-E			
No11南	SK 14	222	156	52	22.33	(半以不整楕円形)	不整鍋状	N-86°-W			
No11南	SK-16	148	84	101	23.56	隅丸長方形	U字状	N-88°-W			
No11南	SK-17	135	104	80	21.80	不整楕円形	皿状	N-24°-W			
No11南	SK-18	94	70	134	24.33	楕円形	逆台形	N 75° W			
No11南	SK-19	124	98	32	23.08	楕円形	逆台形状	N-93°-W	土師器杯底部・小手・陽・角閃		中世
No11南	SK 20	84	44	36	24.65	隅丸長方形	逆台形状	N-65°-E			
No12	SK-01	78	71	31	32.72	隅丸方形	不定台形	N-71°-W		底部小ピット	
No12	SK-02	(313)	(86)	(15)	32.28	楕円形	皿状	N 63° E	有機質粉・鉄製板状・フイングラス系ガラス・瓦		古墳時代中期
No12	SK-03	85	78	86	31.48	楕円形	不整U字状	N 69° E			
No12	SK-04	86	77	88	31.48	楕円形	U字状	N-72°-E			
No12	SK-05	100	90	150	31.52	楕円形	逆台形	N-15°-W			
No12	SK-06	110	85	143	31.05	隅丸長方形	不整逆台形	N-85°-E		底部小ピット	
No12	SK 07	115	103	149	32.75	不整楕円形	逆台形	N-24°-W			
No12	SK-08	132	100	81	31.46	不整楕円形	逆台形	N 22° W			
No12	SK-09	191	70	75	31.67	楕円形	不整U字状	N-62°-W			
No12	SK-10	75	72	133	31.08	やや不整な円形	やや不整な逆台形	——			
No12	SK-11	97	83	131	30.96	やや不整な楕円形	鍋状	N-18°-W			
No12	SK 12	76	39	54	31.96	やや不整な楕円形	不整U字状	N-24°-W			
No12	SK-13	76	63	85	32.06	不整形	U字状	——			
No12	SK-14	85	72	115	31.10	不整円形	U字状	——			
No12	SK-15	90	88	91	31.24	不整円形	不整逆台形	——			
No12	SK-16	85	(85)	92	31.22	不整円形	不定逆台形	——			
No12	SK 17	143	131	135	30.42	楕円形	U字状	N-43°-E			
No12	SK-18	171	128	22	32.03	不整楕円形	鍋状	N-47°-E			
No12	SK-19	118	113	143	31.33	やや不整な円形	逆台形	——			
No12	SK-20	(71)	64	(126)	30.33	楕円形	逆台形	N 38° W			
No12	SK-21	78	36	95	31.72	やや不整な楕円形	逆台形	N-9°-W			
No12	SK-22	98	65	98	32.49	やや不整な楕円形	逆台形	N-25°-W			
No12	SK-23	68	54	82	31.74	やや不整な楕円形	不整な鍋状	N-2°-E			
No12	SK 24	89	73	106	32.15	やや不整な楕円形	逆台形	N-71°-W			
No12	SK-25	120	102	51	31.79	やや小型な楕円形	不整逆台形	N 61° W		底部小ピット	

欠番No11南SK-01、15

溝状遺構一覧表

調査区	遺構名	法量(cm) 長径	短径	深さ	底面標高(m)	平面形	主軸方向	出土遺物	時期等
No11北	SD-02	97	69	21	30.66	楕状	N-15°-E		39号墳飛鳥期
No11北	SD-03	(45)	126	83	25.52	不整楕状	——	土師器杯・鉢・底部(中世)	古墳時代の可能性有

欠番No11北SD-01

Pit状遺構一覧表

調査区	Pit名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	検出面 (m)	底部高 (m)	遺物出土等
No.11南	P-01	30	24	2.	22.07	21.85	なし
No.11南	P-02	27	21	20	22.92	21.60	なし

おわりに

今回の調査を振り返ってみれば古墳39基という大規模な数であり、様々な意味で感慨深いものがあるが思えば常に古墳一基ごとの調査の積み重ねの結果であると言える。横枕集落の東面に位置する標高50mほどの低丘陵が調査対象であり、いずれも尾根先端部は対象外ではあったがそれぞれ別尾根に立地する支群ごとに特色がみられ、実に興味深い成果を得ることができた。特にこれまで不透明であった千代川左岸沿岸地域における古墳時代の一端がこの調査を契機として具体相が明らかになるばかり、鳥取平野地域での古墳時代の動向が解明へ向けて大きく動き出した感がある。特に、前期古墳の調査における方(形)墳の調査は、広岡古墳群、面影山古墳群、美和古墳群、六部古墳群、倉見古墳群、桂見古墳群、服部古墳群などがあるが、近年の発掘調査の増加に伴いかなりの事例が蓄積しており、中後期の中小規模古墳を合わせ、その詳細な比較・検討が急務となってきている。鳥取平野地域における大型古墳、前方後円墳の究明が停滞している現状では、周辺諸地域の動向から推察していくか、むしろ小型古墳を手がかりとして地域相を捉えていくことで活路を見出そうとする状況となってきている。今回の調査地以外にも、横枕周辺地域の下味野、篠田、倭文古墳群等で発掘調査が実施、予定されており、これら千代川左岸地域の動向は、ともすれば弥生時代からの系譜を引く鳥取平野南部地域と湖山池南東岸地域に安易に二分されがちであった傾向に一考を促すものと考えられる。

これまでの2年と3ヶ月に及ぶ現地調査で、古墳の立地や形状、内容が変化しても、変わるものとそうでないものとがあることを知り、そこに横枕古墳群を累々と営んだ人々の心意気のようなものを感じた。墳形や埴輪施設の件、あるいは土器転用枕を例に挙げれば、十器の器種が盛衰する中でも模索しながら受け継がれていく。千代川の水運を含め山間地域への交通の要所でもあり、豊富な鉄製品の保有を例に主体的に新しい要素を受け入れる素地がある半面、保守的な面も見受けられる。地域性の一言では片付けられないような部分でもある。今後、今回の調査成果は、千代川左岸沿岸地域のみならず古代因幡地域の様相を探求していく上で大きく貢献していくものと思われる。 (谷口)

註(1) (財)鳥取市文化財団『荻枕古墳群Ⅰ』2002年
この他にも近藤時太郎『横枕記』(岐阜発行か)によると、大正期の県道建設で土器や鉄器の出土、昭和初期に古墳の発掘が行われたとの内容が記されている。
(2) (財)鳥取市文化財団『服部墳墓群』2001年
(3) 鳥取市遺跡調査団『広岡古墳群発掘調査概要報告書』1989年
(4) 鳥取市遺跡調査団『釣山古墳群発掘調査概報Ⅱ』1992年
(5) (財)鳥取市教育福祉振興会『新見城墓群Ⅱ』1993年
(6) 『前方後円墳集成 補遺編』山川出版社 2000年
(7) (2)と同
(8) 鳥取市遺跡調査団『広岡古墳群発掘調査現地説明会資料』1989年
鳥取市遺跡調査団『広岡古墳群発掘調査概要報告書』1989年
(9) 1989年、鳥取市遺跡調査団が六部山39,40号墳を調査。39号墳は石棺の側壁上部に小U字みが見られ、変形器台転用枕を保有。
(10) (2)と同。古墳時代中期末に線高103mが近に径15.7mの横穴42号墳が、後期後半に標高138m尾根上に横穴式石室を内部主体とする横穴44号墳が築造されている。
(11) (財)鳥取市文化財団『ドボ更古墳群Ⅰ』2002年
この他に2002年、(財)鳥取市文化財団 埋蔵文化財調査センターが10基の古墳を調査。
(12) (財)鳥取市教育福祉振興会『六部山古墳群』1994年
(13) (4)と同。釣山2号墳第1主体部でも杯蓋を伏せた例がある。
(14) (財)鳥取市教育福祉振興会『湖山池態平遺跡』1999年
(15) 鳥取市教育委員会・倉見古墳群発掘調査団『西桂見遺跡Ⅱ』1984年
(16) 古墳の時期決定については、主に以下を参考とした。
岩井 隆「東の土器、南の土器」『古代吉備』第19集 1997年

谷口香子「出雲における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について」『庄内式土器研究X』2000年
松山智弘「土器から見た出雲における古墳期占墓」,山陰の古墳占墓』第30回山陰考古学研究集会　2002年
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年

(27) 岡野雅則「鳥取県内における関係遺跡遺跡について」"鳥内墳群・米里三ノ宮遺跡・北尾釜谷遺跡」鳥取市教育文化財団 2000年

(28) 今回集成や十分な検討ができなかったが、近年の相次ぐ古墳群の調査から、鳥取平野周辺のみならず周辺地域において土器転用枕を考察する上での十分な資料の蓄積があるものと考える。また、土器転用枕について集成・考察した主なものに以下があり参考とした。

青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書 I』1976年
瀧口宏　他「再び土師器転用枕について」"よみがえる古代の伯馬"伯馬考古学研究会　1981年
柳見宏明「古墳の埋葬施設における枕の使用について」"史想」第21号　京都教育大学考古学研究会　1988年

(29) (1)と同。ある程度遺物が集中して出土する範囲があり、調査者は周辺に生活面の存在を示唆。

(30) 2002年、鳥取市文化財団　埋蔵文化財調査センターが行った古墳10基の調査に伴い検出。2004年報告書刊行予定。